

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— IX — (本文編)

福岡県大野城市乙金所在古墳群の調査

1977

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— IX —

福岡県大野城市乙金所在古墳群の調査

1977

福岡県教育委員会

序

大野城市乙金地区所在古墳群の調査は、昭和45年12月及び昭和47年6月から12月にかけて実施いたしました。

ここによりやく報告書を出版することとなりました。

発掘調査にあたっては、東国古文化研究所々長尾崎喜左雄先生・慶応大学教授江坂輝也先生・平安博物館伊藤玄三先生・同近藤喬一先生をはじめ各機関の多くの方々の御指導と御助力をいただきました。また、貴重な報文および論文をお寄せ下さった方々にも深甚の意を表します。

一方では、日本道路公団建設局の方々や大成建設・梅林建設株式会社の方々には、多方面にわたるご支援をいただきました。大野城市教育委員会ははじめ連日の発掘調査にたずさわって頂いた地元の方々に深くお礼申し上げます。

昭和 52 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設に伴って破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和45年度及び47年度に発掘した大野城市乙金所在古墳群の調査報告である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の受託事業であり、昭和45年度は福岡県教育委員会が主催し、東国古文化研究所々長尾崎喜左雄氏を中心とするメンバー、慶応大学文学部教授江坂輝弥氏を中心とするメンバー、及び平安博物館助教授伊藤玄三氏を中心とするメンバーの3チームによって主に実施された。昭和47年度分は福岡県教育委員会が実施した。
3. 昭和45年度調査のその後の整理作業は東国文化研究所、慶応大学文学部江坂研究室、加藤学園沼津女子高校考古学研究所、平安博物館考古第3課、高槻市教育委員会社会教育課及び福岡県教育委員会管理部文化課において実施した。
4. 発掘調査に当っては、大野城市教育委員会、大野城市婦人会及び市内在住の多くの方々の助力を得た。
5. 本書の執筆は、つぎのとおりである。
 - I ……………酒井仁夫
 - II ……………酒井仁夫
 - III ……………尾崎喜左雄・小林敏夫・石川克博・右島和夫・近藤喬一・寺島孝一
田中勝弘・松浦俊和・酒井仁夫・川述昭人・橋本久和
 - IV ……………酒井仁夫
 - V ……………酒井仁夫・川述昭人・森田勉
 - VI ……………石山勲・浜田信也・酒井仁夫・川述昭人
6. 昭和45年度に行なった九州縦貫道関係の調査は、主として加藤久嘉主事と、西谷正・栗原和彦・石山勲・酒井仁夫・副島邦弘の各技師があたり、昭和47年度は主として植田実主事と、西谷正・石山勲・酒井仁夫・川述昭人・森田勉技師が担当した。
7. 第IV章の一部については未集録分があり、後日補編として出版する予定である。
8. 本書の編集は、酒井仁夫が担当した。

本文目次

	頁
I 調査の経過	1
1 昭和45年度調査の経過	1
2 昭和47年度調査の経過	2
II 位置と環境	5
III 王城山C古墳群の調査	12
1 第 1 号 墳	12
2 第 2 号 墳	16
3 第 3 号 墳	29
4 第 4 号 墳	34
5 第 5 号 墳	39
6 第 6 号 墳	55
7 第 7 号 墳	60
8 第 8 号 墳	66
9 第 9 号 墳	70
10 第 10 号 墳	76
11 第 11 号 墳	82
12 第 12 号 墳	89
13 第 13 号 墳	104
14 第 14 号 墳	113
15 第 15 号 墳	119
16 第 16 号 墳	130
17 第12・15・16号墳補考	143
18 第 17 号 墳	149
19 第 18 号 墳	151
20 第3・4号墳間周溝中出土遺物	158
21 第4・第6・第7号墳間周溝中出土遺物	161
22 第6・第9号墳間周溝中出土遺物	163
IV 古野C古墳群の調査	167
1 第 4 号 墳	167

2 第 5 号 墳	172
3 第 6 号 墳	174
V その他の古墳群の調査	178
1 原 口 古 墳	178
2 喜 一 田 古 墳	184
3 唐 山 古 墳	188
VI 附 編	192
A 王城山A古墳群の調査	192
1 第 1 号 墳	194
2 第 2 号 墳	196
3 第 3 号 墳	198
4 第 4 号 墳	205
5 第 5 号 墳	213
B 古野 A古墳群の調査	214
1 第 1 号 墳	214
2 第 2 号 墳	216
3 石 棺	219

図 版 目 次

		本文対照頁
P.L. 1	(1) 王城山B古墳群周辺採集須恵器 (松山芳文・岡紀久夫撮影)	9
P.L. 2	(1) 第1次調査後の乙金古墳群の全景 南西より (朝日新聞社提供)	1・12
P.L. 3	(1) 第1次調査後の王城山C古墳群全景 北東より (朝日新聞社提供)	1・12
	(2) 同 上 西より (朝日新聞社提供)	1・12
P.L. 4	(1) 第2次調査前の王城山C古墳群全景 西より (酒井仁夫撮影)	2・12
	(2) 第2次調査後の王城山C古墳群全景 南より (酒井撮影)	2・12
P.L. 5	王城山C 1号墳	
	(1) 発掘前全景 (近藤喬一撮影)	12
	(2) 発掘風景 (近藤撮影)	12
P.L. 6	王城山C 1号墳	
	(1) 発掘後全景 (近藤撮影)	13
	(2) 石列 (近藤撮影)	13
P.L. 7	王城山C 1号墳	
	(1) 玄室から羨道を望む (近藤撮影)	13
	(2) 墳丘裁ち割り後全景 (近藤撮影)	12
P.L. 8	王城山C 1号墳	
	(1) 石組状況 (近藤撮影)	13
	(2) 遺物出土状態 (近藤撮影)	13
P.L. 9	王城山C 1号墳	
	(1) 遺物出土状態 (近藤撮影)	14
	(2) 出土土器 (寺島孝一撮影)	14
P.L. 10	王城山C 2号墳	
	(1) 発掘前全景 (近藤撮影)	16
	(2) 石室清掃後全景 (近藤撮影)	19
P.L. 11	王城山C 2号墳	
	(1) 発掘後全景 南から (近藤撮影)	17
	(2) 発掘後全景 北から (近藤撮影)	19
P.L. 12	王城山C 2号墳	
	(1) 周溝および石列 (近藤撮影)	17
	(2) 墳丘築造状態 (近藤撮影)	19

P L. 13	王城山C 2号墳	
	(1) 墳丘裁ち割り後全景 (近藤撮影)	17
	(2) 玄室奥壁 (近藤撮影)	19
P L. 14	王城山C 2号墳	
	(1) 玄室築造状態 (近藤撮影)	19
	(2) 遺物出土状態 (近藤撮影)	21
P L. 15	王城山C 2号墳出土遺物	
	(1) 出土土器① (寺島孝一撮影)	21・24・26
P L. 16	王城山C 2号墳出土遺物	
	(1) 出土土器② (寺島撮影)	21・24・26
P L. 17	王城山C 3号墳	
	(1) 調査後の全景写真 南より (酒井撮影)	29
	(2) 墳丘除去後の全景写真 南より (酒井撮影)	29
P L. 18	王城山C 3号墳	
	(1) 床面遺物出土状況 羨道側より (酒井撮影)	31
	(2) 東側墳丘中の壺出土状況 (酒井撮影)	31
P L. 19	王城山C 3号墳出土遺物	
	(1) 紡錘車 (阿南辰秀撮影)	33
	(2) 鉄釘 (阿南撮影)	33
	(3) 鉄鏃 (阿南撮影)	33
	(4) 小刀 (阿南撮影)	33
	(5) 須恵器 (杉山・岡撮影)	33
P L. 20	王城山C 4号墳	
	(1) 調査後の全景写真 南より (酒井撮影)	34
	(2) 玄室床面上遺物出土状況 東より (酒井撮影)	37
P L. 21	王城山C 4号墳	
	(1) 墳丘除去後の全景写真 南より (酒井撮影)	34
	(2) 西側墳丘土層 南より (酒井撮影)	35
	(3) 北側周溝中須恵器出土状況 (酒井撮影)	37
P L. 22	王城山C 4号墳出土遺物	
	(1) 耳環 (阿南撮影)	37
	(2) 須恵器・土師器 (松山・岡撮影)	37
P L. 23	王城山C 5号墳	
	(1) 調査前墳丘 (近藤撮影)	39
	(2) 石室 (近藤撮影)	40

P L. 24	王城山C 5号墳	
	(1) 石室 東から (近藤撮影)	40
	(2) 墳土と石室 南から (近藤撮影)	40
P L. 25	王城山C 5号墳	
	(1) 発掘後全景 (近藤撮影)	40
	(2) 石室と周溝 (近藤撮影)	40
P L. 26	王城山C 5号墳	
	(1) 羨道閉塞石附近出土銀環 (寺島撮影)	41
	(2) 墳丘北東封土中出土高台杯 (46) と宝珠つまみつき蓋 (寺島撮影)	41
P L. 27	王城山C 5号墳出土遺物	
	(1) 墳丘北西裾出土須恵器甕 (73) (寺島撮影)	41
	(2) 東トレンチ周溝内出土遺物 宝珠つまみつき蓋 (14) (寺島撮影)	41
P L. 28	王城山C 5号墳出土遺物	
	(1) 須恵器① (寺島撮影)	43
P L. 29	王城山C 5号墳出土遺物	
	(1) 須恵器② (寺島撮影)	43
P L. 30	王城山C 5号墳出土遺物	
	(1) 須恵器③ (寺島撮影)	43
P L. 31	王城山C 5号墳出土遺物	
	(1) 須恵器④ (寺島撮影)	43
P L. 32	王城山C 5号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・耳環及び紡錘車 (寺島撮影)	43
P L. 33	王城山C 5号墳出土遺物	
	(1) 須恵器の窯印 (寺島撮影)	43
P L. 34	王城山C 6号墳	
	(1) 調査後の全景写真 南より (酒井撮影)	55
	(2) 東側墳丘中土器出土状況 南東より (酒井撮影)	56
P L. 35	王城山C 6号墳	
	(1) 前面墳丘除去後の全景写真 南より (酒井撮影)	56
	(2) 奥壁側墳丘土層 西より (酒井撮影)	56
	(3) 奥壁側列石と壺出土状況 (酒井撮影)	56
P L. 36	王城山C 6号墳	
	(1) 奥壁側列石と周溝中土器出土状況 西より (酒井撮影)	57
	(2) 墳丘除去後の全景写真 南より (酒井撮影)	57
P L. 37	王城山C 6号墳出土遺物	
	(1) 刀子 (阿南撮影)	59

	(2) 鉄釧 (阿南撮影)	57
	(3) 須恵器・土師器 (松山・岡撮影)	59
P L. 38	王城山C7号墳	
	(1) 調査後の全景 南より (酒井撮影)	60
	(2) 前面墳丘除去後の全景写真 南より (酒井撮影)	60
P L. 39	王城山C7号墳出土遺物	
	(1) 耳環 (阿南撮影)	63
	(2) 刀 (阿南撮影)	63
	(3) 須恵器 (松山・岡撮影)	63
P L. 40	王城山C7号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器 (松山・岡撮影)	63
P L. 41	王城山C8号墳	
	(1) 調査後の全景写真 南より (酒井撮影)	66
	(2) 前面墳丘除去後の全景写真 南より (酒井撮影)	66
P L. 42	王城山C8号墳	
	(1) 前面墳丘除去後の全景写真 西より (酒井撮影)	66
	(2) 墳丘除去後の全景写真 南より (酒井撮影)	66
P L. 43	王城山C8号墳	
	(1) 墳丘中須恵器出土状況 南より (酒井撮影)	67
	(2) 須恵器 (阿南撮影)	68
P L. 44	王城山C9号墳	
	(1) 調査後の全景写真 南より (酒井撮影)	70
	(2) 西側墳丘土層 南より (酒井撮影)	72
P L. 45	王城山C9号墳	
	(1) 玄室床面上須恵器出土状況 東より (酒井撮影)	72
	(2) 前面西側墳丘裾の須恵器出土状況 南東より (酒井撮影)	72
	(3) 前面東側墳丘裾の須恵器出土状況 南より (酒井撮影)	72
P L. 46	王城山C9号墳出土遺物	
	(1) 紡錘車 (阿南撮影)	73
	(2) 須恵器 (松山・岡撮影)	73
P L. 47	王城山C9号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器 (松山・岡撮影)	73
P L. 48	王城山C10号墳	
	(1) 調査後の全景写真 南より (酒井撮影)	76
	(2) 玄室床面遺物出土状況 北より (酒井撮影)	78

P L. 49	王城山C10号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器 (阿南・松山・岡撮影)	79
P L. 50	王城山C11号墳	
	(1) 調査前の全景写真 南より (酒井撮影)	82
	(2) 調査後の全景写真 南より (酒井撮影)	82
P L. 51	王城山C11号墳出土遺物	
	(1) 紡錘車 (阿南撮影)	84
	(2) 須恵器① (松山・岡撮影)	84
P L. 52	王城山C11号墳出土遺物	
	(1) 須恵器② (松山・岡撮影)	84
P L. 53	王城山C11号墳出土遺物	
	(1) 須恵器③ (松山・岡撮影)	84
P L. 54	王城山C11号墳出土遺物	
	(1) 須恵器④ (松山・岡撮影)	84
P L. 55	王城山C12号墳	
	(1) 墳丘 (調査前) (右島和夫撮影)	89
	(2) 墳丘盛土の状態 (小林敏夫撮影)	89
P L. 56	王城山C12号墳	
	(1) 石室掘りがた断面 (小林撮影)	89
	(2) 墳丘盛土と周溝の断面 (尾崎益雄撮影)	89
P L. 57	王城山C12号墳	
	(1) 石室全景 (小林撮影)	92
	(2) 羨道入口部填塞状況 (小林撮影)	92
P L. 58	王城山C12号墳	
	(1) 羨道および玄室右側壁の状態 (小林撮影)	92
	(2) 須恵器No. 2 大甕および土師器甕の出土状態 (小林撮影)	93
P L. 59	王城山C12号墳	
	(1) 土師器甕出土状態 (小林撮影)	93
	(2) 須恵器大甕および土師器甕の出土状態 (小林撮影)	93
P L. 60	王城山C12号墳	
	(1) 須恵器No. 1 大甕出土状態 (小林撮影)	93
	(2) 須恵器No. 1 大甕出土状態 (小林撮影)	93
P L. 61	王城山C12号墳	
	(1) 鉄釘出土状態 (小林撮影)	93
	(2) 調査終了時全景 (小林撮影)	93

P L. 62	王城山C12号墳出土遺物	
	(1) 土師器 (小林・右島撮影)	94
P L. 63	王城山C12号墳出土遺物	
	(1) 土師器・鉄製品 (小林撮影)	94
P L. 64	王城山C12号墳出土遺物	
	(1) 須恵器大甕 (小林・右島撮影)	96
P L. 65	王城山C12号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (小林・右島撮影)	95
P L. 66	王城山C13号墳	
	(1) 墳丘調査前 (西谷正撮影)	104
	(2) 墳丘南半除去後 (西谷撮影)	105
P L. 67	王城山C13号墳	
	(1) 石室 南より (西谷撮影)	106
	(2) 石室 北より (西谷撮影)	106
P L. 68	王城山C13号墳	
	(1) 墳丘除去後全景 (西谷撮影)	106
	(2) 玄室内石組遺構 (西谷撮影)	106
P L. 69	王城山C13号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (松山・岡撮影)	107
P L. 70	王城山C13号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器 (松山・岡撮影)	107
P L. 71	王城山C14号墳	
	(1) 調査後の全景写真 南より (酒井撮影)	113
	(2) 前面墳丘除去後の全景写真 南より (酒井撮影)	113
P L. 72	王城山C14号墳出土遺物	
	(1) 耳環 (阿南撮影)	115
	(2) 紡錘車 (阿南撮影)	115
	(3) 鉄釘 (阿南撮影)	115
	(4) 須恵器① (阿南撮影)	115
P L. 73	王城山C14号墳出土遺物	
	(1) 須恵器② (松山・岡撮影)	115
P L. 74	王城山C14号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器	115
P L. 75	王城山C15号墳	
	(1) 墳丘 (調査前) (右島撮影)	119

	(2) 奥壁背後盛土状態 (Cトレンチ) (右島撮影)	119
P L. 76	王城山C15号墳	
	(1) 盛土状態 (Bトレンチ) (右島撮影)	119
	(2) 溝状遺構 (墳丘東南側) (右島撮影)	119
P L. 77	王城山C15号墳	
	(1) 石室掘りかた (右島撮影)	119
	(2) 石室掘りかた (右島撮影)	119
P L. 78	王城山C15号墳	
	(1) 石室全景 (右島撮影)	121
	(2) 石室入り口付近 (右島撮影)	121
P L. 79	王城山C15号墳	
	(1) 閉塞石 (右島撮影)	121
	(2) 石室右側壁 (右島撮影)	121
P L. 80	王城山C15号墳	
	(1) 石室左側壁 (右島撮影)	121
	(2) 石室床面 奥壁側より (右島撮影)	121
P L. 81	王城山C15号墳	
	(1) 玄室内左袖付近鉄鏃出土状態 (右島撮影)	121
	(2) 石室床面下の状態 (右島撮影)	121
P L. 82	王城山C15号墳	
	(1) 調査終了時全景 (右島撮影)	121
	(2) 調査終了時全景 (右島撮影)	121
P L. 83	王城山C15号墳出土遺物	
	(1) 耳環, 鉄鏃	123
P L. 84	王城山C15号墳出土遺物	
	(1) 須恵器	123
P L. 85	王城山C16号墳	
	(1) 盛土の状態 (Bトレンチ) (右島撮影)	130
	(2) 溝 (右島撮影)	130
P L. 86	王城山C16号墳	
	(1) 閉塞石の状態 (右島撮影)	134
	(2) 羨道入口部掘りかた (右島撮影)	134
P L. 87	王城山C16号墳	
	(1) 石室全景 (小林撮影)	134
	(2) 石室左壁 (小林撮影)	134

P L. 88	王城山C16号墳	
	(1) 羨道から奥壁をのぞむ (小林撮影)	134
	(2) 奥壁側から柵石をのぞむ (小林撮影)	134
P L. 89	王城山C16号墳	
	(1) 遺物出土状態 (小林撮影)	137
	(2) 調査終了時全景 (小林撮影)	134
P L. 90	王城山C16号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (石川克博撮影)	137
P L. 91	王城山C17号墳	
	(1) 調査前の状態 北より (酒井撮影)	150
	(2) 調査後の全景 北より (酒井撮影)	150
P L. 92	王城山C18号墳	
	(1) 調査前の状態 東より (酒井撮影)	151
	(2) 調査後の全景 東より (酒井撮影)	153
P L. 93	王城山C18号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (松山・岡撮影)	153
P L. 94	王城山C3・4号墳間出土遺物	
	(1) 須恵器 (松山・岡撮影)	158
P L. 95	王城山C4・6・7号墳間出土遺物	
	(1) 須恵器 (松山・岡撮影)	162
P L. 96	王城山C6・7号墳間出土遺物	
	(1) 須恵器① (松山・岡撮影)	163
P L. 97	王城山C6・7号墳間出土遺物	
	(1) 須恵器② (松山・岡撮影)	163
P L. 98	第1次調査後の古野C古墳群全景 南より (朝日新聞社提供)	167
P L. 99	古野C4号墳	
	(1) 前半完掘後の全景 南より (酒井撮影)	167
	(2) 完掘後の全景 南より (酒井撮影)	167
P L. 100	古野C4号墳	
	(1) 側壁側墳丘土層 南より (酒井撮影)	167
	(2) 奥壁側墳丘土層 西より (酒井撮影)	167
P L. 101	古野C4号墳	
	(1) 奥壁裏側と掘り方 東より (酒井撮影)	167
	(2) 前面列石下須恵器出土状況 西より (酒井撮影)	170
P L. 102	古野C4号墳出土遺物	

	(1) 須恵器	170
P L. 103	古野 C 5・6号墳	
	(1) 調査前の全景 南より (酒井撮影)	172
	(2) 調査後の全景 南より (酒井撮影)	172
P L. 104	古野 C 5・6号墳	
	(1) 調査後の第5号墳全景 南より (酒井撮影)	172
	(2) 調査後の第6号墳全景 南より (酒井撮影)	175
P L. 105	古野 C 6号墳出土遺物	
	(1) 玉類 (阿南撮影)	176
	(2) 耳環 (阿南撮影)	176
	(3) 須恵器 (松山・岡撮影)	177
P L. 106	原口古墳	
	(1) 調査前の全景 西より (酒井撮影)	178
	(2) 調査後の全景 南より (酒井撮影)	178
P L. 107	原口古墳と出土遺物	
	(1) 石室 玄室内より (酒井撮影)	178
	(2) 耳環 (阿南撮影)	181
	(3) 刀子 (阿南撮影)	181
P L. 108	原口古墳出土遺物	
	(1) 須恵器	181
P L. 109	原口古墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器 (松山・岡撮影)	181・183
P L. 110	喜一田古墳	
	(1) 調査前の全景 東より (川述昭人撮影)	184
	(2) 調査後の石室全景 北より (酒井撮影)	186
P L. 111	喜一田古墳と出土遺物	
	(1) 周溝と墳丘土層 西より (川述撮影)	185
	(2) 墳丘除去後の石室 東より (川述撮影)	186
	(3) 須恵器 (松山撮影)	187
P L. 112	唐山古墳	
	(1) 調査前の周辺景観 東南より (酒井撮影)	188
	(2) 調査前の墳丘 東より (酒井撮影)	188
P L. 113	唐山古墳	
	(1) 墳丘全景 東より (酒井撮影)	188
	(2) 墳丘全景 南より (酒井撮影)	188

P L. 114	唐山古墳出土遺物	
	(1) 石室全景 奥壁側より (酒井撮影)	188
	(2) 玉類 (森田勉撮影)	190
P L. 115	(1) 王城山古墳A群全景 東より (松岡史撮影)	192
	(2) 王城山古墳A群全景 東より (松岡撮影)	194
P L. 116	王城山A1号墳	
	(1) 調査後の石室全景 西より (松岡撮影)	194
	(2) 調査後の石室全景 北より (松岡撮影)	194
P L. 117	王城山A2号墳	
	(1) 調査後の石室全景 南より (松岡撮影)	196
	(2) 調査後の石室全景 東より (松岡撮影)	196
P L. 118	王城山A2号墳	
	(1) 大刀出土状況 北より (松岡撮影)	196
	(2) 須恵器出土状況 (松岡撮影)	196
P L. 119	王城山A1・2号墳出土遺物	
	(1) 第1号墳出土鉄器 (岡撮影)	194
	(2) 第2号墳出土須恵器 (酒井撮影)	197
	(3) 第2号墳出土大刀 (岡撮影)	197
P L. 120	王城山A3号墳	
	(1) 閉塞石 墓道側より (松岡撮影)	198
	(2) 石室および閉塞石 奥壁側より (松岡撮影)	198
P L. 121	王城山A3号墳	
	(1) 羨道部遺物出土状況上層 (松岡撮影)	199
	(2) 羨道部遺物出土状況下層 (松岡撮影)	199
P L. 122	王城山A3号墳出土遺物	
	(1) 銅鏡 (松山撮影)	199
	(2) 耳環 (松山撮影)	199
	(3) 鉄鏃 (松山撮影)	199
	(4) しとど目	199
	(5) 馬具 (松山撮影)	199
	(6) 鉄鏃 (松山撮影)	200
	(7) 馬具 (松山撮影)	200
	(8) 鉄鏃 (松山撮影)	200
P L. 123	王城山A3号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器 (酒井撮影)	200

P L. 124	王城山A 3号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (酒井撮影)	200
P L. 125	王城山A 4号墳	
	(1) 調査前の全景 北より (松岡撮影)	205
	(2) 調査後の全景 南より (松岡撮影)	205
P L. 126	王城山A 4号墳	
	(1) 閉塞石 前庭部より (松岡撮影)	205
	(2) 閉塞石除去後の羨道部 前庭部より (松岡撮影)	205
P L. 127	王城山A 4号墳	
	(1) 前庭部と石室 玄室上より (松岡撮影)	205
	(2) 前室内遺物出土状況 玄室より (松岡撮影)	205
P L. 128	王城山A 4号墳出土遺物	
	(1) 馬具 (松山・岡撮影)	207
	(2) 工具 (松山・岡撮影)	207
P L. 129	王城山A 4号墳出土遺物	
	(1) 武器 (松山・岡撮影)	207
P L. 130	王城山A 4号墳出土遺物	
	(1) 須恵器 (酒井撮影)	207
P L. 131	王城山A 4号墳出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器 (酒井撮影)	207
P L. 132	古野A古墳群	
	(1) 第1号墳近景 南西より (田坂美代子撮影)	214
	(2) 第1号墳石室 南西より (田坂撮影)	214
P L. 133	古野A古墳群	
	(1) 第2号墳近景 南西より (田坂撮影)	214
	(2) 石棺出土状態 北西より (田坂撮影)	214
P L. 134	古野A古墳群	
	(1) 第1号墳出土装身具 (田坂撮影)	214
	(2) 第2号墳出土装身具 (田坂撮影)	219
	(3) 第2号墳出土須恵器 (田坂撮影)	217

挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 御笠川流域周辺古墳分布図 (縮尺1/50,000) 酒井作成, 二神製図……………	6
Fig. 2 乙金地区所在古墳分布図 (縮尺1/0'500) 酒井作成, 岩瀬製図……………	7
Fig. 3 王城山B古墳群採集須恵器実測図 (縮尺1/3) 宮原実測・製図……………	9
Fig. 4 王城山C1号墳地形測量図 (縮尺1/200) 近藤喬一・寺島孝一・熊谷康治実測, 寺島製図……	13
Fig. 5 王城山C1号墳出土土器実測図 (縮尺1/3) 寺島実測・製図……………	15
Fig. 6 王城山C2号墳々丘実測図 (縮尺1/200) 近藤・熊谷・田中勝弘実測, 田中製図……………	16
Fig. 7 王城山C2号墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2) 田中実測・製図……………	22
Fig. 8 王城山C2号墳出土土師器実測図 (縮尺1/3) 田中実測・製図……………	22
Fig. 9 王城山C2号墳出土須恵器, 土師器実測図① (縮尺1/3) 田中実測・製図……………	23
Fig. 10 王城山C2号墳出土須恵器, 土師器実測図② (縮尺1/3) 田中実測・製図……………	25
Fig. 11 王城山C3号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 岡部実測, 岩瀬製図……………	30
Fig. 12 王城山C3号墳出土鉄器及び紡錘車実測図 (縮尺1/2) 酒井実測, 宮原製図……………	32
Fig. 13 王城山C3号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 舟山実測, 宮原製図……………	32
Fig. 14 王城山C4号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 中牟田・尾山実測, 岩瀬製図……………	35
Fig. 15 王城山C4号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 宮原実測・製図……………	36
Fig. 16 王城山C4号墳出土耳環実測図 (縮尺1/2) 酒井実測・製図……………	37
Fig. 17 王城山C5号墳墳丘測量図 (縮尺1/200) 松浦俊和・近藤・熊谷実測, 植山茂製図……………	39
Fig. 18 王城山C5号墳出土遺物壺 (縮尺1/3) 寺島撮影……………	43
Fig. 19 王城山C5号墳出土遺物実測図 (縮尺1/2) 近藤・松浦実測, 植山製図……………	43
Fig. 20 王城山C5号墳出土須恵器実測図① (縮尺1/3) 近藤・松浦実測, 植山製図……………	45
Fig. 21 王城山C5号墳出土須恵器実測図② (縮尺1/3) 近藤・松浦実測, 植山製図……………	46
Fig. 22 王城山C5号墳出土須恵器実測図③ (縮尺1/3) 近藤・松浦実測, 植山製図……………	47
Fig. 23 王城山C5号墳出土須恵器実測図④ (縮尺1/3) 近藤・松浦実測, 植山製図……………	49
Fig. 24 王城山C5号墳出土須恵器実測図⑤ (縮尺1/3) 近藤・松浦実測, 植山製図……………	50
Fig. 25 王城山C6号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 内田・副島実測, 岩瀬製図……………	56
Fig. 26 王城山C6号墳出土耳環及び鉄器実測図 (縮尺1/2) 酒井実測・製図……………	57
Fig. 27 王城山C6号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3, 1/6) 酒井実測, 宮原製図……………	58
Fig. 28 王城山C7号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 酒井・内田・副島実測, 岩瀬製図……………	61
Fig. 29 王城山C7号墳出土耳環及び刀実測図 (縮尺1/2) 酒井実測・製図……………	63
Fig. 30 王城山C7号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺1/3, 1/6) 酒井実測, 宮原製図……………	63
Fig. 31 王城山C7号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/6) 酒井実測, 宮原製図……………	64

Fig. 32	王城山C 8号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 川述昭人・沢田・川述公紀・直江・富士崎実測, 岩瀬製図……………	67
Fig. 33	王城山C 8号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3, 1/6) 酒井実測, 宮原製図……………	69
Fig. 34	王城山C 9号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 亀田・富士崎・直江・篠田・高崎実測, 岩瀬製図…	71
Fig. 35	王城山C 9号墳出土紡錘車実測図 (縮尺1/2) 酒井実測・製図……………	72
Fig. 36	王城山C 9号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺1/3) 舟山実測, 宮原製図……………	73
Fig. 37	王城山C 9号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/6) 酒井実測, 宮原製図……………	74
Fig. 38	王城山C10号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 酒井・内田・副島実測, 岩瀬製図……………	77
Fig. 39	王城山C10号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺1/3) 舟山実測, 宮原製図……………	79
Fig. 40	王城山C11号墳墳丘測量図 (縮尺1/600) 内田・副島実測, 岩瀬製図……………	83
Fig. 41	王城山C11号墳出土紡錘車実測図 (縮尺1/2) 酒井実測・製図……………	84
Fig. 42	王城山C11号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 宮原実測・製図……………	85
Fig. 43	王城山C11号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/6) 酒井実測・製図……………	87
Fig. 44	王城山C12号墳外形実測図 (縮尺1/200) 尾崎(益)・鈴木・坂井実測, 小林製図……………	90
Fig. 45	王城山C12号墳出土鉄製品実測図 (縮尺1/2) 小林実測・製図……………	95
Fig. 46	王城山C12号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 小林実測・製図……………	96
Fig. 47	王城山C12号墳出土須恵器 No. 1 大甕実測図 (縮尺1/6) 小林実測・製図……………	97
Fig. 48	王城山C12号墳出土須恵器 No. 2 大甕実測図 (縮尺1/3) 小林実測・製図……………	97-98
Fig. 49	王城山C12号墳出土土師器実測図 (縮尺1/6) 小林実測・製図……………	98
Fig. 50	王城山C12号墳石室平面構成図 (縮尺1/40) 小林作成……………	100
Fig. 51	王城山C12号墳墳丘構成図 (縮尺1/200) 小林作成……………	101
Fig. 52	王城山C13号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 橋本・森田実測, 橋本製図……………	104-105
Fig. 53	王城山C13号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/13) 宮原実測・製図……………	108
Fig. 54	王城山C13号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3, 1/6) 酒井実測, 宮原製図……………	110
Fig. 55	王城山C14号墳墳丘測量図 (縮尺1/100) 岡部実測, 岩瀬製図……………	114
Fig. 56	王城山C14号墳出土耳環・釘及び紡錘車実測図 (縮尺1/2) 酒井実測・製図……………	115
Fig. 57	王城山C14号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 舟山実測, 宮原製図……………	116
Fig. 58	王城山C14号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3) 宮原実測・製図……………	117
Fig. 59	王城山C15号墳外形実測図 (縮尺1/200) 右島製図……………	120
Fig. 60	王城山C15号墳石室計測位置図 (縮尺) 右島製図……………	122
Fig. 61	王城山C15号墳出土耳環, 鉄鏃実測図 (縮尺1/2) 小林実測, 右島製図……………	123
Fig. 62	王城山C15号墳出土須恵器杯実測図 (縮尺1/3) 右島・富沢実測, 右島製図……………	124
Fig. 63	王城山C15号墳出土須恵器壺実測図 (縮尺1/6) 小林実測, 右島製図……………	124
Fig. 64	王城山C15号墳出土新羅土器実測図 (縮尺1/3) 小林実測, 右島製図……………	125
Fig. 65	王城山C15号墳石室プランと推定原企画の適合状態 (縮尺1/40) 右島作成……………	127

Fig. 66	王城山C15号墳墳丘復元図(円の径は9m=30唐尺)(縮尺1/100)右島作成	128
Fig. 67	王城山C16号墳外形実測図(縮尺1/200)尾崎(益)・鈴木・坂井実測,石川製図	131
Fig. 68	王城山C16号墳基盤面実測図(縮尺1/100)小林(敏)・小林(正)・碓井実測,石川製図	132
Fig. 69	王城山C16号墳出土遺物実測図(縮尺1/3)石川実測・製図	138
Fig. 70	王城山C16号墳石室平面図と高麗尺による方眼操作(尺=35cm)石川作成	139
Fig. 71	王城山C16号墳墳丘基盤面平面図と尋による方眼操作 (1尋=高麗尺5尺=175cm)石川作成	140
Fig. 72	王城山C15号墳石室プランと推定原企画の適合状態(縮尺1/40)右島作成	144
Fig. 73	王城山C15号墳墳丘復元図(円の径は9m=30唐尺)(縮尺1/40)右島作成	146
Fig. 74	王城山C17号墳墳丘測量図(縮尺1/100)川述・進・高橋実測,岩瀬製図	149
Fig. 75	王城山C18号墳墳丘測量図(縮尺1/100)副島・内田・岡部実測,岩瀬製図	152
Fig. 76	王城山C18号墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)舟山実測,宮原製図	154
Fig. 77	王城山C18号墳出土須恵器実測図(縮尺1/6)酒井実測,宮原製図	155
Fig. 78	王城山C3・4号墳間出土須恵器実測図(縮尺1/3)宮原実測・製図	159
Fig. 79	王城山C4・6・7号間周溝出土須恵器実測図(縮尺1/3)舟山実測,宮原製図	161
Fig. 80	王城山C6・9号墳間出土須恵器,土師器実測図(縮尺1/3)酒井実測,宮原製図	164
Fig. 81	古野C4号墳墳丘測量図(縮尺1/100)酒井実測,岩瀬製図	168
Fig. 82	古野C4号墳出土須恵器・土師器実測図(縮尺1/3)舟山実測,宮原製図	169
Fig. 83	古野C4号墳出土須恵器実測図(縮尺1/6)酒井実測,宮原製図	170
Fig. 84	古野C5・6号墳墳丘測量図(縮尺1/100)千野・岡部実測,宮原製図	172-173
Fig. 85	古野C6号墳出土耳環及びガラス玉実測図(縮尺1/2)酒井実測・製図	176
Fig. 86	古野C6号墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)舟山実測,宮原製図	176
Fig. 87	原口古墳墳丘測量図(縮尺1/100)近沢・赤崎実測,岩瀬製図	179
Fig. 88	原口古墳出土耳環及び刀子実測図(縮尺1/2)酒井実測・製図	181
Fig. 89	原口古墳出土須恵器,土師器実測図(縮尺1/3)酒井実測,宮原製図	182
Fig. 90	喜一田古墳地形実測図(縮尺1/100)川述昭人・進・沢田・中川原・古賀実測,岩瀬製図	185
Fig. 91	喜一田古墳墳丘測量図(縮尺1/100)川述(昭)・川述(公)実測,岩瀬製図	186
Fig. 92	喜一田古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)酒井実測,宮原製図	187
Fig. 93	唐山古墳地形測量図(縮尺1/200)森田勉・岩永・中司実測,宮原製図	189
Fig. 94	唐山古墳石室内出土須恵器実測図(縮尺1/3)森田実測・製図	190
Fig. 95	唐山古墳石室内出土土丸王及び耳環実測図(縮尺実大)森田実測・山本信夫製図	191
Fig. 96	王城山A古墳群地形測量図(縮尺1/600)高田一弘実測,岩瀬製図	193
Fig. 97	王城山A1号墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)酒井実測・製図	194
Fig. 98	王城山A1号墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)酒井実測,宮原製図	194
Fig. 99	王城山A2号墳石室実測図(縮尺1/40)酒井実測・宮原製図	196

Fig. 100	王城山A 2号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 酒井実測, 宮原製図	197
Fig. 101	王城山A 2号墳出土大刀実測図 (縮尺1/3) 酒井実測, 二神製図	197
Fig. 102	王城山A 3号墳遺物出土状況実測図 (縮尺1/30) 酒井実測・製図	198
Fig. 103	王城山A 3号墳出土玉及び鉄器実測図 (縮尺1/2) 酒井実測・製図	200
Fig. 104	王城山A 3号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺1/3) 酒井実測, 宮原製図	201
Fig. 105	王城山A 3号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 酒井実測, 宮原製図	203
Fig. 106	王城山A 4号墳墳丘測量図 (縮尺1/200) 高田一弘実測, 岩瀬製図	206
Fig. 107	王城山A 4号墳出土玉及び鉄器実測図 (縮尺1/2) 酒井実測・製図	208
Fig. 108	王城山A 4号墳出土須恵器実測図① (縮尺1/3) 酒井実測, 宮原製図	209
Fig. 109	王城山A 4号墳出土須恵器実測図② (縮尺1/3) 酒井実測, 宮原製図	211
Fig. 110	古野A 1号墳石室実測図 (縮尺1/40) 田坂実測, 浜田信也製図	215
Fig. 111	古野A 1・2号墳出土装身具実測図 (縮尺2/3) 浜田実測・製図	216
Fig. 112	古野A 2号墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2) 浜田実測・製図	217
Fig. 113	古野A 2号墳石室内出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 浜田実測・製図	217
Fig. 114	古野石棺実測図 (縮尺1/20) 田坂実測・浜田製図	218

付 図 目 次

		本文対照頁
Fig. ①	王城山C古墳群地形実測図 (縮尺1/400) 酒井・川述・門田・副島実測, 岩瀬製図	12
Fig. ②	王城山C 1号墳列石平面実測図 (縮尺1/40) 近藤喬一・寺島孝一・熊谷康治実測, 寺島孝一製図	12
Fig. ③	王城山C 1号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/40) 近藤・寺島・熊谷実測, 寺島製図	13
Fig. ④	王城山C 1号墳石室実測図 (縮尺1/40) 近藤・寺島・熊谷実測, 寺島製図	13
Fig. ⑤	王城山C 2号墳列石平面実測図 (縮尺1/40) 田中勝弘・近藤・熊谷実測, 田中製図	16
Fig. ⑥	王城山C 2号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/40) 田中・近藤・熊谷, 実測, 田中製図	17
Fig. ⑦	王城山C 2号墳石室実測図 (縮尺1/40) 田中・近藤・熊谷実測・田中製図	19
Fig. ⑧	王城山C 3号墳石室及び列石平面実測図 (縮尺1/40) 古賀・横山・荒石・副島実測, 岩瀬製図	29
Fig. ⑨	王城山C 3号墳墳丘断面図 (縮尺1/40) 内田・岡部・尾山実測, 岩瀬製図	30
Fig. ⑩	王城山C 3号墳石室実測図 (縮尺1/40) 岡部・内田・中川原実測, 岩瀬製図	31
Fig. ⑪	王城山C 4号墳墳丘列石平面実測図 (縮尺1/40) 副島・内田実測, 岩瀬製図	34
Fig. ⑫	王城山C 4号墳墳丘断面図 (縮尺1/40) 副島実測, 岩瀬製図	35
Fig. ⑬	王城山C 4号墳石室実測図 (縮尺1/40) 内田・副島実測, 岩瀬製図	36

Fig. ⑭	王城山C5号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/40) 近藤・松浦実測, 植山茂製図	40
Fig. ⑮	王城山C5号墳石室実測図 (縮尺1/40) 近藤・松浦実測, 植山製図	39・40
Fig. ⑯	王城山C5号墳羨道閉塞石実測図 (縮尺1/40) 近藤・松浦実測, 植山製図	41
Fig. ⑰	王城山C6号墳墳丘列石平面実測図 (縮尺1/40) 岡部実測, 岩瀬製図	55
Fig. ⑱	王城山C6号墳墳丘断面図 (縮尺1/40) 岡部実測, 岩瀬製図	56
Fig. ⑲	王城山C6号墳石室実測図 (縮尺1/40) 岡部実測, 岩瀬製図	57
Fig. ⑳	王城山C7号墳墳丘列石平面実測図 (縮尺1/40) 高橋・岡部・副島・進・内田・酒井実測, 岩瀬製図	60
Fig. ㉑	王城山C7号墳石室実測図 (縮尺1/40) 進・岡部・副島・高橋・酒井・内田実測, 岩瀬製図	61
Fig. ㉒	王城山C8号墳墳丘断面図 (縮尺1/40) 酒井・内田実測, 岩瀬製図	66
Fig. ㉓	王城山C8号墳石室実測図 (縮尺1/40) 酒井・内田実測, 岩瀬製図	68
Fig. ㉔	王城山C9号墳石室実測図 (縮尺1/40) 亀田・富士崎・直江・篠田・高崎実測, 岩瀬製図	70
Fig. ㉕	王城山C10号墳墳丘列石平面実測図 (縮尺1/40) 進実測, 岩瀬製図	76
Fig. ㉖	王城山C10号墳墳丘断面図 (縮尺1/40) 内田・高橋実測, 岩瀬製図	77
Fig. ㉗	王城山C10号墳石室実測図 (縮尺1/40) 酒井実測, 岩瀬製図	78
Fig. ㉘	王城山C11号墳墳丘列石平面実測図 (縮尺1/40) 内田・副島実測, 岩瀬製図	82
Fig. ㉙	王城山C11号墳墳丘断面図 (縮尺1/40) 内田・副島実測, 岩瀬製図	82
Fig. ㉚	王城山C11号墳石室実測図 (縮尺1/40) 内田・副島実測, 岩瀬製図	83
Fig. ㉛	王城山C12号墳墳丘基盤面実測図 (縮尺1/100) 小林・坂井実測, 小林製図	89
Fig. ㉜	王城山C12号墳石室掘りかた実測図 (縮尺1/40) 渋沢・坂井・須田実測, 小林製図	89・92
Fig. ㉝	王城山C12号墳石室実測図 (縮尺1/40) 小林・渋沢・碓井・坂井実測, 小林製図	92
Fig. ㉞	王城山C12号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/40) 石川克・渋沢・碓井・須田実測, 小林製図	92
Fig. ㉟	王城山C13号墳石室実測図 (縮尺1/40) 森田・橋本実測, 橋本製図	106
Fig. ㊱	王城山C13号墳石室及び周溝平面実測図 (縮尺1/40) 森田・橋本実測, 橋本製図	106
Fig. ㊲	王城山C13号墳墳丘断面図 (縮尺1/40) 森田, 橋本実測, 橋本製図	105
Fig. ㊳	王城山C14号墳石室実測図 (縮尺1/40) 副島実測, 岩瀬製図	113
Fig. ㊴	王城山C15号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/40) 右島実測・製図	119
Fig. ㊵	王城山C15号墳石室土場及び掘りかた実測図 (縮尺1/40) 鈴木実測, 右島製図	121
Fig. ㊶	王城山C15号墳石室実測図 (縮尺1/40) 右島実測・製図	121
Fig. ㊷	王城山C16号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/40) 碓井・小林(正)実測, 石川製図	130
Fig. ㊸	王城山C16号墳石室掘りかた実測図 (縮尺1/40) 碓井・須田実測, 石川製図	130
Fig. ㊹	王城山C16号墳石室実測図 (縮尺1/40) 石川・碓井・須田実測, 石川製図	134
Fig. ㊺	王城山C17号墳石室実測図 (縮尺1/40) 内田・高橋実測, 岩瀬製図	150
Fig. ㊻	王城山C18号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/40) 酒井実測, 岩瀬製図	152
Fig. ㊼	王城山C18号墳石室実測図 (縮尺1/40) 川述(昭)・進・岡部実測, 岩瀬製図	153

Fig. ㉔	古野C4号墳墳丘断面図(縮尺1/40) 酒井実測, 岩瀬製図	167
Fig. ㉕	古野C4号墳石室実測図(縮尺1/40) 酒井実測, 宮原製図	167・169
Fig. ㉖	古野C5号墳石室実測図(縮尺1/40) 古家・銅直・三好実測, 岩瀬製図	172
Fig. ㉗	古野C6号墳石室実測図(縮尺1/40) 赤崎・千野・岡部・古野・三好・安藤実測, 岩瀬製図	175
Fig. ㉘	原口古墳石室及び列石平面実測図(縮尺1/40) 千野・岡部・安藤実測, 岩瀬製図	178
Fig. ㉙	原口古墳墳丘断面実測図(縮尺1/40) 近沢・安藤・渡辺・副島実測, 岩瀬製図	178
Fig. ㉚	原口古墳石室実測図(縮尺1/40) 千野・岡部・古野・赤崎・安藤実測, 岩瀬製図	178
Fig. ㉛	喜一田古墳石室実測図(縮尺1/40) 川述実測, 宮原製図	186
Fig. ㉜	唐山古墳石室平面実測図(縮尺1/40) 森田・中司・岩永実測, 宮原製図	188
Fig. ㉝	唐山古墳墳丘断面実測図(縮尺1/40) 森田・中司・岩永実測, 宮原製図	188
Fig. ㉞	唐山古墳石室実測図(縮尺1/40) 森田・中司・岩永実測, 宮原製図	188
Fig. ㉟	王城山A3号墳石室実測図(縮尺1/40) 石山・酒井実測, 石山製図	198
Fig. ㊱	王城山A5号墳石室実測図(縮尺1/40) 石山実測・製図	213
Fig. ㊲	古野A2号墳墳丘断面実測図(縮尺1/40) 田坂実測, 浜田製図	216
Fig. ㊳	古野A2号墳石室実測図(縮尺1/40) 田坂実測, 浜田製図	217

目 次

	頁
Tab. 1 御笠川流域周辺古墳名	5
Tab. 2 王城山C5号墳出土遺物目録	42
Tab. 3 器種と出土地点および型式の関係	52
Tab. 4 王城山C12号墳周溝計測値	91
Tab. 5 鉄釘一覧表	94
Tab. 6 石室計測値と換尺値	100
Tab. 7 玄室中心より周溝までの距離	101
Tab. 8 高麗尺, 唐尺換算表	126
Tab. 9 王城山C15号墳石室の想定原企画	126
Tab. 10 王城山C古墳群墳丘及び石室各部計測値	166
Tab. 11 古野C古墳群・原口・喜一田・唐山各古墳墳丘及び石室各部計測値	177
Tab. 12 石室内出土丸玉計測値	190

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— IX —

福岡県大野城市乙金所在古墳群の調査

I 調査の経過

1. 昭和45年度調査の経過 (PL. 2・3)

昭和45年度、用地問題解決のめどが立った地区より順次発掘調査を開始することと、乙金地区所在古墳群の調査を予定していた。この附近には古墳が群在することが以前より知られており、文化課の担当技師だけでは、調査がおぼつかないと想像された。そこで、東国古文化研究所々長尾崎喜左雄氏、慶応大学江坂輝弥教授、平安博物館伊藤玄三助教授、近藤喬一助手をそれぞれ中心とするグループに調査を依頼し、協力いただくこととなった。

同年11月19日 古野C古墳群の調査を開始する。20日には慶応大学の江坂教授、可児弘明講師、高山純東海大学講師他立正大学学生が到着する。現場をただちに立会していただき、1・2・3号の3基を調査願うこととなった。26日には新潟大学医学部の小片丘彦助教授、森本岩田郎講師が、28日にはさらに沼津女子高校教諭小野真一氏、妙海寺住職笹津海祥師が当古墳群の調査に参加された。なお、3号墳は酒井が担当することとし、12月8日より調査を開始した。

王城山C古墳群の調査は伐採作業のみを11月28日より開始する。作業の進捗につれて、新たな古墳の発見が相継いだ。11月30日より12月1日にかけて資材を搬入する。同2日、近藤喬一助手、寺島孝一副手を中心とした平安博物館の一行4名が到着する。5日には尾崎喜左雄所長を中心とした群馬大学の一行7名が到着し、両メンバーとも、ただちに調査を開始していただいた。各古墳の調査の経過内容は、第三章各節の中で述べることとし、調査期間と担当者を一覧すると次のようになる。

12月25日 11基の古墳の調査を全て終了する。

王城山 C 1・2・5号墳	12月1日～12月25日	平安博物館 助教授 伊藤玄三 助手 近藤喬一 副手 寺島孝一 田中 勝弘・松浦 俊和
〃 C12・15・16号墳	12月5日～12月25日	東国古文化研究所長 尾崎喜左雄 共愛学園高等部教諭 石川正之助 前橋育英高等学校 相沢貞順 渋沢啓央・右島和夫・鈴木 操・坂井久能
〃 C13号墳	11月30日～12月25日	尾崎 益雄・小林 敏夫・石川 克博・小林 正幸 唯井 正明・須田 茂

王城山 C13号墳 11月30日～12月25日 福岡県教育委員会文化課技師 西谷 正
橋本久和・森田 克行

古野 C1・2・3号古墳 11月18日～12月8日 慶応大学 教授 江坂輝 弥
講師 可児弘 明
東海大学 講師 高山 純
新潟大学 教授 小片丘 彦
講師 森本 岩田郎
沼津女子高校教諭 小野 真 一
工藤 竹久・真田 広幸・向田 裕二

〃 C4号墳 12月8日～12月25日 福岡県教育委員会文化課技師 酒井 仁 夫

なお、群馬大学班による発掘調査の後、整理作業を担当されたのは次の方々である。

現群馬県境町教育委員会	文化財担当	小林 敏 夫
現前橋市教育委員会		石川 克 博
現関西大学大学院生		右島 和 夫
現前橋市教育委員会		富沢 敏 弘

関係者一覧は縦貫道関係調査報告書第Ⅱ集（1971年）を参照されたい。

2. 昭和47年度調査の経過（PL. 4）

昭和47年3月 道路公団福岡工事事務所大野工区の工事が開始されるに当たっての事前分布調査及び調査工程作成のための現場立会を実施した。4月6日、古墳群中に工食用道路を設けるとのことで、公団担当職員と共に立会し、前回調査終了部分を破壊することとした。しかし、4月12日、文化課、公団、工事担当者と共に再度の現場立会したところ、未調査の円墳2基の一部が破壊されていた。

6月15日 唐山古墳の調査を開始する。機材を筑紫野市萩原古墳より移動する。また調査区内の草木を伐採し、調査前の写真撮影を行う。翌日全体の地形実測を行う。19日には玄室上部のプランを検出する。同日原口古墳の調査実施について大成建設担当者と打合わせ、7月15日より開始することとした。

6月20日 公団福岡工事事務所において調査工程の再検討を行った。その結果、原口古墳については6月末日に終了する。古野C古墳群については8月10日より8月30日まで調査を実施することとした。また、乙金古墳群全体については、昭和47年度末をもって調査を全て終了してほしい旨、公団より要望がなされた。

6月28日 森田勉が唐山古墳の調査を担当することとなった。

7月10日より13日にかけて豪雨が降り、唐山古墳に北西する丘陵や四王寺山中で土砂崩れ、

河水の氾濫が相次いだ。14日は雨後の処理に大わらわした。

7月29日 唐山古墳の調査は実測の一部を残して終了する。機材を古野C古墳群へ移動し、第5・6号墳の調査を開始する。

8月5日 唐山古墳の実測も終了する。同日裏ノ田遺跡より機材を移動して原口古墳の調査を開始する。8月には古野C5号墳の実測を開始し、原口古墳の地形実測を行う。

8月17日 原口古墳の調査は実測を残して終了し、機材を王城山C古墳群へ移動する。同日ベンチマークを同古墳群へ移動し、またトラバースを設定する。

8月19日 王城山C4号墳の玄室床面より須恵器や玉類が出土する。

古野C5・6号墳の調査は各種実測作業を行い、8月29日に全ての作業を終了する。調査は王城山C古墳群に全てを集中した。工程の詳細は各古墳記述中の調査の経過の項にゆずるとして、各古墳の調査期間を一覧すると次の通りとなる。

3号墳	8月5日～10月7日	
4号墳	8月5日～10月6日	
6号墳	8月5日～10月5日	
7号墳	10月7日～10月14日	10月27日～12月1日
8号墳	9月26日～10月16日	
9号墳	9月23日～10月14日	
10号墳	10月27日～11月18日	
11号墳	10月11日～11月15日	
14号墳	10月8日～11月11日	
17号墳	10月14日～11月2日	
18号墳	11月16日～12月1日	

喜一田古墳の調査は10月9日に開始した。高い崖上にあり、石室は玄室の一部を残すのみであった。14日には全てを終了した。

10月26日 王城山C古墳群中の路線巾の一部に設計ミスのあることが明らかとなり、新たに第10号墳の石室と第18号墳の全てについて調査を要することとなった。用地買収が終えていなかったため、屋野村在住の地権者より調査承諾書を取り、発掘を開始する。

11月25日 残された最後の古墳であった第19号墳の発掘作業を終了し、12月1日には全ての作業を終了した。この間に王城山C古墳群のうち、今回破壊された範囲外の古墳について、地主の協力のもとに平板を用いた地形実測を実施した。

乙金地区には昭和44年当時辛うじて63基が残存していた。王城山A古墳群、古野A古墳群の調査と共に、今回の各古墳群の調査によって、計33基の古墳が消滅してしまったのである。残る30基をいかに存保するか、今後の大きな課題である。

なお、乙金地区古墳群の調査について略報した文献として次のものがある。

1. 大野町教育委員会「大野町の文化財」第1集 1970年
2. 大野町教育委員会「大野町の文化財」第2集 1971年
3. 大野城市教育委員会「大野城市の文化財」第5集 1973年
4. 福岡県教育委員会「発掘現場紹介—乙金古墳群」『教育福岡』昭和48年11月号 1973年

昭和47年度の調査担当者は次の通りであり、関係者一覧は縦貫道関係報告書第VI集（1971年）を参照されたい。

担当者	福岡県教育委員会	文化課	技師	酒井仁夫
	同		技師	川述昭人
	同		技師	森田勉
調査補助員	中司照世	岩永司	川述公紀	
	内田始	副島源司	赤崎敏男	
	千野隆志	岡部真知夫		
学生	国学院大学学生	福岡大学学生	近畿大学学生	
	東京教育大学学生	福岡教育大学学生		
整理担当者	福岡県立九州歴史資料館託嘱	岩瀬正信		
整理補助員	舟山良一	宮原真裕美	岩瀬喜久代	

II 位置と環境 (Fig. 1~3)

室見川・那珂川・御笠川・宇美川の潤おす福岡平野に面した丘陵や山麓には多数の古墳が見える。福岡市域のうち、西部の今宿・今津地区、東部の和白・香椎地区を別とすれば、古墳群は 1) 室見川西岸の早良地区、2) 室見川東岸から那珂川西岸の油山山麓地、3) 那珂川と御笠川に挟まれた地区、4) 御笠川東側の三郡山系丘陵西麓の四地区に区分される。ここでは那珂川の東側、御笠川の両岸地区に問題を絞って考えてみたい。

1) 御笠川・那珂川間の古墳群

註1

背振山系の牛頸山(448m)の北麓は御笠川と那珂川の及ぼす侵蝕と沖積の相互作用によって複雑な段丘を形作っている。北側の下流域においては、段丘は中洲状の島地となっている。これらの島状台地の上には多くの弥生時代以来の遺跡が濃密に分布している。板付・諸岡・須玖・岡本・臼佐原・雑餉隈・小倉・上白水・門田・中原遺跡等が代表される弥生時代遺跡である。

この地域の古墳は東光寺剣塚古墳(前方後円墳)、那珂八幡古墳を北端とし、板付八幡古墳、諸岡古墳群が島地上に立地している。

油山に続く丘陵上では北より須玖古墳群・岡本古墳群・竹ヶ本古墳群(前方後円墳1, 円墳1)・下白水大塚古墳(前方後円墳)・日拝塚(前方後円墳)・天神山古墳(前方後円墳)・ウトロ古墳群(前方後円墳1, 円墳1)・門田古墳群・原古墳群・観音山古墳群・炭焼古墳群・塚原古墳群(前方後円墳1, 円墳2)等が代表的である。

これらの古墳群の立地を一見して明らかなのは、東光寺の剣塚古墳を別として、油山系丘陵の那珂川寄りに偏していることである。油山系丘陵のうち、御笠川に寄っているのは、白木原の小円墳4基のみである。井相田や雑餉隈の神社地が古墳である可能性もあるが、あまりにも古墳の数が少なすぎる。このことは次節、御笠川東岸に密在する古墳群と相関関係にあるかと想像される。

Tab. 1

1 雀居古墳 2 上ノ池古墳群 3 天神森古墳群 4 下月隈古墳群 5 文殊谷古墳群 6 丸山古墳群 7 持田浦古墳群 8 大府古墳群 9 今里古墳 10 御陵古墳 11 御陵古墳群 12 中古墳群 13 盗原古墳群 14 乙金古墳群 15 原口古墳群 16 銀山古墳群 17 雉子尾古墳群 18 釜蓋古墳群 19 成屋形古墳群 20 白木原古墳群 21 吉松古墳 22 剣塚 23 那珂八幡古墳 24 板付八幡古墳 25 諸岡古墳群 26 須玖古墳群 27. 岡本古墳群 28 竹ヶ本古墳群 29 下白水大塚古墳 30 日拝塚古墳 31 辻田古墳群 32 門田古墳群 33 日拝塚古墳 34 ムトロ古墳群 35 原古墳群 36 原ムトロ古墳 37 古墳 38 観音山古墳群 39 炭焼古墳群 40 塚原古墳群 41 大堤古墳群

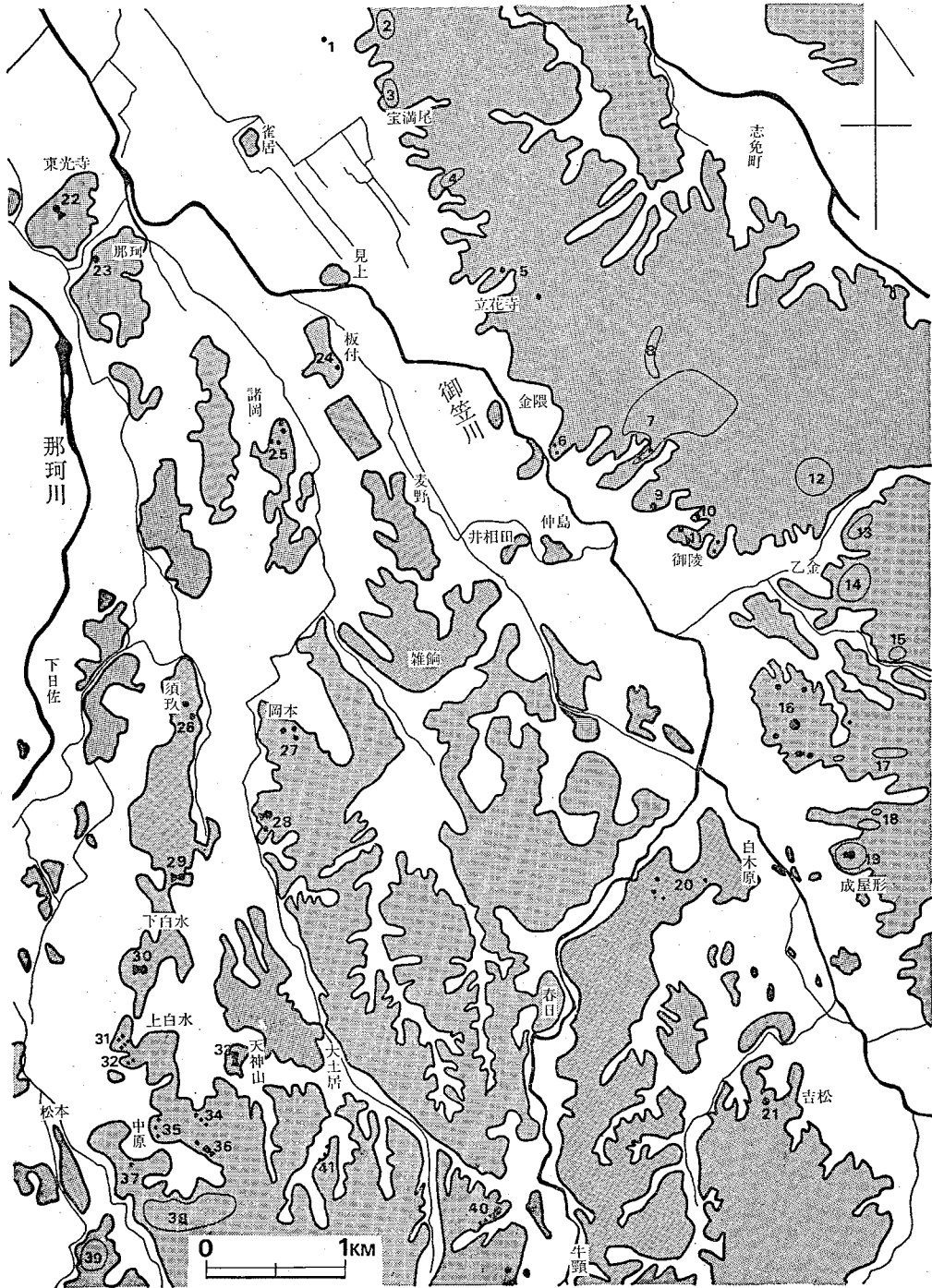


Fig. 1 御笠川流域周辺古墳分布図 (縮尺 1/50,000)

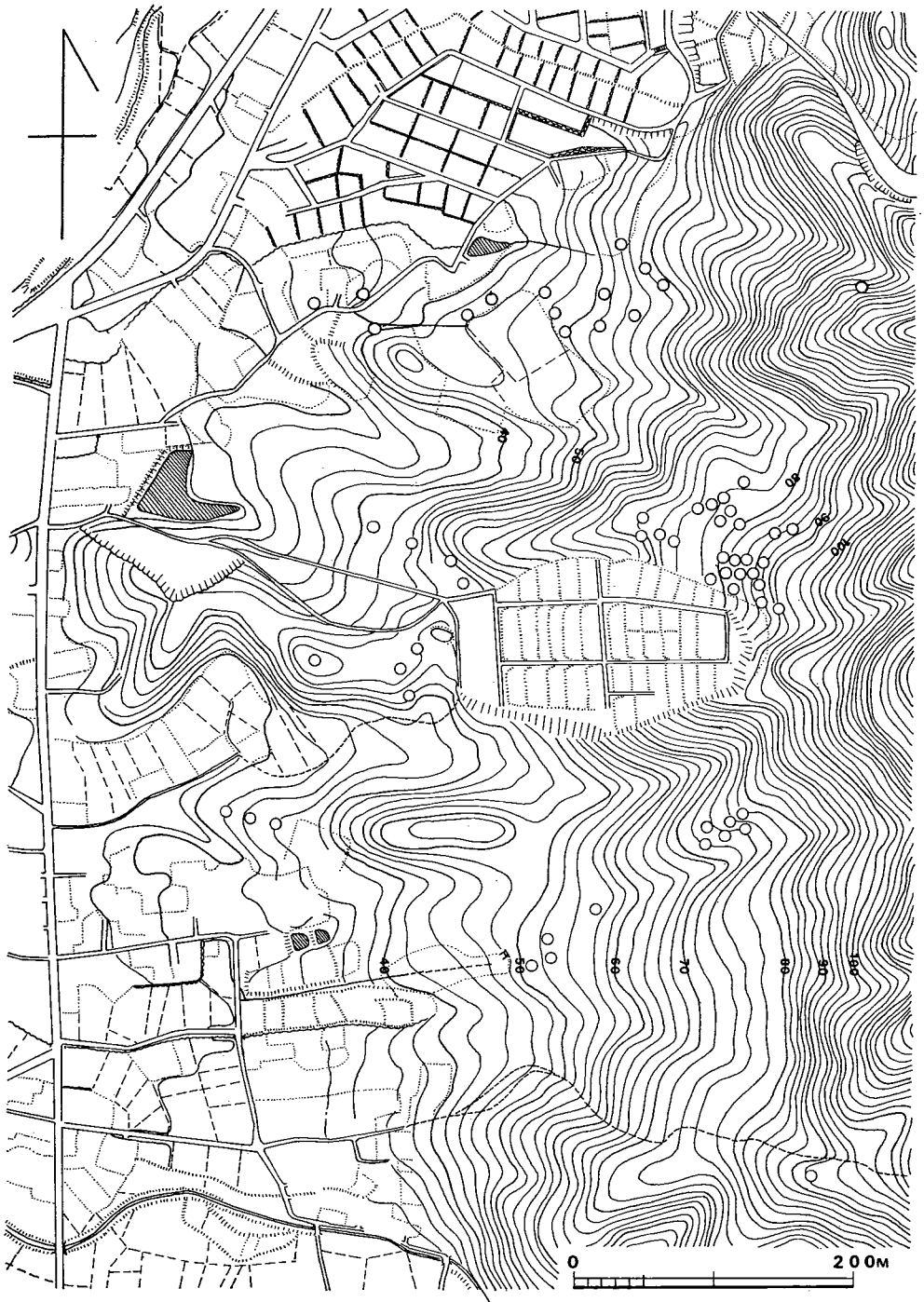


Fig. 2 乙金地区所在古墳分布図 (縮尺 1/5,000)

2) 御笠川流域東岸の古墳群

御笠川流域東岸の丘陵は三郡山系であり、北には宇美川に挟まれた月隈丘陵(100~150m)が、炭焼越への峠を挟んで南側には乙金山(271m)が、さらに四王寺山(410m)が迫っている。この地区は板付飛行場を含めて戦前からの軍用地、ならびに近年の宅地や工場造成等によって地形の改変が著しい。その中であって現存する古墳群(最近消滅したものを含む)は以下の通りである。北より下白井古墳・東平尾古墳・上ノ池古墳群・雀居古墳・天神森古墳群・下月隈古墳群・上月隈古墳群・文珠谷古墳群・建石古墳群・丸山古墳・影ノ浦古墳群・持田浦古墳群・今里古墳^{註2}・御陵古墳^{註3}・御陵古墳群^{註4}・中古墳群^{註5}がある。

宇美に通じる炭焼越の峠を挟んで、乙金山麓には盗原古墳群、喜一田古墳・王城山古墳群・古野古墳群・原口古墳群・雉子ケ尾古墳群・銀山古墳群・釜蓋古墳群・成屋形古墳群^{註7}がある。このうち成屋形古墳群を除く全てが6世紀後半から7世紀にかけての円墳である。

乙金山麓各古墳群の内容は次の通りである。

盗原古墳群

中古墳群の南に対面する丘陵、乙金山の北側斜面には10基前後の古墳群が分布している。龍神を祀るお堂の近辺に数基が密集しており、いずれも小さな円墳である。またやや離れた1基の石室は開口しており、昔、博徒が中で賭け事をしていたらしく、寺銭がなくなると下の街道で盗みを働いたと地元では伝えられる。この事が盗原の地名の起りという。

喜一田古墳群

計16基よりなる。標高30mから60mにかけて密集しており、標高100mの地点に1基のみ認められた(第V章第2節参照)。標高30mより50mにかけては果樹園造成され、その際に若干の古墳が破壊された模様である。また同地区で昭和43年12月より44年1月にかけて須恵器窯跡の調査が国土館大学考古学研究室の手によってなされている。調査の内容については不明な点が多いが、略報によれば6世紀末より7世紀初頭にかかる窯^{註8}2基で、周辺古墳群との近時性が指摘されている。

王城山古墳群

計34基よりなり、地形上3群に区分される。標高50mより90mにかけて宅地造成により大規模に破壊されており、さらに多くの古墳があったものと考えられる。

A群 西側に凸出した丘陵先端に位置し、5基の円墳よりなる。標高は40mから48mである。詳細は第VI章第1節参照。なお、5号墳の西側、標高30mの位置に6世紀末の須恵器窯跡1基が存在する。

B群 A群の北側に狭い谷をへだてて存在する4基の円墳よりなる。いずれも未発掘である。C古墳群の第1次調査に際して、農道開設及び宅地造成によって古墳が破壊されたのであ

ろうか、多数の須恵器が付近より採集された。墳丘や石材は工事に際して壊滅されてしまったのであろうか、まったく検出されなかった。

B群採集須恵器 (Fig. 3, PL. 1)

杯蓋 (1~5) 1~4は天井部の調整が粗く口縁は直立または若干内彎する。口径は10.5cm~11.5cmである。5は口径9cmと小さい。身受けは浅く、かえりは僅かに伸びるのみである。つまみの作りは雑である。

杯身 (6)は、赤橙色を呈し、口縁部は外反し、端部は丸い。

高杯 (7)は、脚部のみ採集した。脚体部にシボリ痕を残し、裾部内外面ともにヨコナデ調整している。脚端部は面取りのナデが施され若干窪んでいる。暗赤褐色を呈し、焼成良好である。

甕 (8) 全体の $\frac{1}{6}$ を残すのみの破片であったが、特殊な器形を呈するため、あえて復元図示した。口縁部は胴部から直線的に内傾する。胴部は偏球状になると思われる。最大胴部位よりやや上方に穿孔されている。全体のヨコナデ調整は丁寧であり、胎土、焼成ともに良好である。推定口径10.4cm、胴部の最大推定径は12.2cmである。

C群 昭和45・47両年度にわたって調査した18基の他に、西側で4基、東側で6基の計28基が確認されている。標高は65mから95mにかけて立地している。当群の古墳は立地上さらに5グループに細分されると考えられるが、詳細は第三章において考察する。

古野古墳群

計13基よりなり、標高からみて3群に区分される。

A群 標高32mから38mにかけて3基分布する。いずれも南側に開口する横穴式石室を有する。詳細は第VI章第2節参照。

B群 標高50mから56mの間に分布する4基の円墳よりなる。いずれも未発掘であるが、径8m以内の小円墳で、横穴式石室を有するものと考えられる。

C群 標高70mから78mにかけて分布する6基の円墳である。いずれも南に開口する横穴式石室を有する。詳細は第IV章参照。

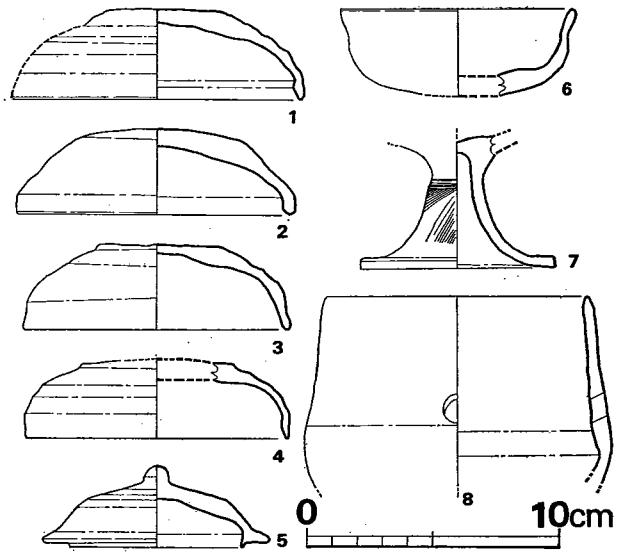


Fig. 3 王城山B群採集須恵器実測図 (縮尺1/3)

原口古墳群

乙金山と南側に連なる四王寺山の間小谷に面して両岸に5基分布していた。そのうち南側の3基は福岡市配水場建設に際して破壊された。石材よりみて、横穴式石室を有していたと推定される。なお、古野古墳群との中間、標高90mの地点に単独の古墳があり、字名により、これも原口古墳群に含めた(第V章第1節参照)。

雉子ケ尾古墳群

四王寺山より西側に長く伸びた丘陵上に、確認されたのみで6基分布する。これらは立地により2グループに区分される。

A群 すでに消滅しているが2基存したといわれる。丘陵の西端にあり、いずれも横穴式石室を有していた。うち1基は石室内側が朱塗りされていたという。

B群 A群の400~500m東側、標高50m付近に4基分布していた。うち1基は縦貫道関係調査の直前に消滅した。この石室は大正時代にすでに開口していたといわれる。玄室長約3.5mの横穴式石室で、内部より7世紀初頭の杯が出土した。他の1基は岡本鹿次郎宅に現存し、石室も完存している。当古墳の北側に接して2基の須恵器窯があり、内部より6世紀後半の須恵器が出土している。

銀山古墳群

4基の横穴式石室を有する円墳よりなっていたといわれるが、その全てが宅地造成によりって消滅している。戦時中この地に高射砲部隊が駐屯し、石室を防空壕として利用していたといわれる。

釜蓋古墳群

釜蓋部落内に位置し、墳丘を完存するものはない。いずれも小形の横穴式石室を有するようである。なお、これら古墳と小谷をへだてて野観音山古墳と呼ばれる径20m以上の大きな円墳がある。頂部に盗掘孔があるが、主体部は不明である。南の成屋形遺跡とは谷をへだてて対している。

3) 御笠川を挟む地域の後期古墳群

以上述べてきた通り、油山山麓及びそれに連なる中洲状台地における古墳群の立地は東西において極端なへだたりを見せている。

東域の古墳群の稀少さと月隈丘陵や乙金山麓古墳群の濃密さとは少なからざる相関関係を持つものと考えられる。つまり御笠川の流路が瓦田・釜蓋間、雑餉隈・乙金間、麦野・御陵間、諸岡・月隈間をかなり移動したであろうことは現地形より見ても容易に想像のつくことである。また東光寺近郊で那珂川と御笠川が合流していた可能性もある。そうした場合、現在御笠

川の西岸に位置する丘陵や中洲状台地も、ある時期には東岸に存したことは充分考えられることである。さらに白木原から雑餉隈にかけての低丘陵上には弥生時代後期以降の集落跡があるにもかかわらず、周辺に古墳が稀薄なのは、この地区でさえ、御笠川東岸丘陵地に古墳を営んでいたとも考えられる。想像を強くすれば、御笠川の治水や開田、灌漑の労働を通じて、両岸集落の結束が強固であり、よって御笠川東岸沖積地に迫る高燥の丘陵地に墳墓造築の地を求めたのではないかと考えられる。(酒井 仁夫)

- 註 1 当地域所在古墳に関する文献は多いが、「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」第1集及び第2集(福岡県教育委員会1976)にその概要が示されており、便利である。
- 2 以上の古墳群の分布については、「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編」(福岡市教育委員会1971)を参照した。持田ヶ浦古墳群のうち2基はすでに調査された。1基は横穴式石室を主体部とし、1基は竪穴系横口式石室を主体としている。「持田ヶ浦古墳群 1・2号調査報告」(福岡市教育委員会1971)。
- 3 島田寅次郎編「今里の古墳」『史蹟名勝天然記念物調査報告書第1輯』福岡県1925年。
- 4 明治時代の発掘で、不明な点が多いが、円墳・箱式石棺である。内部より天王日月獣文帯四神四獣鏡を出土している。
- 5 岩瀬正信氏の御教示によれば、周溝をもつ大形の円墳2基を含んでおり、横穴式石室を主体としていたようである。内部より塗金の方格規矩鏡が出土したといわれる。なお、これら古墳は土取り工事によって消滅し、字塚口に1基のみ残っている。
- 6 高田一弘氏の御教示によれば、6基の円墳よりなる。
- 7 福岡県教育委員会・エーザイ株式会社「福岡県筑紫郡太宰府町成屋形遺跡調査概要」1968年 福岡県教育委員会「成屋形遺跡」1970年。
- 8 大野町教育委員会「乙金窯跡」『大野町の文化財』第1集 1970年。
- 9 岩瀬正信氏の御教示による。
- 10 大野城市教育委員会「雉子ヶ尾古墳群」『大野城市の文化財』第5集 1973年。
- 11 大野城市教育委員会「雉子ヶ尾窯跡」『大野城市の文化財』第5集 1973年。
- 12 岩瀬正信氏の御教示による。

Ⅲ 王城山 C 古墳群の調査 (Fig. ①, PL. 2~4)

1. 第 1 号 墳

1) はじめに

本古墳は2号墳・5号墳とともに、福岡県教育委員会の委託をうけて、平安博物館が発掘調査を担当したもので、1号墳については主として寺島が担当した。

占 地

この古墳の標高は約74mで、今回調査された王城山古墳群の中では低い位置に属する。2号墳とともに1小群を形成するものと思われるが、南側が宅地造成などで削平され、1号および2号の2基が残存するのみであった。

墳頂は盗掘により大きく窪んでおり、石室の石が一部露出していた (Fig. 4, PL. 5-1)。

調査の経過

調査はまず石室内部の清掃から行い、玄室・羨道ともに基底部分が比較的良好に遺存しているのが確認できた。ただし、遺物については、盗掘のために石室内からは須恵器の小片以外は発見できなかった。また、羨道のほぼ中央では閉塞石の集積が認められた。

石室の調査とほぼ併行して、羨道の入り口から墳丘の裾をめぐる列石を検出した (PL. 5-2)。石室・石列の調査後、石室の主軸方向および、主軸にほぼ直角方向にトレンチを入れて墳丘の構築状況を調査した。

2) 墳 丘

規 模

墳丘は西に向って傾斜する丘陵の斜面に作られており、東側に溝を切って墳丘を画している (Fig. 4・Fig. ②, PL. 7-2)。調査前の現状では、墳丘はほぼ円形で、直径は約8mであったが、発掘調査によって本古墳をとりまく列石が確認された。これによって墳丘の規模を計測すると、本古墳は石室の主軸方向にやや長い楕円形を呈し、長径約8.02m、短径は約7.8mである。墳丘の高さは、丘陵の斜面に立地するために計測しにくい、墳丘西側の最も低い部分で標高約73m、墳頂で75mであった。

列 石

列石は、本来羨道入口から墳丘の裾を一周していたものと思われるが、半周以上がずり落ちており、南西および東側の一部が原位置をとどめるのみであった。なお、最も保存状態の良い

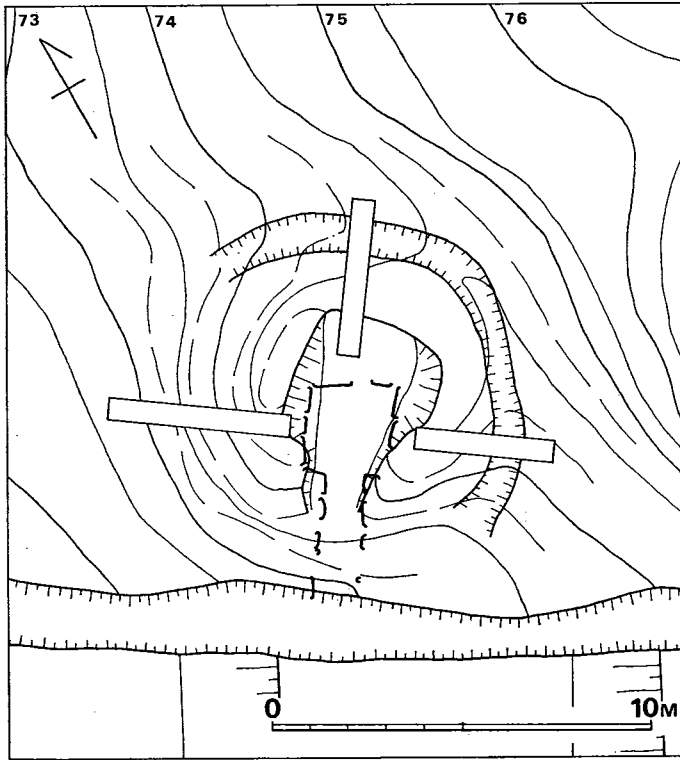


Fig. 4 王城山C1号墳地形測量図(縮尺1/200)

位置に、旧地表から深いところで約80cmほど掘り下げる。この深さは、玄室最下段に据えられた石材の高さに相当する。幅は玄室部では約2.6mで、主軸方向については奥壁側を約50cm掘り下げているが、羨道から前庭にかけては自然傾斜のため、掘り方は認められなかった (Fig. ③)。石室部分を掘り窪めたのち、まず1段目の石を据え、その高さまで盛り土を行い、更に2段目の石を積んで順次墳丘を盛り上げていったものと推定されるが、墳丘断面の観察でその痕跡を明確に認めることはできなかった。

また列石の他に、封土中には列石に用いたと同じ石材が不規則に混じていたが、これは墳丘を強化する目的のものと思われる。

3) 石 室 (Fig. ④, PL. 6~8)

石室は両袖式の横穴式石室で、東側の側壁が最下部の1段、西側で2~3段の側壁が残存していた。主軸の方向はN-35°-Eで、ほぼ南々西に開口している。

石室の規模は Tab. 10 (p. 166) の通りである。

玄室は西側壁が残存状態が最も良好で、3段の石組が残り、高さは約1.44mであった。いず

部分では2段分が残っており (PL. 6)、本来はこの状態で一周めぐっていたものと推定される。

周 溝

周溝は、ほぼ北から東の裾をまわって南まで掘られているが、斜面の低い方に相当する西側には作られていない。溝の幅は狭いところで約80cm、広いところで約1.3mと、かなりの狭広差が認められた。なお、この溝の深さは、最も深いところで約30cmであった。

構 築 状 況

墳丘の構築にあたっては、まず石室に相当する

れの壁も最下段は高さ60~80cm、幅80cm~1mほどの比較的大形の花崗岩を横位置に据えたもので、両側壁には各3個（東壁には2個が現存するのみであったが、羨道寄りの部分には石材の抜きあとが認められた。）、奥壁には2個が用いられていた。それぞれの石の裏側には根石状に小礫を置き、石の安定をはかっていた。

奥壁・東壁については2段目以上の石は全て失われているが、西壁では持ち送りをを行いながら3段目まで積まれており、持ち送りは40cm近くに及んでいた。大石を積み重ねた際の空隙には小礫をつめ、更に裏込めの石を用いて安定をはかっている。

なお、床面の敷石や羨道との境界の梱石などの設備は全く認められなかった。

羨道も西側が残存状態が良好で、東側は最下段を残すのみであった。羨門石は玄室最下段に用いられている石材とほぼ同様の大きさであるが、横位置ではなく、縦位置に据えられていた。その高さは80~90cmである（PL. 8-1）。羨道側壁最下段に置かれる石材は、玄室寄りでは、玄室とほぼ同様の大きさのものを用いているが、入口にゆくに従って小形になり、羨道入口の石は高さ40cmほどとなって列石に移行している。

西側の側壁で遺存している2段目以上の石材は、玄室のものとは異なり、長さ50cm、高さ30cmほどの小形のものであった。

羨道中央のやや玄室よりは、大小の石材を密につめた、長さ約1.2m、現存高約50cmの閉塞石組みが検出された。なお、この部分の羨道幅は約1mであった。

羨道を出るとすぐに、宅地造成のための溝が作られており、墓道などの確認は全くできなかった。

4) 遺物

本古墳で出土した遺物としては、墳丘の南西裾に据えられていた土師器甕（PL. 9-1）、および羨道内から出土した、宝珠つまみのついた須恵器蓋（PL. 8-2）などがある。このうち蓋については、発掘中に盗難にあい、詳細は不明である。他に周溝などから、土師器・須恵器片が少量出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。

土師器甕は、PL. 9-1にみられるように、墳丘裾に隅丸方形の土壇を掘り、据えつけられていたものである。この際、墳丘の裾側には礫をつめ込んで安定を保っている。甕内には土砂がつまっていたが、遺物は全く入っていないかった。

この甕（Fig. 5, PL. 9-2）は器高33.2cm、口縁径20cm、体部最大径26.2cmである。口縁は高さ約5cmで、わずかに外反する。口縁は内外面ともナデ調整を行っているが外面には叩きの痕跡かとも推定される斜方向の列線が一部に認められた。体部外面には叩き痕が、内面にはこれよりやや細かなおさえ板の痕跡が残されている。

肩の張りは全くなく、体部中央よりやや下方で最大径を計る。底部は丸く、中央より偏し

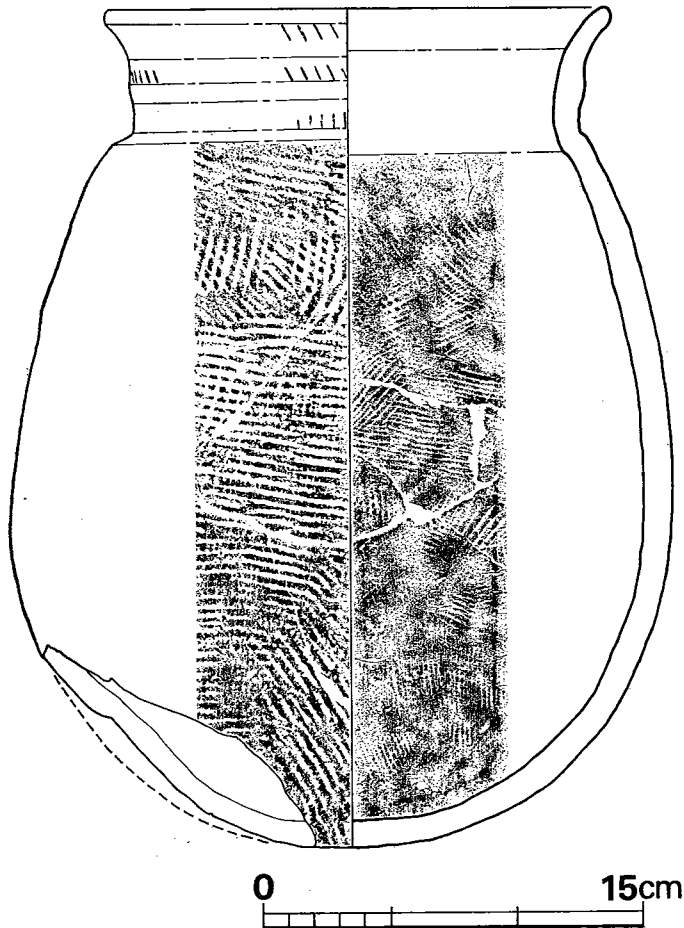


Fig. 5 王城山C号墳出土土器実測図 (縮尺1/3)

と約2m、墳丘の高さは、玄室床面および、これとほぼ同じ高さである墳丘西側の列石(最も低い部分)から計って2mをやや越える程度のものであったと考えられよう。

石室内から出土した遺物としては、羨道床面で発見され、盗難にあった須恵器蓋(有蓋高杯の蓋と思われる)のみであった。これは写真しか残っていないため詳細は不明であるが、ほぼ6世紀中葉から後半にかけてのもものと推定される。この須恵器は、閉塞石の下から発見されたものであり、周囲からの流れ込みによるものではないが、第1次埋葬時のものか、追葬時のものかは不明である。また墳丘に据えられていた土師器甕は、須恵器蓋よりもやや下の6世紀後半のものである。このことから、この古墳は6世紀中葉から後半にかけては、築造されていたということがいえよう。

なお、遺物の年代については、北九州市歴史資料館の小田富士雄先生の御教示を得た。末尾ながら記して謝意を表したい。

(寺島 孝一)

て、径約11.5cmの穿孔が施されている。体部の中央から下半にかけて黒斑がみられ、また炭化物の付着も認められた。

5) ま と め

墳丘および石室の規模・構造については既に述べた通りで、墳丘の直径約8m、石室長は5.7mであった。さて、本古墳は、既に盗掘を受けて、墳頂および石室の上部は欠失していた。しかし、玄室西側壁は3段目まで石組が残っており、墳丘の規模から推定しても、この上に天井石が載せられていたものと思われる。石室3段目の石組までの高さが約1.5mであるから、天井石を載せる

2. 第 2 号 墳

1) はじめに

占 地

当墳は西傾する丘腹に立地する円墳である (Fig. 6, PL. 10-1)。立地、羨道の開口の向きなどからみて、C1号墳と同一小群を形成するものと考えられるが、南側が宅地造成で既に削平されており、C1, C2号墳の2基のみが残存していた。

調査の経過

調査は、まず石室内の清掃からはじめ、ついで、列石周溝の確認、墳丘の截ち割りを行ってその構築状況を調査した。

2) 墳 丘

規 模 (Fig. 6, Fig. ⑤)

墳形および平

面規模については、発掘前の地形測量図からも読みとれるが、当墳では墳丘裾端部に沿ってめぐる列石が検出され、これが墳形および平面規模を規定していると考えられたので、ここでは列石の計測値を記すことにする。

列石は、古墳が西傾する丘腹に立地するため

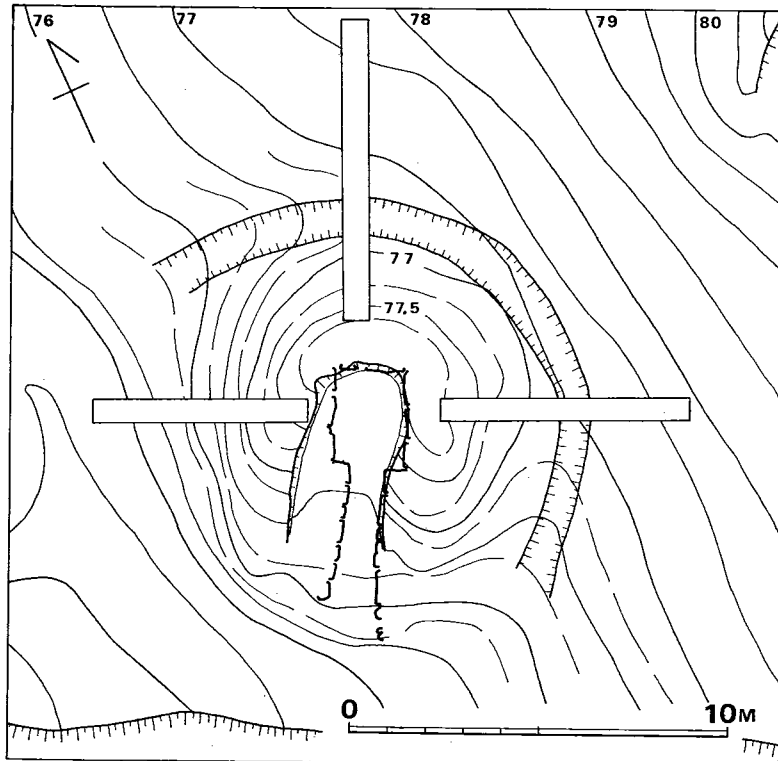


Fig. 6 王城山C2号墳丘測量図 (縮尺1/200)

西半分のものが一部移動し、また、流失した状況にあり、西方にふくれたした円形を呈している。遺存状態の良好な部分で計測すると、径約10mの数値を得る。

墳丘の高さは、先述のように古墳が西傾する丘腹に立地するため計測地点によって異なるが、丘陵の高所側で1.3m、低所側で2.6mを計る。この数値は、墳丘に設定したトレンチの断面土層の観察から、元来の高さに近いものと考えらる。

構 築 状 況 (Fig. ⑥, PL. 11・12・13-1)

構築状況については、石室の中軸線に沿って石室後方に設定したNトレンチ、中軸線に直交し、玄室の中央部を通るEおよびWトレンチの3ヵ所の断面土層を観察することによって資料を得た。

i E ト レ ン チ

西傾する自然地山面は、墳丘部分で、約15cmの落差をもって、幅1.9mと1.7mの2段にわたる平坦面を作り出し、石室部分では、さらに、深さ約28cm程に、ほぼ垂直に掘り下げられている。

地山面の整形後、石室部分をも含めて整形面全体に茶色粘質土を敷きつめ、さらに、墳丘部分にだけ、黒茶褐色砂質土をほぼ水平に盛土している。この2層の盛土によって、石室部は約1mの深さになり、墓壙と言ふべきものを形成している。

玄室の右側壁石材はトレンチ部分で2段までが遺存していたが、その高さは壙の深さにほぼ等しい。下段石材の後方で、壙壁との間には軟弱な暗褐色砂質土が充填され、その上面に、壙の肩部におよんで赤褐色粘質土をはじめ4層にわたる盛土がなされている。2段目の石材の後方には、壙の肩部までの高さに暗褐色砂質土および暗褐色粘質土の2層の盛土が見られる。

側壁の3段目以上に当る部分では5層にわたる盛土が見られるが、茶褐色粘質土および赤褐色土混り茶褐色粘質土の2層は、約50cmの厚さでブロック状に置かれる。これに対し、各々の下面にくる暗茶褐色砂質土は壙の肩部まで、暗茶褐色砂質土および青灰色土混り茶褐色土は墳丘の中程までにおよんでいる。これらの土層のうち茶褐色粘質土層の上面の高さは右側壁奥部で遺存していた3段目石材の高さに等しく、これがトレンチ部分における3段目の石材の後方を固めたものであろう。同様に赤褐色土混り茶褐色粘質土は4段目石材に対応していたものと推定された。

このことから、石室石材の後方を凹ませた状態で土盛りし、石材の積み上げ後、その後方の凹みを充填して石材を固定させるといった作業を2度繰り返すことによって、側壁の3段目および4段目の石材の積み上げがなされたと考えられる。

この過程で、封土の最下層である2層の直上に内側列石が配されている。層序関係からみると、側壁3段目石材の後方を固めた直後に列石が配され、青灰色土混り茶褐色土および茶褐色砂質土が列石までの間に盛土される。さらに、列石から墳丘裾端部までの間に茶色砂質土を盛土

して墳丘全体を整え、側壁4段目石材を運び込んだ様子が伺える。

4段目石材の積み上げ完了後に、墳丘全面に黄茶褐色砂質土および黄褐色土が盛土されて、その墳丘裾端部には外側列石が配されて、これらの土溜めとしている。この2層は下層とは異なり、墳丘全面を覆うものであり、側壁石材の後方を固めたものというより、天井石の架構後に墳丘の全体を整えるべく盛土されたものと考えた方がよからう。

なお、以上から明らかであるが、右側壁は石材を4段目まで積み上げ、約2mの高さをもっていたと考えられる。

ii) N ト レ ン チ

自然地山面の整形は、深さ15cm~30cmの3段掘りにしている。2段目の段落部には茶色粘質土を置き、結果として段落を埋め、深さ約70cmの墓壇というべきものを形成している。

奥壁最下段の石材の高さは、右側壁の2段目の高さに合せられており、また、壇の深さにはほぼ等しい。石材後方の壇壁との空所には5層にわたる盛土がなされ、その上面には、青灰色粘質土が約10cmの厚さで貼り付けられている。石材後方の裏込めの上方に粘質土を貼り付ける手法はEトレンチでみられたように、側壁の2段目までの裏込め手法と同様である。

奥壁2段目以上については、Eトレンチの所見と基本的に大差ない。ただ、2段目石材の後方では、ブロック状に盛土して石材を固定せず、青灰色砂質土、青灰褐色土、茶褐色土混り青灰褐色土の3層を墳丘裾端部およびその附近にまで盛土するという手法をとっている。

2段目の石材を積み上げた段階で内側列石が配されている。列石の内側には、列石の高さまで8層にわたる盛土がなされ、また、外側には墳丘裾端部にまで茶褐色土が盛土される。内側列石のレベルはEトレンチに対して約30cm高位にあるが、奥壁2段目石材は側壁の3段目に対応しており、構築過程においてはEトレンチの所見と同様である。

外側列石は内側列石の外側に盛土された茶褐色土の上面に配されている。奥壁3段目石材の後方を固めた灰白色土混り茶褐色土および黄褐色土の上方には、茶褐色土および赤褐色土が内側列石附近まで遺存しているが、内外両列石の間に上層の赤褐色土がみられ、この2層は、元来、外側列石にまで達していたものと思われる。奥壁の3段目が右側壁の4段目に対応することからも、この2層は墳丘全体を整えるべく盛土されたものと考えられる。

iii) W ト レ ン チ

ここでは丘陵の低所側に当たるため、石室の床面の延長で、墳丘の中程までが整形され、以西は自然傾斜面を残している。

トレンチ部分での玄室左側壁の最下段石材は奥壁石材の高さに近く、その後方には3層にわたる盛土をし、これは墳丘裾端部にまでおよんでいる。以上では、Eトレンチ3・4段目、Nトレンチの3段目石材後方と考えた盛土手法をとっており、4段目まで数えられる。

列石は外側のものは流失している。内側列石は3段目を積み上げた後に配されており、E・

Nトレンチと同様である。

周 溝 (PL. 12-1)

列石については前項で墳丘との関係で述べているので、ここでは周溝について記述する。

周溝はEトレンチ部分で1.8m、Nトレンチ部分で1.7mの幅をもつが、墳丘西半分では自然消滅している。その幅を規定しているのは自然地山面の整形、特に掘り下げた時の掘り方の肩部と墳丘裾部に配された外側列石とであって、その深さも整形、時の掘り方の深さに規制されている。このことから明らかなように、ここで周溝と呼んでいるものは、墳丘の築成が自然地山の整形面全体におよばず、外側列石に規定された範囲、すなわち、外周に1.7~1.8m程の幅を残した範囲内でなされるため、墳丘築成後、外周に残された整形面が結果として周溝状になったものを指しているものであって、地山整形時に、あらかじめ掘り下げられた溝ではない。

なお、周溝内には、墳丘の盛土の一部がおよんでいるが、周溝内に自然堆積した黒色土を除去した時点で外側列石の外表面が露出するので、やはり、墳丘裾部は外側列石までとすべきであろう。また、周溝内の黒色土中、あるいは、盛土の一部である土層にくい込んだ形で多数の土器片が出土したが、故意に周溝内に入れた形跡は認められず、また、大多数が自然堆積した黒色土中にある事などから判断して、周囲の他の古墳からの流入物であろうと考えられる。

3) 石 室 (Fig. ⑦, PL. 10-2・11-1・12-2・13-2・14-1)

主体部は両裾式の横穴式石室である。西傾する傾斜面に対して、ほぼ、並行に構築され、主軸をN-29°-Eにもち、入口を南々西方向に向けている。石室床面における内法規模は全長6.16m~6.62mで、側長は右側が若干長い。玄室幅は1.75m、長さは、西側羨門石が、若干、奥壁側に位置するため正長方形を呈さず、2.42m~2.61mと左右側長に20cm弱の長短の差がある。羨道の幅は奥幅で0.82m、前幅で1.24mを計り、入口に向って、漸次広くなっている。なお、柵石は玄室の奥壁より入口方向2.66mの位置に設置されている。また、羨道部入口附近には閉塞の施設が見られた。

さて、以下に、石室の細部構造について記述する。

玄 室

玄室奥壁の最下段には、高さ77cm程と側壁石材の2段分の高さをもつ大型石を2個使用している。東側に三角形、西側に長方形の内面形をもつものを利用し、両石の間に生じた逆三角形の空所にはそれに見合う形状の石材を選び使用して埋め、1段目石材の上面レベルを調整している。

奥壁は西側コーナーに2段目石材が遺存するのみであった。2段目石材は幅がその下段のものに等しく、その高さは側壁石材の3段目の高さに見合うものを使用している。

奥壁と側壁との関係は、奥壁最下段のものが東西両側壁石材によってはさみ込まれて、縦位

置にすえられている。それに対し、奥壁2段目石材は、遺存部でみる限り、側壁石材を入口方向に押えて、横位置にすえられている。

なお、右側最下段石材上方の2段目石材は遺存していなかったが、最下段石材の上面に2段目石材の裏込め石と考えられるものが4個残っており、その配置状態によって、残る2段目石材の形状をある程度推察し得た。すなわち、裏込め石と考えられる石材は、東側最下段石材の上面で、その両端に共に内傾した扁平な割石が見られ、その中程に、上面が水平な状態の2個の扁平割石が見られたのである。このことから奥壁2段目の残る部分は、本来、一枚石を使用し、遺存石材と同様、横位置に置かれていたのであろうと思われるのである。その高さも、Nトレンチの断面土層観察から、遺存石材とほぼ同様であったのであろうと考えられる。

また、奥壁石材は、最下段、2段目共、約10度程内傾した状態にあった。

次に玄室の側壁であるが、左右両側壁の間に石材の形状、規模、また、積み方などに若干の相違が認められた。

東西両側壁とも最下段に3個の石材を使用しているが、西側壁の場合、高さ、幅ともに奥壁最下段のものに近い大型石を利用しているのに対し、最奥のものはその約4分の1程の小型石材を用いている。この最奥部石材の上方には3段目までの石材が遺存していたが、それらも最下段のものと、ほぼ、同一規模、形状のものであった。ただ、その積み方は最下段と3段目が縦位置にあり、2段目のみ横位置であった。また、2段目までの高さは奥壁最下段石材の高さにはほぼ等しく、共に奥壁石材の側面外方に積まれ、3段目は奥壁の2段目石材の高さに見合い、下方とは逆に、奥壁石材の前面に出るように積まれている。

西側壁に使用されている石材は、入口側の2個の最下段石材が石室内面に当る部分だけを一部加工して平坦にしただけの、ほぼ、自然石に近いものであるのに対し、最奥のものは3段目までいずれも完全な割石であった。

西側壁に対し東側壁は2段目まで遺存し、共に、3個の石材を使用していた。最下段では長さにおいてはいずれも、ほぼ等しいが、高さ、形状は様々で、二石間に生じた空所には比較的大型の石材をつめ込んでおり、雑然とした感を受ける。2段目石材も不統一なものを使用している。ただ、その高さにおいて、対応する最下段石材の規模に反比例するものを選び使用して積み上げたり、2段目石材の上面レベルを調整する工夫をしている点、注意される。

奥壁石材とは最下段、2段目ともに、奥壁石材の側面を押えるように積まれるが、最下段石材がいずれも縦位置であるのに対し、2段目石材は横位置に置かれている。

東側壁に使用されている石材は、西側壁に割石が含まれているのに対し、いずれも、石室内面に当る部分のみの部分加工を施した程度の自然石に近いものであった。

なお、側壁の傾斜具合は、西側壁で、2段目までは、ほぼ、垂直に面を整えているが、3段目では約10度内傾している。東側壁は、1段目2段目共にほぼ垂直面をなすが、2段目の中央

の石材のみ約20度の内傾角をもっている。

羨 道

羨道は東西両壁とも最下段のみを遺存していた。羨道石は東西両石材とも約77cm程の高さをもつ大型石を使用し、玄室側壁石材の側面に当るようにすえられている。羨道側壁石材はいずれも横位置にあるが、その高さを入口に向かって漸次減じるよう石材を選び使用している。すなわち、入口部を形成する石材の高さは、わずか、20cm程を計るにすぎない。

羨道部で、奥壁より2.66mのところ、すなわち、羨門石の間には厚さ20cm足らずの板状の石材を3個使用した間仕切りの施設が見られた。その上面は、ほぼ、水平であるが扉などを設置した痕跡は認められなかった。

また、羨道部の入口寄りのところには遺存長約2mにわたり塊石を使用した閉塞の施設が見られた。

4) 遺 物 (Fig. 7~10, PL. 14-2・15・16)

出土遺物はほとんどが墳丘裾部をめぐる周溝に堆積した黒色土、および、その上方の表土からのもので、石室内からは8点程の鉄片が散乱した状態で出土したにすぎない。すなわち、玄室の東南隅で刀子1個体分3片、鉄鎌様の鉄片2片、不明小鉄片1点が検出し得た他、同形の不明小鉄片が、玄室南西部で3点、北西部で2点、羨道の間仕切り石と閉塞石との間で2点が出土したにすぎない。

周溝内からの出土遺物は、墳丘築造時の封土の一部である第3層、周溝内の自然堆積した黒色土の第2層、表土である第1層と層的に区分した各層からのものである。第3層からは土師器の碗の口縁部片と同じく土師器の高杯の脚部を出土した他、土師器、須恵器の細片10数点を出土したにすぎない。ただ、黒色土が自然堆積する以前の土層よりの出土ということで、古墳築造後さほど遠からぬ時期に流入したと考えられ、当墳の築造年代を考察する上に参考になろう。第2層である黒色土中からは上下両層に比べて、比較的遺存状態の良好な土器が出土している。須恵器が大半で、土師器は少なく、しかも小片の状態で出土している。器形としては杯、壺、横瓶、平瓶、甕などがみられる。第2層出土遺物は墳丘封土が流入する以前の比較的早い段階での他からの流入と考えられる。第1層は表土層で、やはり、他からの流入品であろう。表層にあるためか、小片が多い。

なお、特殊な出土状態を示すものとして、羨道入口の両側墳丘裾部に須恵器の大型壺があった(PL. 14-2)。西側のものは羨道西側壁内面より1m程西方に位置し、外側列石に接して内側に、列石とほぼ同一レベルにすえ置かれた状態にあった。斜方向から押しつぶされた状態にあったが、口縁部から底部まで遺存し、ほぼ、原位置のままで押しつぶされた状態にあった。この壺の中には土師器壺と甕があり、壺はほぼ完形で、やはり原位置に近い状態で出土してい

る。また、この壺は底部を穿孔しており、注意される。甕は口縁部と体部の一部を残すのみであった。東側のものは東羨道側壁内面より1.4m東方にあり、西側同様、外側列石の内側で、列石のレベルとほぼ等しい位置にあった。東側のものは完形でなく、口縁部から体部の上方部と底部のみで、体部の中程の部分が遺存していなかった。両者は底部を下にして重なる様な状態にあったが、口縁部の方は裏返った状態で重なっていた。

遺物出土状態は以上の如くであり、当墳の築造年代を考定する資料に乏しい。ただ、羨道入口両側よりの土器、周溝内第3層の土器などは少なくとも、古墳の使用年代を示すものであり、また、周溝内流入品も古墳群の1つとして当墳をみていくことのできない資料と考える。

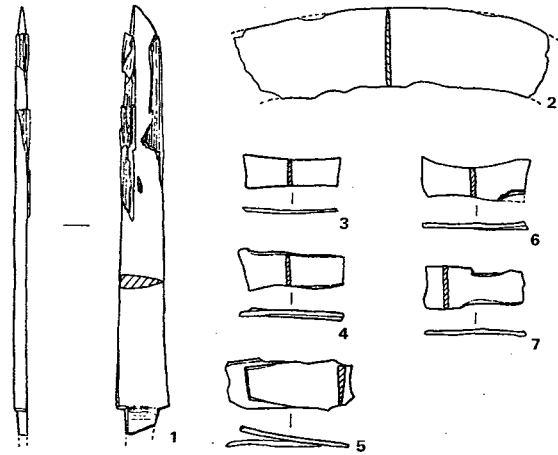


Fig. 7 王城山C 2号墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

次に、個々の遺物の特徴を以下に記述する。

i) 石室内出土遺物 (Fig. 7)

刀子 (Fig. 7-1) 身と茎の一部を残す。全長11.5cm, 身の長さ10.8cm, 刃と棟の両方に関をもつ。身には鞘の木質部が良く残っている。

鎌状鉄製品 (2) 現存長8.9cm, 幅2.1cm, 厚さ0.1cmの薄い板状品で、彎曲している。凸部の背はなめらかな曲線を描いているが、凹部側は波状の凹凸がみられる。厚味は凸部に向かって薄く、断面が三角形を呈す。形状、用途などは不明。

不明鉄製品 (3~7) 長さ2.4~2.8cm, 幅0.7~1.2cm, 厚さ0.1cmで、ほぼ、同規模、同形の小鉄製品が6点出土している。形状は鉄鋌に似ており、何か鉄製品の部品と思われるが用途は不明。

ii) 羨道入口両側出土遺物 (Fig. 8, PL. 15-7)

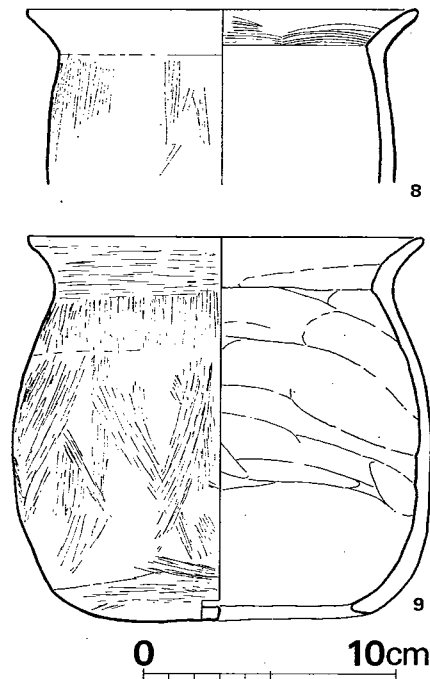


Fig. 8 王城山C 2号墳出土土師器実測図 (縮尺1/3)

2. 第 2 号 墳

23

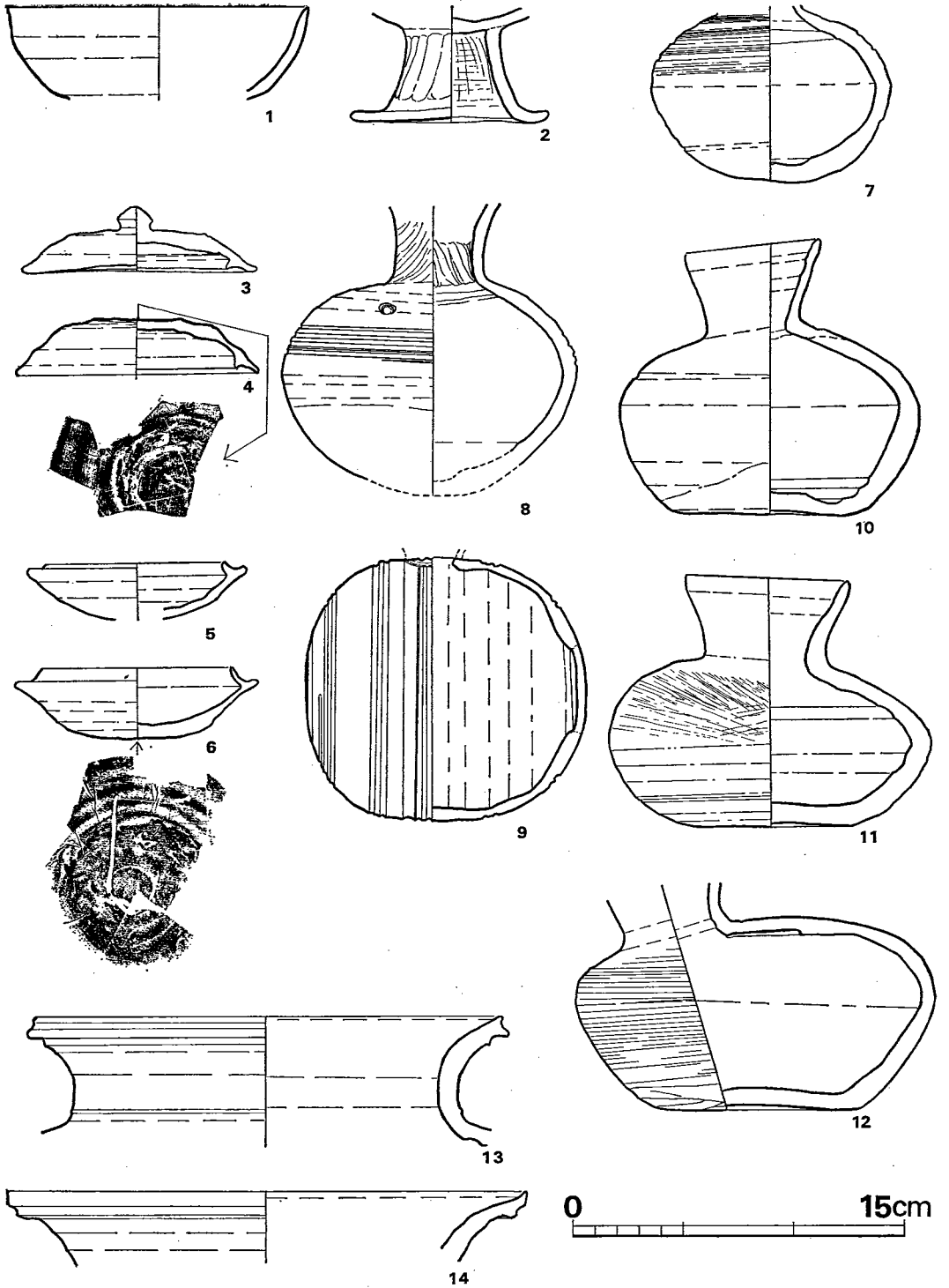


Fig. 9 王城山C 2号墳出土須恵器，土師器実測図④（縮尺1/3）

Fig. 8 は土師器の甕で、共に口縁部は短かく、外反する。また、ともに胴部の張りは小さく、8では口径が胴部最大径より大きい。9においても、胴部最大径がわずかに大きくなるにとどまる。8・9共に体部外面を刷け目で調整し、8では口縁部内面をも刷毛目調整している。9では体部内面を篋削りし、底部を穿孔している。

Fig. 10-16は須恵器の大型の壺で口縁端部を欠失し、口縁部は開きが小さく、体部は肩部よりただちに底部に向う。

iii) 周溝内出土遺物 (Fig. 9, PL. 15・16)

第3層からは図示できるものが2点のみで、他は小片。Fig. 9の1は土師器の杯で口縁部を残す破片。同心円復原した口径は13.6cm、高さは4cm程。口縁部は短かく、わずかに外反させただけで、体部との明瞭な区別が見られずに、直ちに体部へ移行する。口縁部外面はヨコナデして整形し、体部は、不明瞭ではあるが、篋削調整を施している様である。Fig. 9-2 (PL. 16-1は同じく土師器の高杯で、脚部のみを遺存する。内彎しながら外方へ開いた中空の筒部を作り、大きく折り曲げた裾部をもつ。筒部外面は縦位に篋磨き調整を施し、内面にはしぼり痕が認められるが、横位にしぼり痕を消そうとした刷毛目も見られる。杯は脚部に貼り付けている。脚部の高さは4cm、脚裾部の径は8.8cm。細い胎土を用い、黄褐色を呈した軟質の土器である。

周溝内に自然堆積した黒色土中に含まれていた土器の主なものは Fig. 9-3~14 に示す通りである。土師器片も少量包含されていたが、いずれも図示し得なかった。

杯蓋(3・4, PL. 15-1) 3は天井部中央に宝珠形のつまみがつく。天井頂部は篋削り調整が施されていて平らで、稜をもって口縁部へ移行する。口縁部内面には身受けのかえりがあるが、口縁部以下に突出せず、浅い。また、貼り付けたものでなく、体部よりもち出したもので、かえりの内側は浅くくぼんでいる。口径10.7cm、高さ3cm。なお、これは16号墳の墳丘裾部出土のものに接合するものを見出している。形態が3とほぼ同様であるが、天井部につまみを持たない。口径11.0cm、高さ2.5cm。天井部に篋描き痕がある。

杯身(5・6, PL. 15-4・5) 5は同心円復原口径10cm、高さ2.5cmの小型品。受部は小さく、かえりの立ち上りも短かく内傾している。色調は灰白色で、焼き上りが甘い。6は受け部の立ち上りが5に比して高いが、内傾し、受部も短い。口径11cmに対し、高さ3.2cmと比較的深い。外底面は篋切り痕が明瞭で、平らである。また、6字様の篋描きがみられる。

壺(7・8, PL. 16-2・3) 7は胴部最大径10.8cmの小型壺。胴部最大径は体部のやや上方にあるが、全体的に球体を呈す。肩部には2条の凹線がめぐり、上側凹線より上方に2行の櫛目、下側凹線の直下に一行の櫛目が施されている。体部下半は篋削り調整し、外底部は中央が若干くぼみ加減であるが、全体として丸底である。粗い削り整形を施している。8も短頸の壺である。口縁部、底部を欠損する。口頸部は内反り気味に外方へ開く。内外面にしぼり痕が残

る、肩部は丸味をもってなだらかに下り、体部中程で胴部最大径となり、13.2cmを計る。肩部下半に4条の凹線がめぐるが施法は雑である。体部下半部は篋磨き調整され、底部は粗い篋削りによって仕上げている。体部は高さが9.5cmと胴部最大径に比して小さく、やや扁平である。なお、肩部には、対称位置に竹管文が2個みられる。

横瓶（9，PL. 16-4）口頸部を欠失する。体部の高さ12cm，胴部最大径12.6cmと若干胴張り

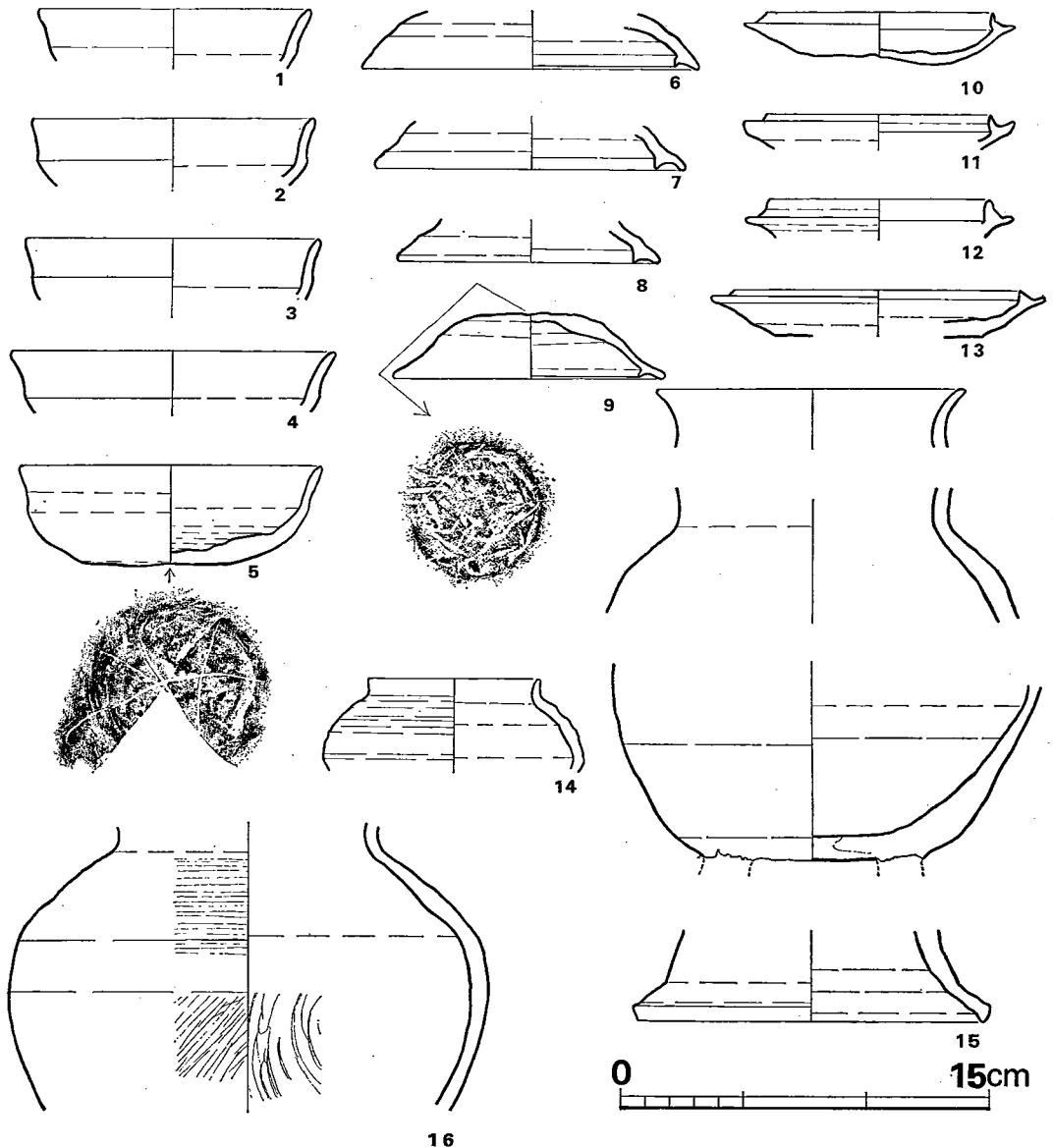


Fig. 10 王城山C 2号墳出土須恵器，土師器実測図②（縮尺1/3）

するようにすぎない。体部外面は刷毛目を施した後に2条毎の凹線を5ヵ所に施している。

平瓶 (10~12, PL. 16-5~7) 10は直線的に開く漏斗状の口縁部をもつ。口縁部は体部に貼り付けたものであるが、体部中央部からわずかに外して接合しているにすぎない。肩部は丸味をもって下り、体部の中程で胴部最大径をなす。肩部から体部下半への移行は稜をとらず、丸味をもち、底部へと移行する。底部はくぼみ、平底に近い。成形は体部下半下方部に篋削り痕を認める他ロクロ曳き痕と刷毛目調整痕をみるだけである。器高12.4cm, 胴部最大径13.5cm, 口径6.2cm。11も10と同形態であるが、体部下半には篋削り調整が丁寧に行なわれている。また、体部下半に2条の沈線が認められる。器高11.4cm, 胴部最大径14.5cm, 口径7.5cm。12は上記二例とは形態を異にする。口縁部は器体成形時の穴を外して体部に接合され、胴部の最大径は器体の上方にあり、肩部上面は丸味を帯びつつ平たく広い。肩部から体部へは稜をとらないが大きく屈曲し、やや直線的に底部へ移行している。底部は10・11同様、内彎し、平底風である。肩部から体部にかけては粗い刷毛調整を施し、体部下方は篋削りによって形を整えている。底部外面も篋削りによって形を整えている。底部外面も篋削調整を行っている。体高8.7cm, 胴部最大径16.3cm。

甕 (13・14, PL. 15-9・10) 大型甕の口縁部である。同心円復原による口縁部径は13が21.8cm, 14が23.4cmを計る。

iv) 周溝表土層出土遺物 (Fig. 10, PL. 15・16)

杯 (1~13, PL. 15-2・3・6) 杯の身に2種類ある。1~5は口縁部に受部をもたない碗形のものである。いずれも、内彎して外方へ開く口縁部をもち、体部との境界には明瞭な稜が走る。比較的遺存状態の良い5は口縁部径12.3cm, 器高4.1cmで、口縁部と体部の内外面にロクロ目が残る。底部は篋切りで、平底風になっている。また、篋描きが見える。10~13は受部をもつタイプである。受部はいずれも小さく、浅い。10・12の受部は水平に、11・13はやや上方に向いて短かくのび、たちあがりも12が比較的高い他は非常に短い。10は口縁部から底部まで遺存するものであるが (PL. 15-6), これは口縁径11.1cm, 器高2.2cmで浅い。仕上げも雑で、体部内外面に粘土瘤が残る。6~9は受部の立ち上りが口縁端部より低いもので、身というより蓋とすべきものであろう。9は口径11cm, 器高2.7cm。内底面は縦横の刷毛目調整をしている。天井部には篋切り痕を残し、また、篋描きを見る。

壺 (14~16) 13は壺形品で、心持ち外反した短い口縁部をもつ。体部は比較的良く胴張りしている。体部外面にはロクロ痕をよく残すが、内面は羽毛目で丁寧に仕上げている。15は口縁部、肩部、体部、脚の4ヵ所で1個体分を形成するものと考えられる。口縁部は内彎しながら開く。頸部はしまらず、そのままならかな肩部へ移行する。肩部の張りは弱く、体部は球体を呈す。体部と脚の接合部には刻みを入れて接合の強化をはかっている。脚は直線的に外方へ開き、大きく折り曲げて裾部をつくっている。16も同形態のものであろうか。体部上半部外

面は横方向、下半部は斜方向に楕目を入れて整形している。内面は下半部に同心円のタタキ痕を残すが、上半部は消している。

5) ま と め

イ. 墳丘および石室の構築については、墳丘上に設定した3ヵ所のトレンチの断面土層を観察した際にすでに明らかであるが、およそ①NおよびEトレンチでの墳の深さに見合うまでの段階、②内側列石を配するまでの段階、③外側列石を配するまでの段階、④墳丘全体を整える段階の4段階にまとめることができよう。この過程のうち、①の段階で、N・E両トレンチに対してWトレンチの盛土方法が異なるが、これはWトレンチ側が丘陵の低所側にあつて、自然地山面を整形することがなく、また、墳丘基盤がほぼ水平であるところから、墳丘のベースを兼ねて盛土がなされたものと考えられる。同様の盛土法はNトレンチの石室2段目石材の後方においても認められた。②の段階における内側列石については、それを配する以前における盛土、すなわち、列石を配するベースとなる盛土が墳丘端部のレベルに等しいかあるいは墳丘基底部に近く、水平で安定した面をとれるのに対し、以降の③の段階までの盛土は墳頂に近いので、盛り上げる高さに対し、そのベースとなる面が狭く、従つて、盛土は下層に比べて不安定な状態にある。このことから、内側列石は②の段階における盛土に対する土溜めの作用を荷負うものと考えられる。④の段階の外側列石についても層序関係よりして、それが墳丘を整えるべく盛土された土層を外側から押えた状態にあり、これらの土溜めの作用を荷負っていたと考えられる。また、これが当古墳の外形を決定していたことは先述のとおりである。

ロ. 当古墳の年代については、石室内がすでに盗掘にあつており、出土遺物としては刀子の他に性格不明の鉄片が検出されただけであり、直接年代を示す資料を欠いている。出土した土器類はほとんど周溝の埋土中からのものであり、しかも、外部から流れ込んだ状態にあつた。その中で杯類をみると、身はすでに小型化しており、受部のかえりも短かく、大きく内傾して、口縁端部の高さに近い。蓋は受部のかえりが口縁部より低いものを比定したが、身同様小型であり、中に宝珠形のツマミをもつものがある。これらの特徴からして、7世紀後葉に比定できよう。他の器形についても同様であり、周溝内の外部からの流入品は比較的新しい段階のものといえる。これらの中で、当石室よりの出土品も混入している可能性もあるが、追葬あるいは閉塞段階での遺物の存在を考慮する必要があるが、古墳の上限を示さない。

周溝内の第3層からは土師器の杯と高杯が出土している。杯は口縁部が心持ち内側へカーブしながら開くものであり、高杯は短脚で、裾部を大きく外反させている。土師器のこの時期の編年については明瞭でないが、およそ、上層の周溝内の埋土中出土の須恵器類とさほど遠くない時期におけるであろう。同層は墳丘の封土の一部であり、古墳の年代を知る手がかりとなるが、詳細に位置づけ難い。

最後に、羨道の左右入口部分で、原位置を保つ須恵器2点が出土している。須恵器は大型の壺2点で、共に口縁部が欠失し、1点は肩部を残すのみである。1点は口縁部の開きが小さく直線的で、体部は肩部から底部に向って徐々に径を小さくしている。他は形状は明確でない。土師器は甕で、口縁部は共に短かく外反し、胴部はさほど張らない。これらについては、周溝内の埋土中の出土品よりやや古式であるが、さほどさかのぼらず、7世紀前半代のもと考えられる。ただ、これらが何時の時点で、羨道入口を飾ったかが明瞭でなく、古墳の築造時期を直接示すものではない。

以上のように、当古墳の造築年代を直接示す資料を欠き、ただ、使用年代について、少なくとも、7世紀代に依然追葬が行なわれていたと推定し得るにとどまる。

(田中 勝弘)

3. 第 3 号 墳

1) はじめに

占 地

2号墳と4号墳の中間、標高80mから82mにかかる斜面に占地する。

調 査 経 過

昭和47年8月17日より調査を開始し、10月7日に全ての作業を終了する。その経過は次の通りである。

8月17日 原口古墳より機材を搬入し、直ちに調査を開始する。盗掘坑内の土砂を取り除き、石室プランの検出を計る。翌18日には玄室プランが判明したので、実測用軸線を設定する。一方、古墳群全体の地形測量を合せ実施する。

8月19日～30日 墳丘前面から東側にかけてはブルドーザーによって押され、集められた土砂が厚く堆積しており、この土砂を取り除くために多大の労力を費した。

8月31日～9月5日 墳丘断面観察用のトレンチを掘り下げ、同土層図を作成する。この間に、石室を全て掘り終えた。羨道の東側石組は残っていなかったが、入口東側と考えられる位置の墳丘中より須恵器壺2個が並んで発見された。

9月6日～19日 墳丘を検出し、周溝内の黒色土を取り除く。中から多量の土器が出土した。

9月20日～26日 墳丘実測を終え、墳丘を全て取り除く。西側の墳丘下地山上に2列の石組を囲繞させていた。この間に石室の床面の遺物出土状況写真撮影及び実測を終了する。

10月7日 全ての実測作業及び写真撮影を終了する。

2) 墳 丘

規 模 (Fig. 11)

調査前に直径8m、高さ2.5mの高まりを見せていた。中央に盗掘坑があり、その状況からして、南に開口する石室が想定された。

列 石 (Fig. ⑧, PL. 17)

墳丘裾の列石はなかったが、墳丘下の地山上に石組を囲繞させていた。東側では、部分的にしか検出されなかったが、西側では多くの石材を2列にわたって用いていた。この石組は内側に割合小さめの石材を数段にわたって積み上げ、外側に大きな石材を一段ずつ並べて用いていた。この石組は地山の自然傾斜にそって南側に下がっており、南側つまり羨道側より強固に組まれていた。

周 溝

周溝は墳丘の東側から北側にかけて認められ、東側では4号墳丘と、北側では6号と共有していた。周溝中の黒色土なり黒褐色土中からは多くの土器が出土した。

構 築 状 況 (Fig. ⑨)

石室主軸を等高線とほぼ平行して古墳を築こうとしたため、地山の整形を含めて、墳丘盛土以前の作業を重視していたと考えられる。東の山側を削って平坦面を作り、西の谷側には石組を囲繞させて墳土の崩壊を防ぐ施設とした。また北の玄室奥壁側地山を削って若干の凹地を作り出し、その最下底より墳丘を盛り上げている。石室の石組み作業と合せて黄褐色土を4次に

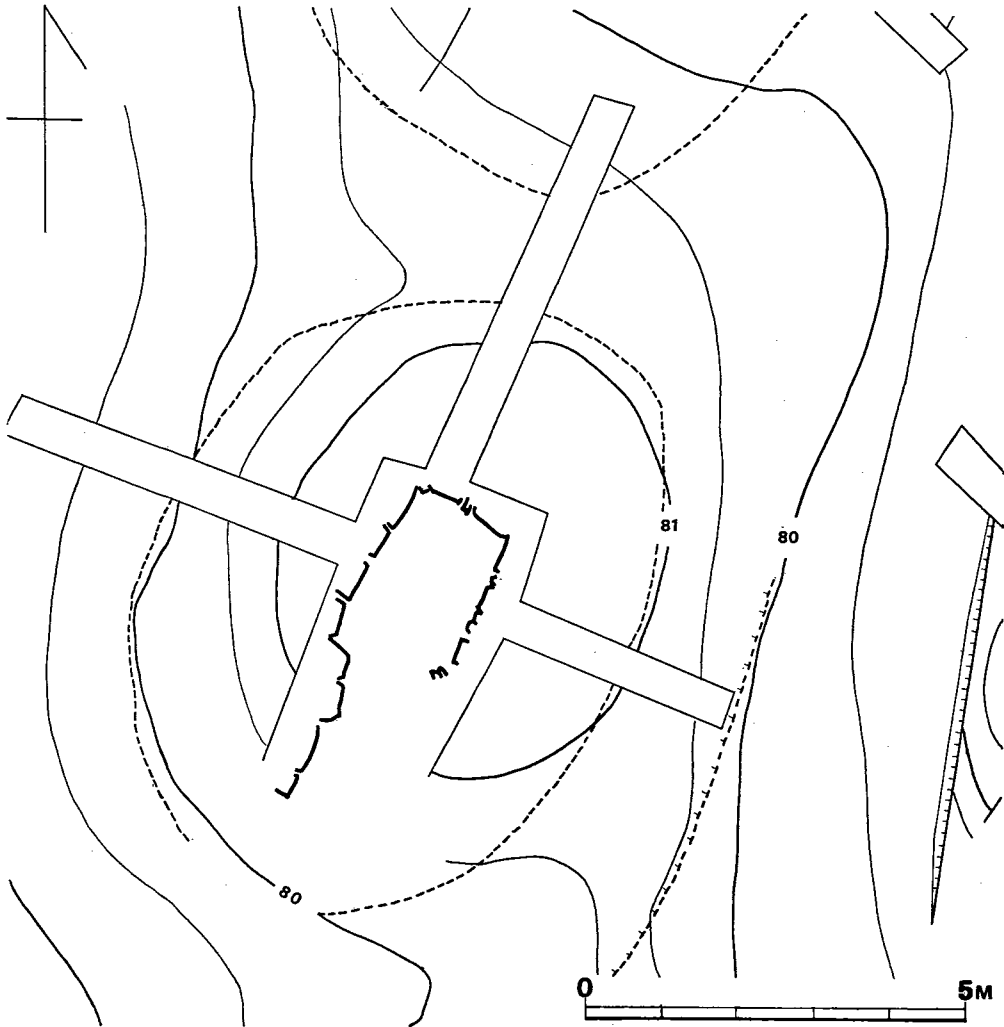


Fig. 11 王城山C 3号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

わたって盛り上げている。盛土の径は東の山側で石室中心より 3.5m 弱であるのに対し、西の谷側では 5m 近くになっている。

土 器 列

羨道入口の東側、裾部に近い墳丘中より須恵器壺 2 個が並列して出土した他は甕などの出土はなかった。

3) 石 室 (Fig. ⑩, PL. 17)

両袖単室の横穴式石室で、主軸を N-22°-E に向けている。石室規模は Tab. 10 (p. 166) の通りであるが、羨道部東側は盗掘時に破壊されていた。

石室掘り方は玄室のみで一辺 2.8m の方形を呈し、南側は開口している。開口部分に榎石が置かれている。

玄室奥壁は高さ 60cm 程の 2 個の用材を立てて腰石とし、上に石材を横積みしている。両側壁とのコーナー部分には、比較的大きな石を用いている。東側壁は 3 個、右側壁は 4 個の用材を腰石としており、石材は両側壁とも雑多で、積み方も粗雑である。床面は中軸線上がやや窪んでおり、本来は上に全面敷石されていた模様である。

両側袖石は玄室床面からの高さは 75cm 程で、東側袖石は内側に倒れ込んでいる。袖石間の床面は玄室より一段高くなっており、その上に幅広の榎石を据えている。羨道は西壁のみ残っており、袖石の他に 3 個の石を腰石としている。そのうち、天井石が乗ったと想像されるのは、袖石横の 1 個のみである。

羨道の床面は石室外に向け傾斜している。

4) 遺 物 (Fig. 12・13, PL. 18・19)

出 土 状 況

玄室の床面よりやや浮いた状況でまとまって土師器の杯身 3 個体、須恵器高杯 1 個体が出土した。鉄釘 1 本、鉄鏃 1 本、刀子 1 本、紡錘車 2 個が奥壁寄り、小刀 1 振が西壁際で床面より出土した。羨道部より杯蓋 1 個と刀子が出土しているが、床面より約 15cm 浮いていた。前述したように墳丘中より壺 2 個が出土している。

出土遺物を列記すると、つぎの通りである。

- | | | |
|---------|----|-------|
| (1) 武 器 | 刀 | 1 振 |
| | 鉄鏃 | 1 本 |
| (2) 工 具 | 刀子 | 1 本 |
| (3) 鉄 釘 | | 1 本以上 |
| (4) 紡錘車 | | 2 個 |

- | | | |
|--------|-----|------|
| (5) 土器 | 須恵器 | 7 個体 |
| | 杯蓋 | 1 個体 |
| | 高杯 | 1 個体 |
| | 壺 | 2 個体 |
| | 土師器 | 3 個体 |
| | 杯身 | 3 個体 |

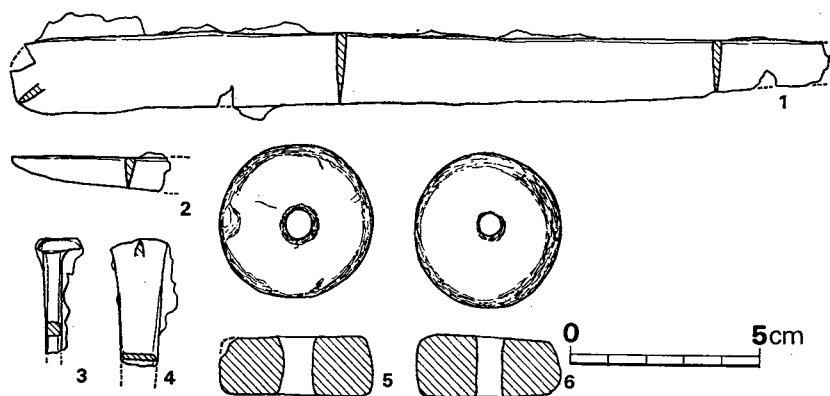


Fig. 12 王城山C 3号墳出土鉄器及び紡錘車実測図 (縮尺 1/2)

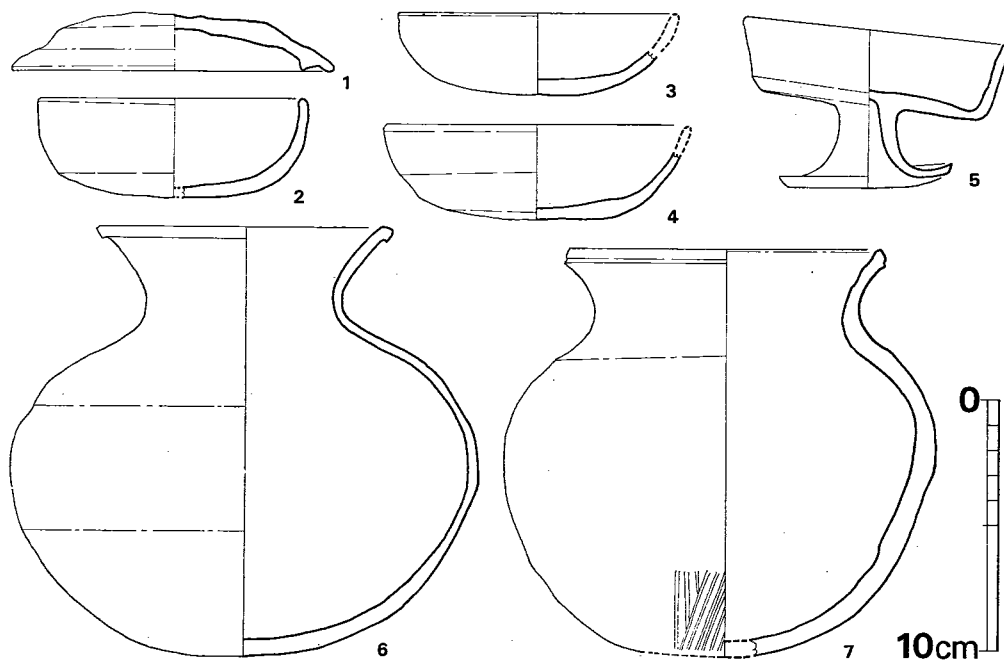


Fig. 13 王城山C 3号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

刀 (Fig. 12-1, PL. 19-4) 切先を欠損し、残存長21.8cmである。茎部は幅広く、特異な形状である。刃部は茎部先端に近いほど鈍くなる。

鉄鏃 (Fig. 12-4, PL. 19-3) 円頭広根式鏃の鋒上半部である。刃部幅は1.5cmである。

刀子 (Fig. 12-2) 2は玄室床面出土の刀子である。羨道出土の刀子はより幅広であるが細片なので図示しなかった。

鉄釘 (Fig. 12-3, PL. 19-2) 断面方形の釘で、14号墳出土のそれに比べると、やや太目である。

紡錘車 (Fig. 12-5-6, PL. 19-1) 滑石製である。5は径4.1cm、厚さ1.5cmで孔は両割りである。6は径3.9cmで、厚さは不均一だが、中央では1.5cmである。孔は一方に片寄り、片割りである。

須恵器 (Fig. 13, PL. 19-5)

杯蓋 (1) 羨道部より出土した完形品である。身受けのかえりは短く、天井部は未調整である。口径12.8cm、器高2.3cmである。

高杯 (3) 杯部の底部は平坦で、直角に近く体部へと続く。口縁部は真直ぐ伸び、端部は丸い。体部に比して脚部は短かく、小さい。脚柱部内外面にシボリ痕がみられる。暗赤褐色を呈し、堅緻である。

壺 (6・7) 墳丘中出土品である。6は焼成が悪く器壁は剝落している。口縁部の折りかえしは弱い。器高17.3cm、口径11.6cm、最大胴部径18.3cmである。7は口縁部稜が不明瞭である。焼成は悪いが、調整は丁寧で、胴部内外面共叩文の上をヨコナデしており、底部周辺の外面にのみ平行叩文が観察される。器高16.3cm、口径12.3cm、最大胴部径17.2cmである。

土師器 (Fig. 13)

杯身 (2・4・5) 全て完形品に近い。2の外面、4・5の内面はへら磨きしており、他の部分は丁寧にヨコナデしている。明褐色を呈し、胎土、焼成共に良好である。

5) ま と め

調査の結果、本古墳は径7m、高さは床面より1.75mの円墳と推定された。玄室より鉄釘が出土しており、木棺に埋葬されたことが知られる。玄室よりまとまって出土した土器類は床面より浮いており、最終追葬時のものと推定される。その形式からして、本古墳追葬の最終時期は7世紀中葉と考えられる。また墳丘中出土壺は、古墳築造時に埋められたと考えられ、その形式より6世紀末と考えられる。つまり当古墳は6世紀末に築造され、7世紀前半に廃棄されたと考えられる。

(酒井 仁夫)

4. 第 4 号 墳

1) はじめに

占 地

王城山C古墳群の調査範囲内では南東の隅に位置し、標高82mから83.5mにかかる斜面に占地する。

調 査 経 過

8月17日 3号墳と同時に調査を開始する。翌日には石室主軸を設定する。

8月19日 玄室床面を検出する。床面上より須恵器各種とガラス小玉が出土した。

8月20日～24日 石室の清掃を全て終了する。一方、墳丘盛土観察用トレンチを掘り下げる。

8月25日～29日 墳丘盛土を全て検出する。北側周溝内黒色土中より多量の須恵器が出土する。

8月30日 石室及び墳丘の写真を撮影し、その後実測を開始する。

8月31日～9月22日 墳丘を全て取り除く。墳丘中、掘り方の東北隅付近から土師器甕が出土する。

9月29日～10月6日 実測を含め、全ての作業を終了する。

2) 墳 丘

規 模 (Fig. 14, PL. 20-1)

調査前に直径8.5m、高さ2.3mの高まりを見せていた。中央に盗掘坑があり、その状況からして、南に開口する石室が想定された。なお墳丘の西裾部は、調査開始4ヵ月前に、ブルドーザーによって削られていた。

列 石 (Fig. ⑩, PL. 21-1)

北側にのみ、長さ3.5mにわたって検出された。西側は破壊されているが石材が散見し、もっと西へ伸びていたと考えられる。つまり斜面下側にのみ置かれたと推定される。

東端では地山直上に列石が置かれているのに対し、西端では灰褐色土を盛った上に置かれている。平坦面を作ることを考慮した事による。いずれにしても墳丘裾を画し、盛土の崩壊を防ぐ列石である。

周 溝

東側は大半が調査区外にあるため十分な説明はなし得なかった。北側は地山を掘り窪めて周

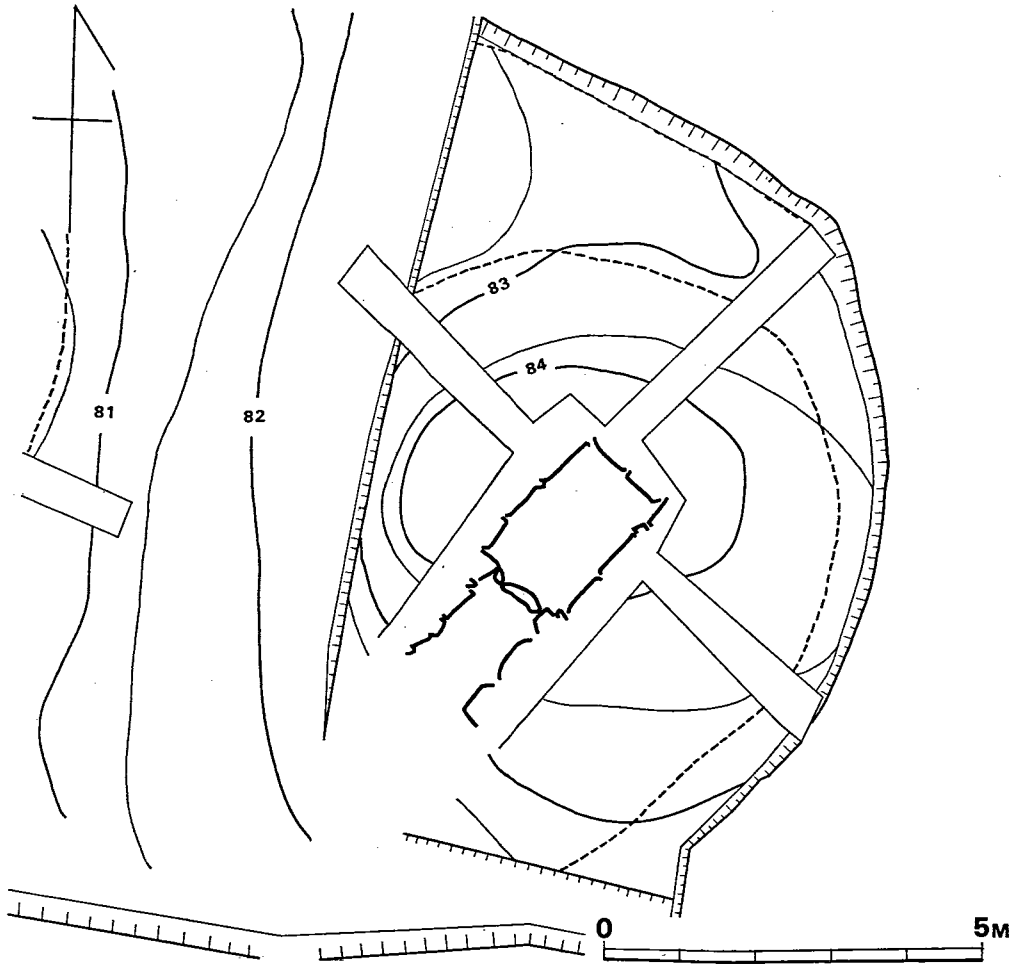


Fig. 14 王城山C 4号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

溝を作っていた。周溝は西の谷に向うにつれて末広がりになり、消滅する。周溝底には黒褐色土がのり、次いで黒色土が堆積していた。この土層中からは多量の須恵器が出土した。

構築状況 (Fig. ⑩, PL. 21-2)

墳丘を築こうとする範囲の表土を全て除去し、地山を整形する。その中央に墓壙を穿ち、石室腰石を据え石を据える。東の谷側には灰褐色土を40~45cmにわたって盛り、東西の高低差を縮めている。この土層中には多量の礫を混入させている。この層上に列石して墳丘径を地割りしている。石室の架構と合せ、この上に3次にわたって盛土し、墳丘を構築している。

土器列

土器列は検出されなかったが、石室の東北隅に近い位置で、第2次盛土の上に土師器甕が1

個据え置かれていた。

3) 石 室 (Fig. ⑬, PL. 20・21)

両袖単室の横穴式石室で、主軸を N-43°-E に向けている。石室規模は Tab. 10 (p. 166) の通りである。

石室掘り方は底面東西長約 2 m、南北 3.7 m あり南に開口している。床面は玄室から墓道ま

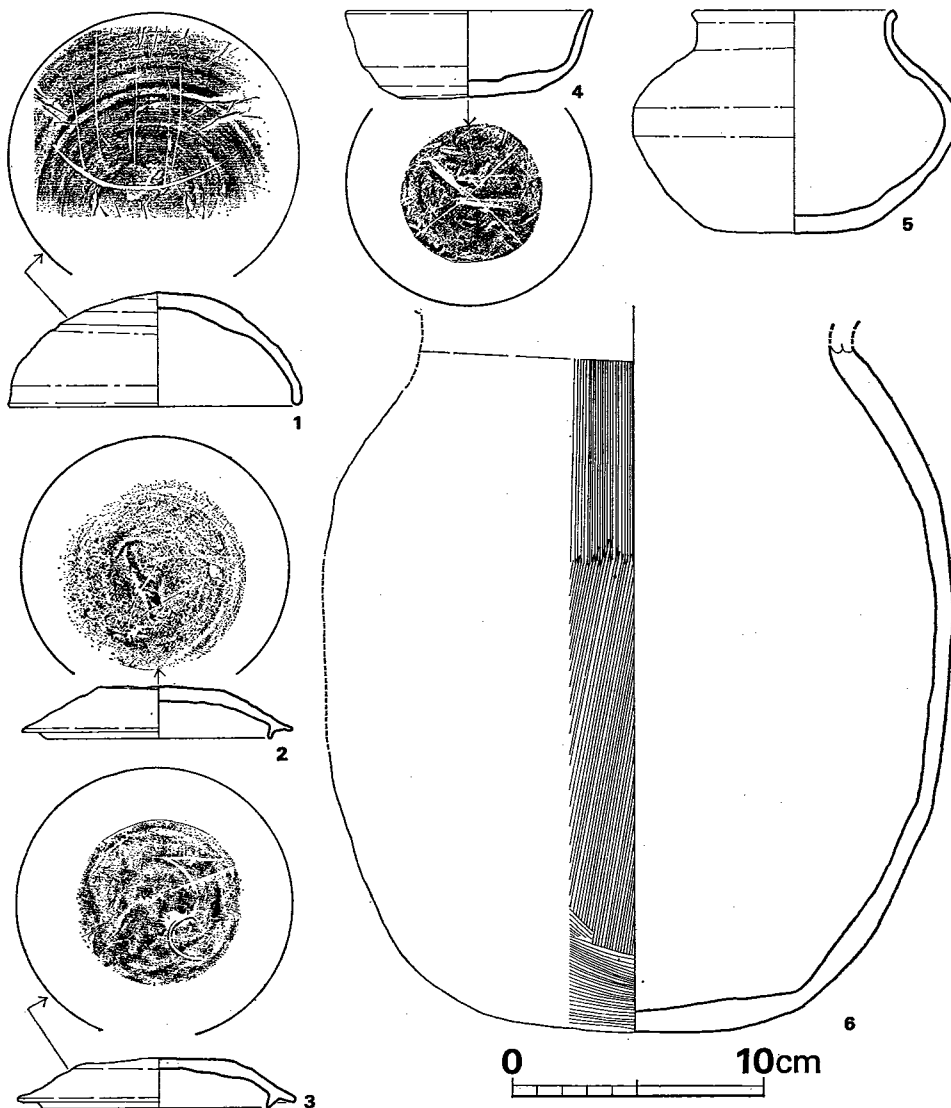


Fig. 15 王城山C 4号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

でまったく平坦である。逆にいえば墓道端と同レベルになるまで、北の奥壁側を掘り窪めたといえる。

玄室奥壁は高さ 50cm の 2 個の用材を立てて腰石とし、上に石材を横積みしている。両側壁は、奥壁とのコーナ部分を別として、腰石のみしか残っていない。西壁側 3 個、東壁側 4 個の用材を腰石としている。玄室の床面は、遺物が地山に密着していることから推して、敷石されていなかったと考えられる。

両袖石は床面高 65cm と低く、その間の梱石は長さ 15cm と 65cm 大の 2 個を合せ用いている。

羨道は東西異なった造りをしている。つまり東壁は袖石に続いて 2 個の用材を並置して据え、さらに地山上に 2 個の石を並べているのに対し、西壁は 1 個の石材を置き、続いて小礫を盛土上に積み上げて、西方へ開く様相を呈している。西側より登り来る葬列に対しての配慮と考えられる。

墓道は短く、約 40cm 石室主軸と平行に伸びている。

4) 遺 物

出 土 状 況 (PL. 20-2)

玄室床面より銀環 1, 須恵器杯蓋 2, 杯蓋 2, 杯身 1, 埴 1 が、羨道床面より杯蓋 1 が出土した。いずれも床面に密着していた。前述したように墳丘中より土師器甕 1 が出土している。

出土遺物を列記すると、つぎの通りである。

(1) 装身具	銀 環	1 個
(2) 土 器	須恵器	5 個体
	杯 蓋	3 個体
	杯 身	1 個体
	埴	1 個体
	土師器	1 個体
	甕	1 個体

銀環 (Fig. 16, PL. 22-1) 銀箔の残りは良く、一部分に腐食がみられる。箔に多く叩いた際の稜がみられる。短径 2.6cm, 長径 3.0cm

須恵器 (Fig. 15, PL. 22-2)

杯蓋 (1~3) 1 は羨道床面より出土した。丸い天井部をもち、口縁部は体部との境に軽い稜をもって直立する。端部は丸い。天井部へう割り、他はヨコナデ・ナデ調整している。焼成は堅緻で色調は灰色である。口径 11.5cm, 器高 4.5cm, 2・3 は玄室床面出土である。平坦な天井部は切り離し後未調整で、他はヨコナデ・ナデ調整している。暗赤褐色を呈し、堅緻である。口径 10.7~11cm, 器高 2cm。

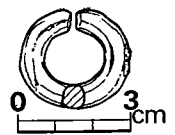


Fig. 16 王城山 C 4 号墳出土耳環 実測図 (縮尺 1/2)

杯身(4) 平坦な底部は未調整で、体部上半から口縁部内外面をヨコナデ調整している。色調は暗赤橙色で、焼成堅緻である。胎土は杯蓋2・3と同じく精良である。口径9.8cm, 器高3.5cm。

甗(5) 板状粘土の上にマキアゲしている。頸部は短かく、胴が張る。口縁部は丸味を持ち、稜は不明瞭である。口縁部内外面と体部外面にヨコナデを施している。色調は灰色～灰黒色で、胎土、焼成とも良好である。口径8.3cm, 器高8.7cmである。

土師器 (Fig. 17, PL. 22-2)

甕(6) 口縁部を欠損する。長胴で、底部は丸味をもった平底である。外面の刷毛目は頸部下から底部にまで及ぶ。内面は粗いヘラ削りである。色調は褐色で、一部黒色変している。胎土、焼成は良好である。

5) ま と め

調査の調果、本古墳は径7.0m, 高さは床面より1.95mの円墳と推定された。

埋葬状態は不明である。

玄室床面出土の須恵器類と羨道床面出土のそれとは型式差がある。同時に埋納されたものか、追葬の時代差かは定かではない。墳丘中出土の土師器甕は古墳築造時を示すと考えられる。同種の甕は第6号墳及び第12墳でも出土している。これら土器の型式より考慮すれば、当古墳は7世紀初頭を前後する時期に使用されたと思われる。

(酒井 仁夫)

5. 第 5 号 墳

1) はじめに

福岡県教育委員会の委嘱を受けて、平安博物館が調査を実施した三基の円墳のうちの一基である。調査は昭和45年12月3日～12月22日までおこなった。調査には近藤喬一（平安博物館）、松浦俊和（京都教育大学学生）、熊谷康治（京都産業大学学生）の三人が参加した。本原稿は須恵器の項を松浦の原稿をもとに近藤が整理し、その他は近藤による。遺構・遺物のトレースは、調査員および補助員の実測図をもとに平安博物館の植山茂氏の手をわずらわした。遺物の写真撮影・焼付は寺島孝一による。

占 地

本古墳は王城山山腹に占地する古墳時代後期の群集墳のうちの一基で、海拔79.5～81.5mの間に立地している。墳形は円墳で、主体部は両袖式の横穴式石室であった。

2) 墳 丘 (Fig. 17・Fig. ⑬, PL. 23)

規 模

ほぼ中央に相当する部分が、盗掘によりかなり大規模に掘り窪められていた。調査の結果、周溝と外護列石の一部を検出されたが、それらを考慮すると直径約7.6mの小円墳である。高さは山腹の傾斜面に占地しているため、場所によって異なる数値を得るが、最高所は海拔81.42m、墳丘裾は、山腹の低い側で列石の位置よりみて79.75m、高い側では溝の底が80.4mとなる。従って現状での比高差は0.5～1.7mとなりかなり低いものであった。

列石・周溝

羨道側壁は盗掘で破壊されて

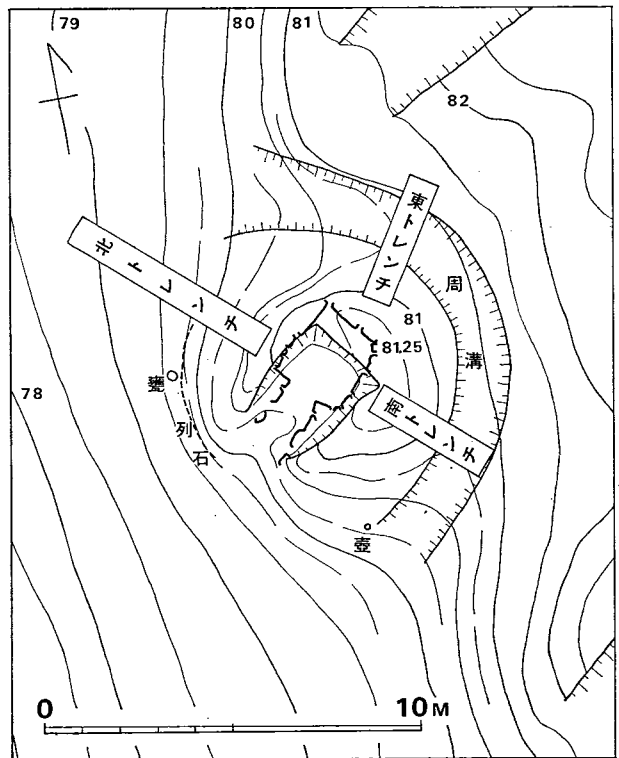


Fig. 17 王城山C 5号墳墳丘測量図 (縮尺1/200)

おり完存していなかったが、恐らく先端になると思われる個所から続く列石の一部を検出し得た。列石は墳丘裾西側 $\frac{1}{4}$ の部分が最もよく残っていた。C1・C2号墳のようにほぼ完全に墳丘裾をまわっていたものが流出したものか、本来完全でなかったものかは明確でない。また傾斜面の上方に相当する墳丘裾には、溝状の遺構が検出された。場所によって一定はしていないが、ほぼ幅1~2m、深さ10~30cmを測る。溝は墳丘裾約 $\frac{1}{2}$ をめぐっている。溝の中からは、周囲からの流れこみか、多量の須恵器が出土し、小片ではあるが土師器片も認められた。墳丘の北西裾には大型甕 (Fig. 24, PL. 27-1)、南東裾には壺 (Fig. 18・22-6, PL. 31-61) が据えられていた。

構築状況

石室の掘り方をみると、玄室では腰石を据えるために1段掘り窪め、比較的小さな石を用いて安定を保たせ、うらごめの土をつめている。羨道部では、地山を平坦にしたのみか、あるいは一部盛土を積み、高さを整えて石を据えている状態が認められた。うらごめの土の高さは、腰石の半ば、もしくは腰石ぎりぎりまで達し、2段目の石の背後は粘質土層を用いて封土を形成するといった配慮が認められた。それより上は色調を異にするが、砂質土層が互層をなしていた。石室は腰石1段しか大部分のところに残っていなかったが、土層の状況からおおよその部分まで壁体が存在していたものか、推測する手がかりとなる。

溝は第2層上面よりほりこまれており、溝内には多量の土器片の他、黒色土が堆積していた。墳丘裾を完周しないことからみて、溝は恐らく山腹の高い側の土を掘りとり、墳丘形成の一部としたため、溝状遺構はその際の土の掘り取りの跡をおおまかに整形したものと推定されよう。

3) 石室 (Fig. ⑭・⑮, PL. 23-2・24・25)

内部主体は、主軸をN-48°-Eにとり、南西方向に開口する全長約5mの両袖式の横穴式石室である。天井石は一枚も残存せず、石室の壁体も大部分のところでは最下段の腰石しか残っていなかった。羨道両側壁中では、一枚も残っていないところも認められた。

玄室の平面形は主軸方向にやや縦長の長方形を呈し、奥壁は両側壁に対しやや傾斜している。玄室は主軸中央で長さ2.2m、奥壁幅1.65m、袖の部分で1.77mを測る。南側壁長 (奥壁に向かって右を南とする。南・北はすべてこれに従う。) は2.05m、北側壁長は2.25mである。奥壁は2枚の腰石を横長と縦長に用い、最高所は玄室床面より測って96cmである。石の厚さは南側のものが15cm、北側のものが30cmと比較的扁平な石材を用いている。

側壁の腰石は各3個、奥壁と同じく扁平な石材を用いて構成していた。奥壁よりの石が最も大きく、2枚は横長に、一枚は縦長に使用している。南側の奥で最高所1.06mを測る。石の基底には同じ石材の小片を用いて安定を保たせている。玄門の袖石は北側で30×46cm、高さ90

cm, 南側で30×50cm, 高さ73cmのほぼ長方柱状の石の長手を玄室内に向ける形で立てて用いていた。基礎には根石をつめて安定をはかっている。

玄室床面に礫などを敷いた状況はまったく認められなかった。北側奥壁近くでは、一部小石材が残存していたが、盗掘時、壁体のうらごめなどが転落したものと考えられる。排水施設もならなかった。

玄室と羨道の境には、長さ90cm, 幅約20cmの梱石が置かれていた。玄室床面よりの高さは、18cmである。

羨道の平面形は、入口に近づくにつれて軽く八の字形に開く。南側壁は腰石2枚が残存し、一部では2段まで石材が残存していた。最高所は羨道床面より測って82cmを測る。北側壁は腰石が2枚しか残っていないが、もう3枚あったものと推定される。その先端に石が認められるが (Fig. ⑩, PL. 25), 石の大きさ、石の据え方、羨道床面がこの石の部分より傾斜してゆくことからみて、側壁ではなく、側壁入口に接して始まる外護列石と推定される。従って羨道長は、この石の先端までとるかどうかで長さが変わってくるが、先端までいれると3.14m, 抜かれている石のあったところまでとすると2.8mとなる。幅は梱石上で90cm, 入口で推定1.2~1.3mを呈する。掘り方は南側では認められたが、傾斜の低い側である北側では明瞭でなかった。南側でも先端の側壁底は、一部盛土をして高さを整えていた。北側でも地山面を整形した上に、別に掘りこみをもうけず石を据えたものかと推定される。

羨道閉塞 (Fig. ⑪) は比較的良く残っていた。梱石東端より約80cmのところから始まり、羨道入口まで及んでいる。床面にまず四つの比較的大きな石を方形に据える。石の大きさは55×38cm, 60×30cmを測るものが大きい方で、両者をまず南北方向に並列して縦長におき、その後方、入口よりの南側に35×53cmの石を一つ、北側ではこぶし大の石を四つかためて同じく縦長に置く。そしてその中央に石を置き、さらにその間を左右から20~30cmほどの石を用いて積んでいる。主軸平行の断面にみられる通り、当然のことながら玄室よりが早く積まれ、入口側に順次後退していった様子がみられる。閉塞石の高さは、床面より最高所で56cmを測る。閉塞石附近の床面より銀環1個が出土した。なお、南側側壁上およびその背後にかけて、羨道部の閉塞石にほぼ対応する位置でも石材の積み重なりが認められる。これらは閉塞石の方向と直交する関係にあり、うらごめの石と判断される。あるいは天井石を支えるためのひかえ積みの一部かとも考えられるが、石室の規模の復元を試みる時に後述する。

羨道部にも礫床面などは認められず、また排水施設もなかった。

4) 遺 物

出土状況 (PL. 26・27)

盗掘による石室内の攪乱はいちじるしく、遺物も床面に接して出土したものは、玄室内の鉄

片数点、羨道閉塞石附近の銀環をのぞいては皆無であった。床面に接して出土したのも、原位置かどうかは疑わしい。鉄片は棺釘かとも思われ、出土位置は玄室内奥壁より0.9m、南壁より0.6mの位置と、南玄門袖石より0.2m、南壁より0.5mの位置2ヵ所にはほぼ集中しており、あるいは木棺の本来おかれた地点に近いものかとも推定されるが、決定的なことはいえない。銀環も盗掘者の攪乱によって移動したのか、もし追葬が考えられるならば、追葬時の攪乱も考えられ、本来の位置かどうかは判断のしようがなかった。須恵器・土師器は後述リストに示す如く、墳丘封土内、墳丘裾および周溝内よりの出土で、石室内からの出土品はまったくみられなかった。本来の位置を留めていたと判断されるものは、墳丘南西裾に据えられていた須恵器の壺 (Fig. 22-69, PL. 31-61) と墳丘北西裾より出土した須恵器の甕 (Fig. 24, PL.

遺物名	遺物番号	Fig番号	PL番号	窯印PL番号	出土位置	備考				
鉄釘	1	19-1			玄室床面					
	2	19-2			"					
	3	19-3			"					
銀環	4	19-4	32-4		羨道閉塞石附近					
指輪	5	19-5	32-5		奥壁背後封土中	現代のものかも知れない。				
紡垂車	6	19-6	32-6		東・周溝内					
須恵器	蓋	7	20-7	28-7		北東裾溝内	紡垂車と共存 窯印あり			
		8	20-8	28-8		北東裾				
		9	20-9			北トレンチ封土第1層				
		10	20-10			南東溝内				
		11	20-11			"				
		12	20-12			北東溝内				
		13	20-13			前庭溝内				
		14	20-14	28-14		東周溝内				
		15	20-15	28-15		北東裾				
		16	20-16	28-16		"				
		17	20-17	28-17		北東溝内				
		須恵器	杯	18	20-18				前庭部	窯印あり ↑ むしろ蓋か ↓
				19	20-19				"	
				20	20-20	28-20			北東溝内	
				21	20-21	28-21			"	
				22	20-22	28-22			"	
				23	20-23	28-23			北東裾	
24	20-24			28-24	33-24	北東溝内				
25	20-25					東トレンチ溝上部				
26	20-26			28-26		"				
27	20-27			28-27		"				
28	20-28			28-28		"				
29	20-29					北トレンチ溝内				
30	20-30					東トレンチ溝内				
31	20-31			28-31	33-31	南東溝内				
32	20-32					東トレンチ溝内				
33	20-33					"				
34	20-34					"				
35	20-35			"						
36	21-36			北東裾						
37	21-37	29-37	33-37	前庭部						
38	21-38	29-38		東トレンチ溝上部						
須恵器	杯	39	21-39		33-39	南東溝内	窯印あり			
		40	21-40		33-40	"	"			
		41	21-41	29-41	33-41	北東裾	"			
		42	21-42		33-42	南東溝内	"			
		43	21-43	29-43		北東溝内	窯印あり			
		44	21-44	29-44		"				
		45	21-45	29-45		"				
		46	21-46	29-46	33-46	北東裾				
		47	21-47	29-47		東溝内				
		48	21-48			北東溝内				
		49	21-49			北東溝内				
		50	21-50			北東溝内				
		51	21-51	29-51		"				
		52	21-52			"				
		53	21-53	29-53		東溝内				
		54	21-54	29-54		"				
		55	22-55	30-55		南東溝内	窯印あり			
		56	22-56	30-56	33-56	"				
		57	22-57			"				
		58	22-58	30-58		"				
		59	22-59	30-59		北西墳丘				
		60	22-60	30-60		前庭部	窯印あり			
		61	22-61	31-61	33-61	"				
		62	22-62	31-62		北東溝内				
63	22-63	30-63		南東溝内						
64	22-64	30-64	33-64	北東溝内						
65	22-65	30-65	33-65	南東溝内						
66	22-66	30-66	33-66	東トレンチ溝内						
67	22-67	31-67	33-67	北東溝内						
68	23-68	31-68		南東溝内	新羅焼か					
69	23-69	31-69		東トレンチ溝内						
70	23-70	31-70		南東溝内						
71	23-71			前庭部						
72	23-72	32-72		東トレンチ溝内						
73	24-73	32-73		北西裾						
74	23-74				参考図					

Tab. 2 王城山C5号墳出土遺物目録

27-1・32-73) である。この甕の小片が、本古墳のすぐ下方に位置するC2号墳周溝附近より出土しており、この点を考慮する時、周溝内出土の須恵器などは、本来本古墳に属さず周辺よりの流入と考えた方がよいかも知れぬが、この点については、まとめのところで後述する。

出土遺物と出土状況は、Tab. 2 の通りである。

鉄釘 (Fig. 19-1~3) 1は断面方形を呈する。

先端部の小片は残存長3.2cm、幅5mm、厚さ3mmを測る。なお断面方形、先端の彎曲している小片が二点認められる(2・3)。2は残存長は3.8cm、幅・厚さとも4mmを測る。彎曲した部分は、やや扁平になり先端が完結しているようでもある。直線を呈する部分に横方向の木目の痕かと思われるものが残る。しかし、確実ではない。鉸具の一部かも知れない。

銀環 (Fig. 19-4, PL. 32-4) 径は2.5×2.2cmで、断面は扁円形を呈する。一部に緑銹をおびる。

指輪 (Fig. 19-5, PL. 32-5) 青銅製品である。中心は中央両側の窪む楕円形で、窪んだ部分から環にかけて先端が細くなりながら凹線が一条はしる。玄室奥壁背後の掘方確認のため設定したトレンチを発掘中、封土中から出土したものである。出土状況、類品をあまり見受けないことなどよりみてまったく新しいものかも知れない。念のために報告書に掲載することにした。御教示を願いたい。

紡錘車 (Fig. 18-6, PL. 32-6) 滑石製品である。最大径4.6cm、厚みの大きいところで1.1cmを測る。ほぼ中央に径7mmの片面穿孔の孔をもつ。上面は周辺をうち欠いた後、整形し面取りしているが素文である。東周溝内より宝珠つまみ付の須恵器蓋その他の土器とともに出土した。

須恵器 (Fig. 20~24, PL. 28~33)

蓋 (Fig. 20-7~17・25~35, PL. 28-7~17・26~31) a~c類に区分する。

a類 (Fig. 20-7~13, PL. 28-7・8) 最大径13.6cm前後を測る。器高は2~2.5cmで、身受けのかえりをもつ。天井部は平坦であらく筧削りする。内外面とも粘土紐まきあげの痕を顕著



Fig. 18 王城山C5号墳前庭部出土壺

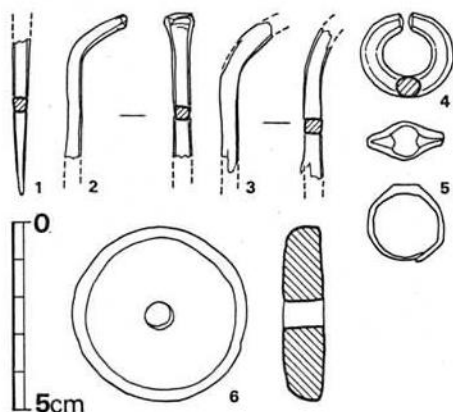


Fig. 19 王城山C5号墳出土遺物実測図 (縮尺1/2)

に残す。周辺はナデで調整する。内面全体に仕上げのナデが認められる。細石を混じえ、焼成はやや軟質で灰色を呈する。

b類 (Fig. 20-25~35, PL. 28-27・31) やや小型で最大径11cm前後を測り、器高は2.1cm前後を呈する。身受けのかえりをもつ。天井部は平坦で、あらく篋削りし、その他の部分は内外面ともナデが認められる。細石がまじり、焼成はやや堅硬で灰色、一部淡灰褐色を呈するものもある。なかに窯印をもつ例が知られる。

c類 (Fig. 20-14~17, PL. 28-14~17) 宝珠つまみをもち、身受けのかえりのある蓋である。最大径15cm、小さいものでも14.2cmを測る。器高は3.8~2.1cmである。細石を混じえるが、石の動きからみてろくろはすべて時計まわりに動いている。焼成は堅硬で灰色を呈する。

杯身 (Fig. 20-18~24・21-36~53, PL. 28-20~24・29-37~53) a~c類に区分する。

a類 (Fig. 20-18-24, PL. 28-20~24) 蓋受けのかえりをもつ。たちあがり口縁部水平面より長く突出するもの(18・19)とほぼ水平になるもの(20~24)とに区別しうるかも知れない。前者は胎土も精選され、つくりも比較的丁寧で、焼成は堅硬、灰色を呈する。一方、後者は器身がぶあつく、つくりも粗雑である。胎土に細石をまじえ、趣を異にする。焼成は比較的堅硬なものを含むが、軟質のものも多く、灰色を呈する。焼きひずみを生じたものが多い。中に窯印のある例もある。後者はあるいは蓋b類と同じあつかいをした方がよいのかも知れない。

b類 (Fig. 21-36~42, PL. 29-37・38・41) 最大径11.8cmから小さなものでは9.2cmまでのものを含む。器高も高いもので4.1cm、浅いものでは3.3cmとばらつきがある。かえりをもたず、やや外反する口縁端は丸くおさまる。胎土は細石を混じえるが、焼成の堅硬なものも認められる。灰色ないし灰褐色を呈する。中に窯印をもつものが出土している。

c類 (Fig. 21-43~53, PL. 29-43~53) 最大径13cm前後で、器高は4.5cm前後を測る。貼り付け高台をもつ。高台は短かく下方へ垂直にのばし端部を外方へ曲折させるものと、単純に「八」字状に開くものと両タイプがある。底部には丁寧な篋削りを施している例が多く、体部との境に稜を形成する。体部から口縁にかけては直線的なものと、やや外反するものがある。胎土は精選されたもの(44)と細石の混じる率の多いもの(43)とがあり、焼成は46が比較的軟質である他は、堅硬といえる。灰色ないし淡灰色を呈している。

碗 (Fig. 21-54, PL. 29-54) ややひずみをおびているが、最大径12.4cm、器高6.8cmを測る。体部上半はわずかに外反し、下半はほぼまっすぐのびるため、体部中ほどでわずかに彎曲が認められる。底部はあらい篋削りの痕がみられ、削りだして底部を形成しようとしている。底部と体部の境は一段明瞭な稜をなす。体部から口縁にかけて内外面ともナデ痕を顕著に示している。胎土には細石が混入するが、焼成は比較的堅硬で、灰色を呈している。

高杯 (Fig. 22-55~59, PL. 30-55~59) 口径の判明するものはいずれも10.3cm前後を

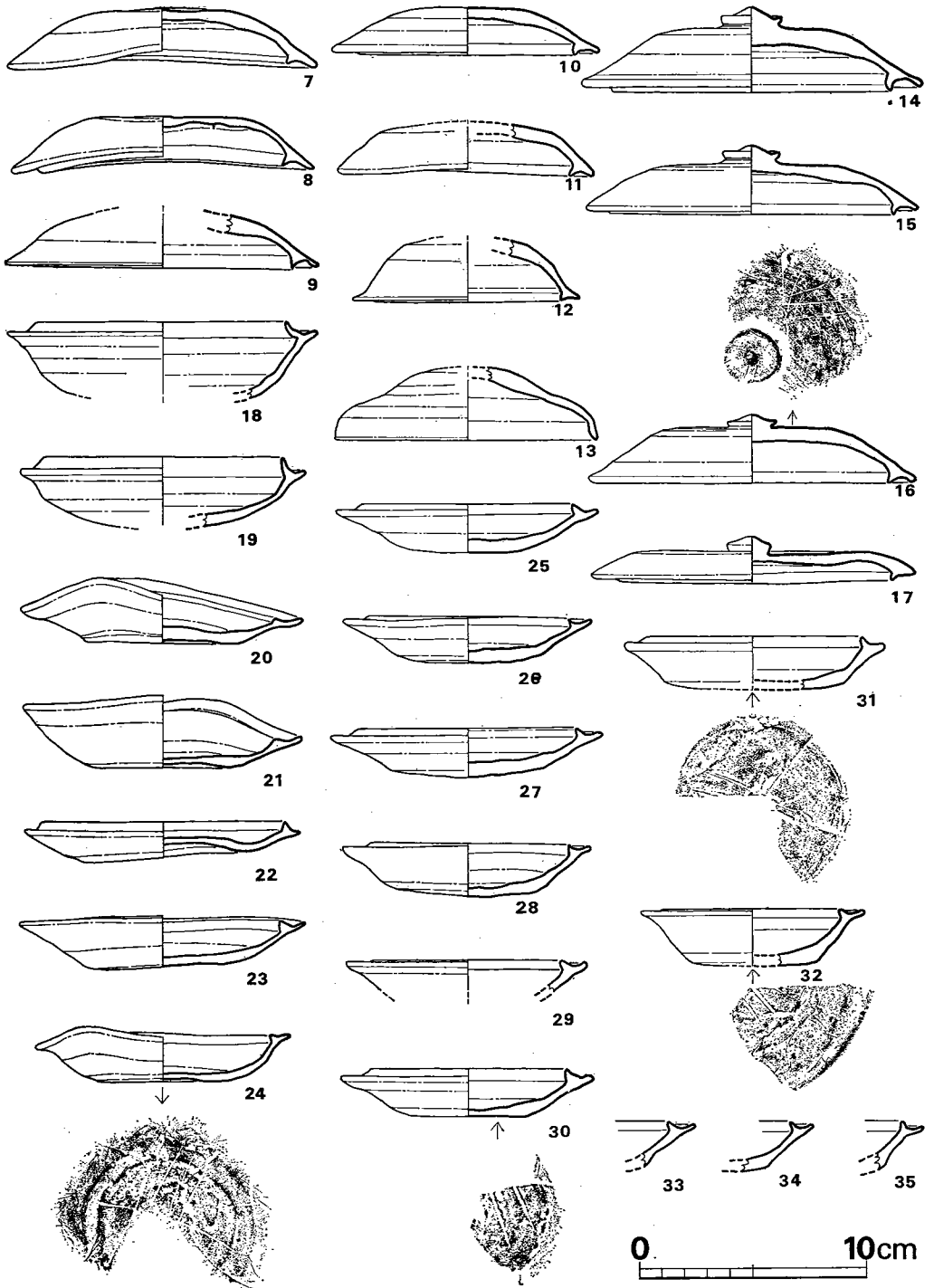


Fig. 20 王城山C 5号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

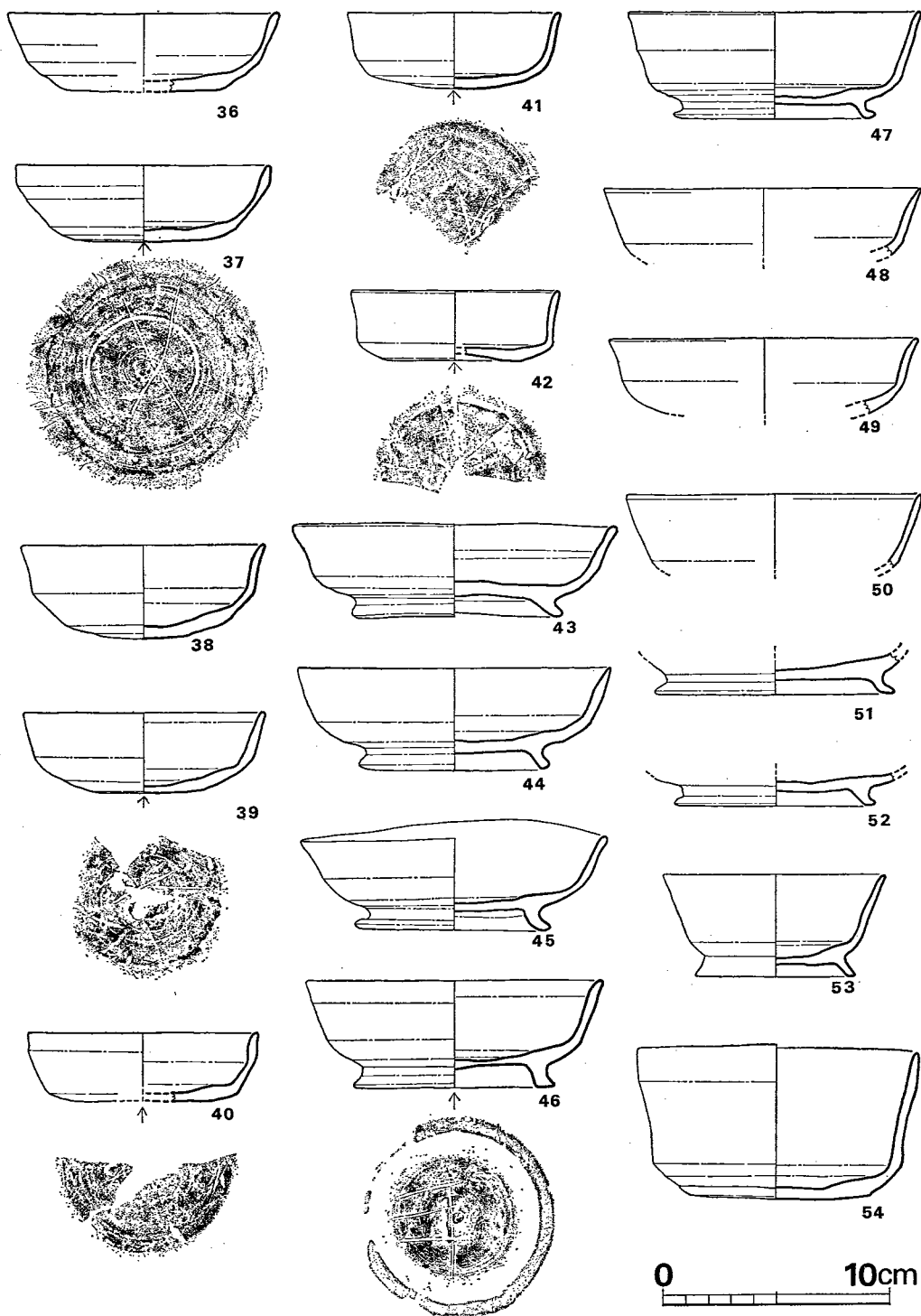


Fig. 21 王城山C 5号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

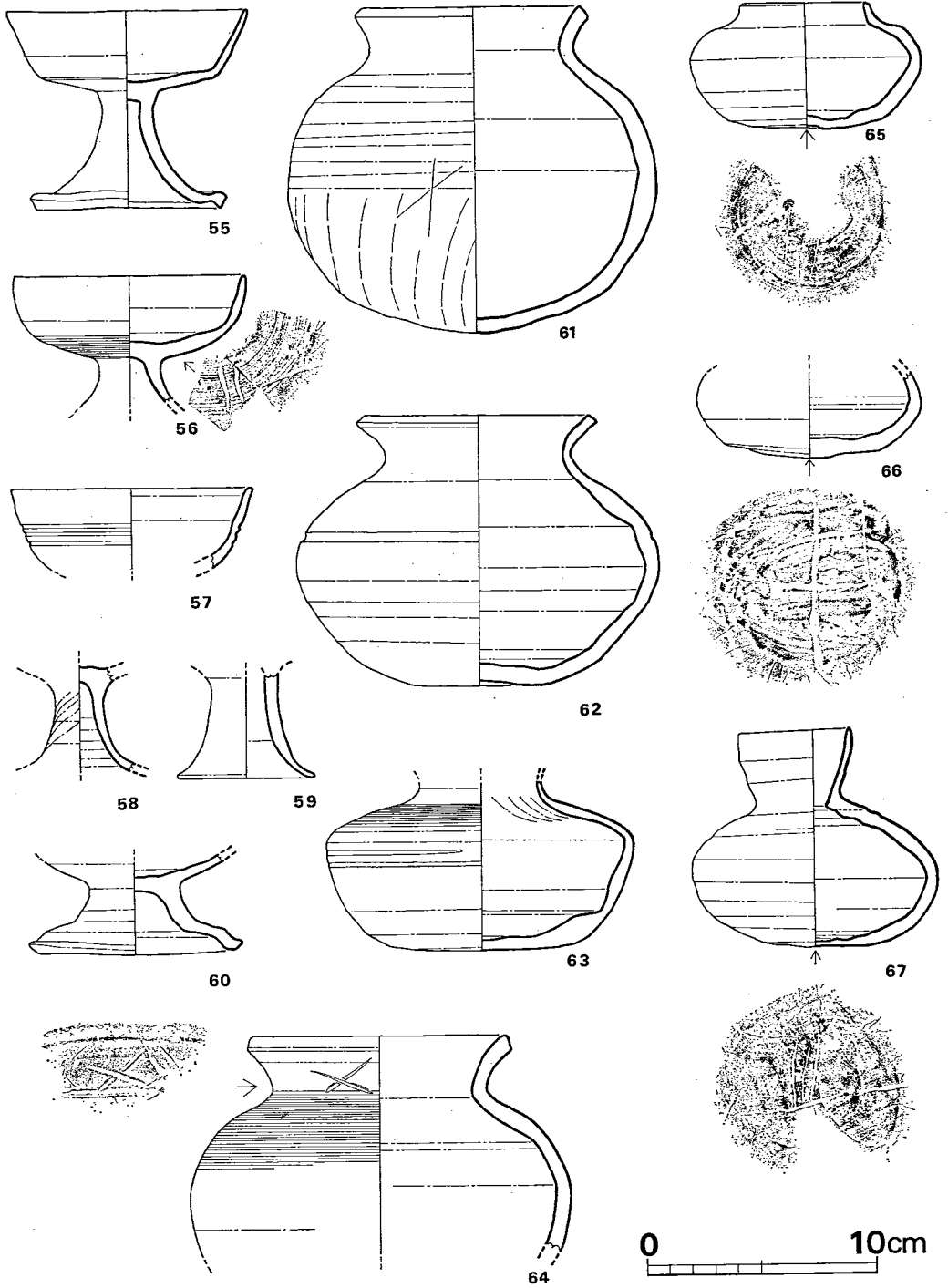


Fig. 22 王城山C5号墳出土須惠器実測図 (縮尺 1/3)

測る。器高の知れる一例では8.5cmある。杯部の形態には二種類あり、明瞭な稜を形成するもの(55)と稜を形成しないもの(56・57)とにわけられる。脚の知られる範囲ではすかしはない。しぼり目の痕を明示する例もある。窯印が脚との境の杯部につけられる例が一つある。細石を混じえるが、胎土は比較的精良で、焼成も堅硬なものが多い。灰色を呈する。ただ59だけ褐色をおびている。

平瓶 (Fig. 22-67, PL. 31-67) 胴部中位の張った扁平な体部に、上端に向って外方へ開く口頸部を貼り付けた小型の平瓶である。口径は4.7cm、器高9.5cmを測る。肩部内外面に、口頸部を貼り付けた痕が明瞭に認められる。体部下位から底部にかけては不定方向の篋削りが施されており、底部中央に窯印を有する。胎土は細石をまじえるも比較的精良で、焼成も堅硬である。灰褐色を呈している。

壺 (Fig. 22-61~64, PL. 31・32) 63を除き、球形あるいは胴部中位の張った球形に近い器体に、外反する短かい口径部のつく壺で、丸底もしくは丸底に近い平底を呈する。63は口頸部を欠損するが、平底で肩部の強く張った扁平な体部をもつ壺である。施文はほとんどなく、わずかに胴部中位ちかく沈線を一条めぐらす例が知られる(62)。さらに頸部に相対する窯印を有する(64)、肩部にカキ目調整が認められる(62・64)、胴部下位から底部にかけて不定方向の粗い篋削りが施されている(61・62)などの特徴を指摘しうる。61は口径9.2cm、14.1cmを測る。これにも胴部中位に1ヵ所、細い窯印を有する。いずれも胎土は比較的精選されており、焼成堅硬で灰色を呈する。64は内外面に自然釉のふきだしが認められ、また胴部中位に窯で焼成時密着していた他の土器のものかと思われる土が附着したままである。

短頸壺 (Fig. 22-65・66, PL. 30-65・66) 完形に復元し得たもの(65)は、口径5.2cm、器高5.4cmを測る。肩部の張った扁平な器体に、やや内傾ぎみの短かい口頸部がつく小型の壺である。口縁端部をわずかに欠損している。平底の底部には篋削りが認められ、窯印を有する。胎土は細石を含むも比較的良好で、焼成はやや軟質、淡灰色をおびている。

長頸壺 (Fig. 23-68・70, PL. 31-68・70) 68は大きく外反する口縁部から、頸部にかけて細くすぼまり、頸部下端で鋭く屈折して直線的に大きくひろがる。さらにその端部で再び屈折して内彎しながら底部にいたる。底部には短かくて頑丈な高台を有する。口径10.6cm、器高19.9cmを測る。頸部及び肩の屈折部に二条と一条の沈線文が施されている。胎土は細石を含むが、焼成は非常に堅緻、肩部より上半は灰色、高台の部分は淡灰色を呈している。70は口縁部及び底部を欠損する。体部上位の張った器体に、外上方へ直線的にのびる長い頸部がつく。胴部上位に三条の沈線文をめぐらせ、その間に斜線文及び波状文が施されており、肩部から胴部下位にかけてカキ目による調整がおこなわれている。最大径19cmを測る。胎土は比較的精良で、焼成堅硬、灰色を呈する。

台付壺 (Fig. 22-60・23-69, PL. 30-60, 31-69) 口頸部を欠くもの(69)は、最大径

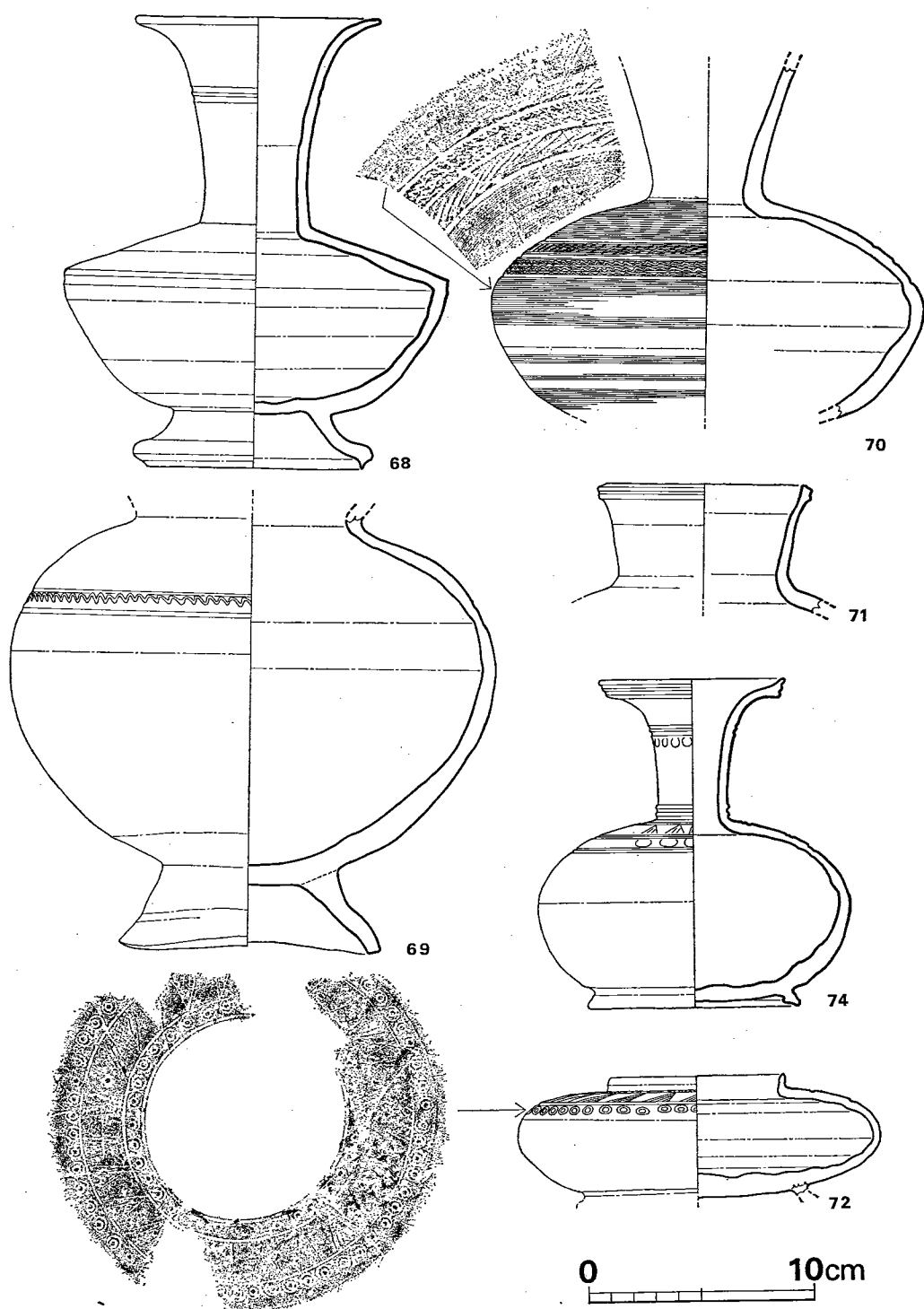


Fig. 23 王城山C 5号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

21.3cm, 現存高19cmを測る。肩部のやや張った球形に近い器体に、「八」字形にひろがるいびつなつくりの貼りつけの高台がつく。肩部に二条の沈線文をめぐらせ、その間にくし描きの波状を一条めぐらせる他、文様は認められない。脚のみのもの、あるいは口頸部のみのものも、いちおうこの中へいれておいた。

胎土は比較的良好で、焼成は堅硬、胴部下半は灰黒色、他は灰色を呈している。

脚付壺 (Fig. 23-72, PL. 32-72) 本古墳より出土した土器の中でもっとも注目をひくものが、新羅焼かと推定される脚付壺の出土であろう。おしくも脚部は欠損しているが、ほ

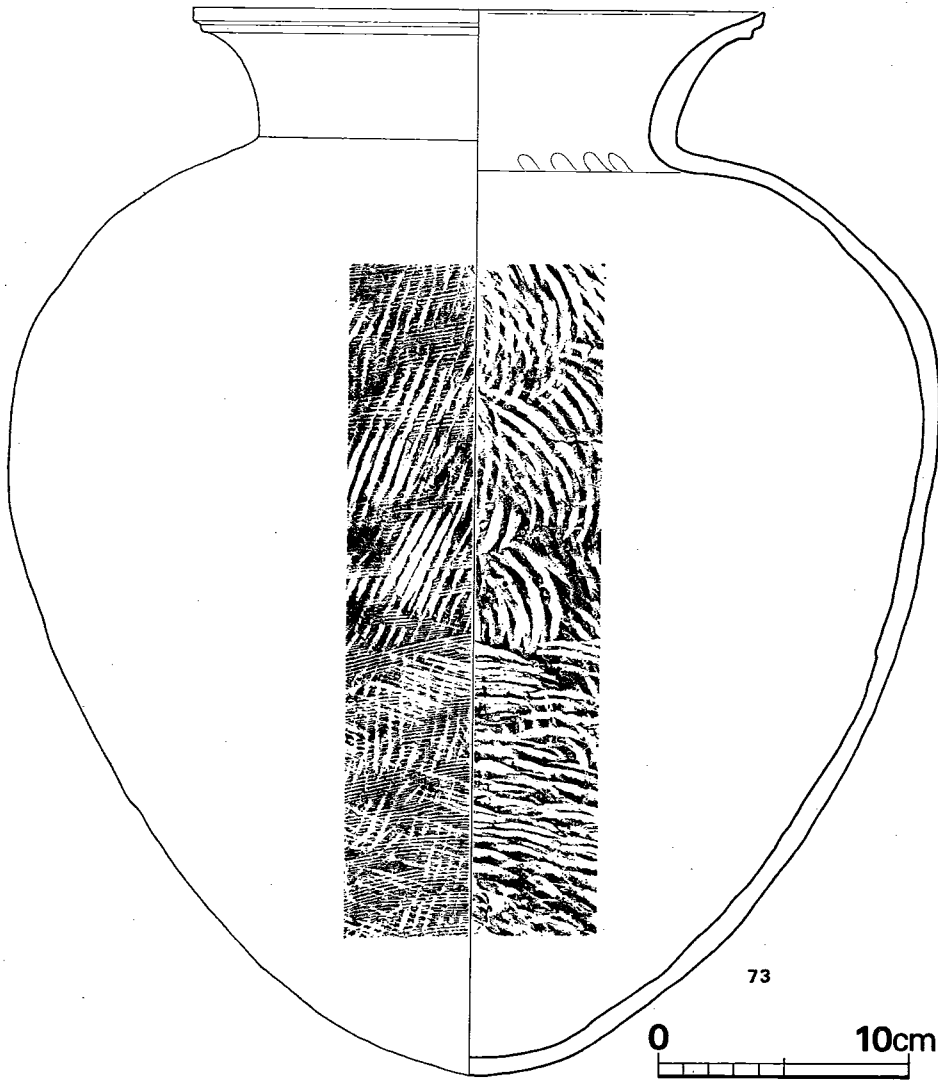


Fig. 24 王城山C 5号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

ば全形をうかがえる良好な資料である。器形は体部中位の強く張った器体に、短かく垂直に立ちあがる口頸部がつく。口径は7.7cm、胴部最大径16cm、現存高5.4cmを測る。肩部には二列の竹管文の間に、内部を斜線でうめた鋸齒状文をめぐらせており、体部中位から底部にかけて篋による整形がみられる。脚はかるく「八」の字形にはりだし、類品ではこの部分にすかしのつけられているものもあるようである。最近この類の土器が西日本各地でぼつぼつ出土しているようで、参考品として京都市右京区嵯峨大覚寺前に所在する大覚寺3号古墳出土の台付長頸壺 (Fig. 23-74) を掲げておいた。

5) ま と め

先述した如く、石室は盗掘のため天井石は一枚も残存せず、壁体も大部分のところで腰石一枚だけしか残っていなかった。従って明確な根拠に基づいて本来の石室の状態を復元することは不可能である。ただ奥壁背後にいれた東トレンチ土層断面図 (Fig. ⑭の上) で確実なことは、溝は第2層上面から掘りこまれていることである。このことは表土直下のこの黄褐色土層が、現状ではいくぶん土砂の流失を考慮する必要があるとはいえ、本来の封土の最高所に近いものと判断してよいのではないかといえよう。その最高所は、玄室床面より測っておよそ1.7mである。天井石の大きさが不明なため、玄室高を推定しようもないが、本来あまり高いものでなかったことぐらいは考えられよう。

羨道閉塞石の最も残りのよい南壁ぞいでは、南側壁の一番奥の大石の最高所とほぼ高さを等しくしていた。玄門袖石の高さも、ほぼ似かよった高さに位置している。羨道閉塞石も当然一部崩壊していることは考えられるが、先述した如く、残存していたものは本来の状況をよく留めていたと判断された。これらの点を考慮する時、羨道部の天井石の下端は、玄門袖石の高さにほぼ近いものではなかったかとも考えられよう。

墳丘裾の傾斜上面側をめぐる周溝は、多量の須恵器を含んでいた。溝中には黒色土が充満していた。須恵器は後述する如く二時期のものを含んでいる。溝が古墳築造当初のものであれば、少くとも須恵器IVb型式からVI型式の期間まで溝としての状態を留めていたものであろうか。

墳丘北西裾で、羨道入口より続くと推定される列石を検出したが、石の大きさは長さ40cm、幅30cm前後の比較的小さなものであった。流出を考慮する必要はあるが、本来何段にも積み重ねたものではなく、封土中にもところどころに同じような大きさの石がみられることと共に、封土の流失をふせぐ意図が強かったものかと思える。和歌山、兵庫、静岡、群馬など各地で列石が検出されているが、なかには外護表飾としての意図の強いものも知られる^{註1}。それらとは性格をやや異にしているといえよう。

埋葬状況についても推定する明確な根拠を欠いている。ただ玄室内にわずかにちらばってい

た鉄片が、棺釘といえるならば、釘の先端に近い部分に横方向に走る木目痕らしいものが認められることより、組合式の木棺を用いて埋葬したものと判断されよう。墳丘裾にすえられている甕と壺に対し、東よび東北周溝内、また東北封土中出土の土器は、時期を異にしており、土器型式からみて、両者の中間の時期を欠いているといったことが知られる。石室築造時期から一世代おいて、本古墳がふたたび墓として追葬された可能性が高いものかと考える。

では本古墳の築造時期はいつと推定されようか。石室内より埋葬の時期を限定しうる資料が皆無に近いため、墳丘裾、周溝、封土中出土の須恵器を用いて年代を推定するより手がかりがない。Tab. 2 を整理して作ってみたものが Tab. 3 である。これらの中でもただ先述した如く、確実に原位置に据えられた状態を留めていたと判断されるものは、墳丘南西裾の須恵器壺と北西裾の甕といえよう。さらに封土中の高台杯と宝珠つまみのつく蓋 (PL. 26-2) も本来の位置のものかとも考えられる。他は周辺の古墳よりの流入かも知れない。据えられていた壺と甕は、九州の須恵器の編年でいえば第IV型式に相当する。高台杯と宝珠つまみをもつ蓋は第VI型式に比定されよう。須恵器の型式編年に暗いために、確実なことはいえず、調査の方法にも問題があったため強く主張することはひかえたいが、Tab. 3 をみるかぎり、両型式の土器は、周溝および墳丘裾出土といえども自ら時期差により出土地点を異にしているように判断される。すなわち墳丘南西もしくは北西より出土するものは、杯a類、杯b類の一部、高杯、壺

器		種	型 式		主要出土地点	備 考
蓋	a	大型・かえりあり	IVb	VI	北東裾・溝内	
	b	小型・かえりあり		VI	東溝内	
	c	宝珠つまみ		VI	北東・東溝内	
杯	a	かえりながい	IV	VI	前庭部	蓋bと同じか 前庭部のものIVか
	b	かえり水平		VI	北東裾・南東溝内	
	c	かえりなし 高台つき		VI	北東裾, 北東・東溝内	
碗			VIか	東溝内		
高杯			IV		南東溝内	1点北西裾
平瓶				VI	北東溝内	
壺	a	小型・短頸 台付長頸壺 台付壺(短頸) 新羅焼	IV	IV	前庭部・北東溝内	
	b			IV	南東・東溝内	
	c		VI	南東溝内		
	d		VIか	東溝内・前庭部		
	e		VI	東溝内		
甕			IV		北西裾	

Tab. 3 器種と出土地点および型式の関係

a・b類、壺などである。これらはすべてIV型式に属する。一方、蓋a・c類、杯c類、高杯、平瓶、壺c・d類は北東裾もしくは北東から南東にかけての周溝内より出土する。これらの須恵器は第VI型式のものが大部分を占めている。出土位置について言葉をかえていえば、前者は前庭部ともいふべき、石室の前面の位置に相当し、後者は石室のまま横近くから石室背後に位置するといえよう。このことから本古墳築造当初、前庭部ともいふべき部分でまず墓前祭祀が実施されたことが推定され、その時期は須恵器の第IV型式の時期であった。ただ出土位置を異にするため問題を残すが、蓋b類はIVb型式かと判断される。従って本古墳の築造された時期は6世紀末～7世紀初頭に比定されよう。先述した如く、第V型式の須恵器の出土をみない。ということは7世紀前半には、本古墳への追葬は行われなかったものかもしれない。ついで石室の後側あるいは横の地点で追葬時の祭祀が行われたものかと考えられる。その時期は第VI型式の須恵器の時期で、およそ7世紀後半と推定されよう。一世代30年とすれば、三世代のうち、中間を抜かして築造当初と最後の時期に本古墳では埋葬が行われた。それ以後の須恵器の出土をみないため、7世紀後半を最後として本古墳は、墓として利用されなくなったものと考えられる。墓がいつまで墓として特定血縁集団の中でも意識されていたかを、推定するよすがともなるかも知れない。

最後に先述してきた時期比定、あるいは墓前祭祀をとりおこなう場所の差が、時期によって異なっていたことを裏づける根拠として東周溝内から出土した壺e類を使えるかとも考える。この短い脚付の短頸壺が、新羅焼そのものか、あるいは新羅の工人が、我国へ渡来して、北九州のどこかで窯を築き、故地のものに非常に近いものをつくりあげたものであるのか、資料蒐集も行わず、充分検討したこともない筆者には判断しがたい。しかし、新羅焼とすれば7世紀後半の中頃の時期に比定される^{註3}。この土器の出土地点は、第VI型式の須恵器の圧倒的に多い地点であったことは、先述してきた通りである。新羅統一直後、あるいはそれをやや前後する時期のこの手の土器が、最近西日本でいくつか出土が知られ、時期をやや異にする可能性もあるが、参考資料として掲げた如く、京都市右京区嵯峨大覚寺3号古墳でも長頸壺が検出された。大量の一つの古墳より出土するといった例はこれまでのところ知らない。いずれにしろこの時期にも朝鮮からの須恵器工人の政変を契機にしたものかどうかはわからぬが、渡来があり一つの画期をなしたことは今後の資料増加により明らかとし得よう。追葬時にしろ本古墳にこれら周溝内より出土した須恵器が、関係深いとする仮定が認められるなら、新羅焼もしくはそれに近い我国製品をおさめた本古墳の被葬者の出自は興味深い問題ともいえよう。

(近藤喬一・松浦俊和)

註 1 樋口隆康・近藤喬一・吉本堯俊『和歌山市鳴滝古墳群の調査』（『和歌山県文化財学術調査報告』第二冊，1967）

註 2 須恵器の型式編年については以下の報告書を参照した。

小田富士雄・柳田康雄・真野和夫『野添・大浦窯跡群』（『福岡県文化財調査報告書』第43集，1970）

八女古窯跡群調査団『福岡県八女市塚ノ谷窯跡群八女古窯群調査報告Ⅰ——，1969）

田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ，（『平安学園研究論集』第10号，1966）

- 註 3 新羅焼については、尹武炳・韓丙三・田辺昭三・小田富士雄の各氏より御教示をいただいた。須恵器の型式についても、小田富士雄・田辺昭三両氏より一部御教示を得た。ただし誤りがあれば充分理解できなかった近藤の責任である。

安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」（『京都府教育委員会埋蔵文化財発掘調査概報』1976）

復元実測図は平城宮跡発掘調査部の吉田恵二氏によるものを使用させていただいた。

（1976. 12. 19 稿了）

6. 第 6 号 墳

1) は じ め に

占 地

3号墳の北側に接し、標高も同様に80mから83mにかけての斜面に占地している。

調 査 経 過

8月26日～28日 墳丘中央にみられた盗掘坑内の清掃を開始する。28日には玄室のプランを確認する。

8月29日～9月5日 29日には石室羨道部を検出し、主軸をもとに、墳丘断面観察用のトレンチを設定する。9月2日には3本のトレンチを掘り終える。その断面を観察しても、3号墳及び9号墳との新旧関係は判明しなかった。これらトレンチの断面図を作成する一方、墳丘上の表土剥ぎを行った。

9月5日～9月15日 周溝内から多量の須恵器が出土する。その出土状況及び全体写真を撮影する。

9月16日～23日 墳丘盛土前半を除去する。西の谷側墳丘中より土師器壺2個、須恵器壺1個が並べてあり、東の山側墳丘中より土師器壺が出土した。また北半の封土を除去する。北半つまり玄室裏側は地山の自然傾斜が著しいか、あるいは地山の掘り込みを少なくしようとしたのか、石室の石組及び盛土の工程中に斜面を埋めて平坦面を作り、その上に墳丘裾の列石を置いていることが判明した。

9月24日～10月6日 石室の実測を行い、10月6日に全ての作業を終了した。

2) 墳 丘 (Fig. 25, PL. 34・35・36-1)

規 模

調査前に直径10m、高さ2mの高まりを見せていた。中央に盗掘坑があり、その状況からして、南に開口する石室が想定された。なお、東側の墳丘裾は、調査開始前に、ブルドーザーによって削られていた。

列 石 (Fig. ⑩, PL. 35-3・36-1)

北側の裾部に9mにわたって圍繞していた。この列石は調査経過中で述べた通り、盛土作業途中に置かれたものであるが、外形状は墳丘裾を繞っているように見える。

周 溝

墳丘裾をU字状に取り巻いて黒褐色土層が堆積していた。これは墳丘を盛る以前の地山整形

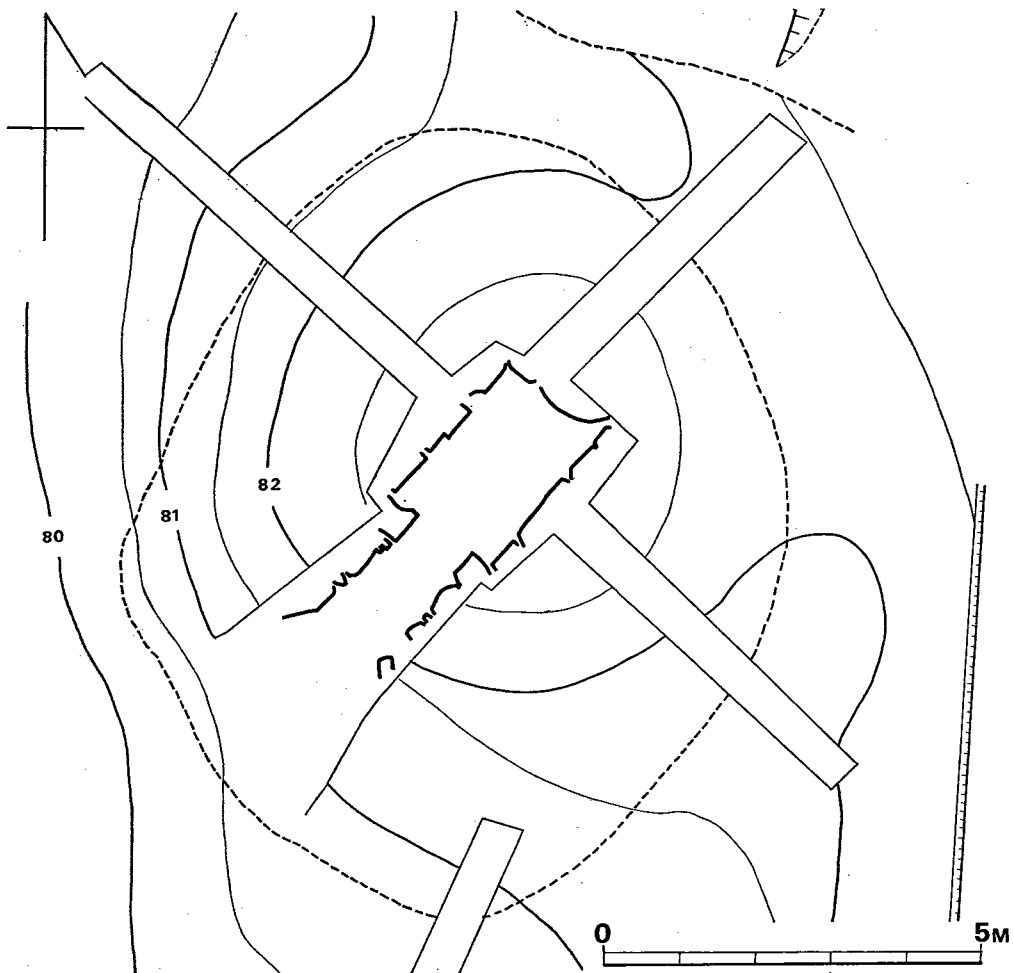


Fig. 25 王城山C 6号墳丘測量図 (縮尺 1/100)

面と墳丘裾との境に堆積したもので、意識的に溝を穿ったものではない。

構築状況 (Fig. ㉔, PL. 35-2)

直径約12mにわたって地山を整形して、古墳築造範囲を設定している。北東側では石室架構と合せて地山上の黄褐色土層上に盛土し、平坦面ができたところで列石を囲繞させ、そこがあったかも墳丘裾のごとくしてさらに盛土している。南東側では3次、谷に向う北西側では4次にわたって盛土している。

土器列 (PL. 34-2)

羨道入口の両側墳丘中から甕や壺が検出されている。北西側では土師器甕2個と須恵器甕1個が樹立させたりえで破碎した状態で出土した。南東側の土師器壺は底部から胴部にかけてし

が残っていなかったが、やはり樹立された状態にあった。石室奥壁裏側の列石下墳丘中からは、完形の須恵器壺が出土した。

3) 石 室 (Fig. ⑨, PL. 34~36)

両袖単室の横穴式石室で、主軸をN-46°-Eに向けている。石室規模は Tab. 10 (p. 166) の通りである。石室掘り方は底面2.6×5.3mの方形で、東の谷側は掘り込んでいない。床面は玄室から羨道に向けて傾斜している。

玄室奥壁は床面よりの高さ約50cmの用材を腰石としている。両側壁は床面よりの高さ50cm以内の石各3個を腰石としているが、その積み方は粗雑である。

両袖石は床面高70~80cmで、その間の梱石は平面形が不整である。

羨道部は両壁とも袖石を含めて雑多な4個の用材を腰石としている。このうち天井石がのつたと考えられるのは玄室側2個のみである。南西壁端の石は石室主軸より西に向いており、墓道は同方向に続いていたと考えられる。閉塞石は盗掘に際して破壊され、持ち出されていた。

4) 遺 物

出 土 状 況 (PL. 34-2, PL. 35-1)

玄室出土品は刀子片1個のみである。石室外から鉄釧1個と鉄鏃1本が出土している。前述したように、墳丘中から須恵器2個体、土師器3個体が出土している。

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 装身具	鉄釧	1個
(2) 武器	鉄鏃	1本
(3) 工具	刀子	1本
(4) 土器	須恵器	2個体
	壺	1個体
	甕	1個体
	土師器	3個体
	壺	1個体
	甕	2個体

鉄釧 (Fig. 26, PL. 37-2) 墳丘の南側裾近くから出土した。断面は外周のほうがやや幅広で2mm測る。径6.2cm

鉄鏃 (Fig. 26, PL. 37) 北側の周溝中より出土した広根式鏃である。鋒部の厚さは1.5mmである。

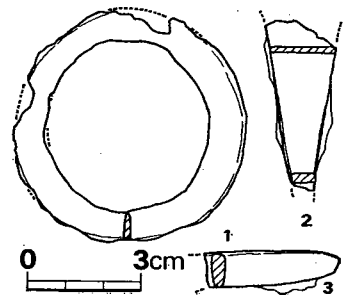


Fig. 26 王城山C6号墳出土耳環及び鉄器実測図 (縮尺1/2)

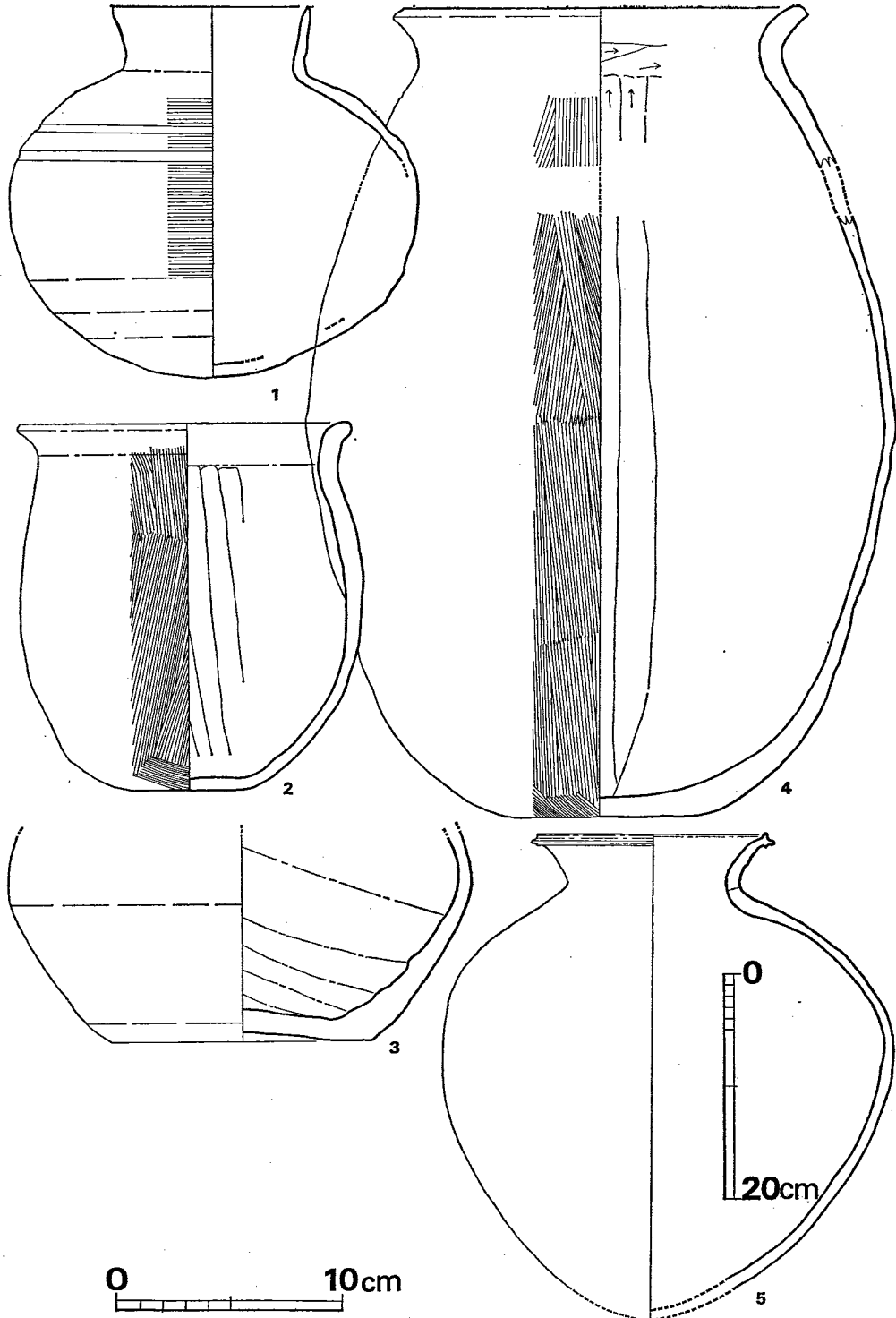


Fig. 27 王城山C 6号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺 1/3, 5のみ 1/6)

刀子 (Fig. 26, PL. 37-1) 玄室出土の刀子茎で、刃部近くまで残っている。最大厚 4 mm, 須恵器 (Fig. 27, PL. 37-3)

壺 (1) 玄室裏側墳丘中より出土した。短く立ち上る口縁の端部は若干磨耗し、丸味もっている。球状の胴部にはカキ目を施し、上から 2 条の浅い凹線を引いている。胴下部から底部にかけてはヘラ削りしている。色調は灰緑色で焼成は軟調である。口径 8.6 cm, 器高 16.4 cm, 胴部最大径 18 cm。

甕 (5) 西側墳丘中出土である。外彎する短い口縁を有し、端部の外側はヘラ、内側は強いヨコナデによって 3 本の凸起を作り出している。肩部には縄目叩きの上からカキ目を施している。底部は焼成後穿孔されている。灰青色～灰黄色を呈し、焼成は堅緻である。口径 21.5 cm, 器高 43.4 cm, 胴部最大径 40 cm。

土師器 (Fig. 27-2~4, PL. 37-3)

壺 (3) 東側墳丘中より出土した。頸部より上を欠損して土り出しいる。胴部外面にヘラ削りを施し、内面は背で回転ナデしている。底部は上げ底で不定方向のナデにより調整している。胎土中に砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。焼成は堅緻である。

甕 (2・4) 西側墳丘中より出土した。平底で、胴部から底部にかけて外面を刷毛目調整し、内面をヘラで削り上げている。2 は口径 14.8 cm, 器高 16.5 cm, 4 は口径 18.5 cm, 器高 34 cm である。

5) ま と め

調査の結果、本古墳は径 10.4 m, 高さは床面より 2.15 m と推定され、王城山 C 古墳群中最大の円墳である。玄室の容相は盗掘に際して荒されており、埋葬状態は不明である。

墳丘中から 5 個体の土器が出土している。須恵器壺は小田富士雄氏のいう IV～V に相当するものであろう。土師器甕 (Fig. 27-2) にやや似たものは大谷古墳群第 7 号墳丘中からも出土しており、V 類須恵器に対応すると考えられる。よって当古墳は 7 世紀初頭から中葉にかけて使用された古墳と考えられる。

(酒井 仁夫)

7. 第 7 号 墳

1) はじめに

占 地

4号墳の北東に接し、標高84mから86.5mにかかる斜面に占地する。調査された王城山C古墳群の中では10号墳と共に、最も高所に位置する。

調 査 経 過

10月7日より調査を開始する。当所7号墳墳丘の大半は工事範囲外にあり、僅かに墳丘南西側裾部のみを調査対象とした。14日には墓道が検出され、その断面図を作成して調査を終了した。

10月27日～11月1日 工事幅が変動し、再度調査を開始した。盗掘坑の清掃から始め、11月1日には玄室床面を検出した。

11月2日～8日 石室主軸をもとに北西側にトレンチを設定。墳丘上表土剥ぎと共にトレンチ掘りを実施する。7日から8日にかけて土層断面を作成する。残り2本のトレンチは調査区域外に出るので掘れなかった。

11月9日～11日 墳丘の平板測量を実施する。

11月12日～14日 石室及び墳丘の検出作業を終え、全体写真撮影を行う。14日より墳丘除去作業を開始する。

11月15日～17日 墳丘を全て除去し、掘り方を検出する。これら作業の後写真を撮影し、発掘作業を終了する。

11月18日～12月1日 11月14日より開始した石室の実測作業は12月1日をもって全て終了する。

2) 墳 丘 (Fig. 28, PL. 38)

規 模

調査前に直径10m、高さ2.5mの高まりを見せていた。中央に盗掘坑があり、その状況からして、南西に開口する横穴式石室が想定された。

なお墳丘の北側 $\frac{1}{3}$ は調査区域外であった。

列 石 (Fig. 20)

北側の墳丘中で、1.8mにわたって並ぶ列石が認められたのみである。

周 溝

北西側の墳丘裾が調査前に破壊されており、さらに南東の山側が調査区外であったため、明

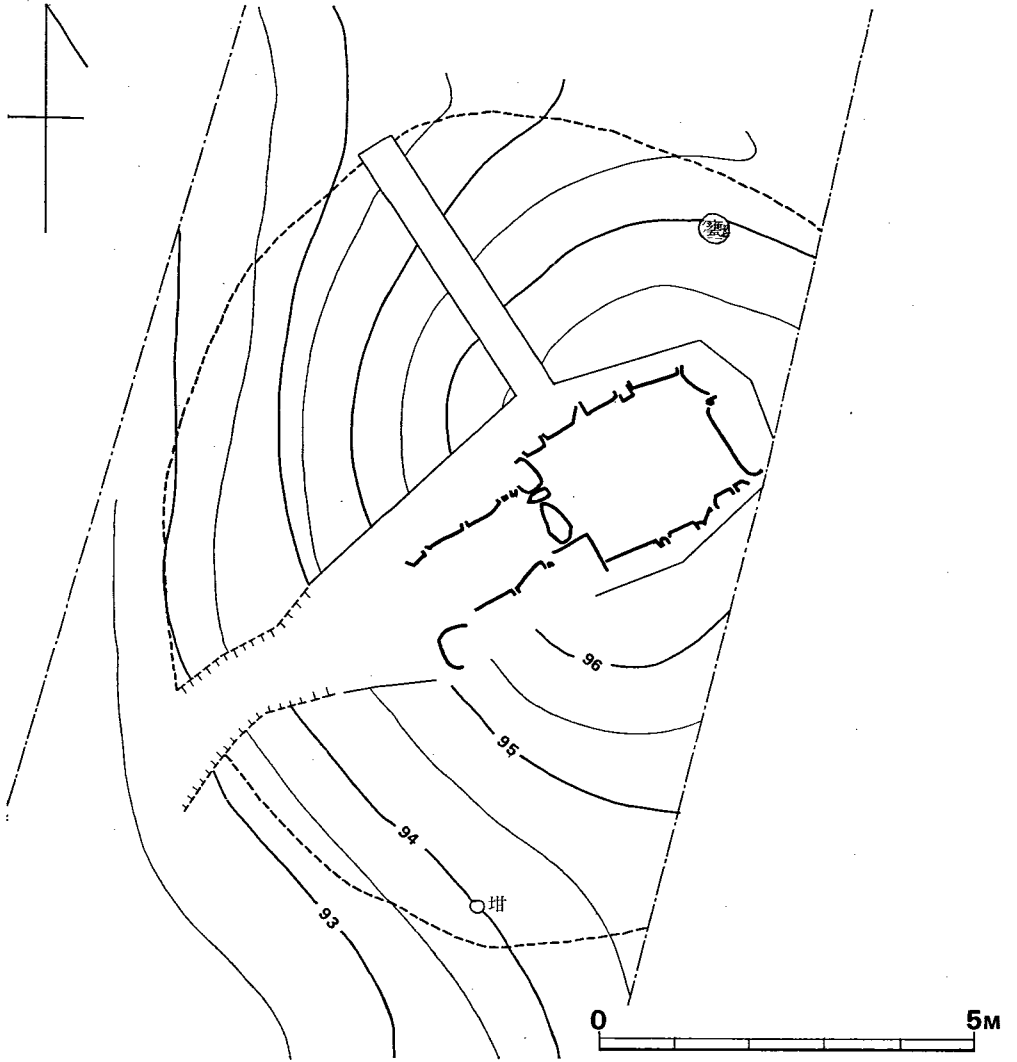


Fig. 28 王城山C 7号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

瞭ではない。10号墳との間が、地山を掘り窪めていないにしても、周溝様になっていると考えられる。

構築状況 (Fig. ㉑, PL. 38-2)

古墳築造範囲を造成整形し、中央に墓壙を掘り込んでいる。西側トレンチの土層図によれば墳丘盛土は裾部を固めた後に石室方向を盛っている。石室用材の3段目か4段目(床面よりの高さ約1m)を被う盛土より上は水平に盛り上げている。

土 器 列

土器列として並んではいなかったが、墳丘中や上から須恵器が出土した。羨道東側及び玄室裏側の墳丘中からは葬が、南側の墳丘上裾部近くからは埴と壺が出土した。

3) 石 室

両袖単室の横穴式石室で、主軸を N-59°-E に向けている。石室規模は Tab. 10 (p.166) の通りである。

石室掘り方は一辺約 3.5m の隅丸方形で、玄室のみを囲っている。床面は玄室では平坦であるが柵石を境として、羨道部ではかなりの傾斜をしている。

玄室奥壁は高さ約70cmの2個の方形用材を腰石とし、上に石材を横積みしている。北東側壁は3個の石よりなり、比較的大きな石を用いているのに対し、北西側壁は4個の小さめの石を腰石としている。

袖石は床面からの高さ約70cmの石材を立てて用いており、その間の柵石は枕状を呈し、厚さ約15cmである。

羨道は両壁共袖石を含めて4個を用いて腰石としている。玄室と同様、北西壁は北東壁に比べ、用石が小さい。

墓道は羨道より約 3.5m 伸び若干広がりを見せたところで、崖法面に切られている。中央幅は約 1 m である。北西壁の羨道部寄りには3個の角礫が据えられている。

閉塞石は柵石より55cm離れた羨道中央部に積み上げられていた。

4) 出 土 遺 物 (Fig. 29~31, PL. 39・40)

出 土 状 況

玄室床面より金環2個が、羨道より小刀1振が出土した。墓道や羨道埋土中からは須恵器や土師器が集中して出土した。

出土遺物を列記すると、つぎの通りである。

- | | | |
|---------|-----|-------|
| (1) 装身具 | 金環 | 2個 |
| (2) 武器 | 刀 | 1振 |
| (3) 土器 | 須恵器 | 8個体以上 |
| | 高杯 | 2個体 |
| | 埴 | 1個体 |
| | 壺 | 3個体 |
| | 甕 | 3個体 |

土師器	3 個体
高杯	2 個体
鉢	1 個体

金環 (Fig. 29, PL. 39-1) 玄室床面より出土したが、原位置を保ってはいなかった。1・2 は対になろう。腐食が著しく、環部内側に僅かに金箔を残していた。径16.5mm以上。

刀 (Fig. 29, PL. 39-2) 刃部の破損が甚しく、茎も端部を欠く、両関の直刀である。刃部長21cm, 鋒部厚さ3mm。

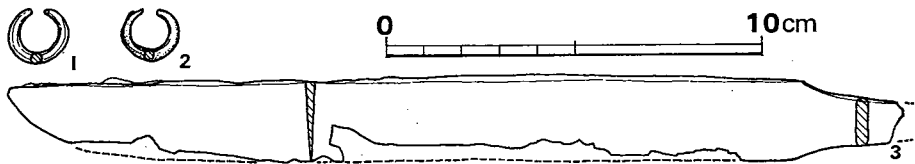


Fig. 29 王城山C7号墳出土金環及び刀実測図 (縮尺1/2)

須恵器 (Fig. 30-31, PL. 39-3-40)

高杯 (Fig. 31-1・2) 共に墓道より出土した。杯部の受け部端は丸味をもつ。立ちあがり1cm, 口径10.5cm, 受け部径13.2cmである。脚裾部は1が直ぐ伸びて端部が水平なのに対し、2は跳ね上がる。色調は灰黒色で、胎土は精良である。脚の焼きゆがみが大きい。

埴 (3) 6の壺と共伴して南側墳丘上裾部近くから出土した。短く直線的に内傾する口縁をもつ、やや肩が張り、底部は平坦である。肩上部に蓋を重ねて焼いた痕が付着している。口縁部から肩部にかけてはヨコナデ調整し、胴部をヘラ削りしている。暗赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径5.1cm, 器高6.6cm。

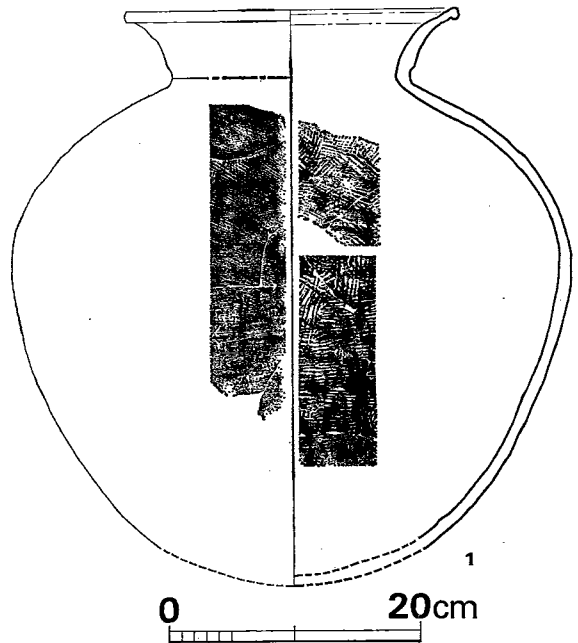


Fig. 30 王城山C7号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/16)

壺 (4~6) 4は有高台, 5は長頸壺と考えられる。4・5は南側墳丘裾下から出土しており、本来3・6と共に置かれていたとも考えられる、4の器壁は極めて薄く仕上げられており、

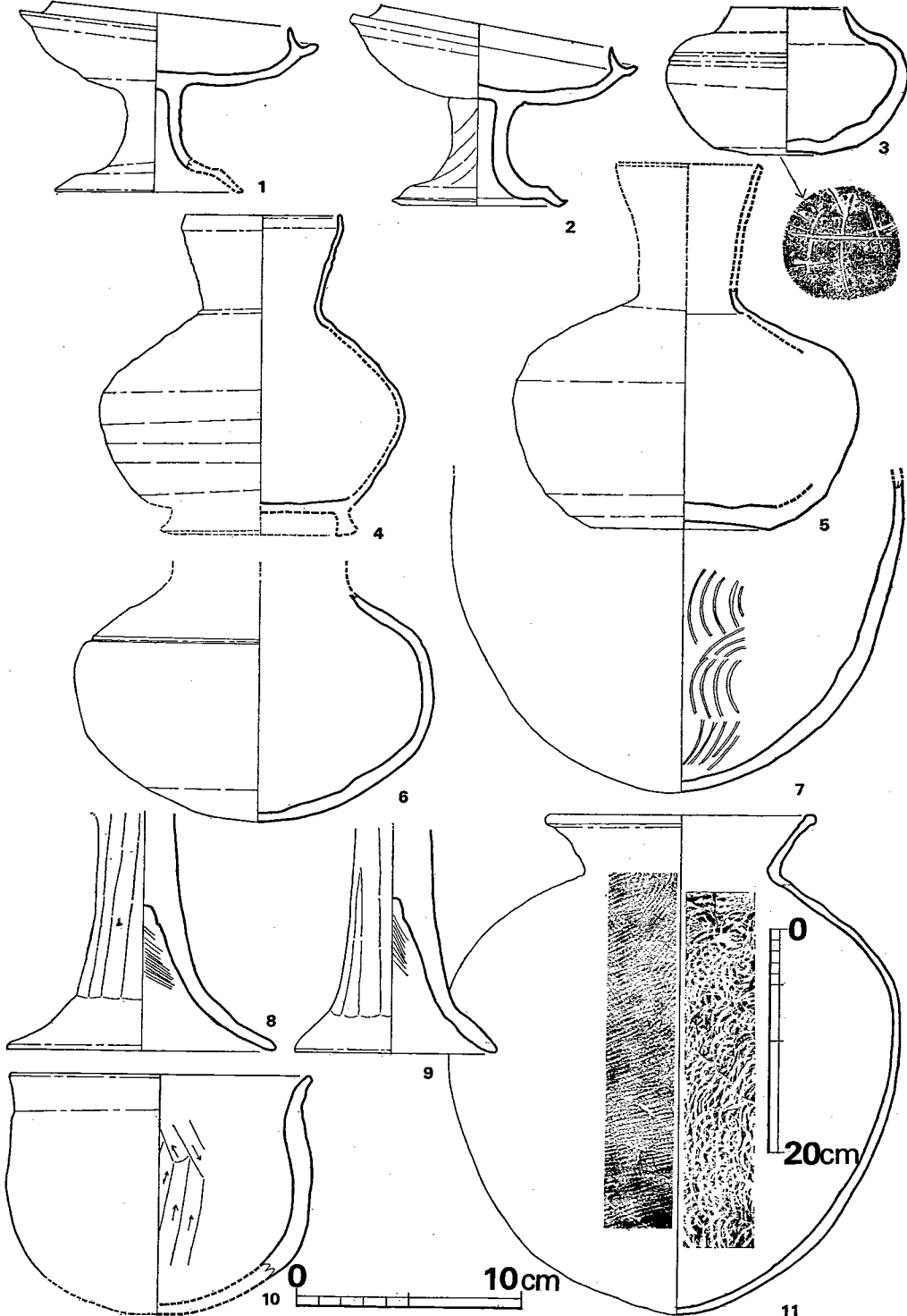


Fig. 31 王城山C7号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺 1/3, 11のみ1/6)

胎土も精選されている。胴下半をヘラ削り、他の外面及び口縁部内側は丁寧にヨコナデされている。5の頸部は直線的に立上ると思われる。頸部立上りの器壁は極めて薄い。肩部から胴部に強いヨコナデ、胴下部から底部にかけては粗いヘラ削りを施している。灰色を呈し、焼成は良好。なおこの壺の破片は11号墳周溝中からも出土している。6の頸部は欠損しているが、短いと思われる。焼成が悪いため、器壁が剝落している。肩部に一条の沈線を刻んでいる。

甕 (7・11, Fig. 30, PL. 46) 7は南側, 11は北側の墳丘中より出土し, Fig. 30は墓道から破砕された状態で出土した。11の口縁部は下からのヨコナデによって粘土を盛り上げ、さらに端部をヨコナデしている。胴部は平行叩を螺旋状に行い、底部のみ上からヨコナデしている。口径24cm, 器高44.6cm, Fig. 30の叩は多彩である。外面は格子状叩の上カキメを施している。内面上部は変形矢羽根状叩と正方形格子状叩を合せ用い、部分的にヨコナデしている。下部は平行叩を行っている。口径は26.5cmで、器高は約46cmと思われる。

土師器 (Fig. 31, PL. 40)

高杯 (8・9) いずれも墓道より出土した。脚柱部外面を縦にヘラ削りし、内側をヘラで螺旋状に削っている。脚裾部はヨコナデ、淡赤橙色をし、焼成は悪い。

鉢 (10) 南側の墳丘中より出土した。厚手で口縁を軽く外反させ、内外面をヨコナデしている。胴部外面はナデ、内面はヘラによって削っている。全体に作りは雑である。色調は赤橙色～灰黒色。軟質である。

5) ま と め

調査の調果、本古墳は径6.7m, 高さは床面より2.4mと推定された。埋葬状況は不明である。石室床面からの土器の出土例がなく、最終追葬時は不明である。墓道より集中して出土した土器群は7世紀初頭のもと考えられる。なお墓道出土の須恵器甕の内面叩きは特殊で、同種の叩文は豊前垂水廃寺出土瓦にみられる。^註

(酒井 仁夫)

8. 第 8 号 墳

1) はじめに

占 地

5号墳の北側，9号墳の西側に接している。標高79.5mから82.5mにかかる斜面に占地している。

調 査 経 過

9月26日～10月4日 26日に墳丘中央にみられた盗掘坑内の清掃を開始する。28日には玄室のプランを確認し，主軸をもとに墳丘断面観察用のトレンチを設定する。トレンチを掘り，墳丘上の表土を除去する作業を続ける一方，石室床面の検出を計った。10月3日に全体の写真撮影を行った。翌4日玄室床面出土の唯一の土器である杯蓋が盗難に会い，紛失した。

10月5日～10月16日 墳丘断面土層図を作成して後，盛土を除去した。一方，石室の実測作業を行い，16日に終了した。

2) 墳 丘 (Fig. 32, PL. 41・42)

規 模

調査前に直径11.7m，高さ2.5mの高まりを見せていた。西の谷側に向けて墳丘が張り出し，全体的に卵形を呈していた。中央に盗掘坑があり，その状況からして，南西に開口する石室が想定された。

列 石

西から南にかけての墳丘裾に若干の礫がみられたが並んではいなかった。なお，墳丘を取り除いている間に，南西墳丘中より列石が検出された。南西側羨道の南端より始まり，5.4m伸びていた。

周 溝

9号墳との間が周溝様になり黒褐色土を堆積させているが，意識的に溝は掘っていない。

構 築 状 況 (Fig. ㉔, PL. 41-2・42-1)

北東側から南東側にかけては地山を削り，少くとも玄室が水平になるように造成している。しかし西側は表土を残して，自然地形のまま利用したと思われる。西北トレンチの土層図によれば，暗黒褐色の旧地表の上に灰褐色土を盛り，列石を配して，そこを裾としてさらに上に盛土している。列石を繞らすレベルは，玄室とほぼ同一である。南東から北東にかけての斜面との高低差を修正させた上で，全体にわたって盛土しているのである。墳丘という意味を厳密に

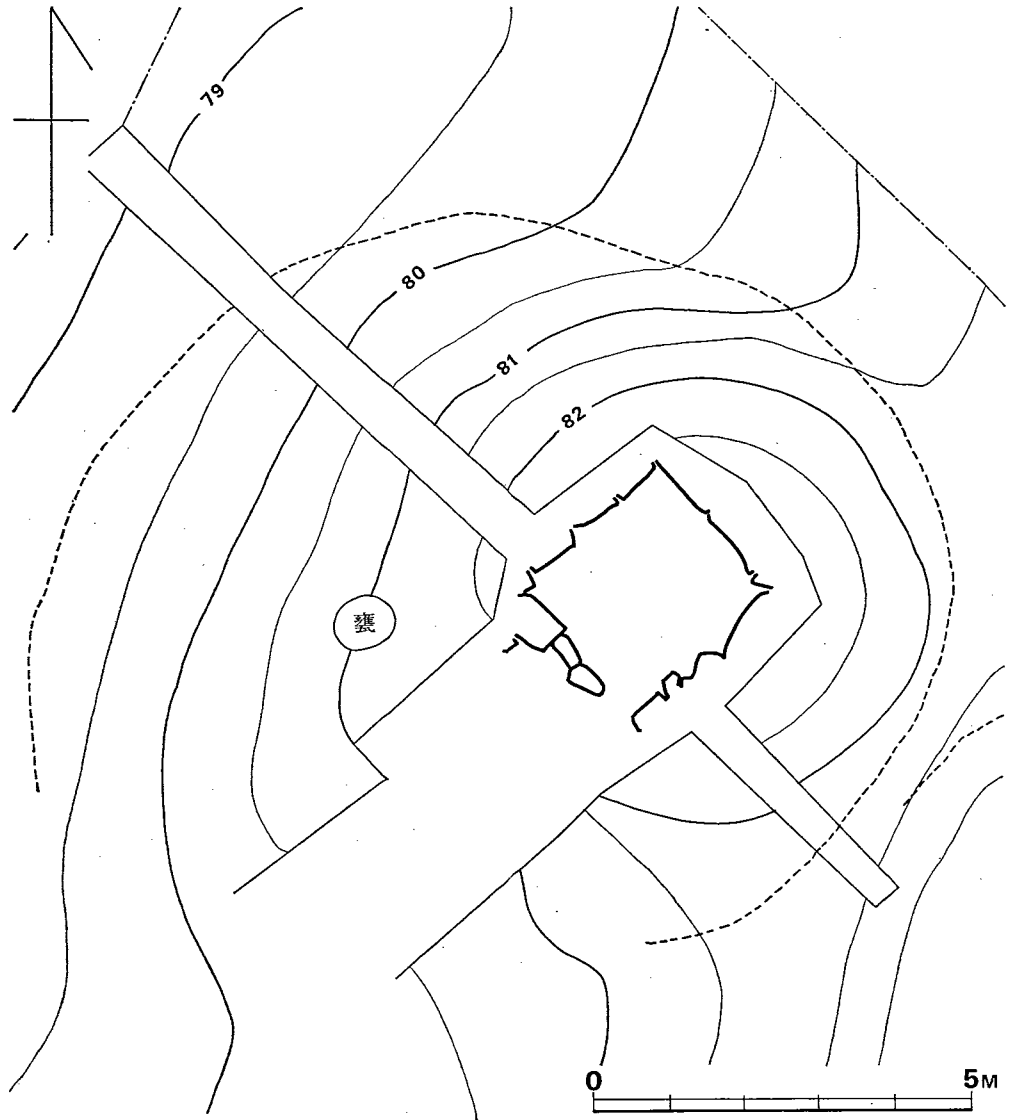


Fig. 32 王城山C 8号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

用いるならば、列石配置点より玄室寄りのみを墳土と呼ぶべきかもしれない。

土 器 列 (PL. 43-1)

列をなした土器群は検出されなかった。西南の墳丘中からは大型の須恵器甕が、南東の墳丘裾からは壺が出土した。大甕は列石と同一レベルの層上にのり、据えた状態であったが破碎されていた。

3) 石 室 (Fig. ㉓, PL. 42-2)

両袖単室の横穴式石室で、主軸をN-46°-Eに向けている。石室規模は Tab. 10 (p. 166) の通りである。石室掘り方は約3.3m四方の方形で玄室のみを囲っている。床面は玄室のみ水平であるが、柵石より羨道側は傾斜している。

玄室の規模はほぼ方形で、当古墳群中で最大である。奥壁は床面よりの高さ90cmの石を立てて中央に据え、西側に高さ50cmの石を横積みしている。さらに東側コーナーには高さ80cmの石を立てて腰石としている。幅広の玄室を無理に作った感がする。両側壁は各3個の多角形雑多な石材を用いている。床面上に数個の石がみられたが、敷石かどうか判然としない。

袖石は北西側のみ残っている。床面からの高さは約85cmである。南東側袖石は根石のみ残している。袖石間の柵石は長さ45cm大の礫2個を利用している。羨道は根石さえ判然としないほど破壊されている。列石の南端を羨道端と考えれば、羨道の長さは約4mとなる。閉塞石もまったく破壊されていた。

4) 遺 物

出 土 状 況

玄室床面から出土した須恵器は盗難に会い紛失した。東南側墳丘裾から蓋及び壺が、西南側墳丘中から甕が出土している。

出土品は以上3点の須恵器のみである。

須恵器 (Fig. 33, PL. 43-2)

蓋(2) 宝珠形つまみのつくと考えられる大形の杯蓋である。体部から天井部にかけてカキメを施している。色調は青灰色で焼成良好である。口径17.8cm。

壺(1) 口縁部は外反し、内傾しながら立上り、端部は平坦に面取りしている。内外面ヨコナデ胴部は厚手で、上半は叩の上にカキメを施し、さらにヨコナデしている。胴下半は長方形格子叩きの上にカキメを施している。内面には円心円叩がみられるが、上半のみ上からヨコナデしている。焼成悪く、淡灰色～淡黄灰色である。口径12.8cm、器高19cm。

甕(3) 広口の大型甕である。長く直線的に伸びる口縁部は3個所に沈線が施され、うち下2個所は二条の沈線、上は一条の沈線よりなる。

3個所の沈線に挟まれた二帯に平行条線及び波状紋が附されている。口縁端部は厚みを増すことなく、ヘラによって有段化されている。体部は肩が張り、やや長胴気味である。外面の格子叩も、内面の同心円文も鮮明である。口径55.4cm、器高85cm。

5) ま と め

当古墳は徹底的に破壊されており、復元するに困難を覚えるが、本来は径8.3m、高さは床

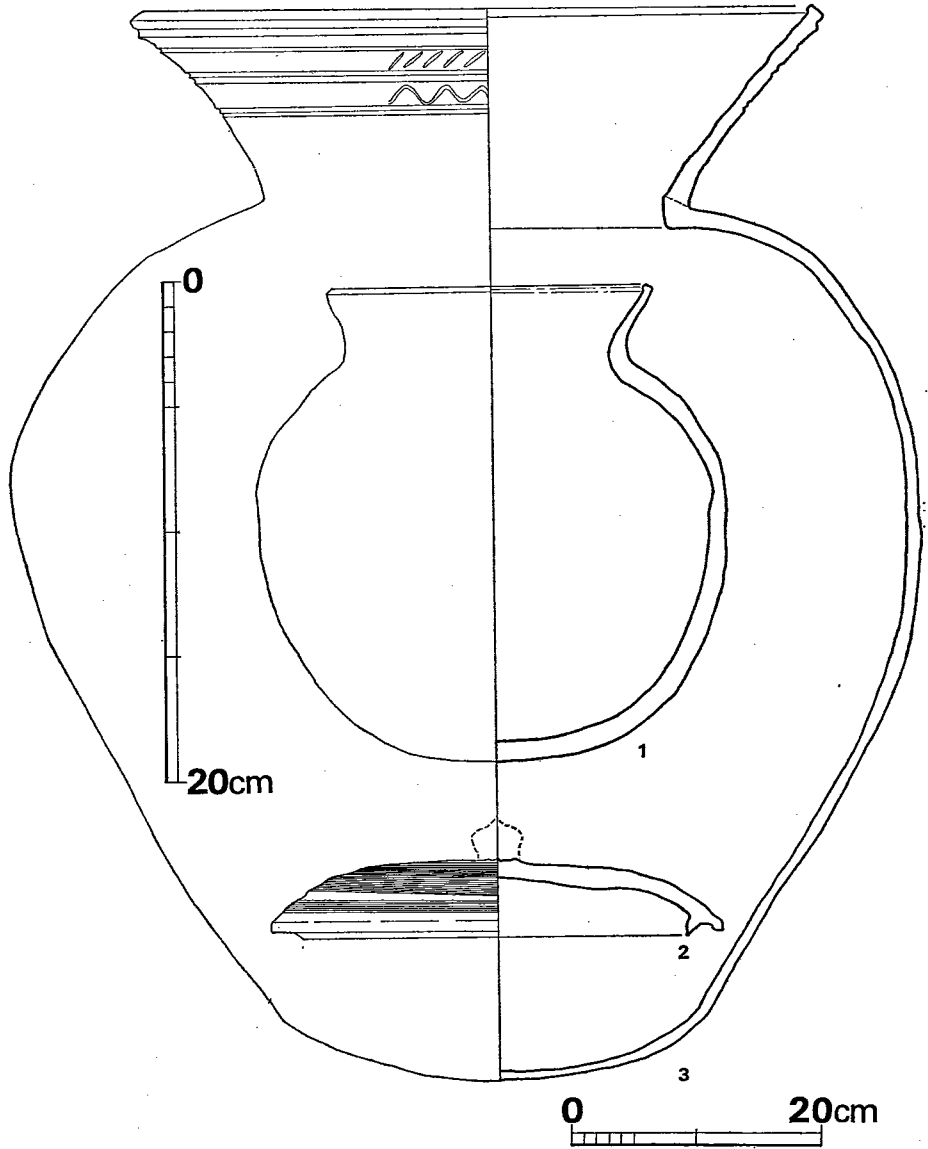


Fig. 33 王城山C 8号墳出土須恵器実測図（縮尺 1/3, 1/6）

面より1.8m以上あったと推定される。埋葬状態を復元するのも同様に困難である。

床面出土の唯一の土器である杯蓋は盗掘に会い、図示できなかったが、小田富士雄氏のいうVI-Aの須恵器であった。その土器の示す年代が、当古墳追葬の終末かと考えられる。墳丘中出土の甕から考慮して、当古墳の築造は7世紀初頭ではなかろうか。（酒井 仁夫）

9. 第 9 号 墳

1) はじめに

占 地

8号墳と10号墳の中間に位置し、6号墳の北側に接している。標高82mから85mにかけての斜面に占地している。

調 査 経 過

9月23日 調査前に破壊され、すでに石室石材が法面に露出していたので、まず法面を削り、土層を観察する。その結果、床面と石材の関係が把握できたので、主体部の検出を計る。

9月24日～26日 破壊された部分が玄室であると判断され、追って羨道部、墓道へと掘り進める。羨道の両側石間には上より黄色土、次いで黒褐色土が堆積しており、地山の上、灰褐色土を床面としていた。羨道の東脇からは蓋杯4セットがまとまって出土し、西南脇からは須恵器壺が検出された。

9月27日～10月2日 墳丘検出作業及び、石室清掃を終え、全体写真を撮影する。

10月3日 本日より福岡教育大生が調査に参加する。直ちに当古墳石室の実測作業を開始する。

10月4日～5日 北から東にかけての墳丘が全て破壊されているため、北西トレンチのみを設定し掘下げ、墳丘の盛土状況を観察する。

10月6日～10月14日 土層及び石室の実測作業を終え、当古墳の調査を終了する。

2) 墳 丘 (Fig. 34, PL. 44)

規 模

調査前に直径13m、高さ2.5mの高まりを見せていた。墳丘の東半はまったく破壊されており、石室用材がすでに露出していた。

列石 (Fig. ④, PL. 44)

南東側墓道端から東に向かって真直ぐの列石が検出された。小礫を積み重ねて石垣状を呈しており、長さ3.9m伸びていた。西側の下段は6号墳北側墳丘と同様に黄褐色土層上に築かれていた。土層で見える限り、石垣と6号墳との前後関係は把握できない。ただし、この石垣が9号墳築造当初のものかどうかは疑わしい。むしろ当初墳丘が崩壊したので、後に補修した石垣と考えられる。

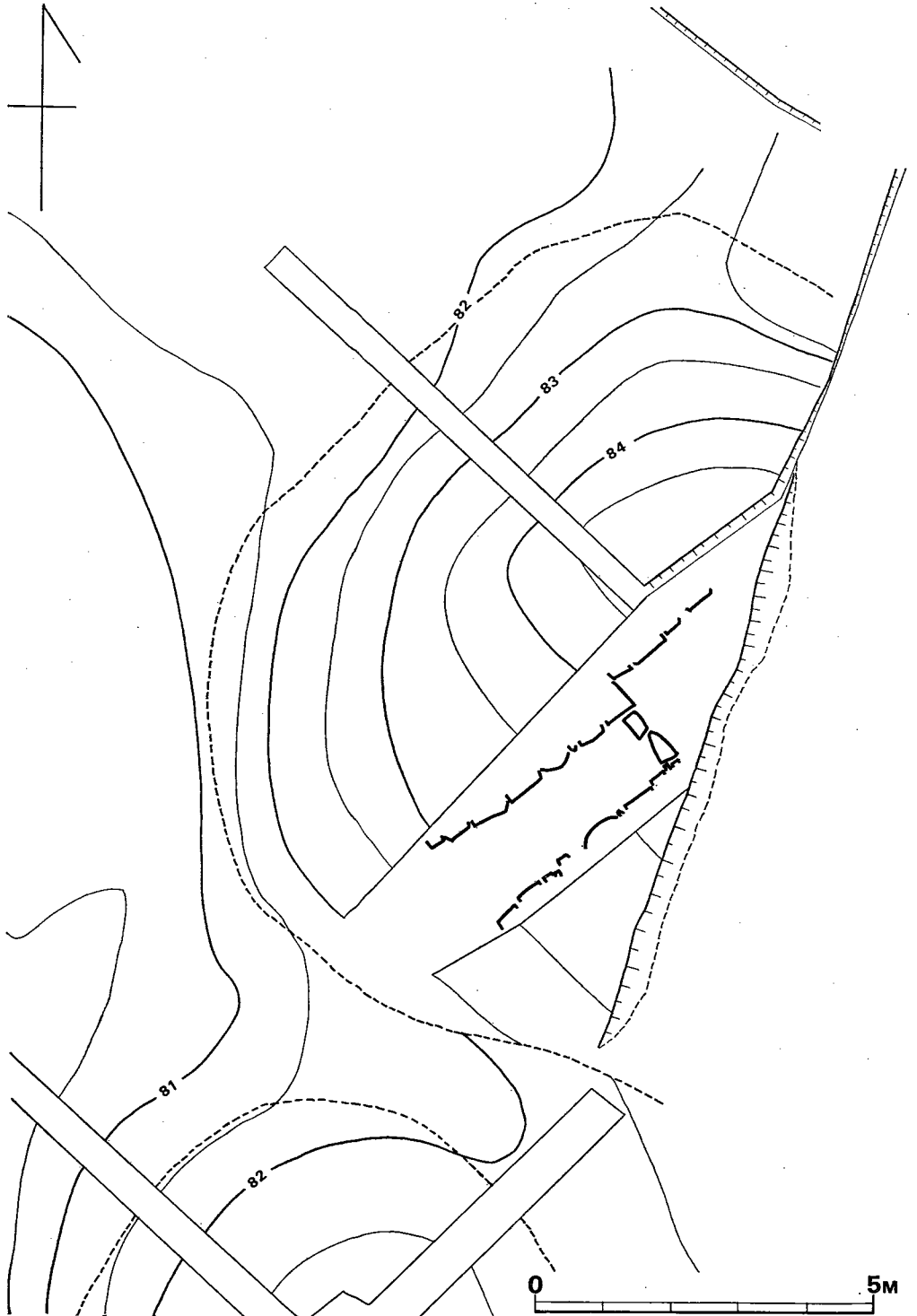


Fig. 34 王城山C 9号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

周 溝

東北の谷側しか墳丘が残っていなかったため、周溝の存否は確認できなかった。ただし、8号墳との間に黒褐色土を堆積しており、8号墳周溝を共有していた。

構 築 状 況 (PL. 44-2)

北西側は地山整形を行わず、直接上に盛上したように見受けられる。墓墳掘り込みもなく、玄室床面が平坦になる程度の整形である。

3) 石 室 (Fig. 24)

両袖単室の横穴式石室で、主軸を N-51°-E に向けている。石室規模は Tab. 10 (p. 166) の通りである。玄室は北西壁のみ残り、3個の石を立てて腰石としている。

袖石は南東側で床面からの高さ約1mの石材を利用しているのに対し、北西側では60cm弱の小振りの石材である。袖石間の柵石は2個の枕状石を利用している。羨道は5m伸びているが、腰石として立てている用材は袖石側2石のみで、天井石が架構されたのも、その付近までであろう。羨道の南西端は特に破壊が著しく、根石のみ残している。南西側の羨道先端から墓道が伸びるが、その肩に数個の石を据えている。

羨道の間間に角礫が散在していた。閉塞石の残骸と思われる。

4) 遺 物

出 土 状 況 (PL. 45)

玄室から蓋と杯身が出土した。玄室を破壊した際のブルドーザー排土中から紡錘車が採集された。玄室床面に置かれていた遺物ではなかろうか。南東側羨道の端から蓋杯が4セットまわって出土した。また南西側墓道の肩部より壺が出土した。南西側墳丘中より甕が破碎された状況で出土した。

出土遺物を列記すると、次の通りである。

- | | | |
|--------|--------|------|
| (1) 石器 | 紡錘車 | 2個 |
| (2) 土器 | 須恵器 | 14個体 |
| | 杯(蓋・身) | 11個体 |
| | 特殊蓋 | 1個体 |
| | 壺 | 1個体 |
| | 甕 | 1個体 |
| | 土師器 | 1個体 |
| | 甕 | 1個体 |

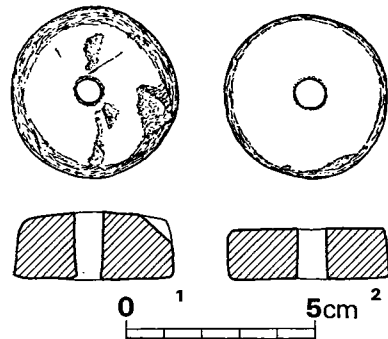


Fig. 35 王城山C 9号墳出土紡錘車実測図 (縮尺1/2)

紡錘車 (Fig. 35, PL. 46-1) 滑石製である。1 は上下両面とも若干のふくらみをもつ。径 4.5cm, 厚さ 1.8cm。2 は断面長方形で, 両面に製作時の削痕が目立つ。径 4.4cm, 厚さ 1.9cm。

須恵器 (Fig. 36・37, PL. 46-2・47)

杯蓋 (1~4, 6) 1~4 は羨道脇から身 (8~11) とセットになって出土した。口径 11.4~11.6cm, 器高 3.8~4cm。丸い天井部はヘラ切り離し後, 未調整である。体部と口縁部の

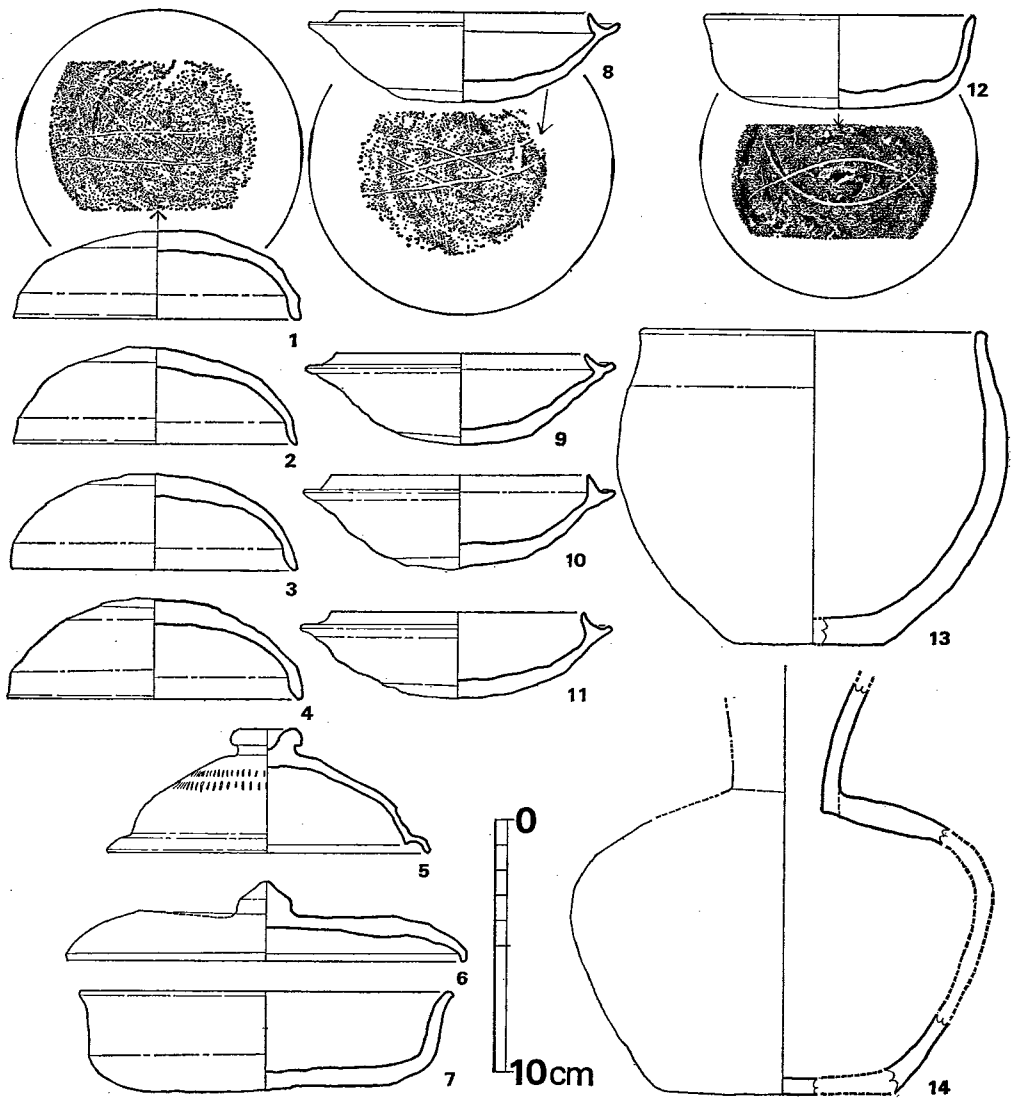


Fig. 36 王城山C 9号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺 1/3)

境に稜をもち、口縁内側は僅かに肥厚する。暗赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。6は玄室床面から出土した。大きな乳頭状のつまみをもち、平坦な天井部から丸い体部へ移る境に稜をもち、身受けの折り返しは小さいが直角に立つ。口縁内外面のヨコナデは丁寧だが他の調整は粗い。

色調は灰黒色～暗橙色である。口径15.7cm。

杯身(7~12) 7は玄室床面より出土した。6の蓋とセットになろう。平坦な底部から外彎気味に立上り、口縁部で強く開く。端部は丸い。底部はヘラ切り後、丁寧にナデている。色調は灰色で堅緻である。口径14.8cm, 器高4.0cm, 8~11は一括出土である。口径12.3cm, 器高3.4~3.8cm。底部はヘラ切り離した後未調整で他はナデ、ヨコナデしている。暗赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。12は南側の石垣状列石の下層、赤褐色土層中より出土した。平坦な底部から直線的に立上り、口縁部で軽く外反する。色調は暗黄褐色で、焼成は悪い。口径10.8cm, 器高3.7cm。

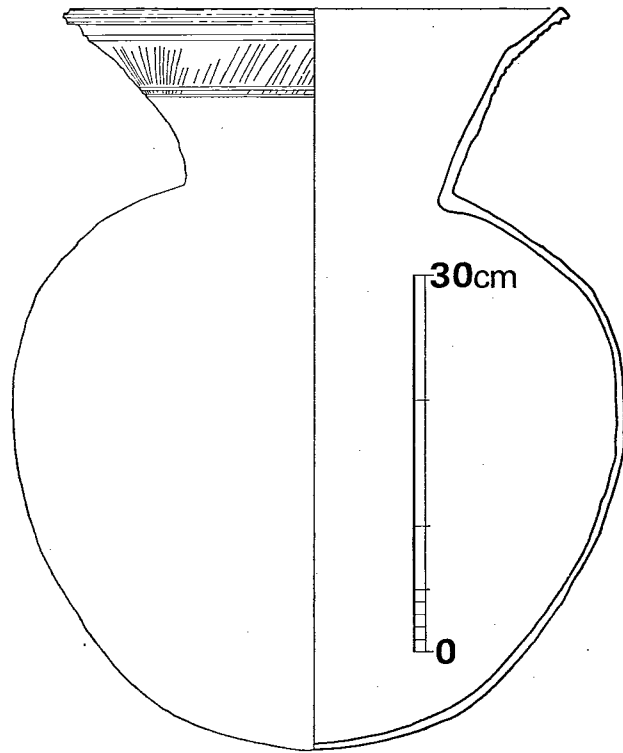


Fig. 37 王城山C 9号墳出土須恵器実測図(縮尺1/6)

特殊蓋(5) 玄室床面より出土した。全体に作りは薄手である。折り返して作られた頭部のつまみは厚く大きい。肩部に不鮮明だが細いヘラ先による二段の列点がみられる。身の受け部は屈折し、つくりは華奢である。外面のほとんどに灰黄色の自然釉が付着している。色調は内面明灰色、外面暗灰色で胎土、焼成とも良好である。口径12.7cm, 器高4.9cm, 新羅焼であろう。

壺(14) 底部は平坦で、やや肩が張る。頸部と体部にカキメを施している。色調は暗赤褐色で、胎土、焼成共に良好である。

甕(Fig. 37) 体部の割に大きな口縁をもち、頸部にヘラ描き平行条線を刻み、上下を

沈線で画している。胴部は球形で、器厚は均一である。色調は灰黒色で、極めて堅い焼成である。なお破片の一部は6号墳北側周溝中や4号墳西側周溝中より出土した。口径40.6cm, 器高59.2cm。

土師器 (Fig. 36-13, PL. 47)

甕 (13) 北側の墳丘裾下より出土した。内傾する短い口縁部は端部でやや立ち上る。全体をナデで仕上げている。赤黄褐色を呈する。口径14cm, 器高12.4cm。

5) ま と め

墳丘の東半がまったく失われており、墳丘原形を復元することはできなかった。

床面出土の蓋杯は追葬最終期を決するであろう。また共伴して出土した新羅焼の時期も決められる。羨道で出土した蓋杯は玄室出土品より古い形態をしており、追葬の際に取り片付けられたものであろう。列石の項でも触れたように、追葬の際に墳丘を改修したと考えられる。列石下出土の杯 (Fig. 36-12) が玄室出土杯と羨道出土杯の中間に位置付けられることも、上の推察を首肯させる。当古墳は7世紀初頭に築造され、7世紀後半まで使用されたと考えられる。

(酒井 仁夫)

10. 第 10 号 墳

1) はじめに

占 地

7号墳の北側，9号墳の東側に隣接して墳裾を構えており，標高85m～87mに占地する。

調 査 経 過

10月27日 本日より発掘調査を開始する。樹木を伐採して墳丘の写真撮影を行う。

10月28日～30日 盗掘墳の清掃と内部主体を追求する。玄室内床面は盗掘のため敷石は大半を取り除かれていたが，幸いな事に玄室左側の玄門寄りの位置で最終追葬時のものと思われる土器を8個検出した。

10月31日～11月1日 遺物の出土状況の写真撮影と遺物実測を行う。実測後，遺物を取りあげる。石室内を引きつづき発掘し，羨道について墓道を検出する。羨道の閉塞は玄門近くから1.5mの範囲に及ぶ。

11月2日～3日 北，東，西トレンチを設定して盛土の調査を行う。

11月5日～7日 トレンチ掘りと表土剥ぎ作業を行う。7日からは北，東側トレンチの土層断面を作製する。

11月8日 表土剥ぎ作業を終り，石室内も清掃して写真撮影を行う。割りつけをして，実測を開始する。

11月9日 表土を除去した墳丘の地形測量を縮尺1/50で行う。

11月10日～13日 石室の実測を続行する。閉塞石は図面をとりながら除去して行く。

11月14日～15日 盛り土を除去して，掘り方の追求と地山の整形法を調べる。墳丘西側では盛土中の列石が検出される。

11月16日～17日 掘り方を検出し，写真撮影を行う。墳丘内南側の地山直上から土師器の杯を検出する。

11月18日 西側列石の実測を行い，本日で調査を終了する。

2) 墳 丘 (Fig. 38, PL. 48-1)

規 模

調査前の規模は南北8.5m，東西7.5mの円墳であり，高さは2mである。頂部には大きな盗掘墳が所在しており，その形状から南西に開口する石室が予想された。

列石 (Fig. 25, PL. 48-1)

石室の西側半分を一重の列石が囲繞する。この位置は石室中央部から約1.7mである。盛り

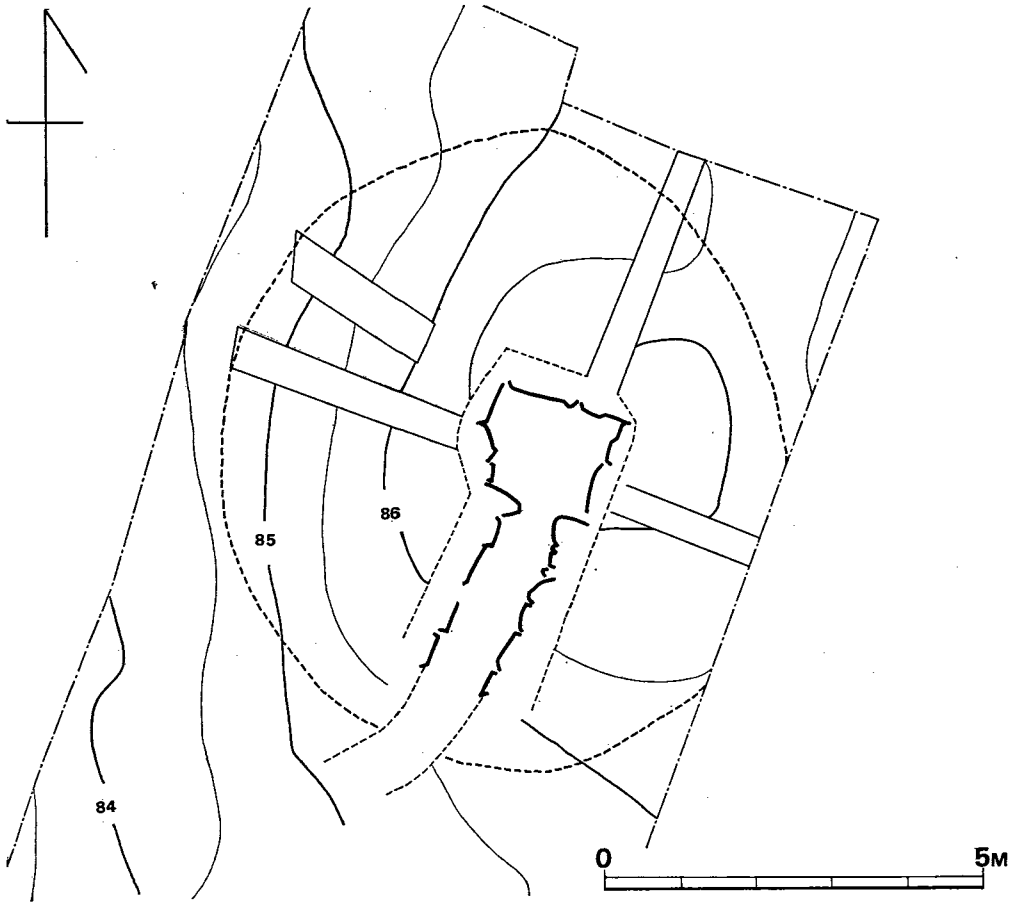


Fig. 38 王城山C10号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

土の最上層部にその基底を置く。石材は30cm~50cm大であり、縦長に一段だけ並べている。

周 溝

斜面に石室を構築しており、地形は東から西へ傾斜している。従って、墳丘西側の低所には周溝を造っておらず、東側の高所には、周溝が認められた。しかし、発掘区域外であるため、その全容はわからない。奥壁側、即ち北方では上端部幅1m、深さ25cmの黒色土層の落ち込みが見られ、周溝が存在した。従って周溝は高所のみが存在する。

構築状況 (Fig. 26, PL. 48-1)

斜面部に墓壙を掘りぬいて、石室を構築しているため、墓壙の西側と東側では90cmの高低差がある。東側の高所部は地山を削って平坦にしており、この範囲は墓壙の端部から1.7mである。墳丘の裾部もここに位置する。盛土は石室の構築と同時に進行されており、内方から外方へ

とほぼ水平に4層に土盛りされる。低所の西側部の盛土基底地山面は傾斜しており、盛土も傾斜にそった土盛りを行う。三次にわけて盛土しており、最上部の黄褐色土層には角礫を使った列石が途中に置かれる。北側も地山上に四次にわたった盛り土を行っている。

土 器 列

墳丘中からは土器は検出されなかった。

3) 石 室 (Fig. 27, PL. 48-1)

単室の横穴式石室であり、主軸は N-21°-W で、ほぼ南南東方向に開口する。石室規模は Tab. 10(p.166) の通りである。

玄室はほぼ正方形に近い平面形である。奥壁は長さ1mと0.5m大の石材2個が腰石となるが、2段目からは石材が存在していないので不明である。現高は床面から70cmしか残存していない。腰石を置く際に石材の幅だけ墓壙をさらに掘り下げている。左右両壁には右側が2個、左側は大、小3個の石材を用いて腰石としている。50cm~60cm大の石材を横長に使用する。左側側壁は、内側へ入り込み、奥壁と比してその幅を減ずる。側壁も奥壁と同様、石材をすえる部分だけ、地山を掘り下げる。床面には盗掘からまぬがれた敷石が若干残存しており、本来玄室に敷石が施されていた事がわかる。

袖石は左側壁から50cm、右側壁から40cmほど突出させている。床面からの高さは左袖は75cm、右袖は60cmである。袖石間の梱石は40cm大の大石1個と積めに小石を1個使用している。厚さは20cmである。

羨道には、玄室の腰石に用いたのと同じ規模の石材を縦積み、もしくは横積みにしており、その上方に数段積む構造である。残存部の最高値は80cmを測る。羨道床面は玄室床面と同一レベルで水平であるが、入口から80cmの位置は墓道部へと下降する。羨道の石材を置く場合は、玄室内の腰石を置く方法とは異なって、地山面に据えるだけであり、地山をさらに掘り下げる事はしない。

墓道は1.8mほど確認されており、先端部は西側へ、即ち斜面低方へ曲がる。

閉塞は、羨道部から80cm程入った所に始まり、梱石近くまで及ぶ。20cm~30cm大の角礫で閉塞する。下方部には、大き目の石材を置き、これを要として前面、上方、後部に積石する。閉塞の高さは、床面から65cm程である。

4) 出 土 遺 物

出 土 状 況 (PL. 48-2)

盗掘からまぬがれた土器が玄室内からまとめて7個体出土しているが、いずれも追葬時のものであり、敷石からは10cm上方に位置する。器種は須恵器の蓋杯2、杯身1、平瓶1と土師

器の甕 1, 鉢 1 である。閉塞石の前面からは須恵器の高杯 1, 蓋杯 1, 杯身 1 が検出された。

出土遺物はつぎの通りである。

土 器	須恵器	8 個体
	杯 蓋	3 個体
	杯 身	3 個体
	高 杯	1 個体
	平 瓶	1 個体
	土師器	2 個体
	甕	1 個体
	鉢	1 個体

須恵器 (Fig. 39, PL. 49)

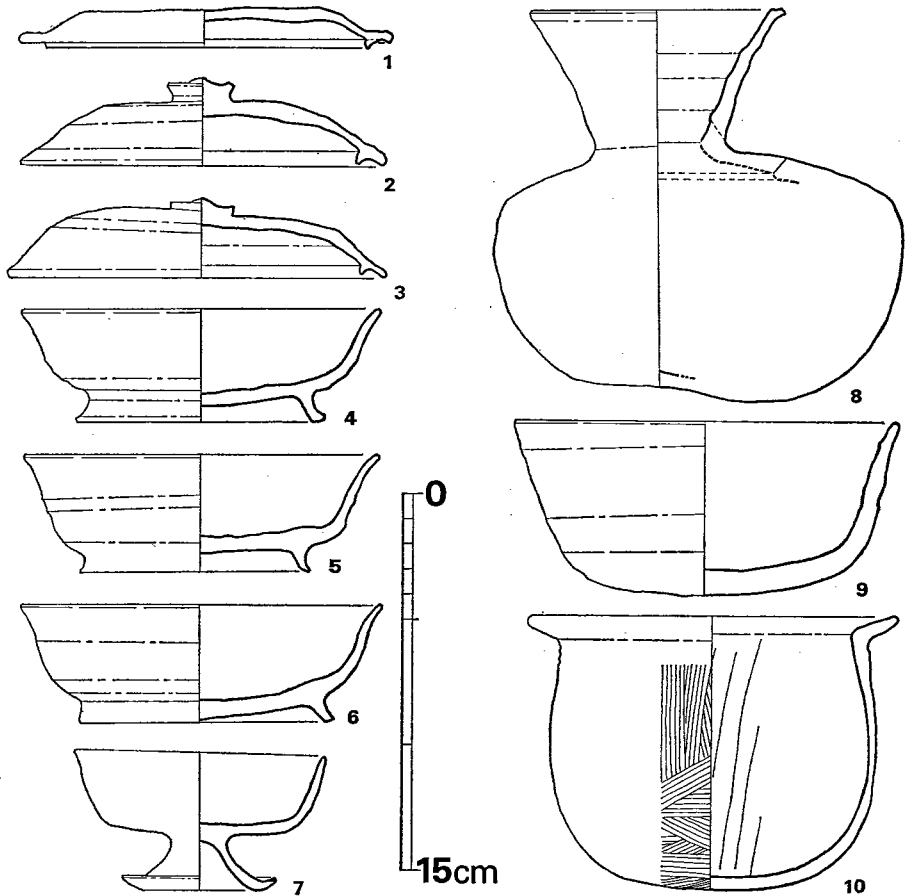


Fig. 39 王城山C10号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺 1/3)

杯蓋(1~3) つまみの有無によりI, II類に2分類する。

I類(1) 蓋には身受けのかえりのつく形態である。かえりは短い、端部は口縁部水平面より外方へ出る。天井部は扁平であり、器高は1.5cmと低い。灰黒色を呈しており、焼成はやや不良である。胎土は良好である。玄室床面からの出土である。

II類(2・3) 擬宝珠形のつまみを有する。ともに身受けの短いかえりがつく。2は玄室内からの出土品である。口縁端部は肥厚している。調整法は、天井部内面のみナデを施しているが、そのほかは全て横ナデ調整である。径は14.5cm、高さは3.5cmを測る。暗灰橙色であり、焼成はやや不良である。胎土には砂粒を多く含む。3は閉塞石前面からの出土品である。2と同じく、身受けのかえりを有する。かえりは短く、口縁部水平面より内側にある。口縁部はひきのばされていて長い。天井部と体部の境からわずかに口縁部よりの所のみへら削りを施す。頂部内面はナデであり、以外は横ナデ調整を施すが調整は粗雑である。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多くの砂粒を含む。径15.2cm、器高3.2cmである。

杯身(4~6) 貼り付け高台を有する形態である。高台はやや長く、底面は平坦で水平なものと、外端部が立ち内傾するものと2種類があるが時期差はない。杯部の口縁部はわずかに外彎しており、端部は丸くつくられている。5は閉塞前面から、6は玄室床面から出土している。調整法は底部内外面をナデしており、以外は横ナデ調整である。口径は14.2cm~14.4cm、器高は4.5cm~4.7cmである。色調はともに明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好である。

高坏(7) 玄室床面と閉塞上面部の出土品が接合された。脚端部は上方へ突き出している。口径は10cm、脚裾径6.2cm、器高5.5cmを測る。調整法は杯部の体部以上は内外面とも横ナデをし、以外はナデを施す。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。

平瓶(8) 口頸部は大きく外反する。器壁は横ナデの際の凹凸が著しい。口縁部上面はわずかにくぼませている。胴部は全体に丸味を帯びている。玄室床面から出土している。口縁部は楕円形を呈しており、長径11.6cm、短径9.6cmである。色調は灰色を呈するが上半部は自然釉の付着により黒色を呈する。胎土には多量の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

土師器 (Fig. 39, PL. 49)

鉢(9) 玄室内よりの出土である。口縁部はやや外反する。器壁は全体に厚手造りである。底部は内外面ともナデ調整をし、体部以上は横ナデ調整を施す。口径16.1cm、器高7cmである。焼成は不良である。

壺(10) 口縁部は「く」字となり、端部は丸くつくられている。胴部最大径は中央部にあり、底部は丸底となる。内面はへら削りを施しており、外面は胴部中程以上は縦方向の刷毛目が入り、以下は横方向の刷毛目が入る。明橙色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。口径14.8cm、器高11cm。

5) ま と め

調査の結果、本墳は長径 8.2m、短径 7.4m の円墳であり、現存墳丘の高さは床面から 1.6m は下らないものと推定された。墳丘の西側半分には一重の列石が墳丘途中に圍繞していた。遺物は玄室内と羨道部前面から出土している。羨道部のもは閉塞石前面から出土しており、追葬の際のかき出しによるものと思われるが、玄室内の出土品との時期差は殆どなく同時期のものと思われる。墓道の先端部は斜面の低方に向って開いている。石室の構造と出土遺物から当古墳は 7 世紀の中葉から後半の項まで使用されたものと思われる。 (酒井 仁夫)

11. 第 11 号 墳

1) はじめに

占 地

調査範囲内の北西端に位置する。標高73mから75mにかけての斜面に占地する。

調 査 経 過

10月11日 調査開始する。墳丘上の伐採作業を行い盗掘坑内の土砂を取り除く。

10月12日～17日 石室を玄室，羨道共に検出する。石室主軸をもとに3本のトレンチを設定する。

10月18日～10月22日 墳丘上の表土剥ぎ及びトレンチ掘削作業を実施する。墳丘裾には黒色土が厚く堆積し、多くの土器片を含んでいた。

10月23日～10月27日 墳丘面を露出させ、裾部の堆積土を取り除く。墳丘裾の北側から東側にかけては列石が囲繞していた。27日には全体の写真撮影を行う。

10月28日～11月15日 石室及び墳丘の実測作業を行い、15日には全ての作業を終了した。

2) 墳 丘 (Fig. 40, PL. 50)

規 模

調査前に直径9m、高さ1.75mの高まりを見せていた。中央に盗掘坑があり、その状況からして南西に開口する石室が想定された。

列 石 (Fig. ㊸, PL. 50-2)

羨道に近い部分を除き、馬蹄形に石室を取り巻いている。場所によっては3段石を積んでいる。この列石は墳丘裾を繞るものではなく、盛土途中で積まれたものである。

周 溝

意識的に溝を繞らしてはおらないが、平坦にした地山整形面と墳丘盛土間が周溝様をなし、黒色土が中に堆積していた。

構 築 状 況 (Fig. ㊸, PL. 50-2)

地山整形後、墓壙を掘り石室腰石を据えている。石材の裏込めをして後墳丘造成範囲に黄褐色土を盛り上げている。北西の谷側ではその盛土裾に若干の石を配置している。黄褐色の盛土上に馬蹄形に列石を繞らし、その上にさらに盛土して石室を被っている。墳丘中からは多くの完形土器が出土した。特に大甕や杯は列石と同レベルの出土が多い。一定の盛土が終了した段階で祭礼を行った可能性がある。

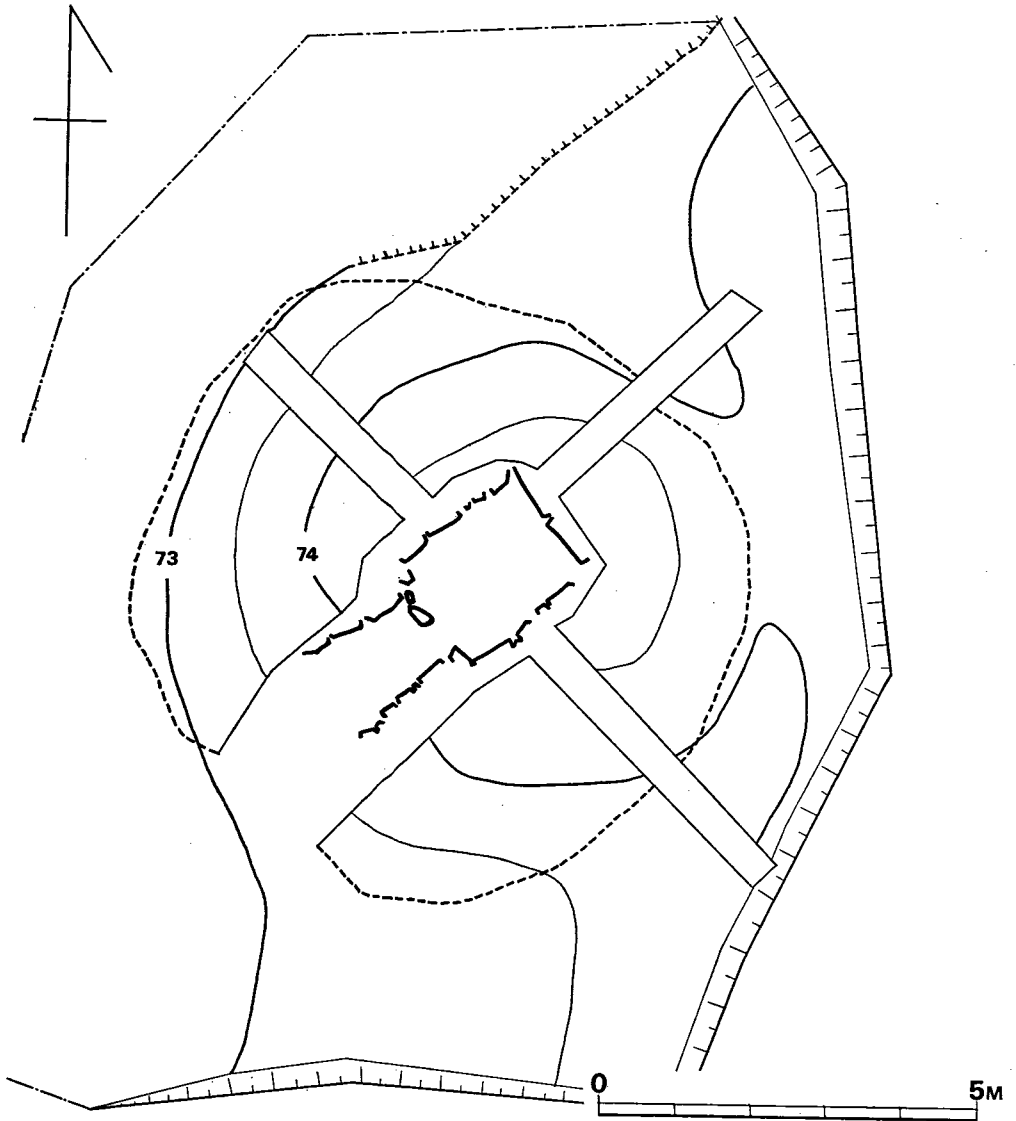


Fig. 40 王城山C11号墳墳丘測量図 (縮尺 1/600)

3) 石 室 (Fig. ㉔, PL. 50-2)

両袖単室の横穴式石室で、主軸を $N-45^{\circ}-E$ に向けている。石室規模は Tab. 10 (p. 166) の通りである。石室掘り方は王城山C古墳群としては珍らしく石室全体を被っており、山側で 50cm 、谷側で 30cm 前後地山を掘り込んでいる。床面も羨道部まで平坦である。地形の傾斜がもともと急でなかったせいでもある。

玄室用材は各壁共床面下への埋め込みが浅く、辛うじて根石や裏込め石で支えている程度である。奥壁2個、両側壁3個の用材を立てて腰石としている。用材の形は当古墳群としては整っている方である。

袖石は盗掘時の影響が大きく、北東側は玄室側に倒れ込み、北西側は根石のみ落して抜き去られている。袖石間の梱石は枕状の石を3個も用いている。羨道は梱石より1.6mまでの腰石を残しているが、それから先、本来はもっと長かったと考えられるが、盗掘によって詳細は不明である。

閉塞石はその基礎部のみ羨道中に残っていた。20~40cm大の石を横積みしている。

4) 遺物 (Fig. 41~43, PL. 51~54)

出土状況

石室床面からの出土遺物は皆無である。しかし墳丘中及び北東から南東にかけての山側周溝中からは多量の須恵器及び紡錘車が出土した。墳丘中出土須恵器の破片が周溝中から発見された例も多々あり、本来置かれていた場所を示す好例といえる。

出土遺物を列記すると、次の通りである。

(1) 石器	紡錘車	1個
(2) 土器	須恵器	23個体以上
	杯(蓋身)	11個体
	高杯蓋	1個体
	高杯	1個体
	碗	2個体
	埴	1個体
	壺	3個体
	平瓶	2個体
	横瓶	1個体
	甕	2個体

紡錘車 (Fig. 41, PL. 51-1) 東側の周溝中から出土した。滑石製品である。両面共若干ふくらみを持ち、断面梯形である。底径4.2cm、上端径3.4cm、厚さ1.4cmである。

須恵器 (Fig. 42・43, PL. 51-2~54)

杯蓋(1・3~8) 器高3.6cmのもの(1)、器高2~2.2cmのもの(3~5)と、つまみのつくもの(6~8)の3種がある。1は周溝から出土した。天井部は切り離した後ヘラで粗くナデている。口縁の端部は

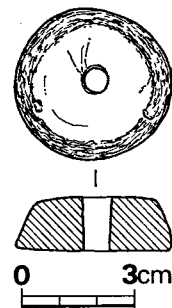


Fig. 41 王城山C11号墳出土紡錘車実測図(縮尺1/2)

11. 第 11 号 墳

85

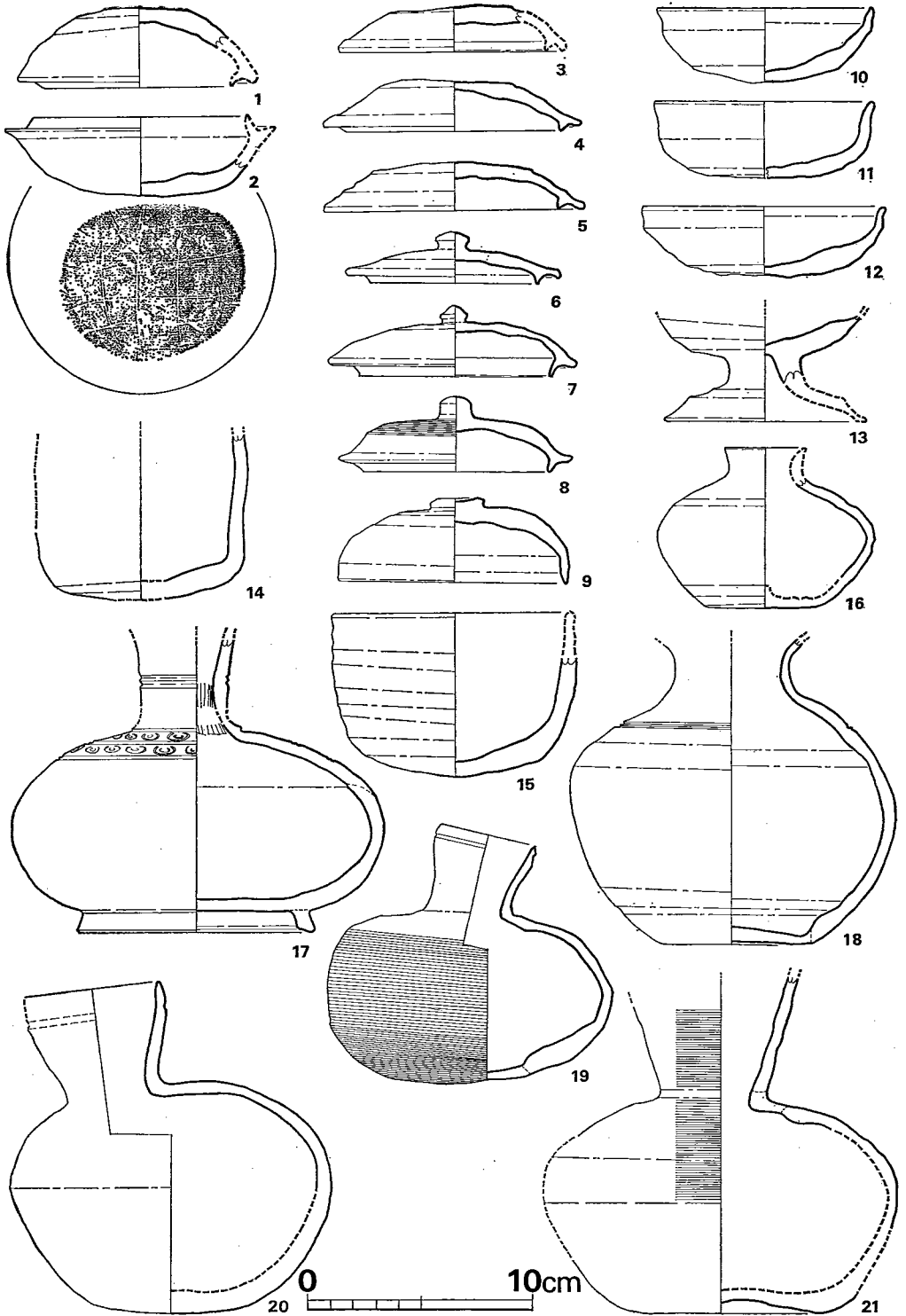


Fig. 42 王城山C11号墳出土須惠器実測図 (縮尺 1/3)

分厚く丸い。淡赤橙色で毀弱である。6～8は墳丘中より出土した。天井部のナデ調査は粗い。口縁端部は丸味を持ち、身受けのかえりは短く断面三角形である。色調は灰色～黒色で、焼成は堅緻である。6～8は周溝中より出土した。6・7は疑宝珠形つまみをもち、天井部の調整は粗い。6の口径9.5cm, 7の口径11cmである。色調は灰黒色で焼成はよい。8は乳頭状つまみを持ち、天井部から肩部にかけてカキメを施している。色調は灰色～灰黒色で、焼成はやや悪い。口径10.3cm。

杯身(2・10～12) 蓋受けのたちあがりのあるもの(2)とないもの(10～12)がある。2は周溝中より出土した。天井部を粗くナデしており、その上に格子目ヘラ記号を付している。口径12cm, 器高3.6cm, 色調は灰色で、堅緻である。10は墳丘中から出土した。体部と直立する口縁部との境に稜をもち、調整は雑である。灰色を呈し、焼成不良。口径9.8cm, 器高3.3cm, 11・12は周溝中より出土した。外反する口縁の端部は丸味をもち、作りや調整は全体に粗雑である。11は口径9.9cm, 器高3.4cm。12は口径11cm, 器高3.2cmである。

高杯蓋(9) 周溝中から出土した。偏平なボタン状つまみをもち、体部から口縁部にかけてのヨコナデは粗い。暗橙色を呈し、堅緻である。口径10.1cm, 天井部までの器高は3.5cmである。

高杯(13) 墳丘から出土した。杯部底は分厚く、体部に移行する位置から急に薄くなっている。脚部は裾が2段になり、端部に平坦面をもつ。暗赤橙色～灰色を呈し、堅緻である。脚裾径9.0cm。

碗(14・15) 14は周溝から出土した。丸味をもつ底部は不定方向ナデ調整しており、他はヨコナデである。色調は暗灰色で、胎土、焼成共に良好。15も周溝より出土した略完影品である。体部はヨコナデしているが凹凸が多い。口縁部は直立し、端部は丸い。灰黒色を呈し、胎土、焼成共良好である。口径10.6cm, 器高7.4cmである。

埴(16) 周溝中より出土した。平底で、短く外反する口縁と玉葱形胴部をもつ。底部ヘラ削りで、他をヨコナデしている。色調は灰色で胎土精良である。口径9.6cm, 器高7.2cm。

壺(17・18・21) いずれも周溝中から出土した。17は長く直立する頸部に二条の沈線を施している。内面にシボリ痕がみられる。偏球状の胴部はやや歪んでおり、肩の三条沈線間に同心扶状円文を配している。高台の両端は鋭くヘラで削って面取りしている。頸部の色調は明灰色である。胴部は内面が明灰色、外面は灰色から灰黒色を呈し、肩には灰緑色の自然釉がかかっている。底部外面は漆黒色である。胎土中には砂粒少なく精製されている。同様の器種は第5号墳の他、細片が13号墳の墳丘西南裾及び6号墳北側周溝中より出土している。18は広口壺でなだらかな肩部に二条沈線を施している。焼成は良いが、底部のみ不良で灰白色を呈している。21の頸部は直線的に開き、玉葱形胴部に付されているが、その接合法は平瓶の製法と似ており、胴部片側にやや偏している。頸部から肩にかけてカキ目を施している。暗赤褐色気味

で、焼成はやや不良である。

平瓶 (19・20) いずれも周溝より出土した。19は口縁に一条のヘラによる沈線を繞らし、その下を若干ヘラで削っている。肩部はカキ目の上をヨコナデしている。胴部は歪が大きい。頸部から胴部にかけては灰色、胴下半部は漆黒色を呈している。胎土中砂粒が目立つが、焼成は堅緻である。20はやや平坦に近い底部をもつ。口縁から肩にかけてヨコナデ、胴から底部はナデ調整している。青灰色を呈し、やや毀弱である。

横瓶 (Fig. 43-3) 周溝中及び墳丘中から出土した。外反する頸部は短く、口縁部の作りは単純である。胴部の器厚はほぼ均一である。図上左側の塞孔の径は9.8cm、左側のそれは7.1cmである。色調は暗灰緑色～灰黒色で、焼成は堅緻である。

甕 (1・2) 墳丘中より出土した。1の破片は8号墳羨道部東側の黒土層中からも出土して

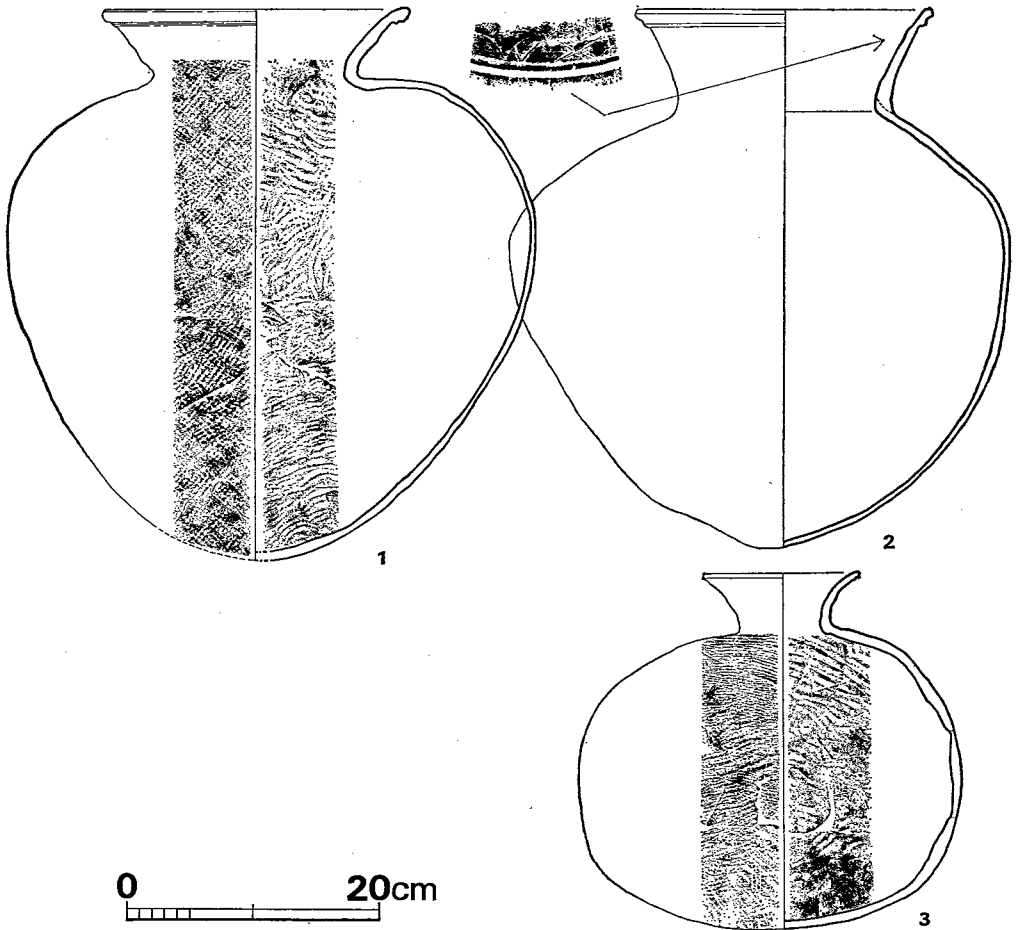


Fig. 43 王城山C11号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/6)

いる。1の頸部は短く、肩が張っている。器壁はよく調整され、均質である。底部は焼成後穿孔されている。口径24.4cm、器高約44cm。2は口縁部を僅か肥厚させ、ナデ調整後、端部をやや窪ませている。器壁は均一で薄い。全体に黒色～灰黒色をし、肩部は灰色、底部は暗橙色を呈する。やや焼歪みしている。口径23.8cm、器高43.2cm。

5) ま と め

墳丘中出土の須恵器は列石を繞らした時点での埋納物であり、当古墳築造の時期を示している。
(酒井 仁夫)

12. 第 12 号 墳

1) はじめに

本古墳は、乙金山の北西中腹斜面に営まれた古墳群中の一つで、第15号墳の西6.5mのところに位置している。発掘前は篠や雑木におおわれており、墳丘中央部は既に盗掘や石取りをされ、楕円形に著しく陥没していた。また、墳丘の南側は、林道により墳裾が幾分削り取られていた。本古墳の現状での規模は、南北径9.5m、東西径11m、高さ1.5mほどで、形状は円墳である。

調査経過

発掘調査は昭和45年12月12日より24日まで行われた。

調査はまず墳丘の外形実測から始め、その後主体部を探すため墳丘中央部のくぼんだところの土砂を排除した。主体部が横穴式石室であるということが判明してから、左壁、右壁、奥壁にそれぞれ直交するように各壁の後方にトレンチA・B・Cを設定し、墳丘の構築状態を調査した。その際、墳丘の中腹に一部土師器甕が圍繞していることが判明したため、その連続を追って、羨道とAトレンチの間にEトレンチを設定し、合わせて自然地形の傾斜状況を検討した。さらに土師器の全面的圍繞を想定して、墳丘中腹よりやや上部から墳裾にかけて、ほぼ全面的に表土をはがしてみた。また、羨道前にはDトレンチを設定し、前庭の有無等を調査した。一方、石室は墳丘の調査と併行し、壁の根石と四隅から判断される床面とにより、その形態を明らかにした。その後、床面に十字状にトレンチをいれて、石室の構築状態の検討をした。なお、最終的には、封土を全体の $\frac{1}{4}$ を残して完全に除去し、石室及び墳丘の構築状態を明らかにした。

2) 墳 丘 (Fig. 44, Fig. ㉓・㉔・㉕, PL. 55・56)

構築状況

本古墳は、西南西方向に下る丘陵の一部を幾分削り取り、地面を整備して盛土によって築造された円墳であることが明らかとなった。まず、各トレンチに見られる地層について説明しておこう。第1層は、墳丘の盛土と墳裾を繞る周溝内堆積土(第2層)の上に見られる層で、赤褐色土を少量混じりしまりのある黄褐色土である。第2層上部の層は墳丘盛土の層とほとんど変りがないが、この方がやや赤味が強くなっている (Fig. ㉕ 第1-1層及び第1-2層参照)。第2層は、周溝内に堆積している黒色土である。第3層は、墳丘盛土で黄褐色土と赤褐色土の混じり合ったもので、粘性に富み全体的に固くしまっている。第4層は、墳丘下に認めら

れる自然堆積土層で粒子の細かい、粘性に富んだ黄褐色土である。この層は厚さ20~30cmで上部に部分的に厚さ5cmほどの黒色土が存在している。第5層は、第4層下に存在する花崗岩の礫を含有する粘性の強い赤褐色土で、勿論自然堆積土である

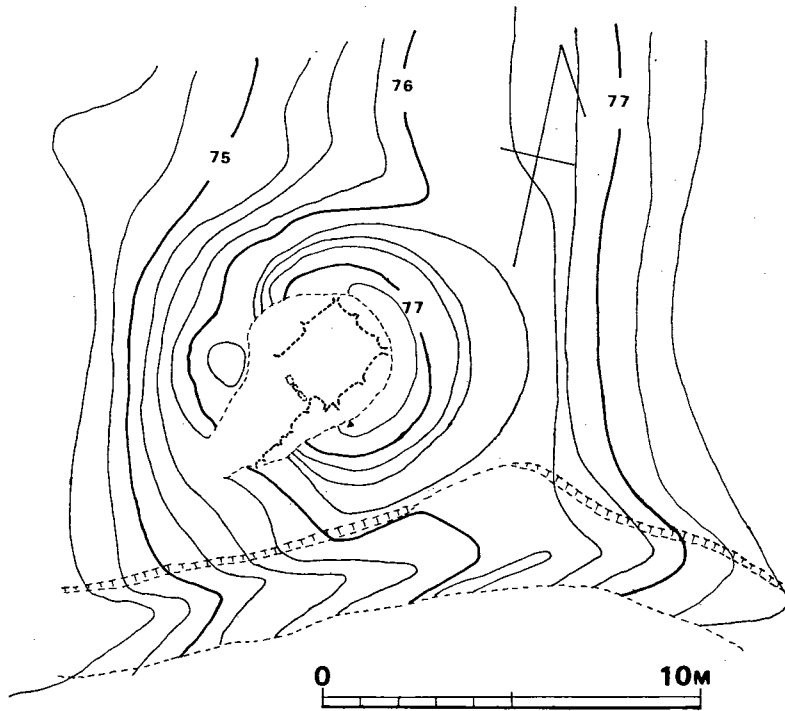


Fig. 44 王城山C12号墳外形実測図 (縮尺 1/200)

Cトレンチの所見では、墳

丘の基盤は上述の第4層を削り取って第5層としており、最終的な封土除去後の調査でその封土の直下にこの第5層がほぼ墳丘の北東部全体に認められた。A・Bの両トレンチに見られる基盤層は、第4層である。この層は、北西に向って約9度の傾斜で低くなっている。Eトレンチでは、ほぼ東西方向に設定したが、その断面に見られる第4層は約18度の傾斜で西に下っている。さらにこの第4層を墳丘の前半部分まで追ってみると、全面的に存在することが明らかとなった。つまり、本古墳の基盤は、墳丘の北東部の四半部では第4層が削平されて第5層となっているが、この他では第4層となっているということである。言うまでもなく、基盤は自然堆積土で、第3層以上は人工の盛土である。

封土は、このような基盤上に墳丘中央部ではほぼ基盤層と平行に、墳裾では斜めに積まれており、かなり固くしめられていた。

封土外の第2層上に存在する第1—2層は、盛土である第1—1層と色調ではやや差異が認められるが、粒子、質ではほとんど違いがない。これは、この古墳が盗掘や石取りをされた際に封土の一部が動かされて第2層上に堆積した結果とみられるのである。

規 模

墳丘の規模は、東西径9.55m、北西~南東径9.65m、南北径9.6mである。高さは、石室床

面から現存墳丘の頂まで1.9mで、A・B両トレンチで見られる周溝の上端より測るとそれぞれ1.3m、1.35mである。

周 溝

周溝は、発掘前においてはその存在を推定しかねたが、発掘調査の結果検出することができた。即ち、A・B・Cの各トレンチ断面において、墳裾から続く基盤層に浅いU字形の切り込みが見られ、黒色土（第2層）の堆積が認められたが、これが周溝跡である。各トレンチで見られる周溝の計測値は、Tab. 4 に記す如くである。

トレンチ名	上 端 幅	下 端 幅	深 さ	備 考
A (北 西)	1.00	0.90	} 0.1 } } } 0.15	林道により外側立ち上りが 削りとられていて不明
B (南 東)				
C (北 東)	1.35	0.80		

Tab. 4 王城山 C12号墳周溝計測値 単位m

これらの各トレンチ断面で見られた周溝跡は、墳丘の全面発掘で全貌を明らかにしたが、その結果、墳丘の北西側から北・東側を繞って南東側まで続いていることが確認された。しかし、羨道左側から前面にかけては、自然地形の傾斜の最も低いところになっているため消えている。周溝の堆積物は、極めて色の濃い黒色土で、中からは須恵器や土師器の破片が多量に出土している。堆積土の状況、また地形からして、湛水溝であることは考えられない。

土 器 列

墳丘の中腹には、一部土師器甕が囲繞していた。ほぼ全面的に表土を除去した結果、土器の心の間は約60cmの間隔で墳丘西側から北側にかけて6個、東側に2個検出された。さらに、東側で検出した2個の土師器甕の南側には、土師器の配列に連続するように約60cmの間隔をもって径15cmほどの角礫が2個検出された。しかし、墳丘の後半分、すなわち北東側にはこれら一連の土師器や石の配列は全く検出されなかった。これらの土師器は、上半分は甚だしく破壊しており、僅かに胴下半部が残存するのみであったが、いずれも底部に径5cmほどの礫が1、2個存在していた。土器の置かれていた位置を墳丘断面の層位との関係で見ると、AトレンチではNo. 3の土師器が現墳丘表面より約30cm下の封土中（第1層）に検出され、BトレンチではNo. 1が35cm下（第3層）に検出された。このほかの土師器も底部が現墳丘表面より大体20~30cm下の封土中であったことから、埋設当初は地表に全体の上部1/3ほどは露出していたものと思われる。

羨道入口の両側には、大型の須恵器甕が2個埋設されていた。これらは羨道入口部中央から左右に2.1m離れた対称の位置にあり、置かれている層位は封土中であるが、底部は基盤層にとどいている。この2つの須恵器は、上部からの圧力で押しつぶされた恰好で口縁部、胴上半

部が胴下半部に埋没していた。両者共、底部に径5cmほどの礫3個が置かれていた。このことは、おそらく埋設の際の器の固定を考えたものであろう。

3) 石室 (Fig. 92~94, PL. 57・58)

主体部は、S-26°-Wに開口する横穴式石室である。石室は破壊が著しく、既に天井石はすべて失われていた。ただ一石のみ、天井に使用されたとみられる巨石(1.5m×0.9m×0.9m)が右側壁に接して崩落していた。地元の話では、往時この付近一帯の古墳の石類を抜き取ったとのことである。本古墳もその際の憂き目に遭ったのであろうか。壁石も天井石同様根石を遺存するのみで大方は失われていた。その根石も完全には残っておらず、奥壁に向って左袖石から左羨道壁は全て除去されていた。幸いにして壁の根石が置かれてあった所は、掘りがたが攪乱されていなかった。

壁体は、前述の如く頗る遺存状態が悪く、奥壁三石一段、左、右側壁共に二石ずつ一段のみで(現高70~80cmである)、羨道は大石二石と若干の小礫を混じえて高さ70cmほど残存しているだけである。石材は花崗岩の割石で、玄室は奥壁、両側壁共にこれらの平^{ひら}の面を出してきちんと揃えて構築されている。しかし、石の据え方では、両側壁の横位に対して奥壁は縦位である。左壁だけは横位に据えた2個の大石間に間があきすぎたため小礫を若干補填している。これら玄室の各壁は、10~12度内傾している。用石の大きさは、極めて多様で、小は10cm×10cm、大は1m×80cmほどもある。羨道壁も玄室と同様、花崗岩の割石を横積みと小礫の小口積みを混合した乱石積みで、入口部は比較的扁平な石を現状で四段積みにしていて、また、袖壁は右側にしか残っていないが、細長い一石を縦位に置いて構成されていた。

壁根石の外側には、壁石の安定を図るために掘りかたに大小様々な角礫が詰め込まれていた。この掘りかたへの角礫と土砂の入り方を墳丘盛土の状況と合せ見ると、石室壁体の構築と盛土が交互してなされた様子がうかがわれる。このため、壁はかなり頑丈に固定されていたようである。

石室のプランは、左羨道壁が除去されているため、いずれの形式に属するか断定はできないが、壁石の抜き取り跡から推定して、両袖型であることは明確である。というのは、一つには石室構築の際の掘りかたが玄室部ではほぼ楕円形になっているが、羨道部に到って急激に狭まっていることによる。二つには羨道入口から2.1m奥のところに極めて精巧に切られている幅10cm、長さ30cmほどの梱石が三石並んでいて、その末端と左壁との間が右壁袖幅と同じぐらいであることによる。

床面は、玄室部では盗掘や石の抜き取り等で著しく攪乱されていたため、埋葬時のそれを確認することは困難であった。そのため、玄室の四隅から床面を推定し、精査を行った。その結果、鉄製品(釘、鏃)や須恵器片が十数片、多少レベルの相異をもって散乱した状態で検出され

た。また、遺物と共に散乱状態で角礫が存在したが、意識的に敷き並べられたものではない。羨道部においては一部填塞が除去されているところがあったが、下部はあまり荒らされていなかった。填塞の下部には拳大から人頭大の角礫が雑然と置かれており、意識的に敷きつめたとは考えられないものであった。故に玄室、羨道共に築造当初より敷石はしなかったものと見られる。

羨道入口部の填塞は、下部においては比較的良好に揃っていたが、上部は雑然としていた。石室前は、羨道から前方に礫が流れ出たような状態になっていた。羨道奥部においては、梱石の前方約30cmのところやや大ぶりの石を置き、この石を填塞の奥端としている。

石室掘りかたについては、まず、これを平面図上で見た場合、玄室部では壁面より80cmから1mの幅でその上端の線が楕円形に繞っているのがわかる。それが羨道部にくるとほぼ90度の角度で曲折し、狭ばまった状態で入口方向に続いている。平面形は、鏡部が楕円形の柄鏡形である。一方、掘りがたを断面で見た場合、根石の据えられるべき場所は、石室中央部分の基盤面より幾分掘り下げてある。換言すれば、まず石室を構築する場所全体を約60cm掘り込み、そして根石を据えるところをさらに一段深く20~30cm掘りくぼめて根石を据えているということである。また、石室内トレンチの断面では、石室の中央よりやや南に寄ったところに径1m、深さ40cmの著しく不整な円形の掘りこみが見られた。この掘りこみを埋めている土は、第4層と第5層の混合土であり、中からは遺物は検出されなかった。従って、この掘りこみは古墳築造後に掘られたものではなく、梱石のあり方からも石室構築時の造作であることには疑いないが、その性格については明らかでない。

なお、石室の規模は、Tab. 10 (p. 166) に記す如くである。

4) 遺 物

出 土 状 況 (Fig. ㉑・㉒, PL. 58-2・59~61)

墳丘の中腹からは、前述の如く土師器甕が8個体出土した。その遺存状態はいずれも極めて悪く、胴中央部以下が残るのみで上部は全て崩壊しており、その破片は周囲に散乱していた。出土位置を平面的に見た場合、いずれも玄室の中心よりほぼ3.6mのところ存在する。

羨道入口の両側には大型の須恵器甕が1個ずつ埋設されていた。土師器罎の円周線より僅かに外方にずれている。遺存状態は、土師器甕同様極めて悪く、胴下半部が僅かに残るのみであった。周囲には破片がかなり広範囲に散乱していた。

羨道入口の前方からは、須恵器の杯(3)、杯蓋(7・8)、長頸瓶(11)がかなり小さく破碎した状態で出土した。しかし、3・8は比較的良好に遺っていた。

この他、墳丘南西の裾からは高杯(9)、杯(6)、杯蓋等の小破片が少量、Aトレンチ内の墳裾よりは杯(4)が出土した。周溝内からは、墳丘北側で短頸罎(10)が出土し、東南部か

ら須恵器大甕の破片が多量に出土したが、器形をととのえ得るものはなかった。

羨道内からは、須恵器の杯片(5)と大甕片が2, 3片出土しただけであった。

玄室内からは、散乱した状態で鉄製釘が8本、鉄鏃片2本が出土した。また、石室の破壊がかなり進んだ後に流入したと見られる須恵器大甕の破片が十数片検出された。これらの遺物は、既に盗掘を受けていたので原位置の出土ではない。鉄釘は、全体的に左壁寄りに多く出土している傾向は認められた。

以上のような状態で出土した遺物をまとめてみると次のようになる。

(1) 武器	鉄鏃	2本
(2) 棺材	鉄釘	8本
(3) 土器	須恵器	11個体以上
	杯身	4個体
	杯蓋	2個体
	高杯	1個体
	短頸埴	1個体
	長頸瓶	1個体
	甕	2個体

土師器

甕 8個体

遺物各説

鉄釘 (Fig. 45-1~8, PL. 63)

いずれも角釘である。頭部の形には、1のようにひき延ばしてまるめたもの(蕨手状)と7のように直角に折り曲げたものの2種類がある。断面の形は、長方形若しくは正方形である。銹の出方はいずれも著しい。これらの釘は、棺に打たれていたものであろう。

鉄鏃 (Fig. 45-9・10, PL. 63)

鋒部及び筥被部が欠損しているの
で、詳しい型式は不明であるが、尖
根型式である。断面は $5.5\text{mm} \times 4\text{mm}$
の長方形である。現存長は9は 6.6cm 、
10は 3cm である。

須恵器

(Fig. 46~48, PL. 64・65)

杯身 (Fig. 46-3・4・5・6, PL. 65)

No.	長さ	中央幅	頭部のつくり	遺存状態
1	80	5×5	蕨手状	完形
2	69	6×5.5	蕨手状?	ほぼ完形
3	67	4.5×4	?	頭部欠損
4	58	5×5	蕨手状?	頭、先部欠損
5	79	6×5	直角に折れまがる?	頭部欠損
6	?	5×5	直角に折れまがる?	頭、中央部欠損
7	52	5×5	直角に折れまがる	先部欠損
8	34	5×4	?	上半分欠損

Tab. 5 鉄釘一覧表 単位mm

3. 平底の底部から立ち上がる口辺は、先端部でやや外反する。器外面は横ナデ調整で、整形時の稜が2ヵ所に見られる。胎土には小粒砂を多量に含み、焼成は良好で、青灰色を呈する。器高3.9cm、口径11.7cm。

4. 3と同様に口縁部は外反する。胎土、焼成共に良好。器の内外面は横ナデ調整。青灰色。器高4cm、口径12.2cm。

5. 口縁部が僅かに残るのみなので、器高、口径は不明。焼成は極めて堅緻。青灰色。

6. 立ち上がりは比較的高くて内傾しており、蓋受け部は水平にやや突出している。口縁から蓋受けの下部までは横なで調整だが、それ以下は篋削りである。胎土にやや小粒砂を含み、焼成は良好、灰色を呈する。口径9.2cm、最大径11.2cm、器高3.7cm。

杯蓋 (Fig. 46-7・8, PL. 65)

7. 残存程度は全体の1/6、やや内傾した小さなかえりを有するもので、胎土に小粒砂を含んでおり、焼成は堅緻である。青灰色。最大径13.1cm (推定)。

8. やや内傾したかえりのついたもので、著しく扁平である。表面は横ナデ調整で、灰色を呈する。胎土に粒砂を含んでいるが、焼成は良好。径13.6cm、器高2.2cm。

高杯 (Fig. 46-9, PL. 65)

脚部を欠損している。杯部の口縁はやや外反し、底部との境には一条の沈線が繞っている。胎土、焼成共に良好。表面は横ナデ調整、灰色を呈する。口径8.6cm、杯部高3.7cm。

短頸埴 (Fig. 46-10, PL. 65)

頸部は欠損。やや肩の張った球体部は高さ9.6cm、最大径12.4cmで、外面はかき目調整である。胎土、焼成共に良好。黒灰色を呈する。

長頸瓶 (Fig. 46-11, PL. 65)

口縁は、やや開き気味で造りは単純である。頸部には中央部よりやや上位に二条の沈線が繞っている。胴部は肩が張った重厚な造りで、肩部には二条の平行沈線が繞り、その間に一条の

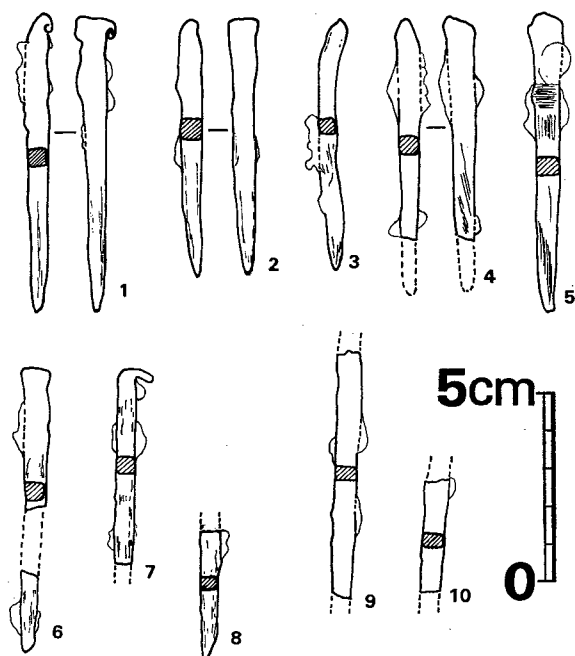


Fig. 45 王城山C12号墳出土鉄製品実測図 (縮尺 1/2)

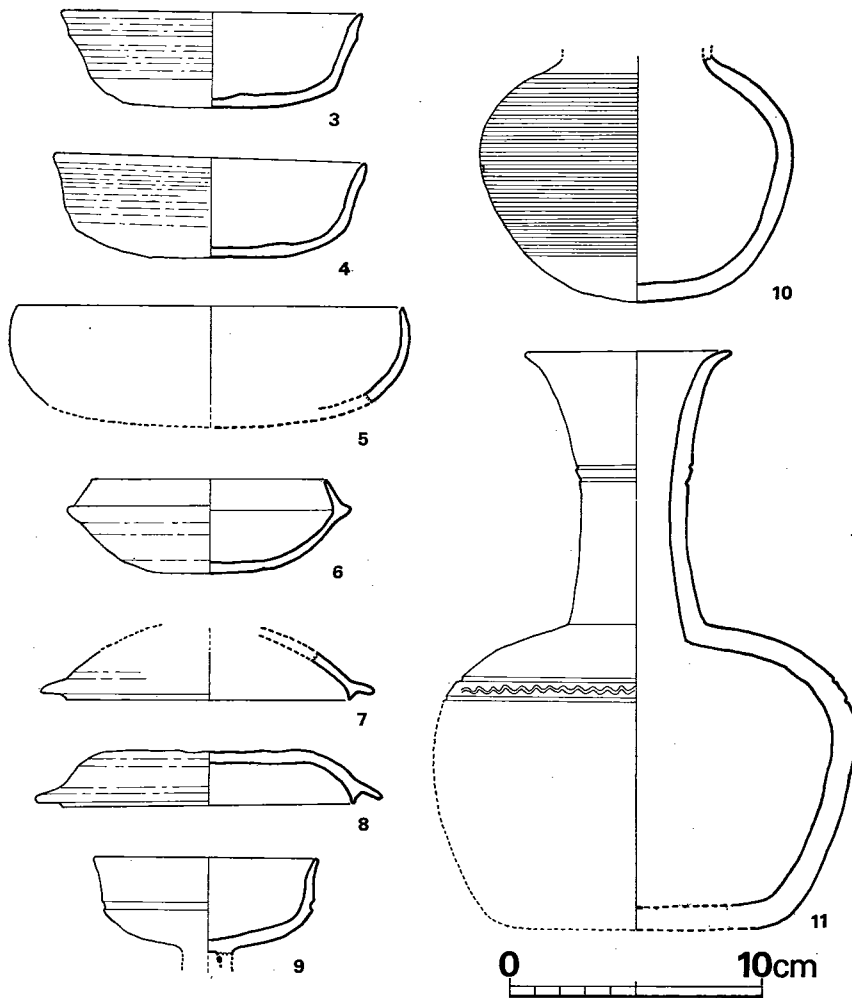


Fig. 46 王城山C12号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

波状文が施されている。胎土は精選されており、焼成は堅緻、色調は灰色。器高22.9cm、口径8.1cm、頸部高10.8cm、胴部最大径16.7cm。

甕 (Fig. 47・48, PL. 64)

1. (Fig. 47, PL. 64) 肩部以上と底部が僅かに残る。口縁部は極めて重厚に造られ、頸部には口縁近くと中央にそれぞれ二条の沈線が繞り、その間に篋状工具による斜行の条痕がある。肩部及び底部の外表面は叩きにより精巧に整形されているが、内面は頸部を除いて同心円の叩文が全面に施されている。焼成は非常に堅緻で、色調は全体的に暗灰色であるが、頸部は一部分黒色である。器高84cm (推定)、口径48.5cm、頸部高16.3cm、頸部径31.8cm。

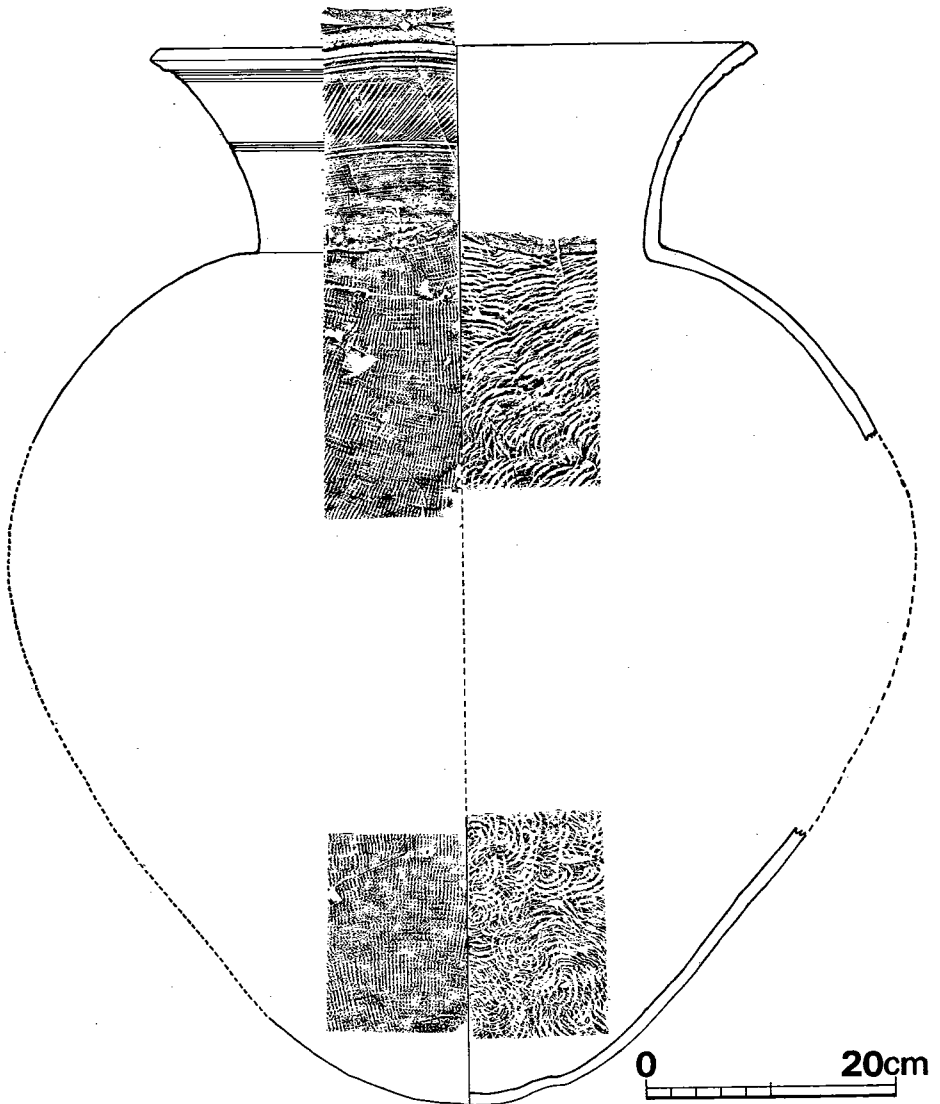


Fig. 47 王城山C12号墳出土須恵器 No. 1 大壺実測図 (縮尺 1/6)

2. (Fig. 48, PL. 64) 口縁部は1と比べるとさほど重厚ではないが、造りは良好である。頸部には楕描きの波状文が二段に規則的に施文してある。胴部はやや縦長の球体を示し、外面には縦横の叩文、内面には同心円の叩文がある。底部は丸底で、器壁は胴部や頸部に比して薄く弱々しい。胎土は良い方であるが、焼成は不良で、色調は灰白色である。器高57.5cm, 口径29.2cm, 頸部20.8cm, 胴部径51.3cm。

土 師 器

甕

口縁部の造りと焼成，整形技法により，3類に分けることができる。

A類 (Fig. 49-2・3, PL. 63)

口縁が著しく外反し，肩部が張っていて楕状工具による外面整形，篋による内面整形がないもの。

2は肩部と底部が僅かに残るのみで，胎土に小粒砂や雲母を含み，焼成は極めて悪く崩れ易い。底部には焼成後に穿った径4cmほどの不整形な穴があり，肩部には僅かに刷毛目の跡が見られ，赤褐色を呈する。口径21.3cm (推定)，頸部径18.2cm (推定)，器肉5~9mm，器高不明。

3は胴部が $\frac{1}{6}$ ほど残る。胎土に小粒砂を多分に含み，焼成は比較的良好である。器外面は滑らかで暗褐色を呈する。胴部径25cm。

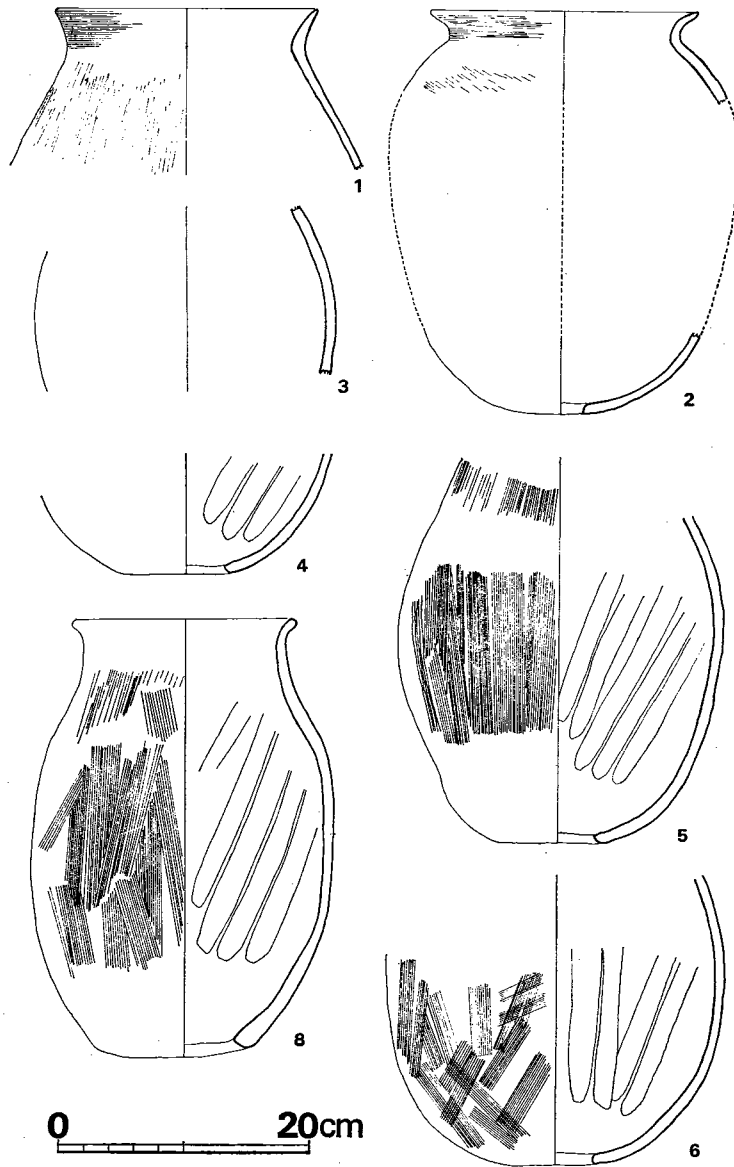


Fig. 49 王城山C12号墳出土土師器実測図 (縮尺1/6)

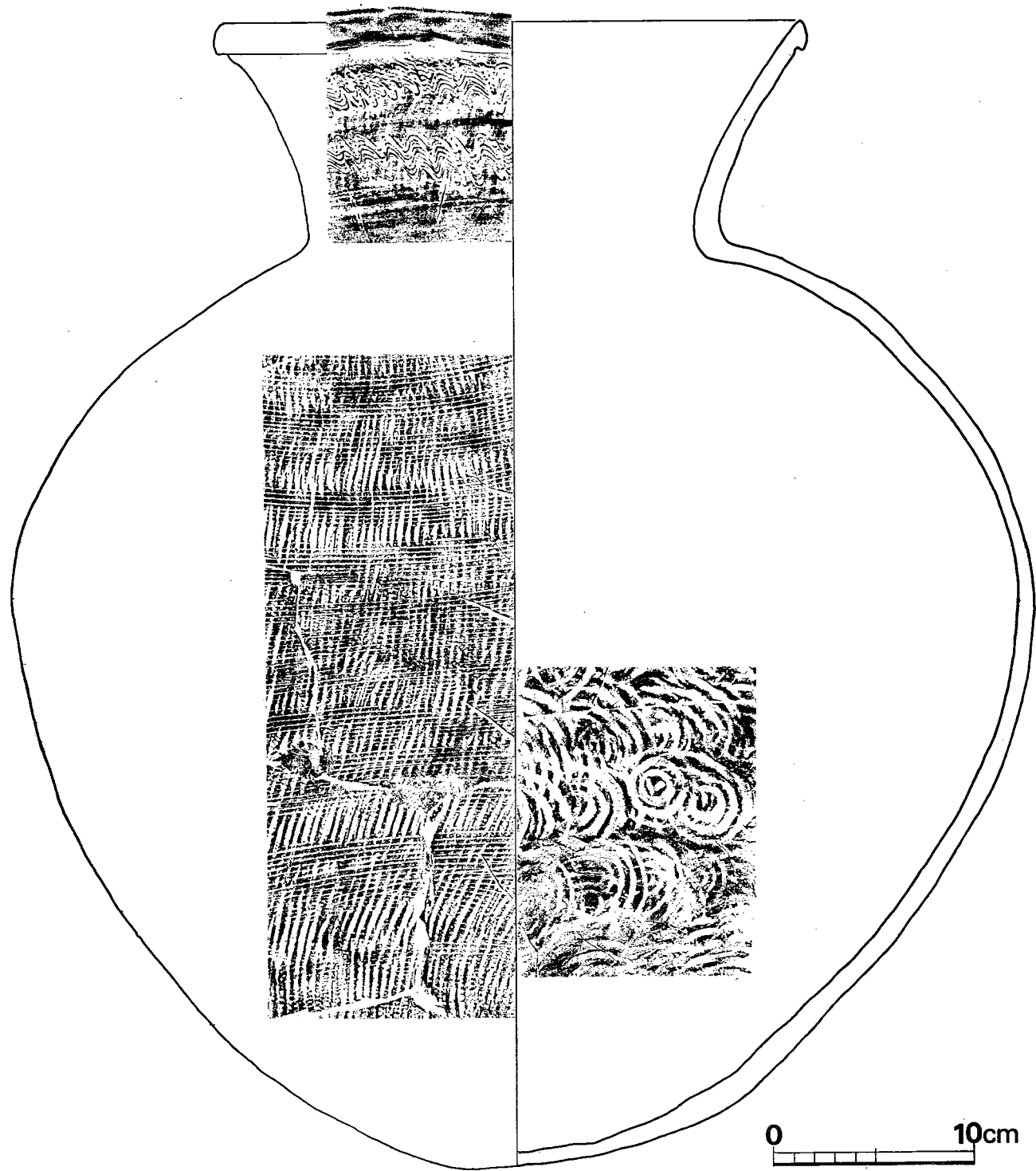


Fig. 48 王城山C12号墳出土須恵器 No. 2 大甕実測図 (縮尺 1/3)

B類 (Fig. 49-1・4・5・6・8, PL. 62・63)

口縁の外反は弱く肩に張りが無い。器外面には櫛状工具による整形痕がよく残っていて、焼成も全体的に良好である。

1は肩部以上が僅かに残るのみである。焼成は比較的良いが、器壁が薄くくずれ易い。口縁部は横ナデ調整、肩部は櫛状工具による整形だが粗雑。赤褐色を呈する。口径20.5cm (推定)、頸部径19cm (推定)。

4は胴下部が残るのみで、胎土に小粒砂を多量に含み、焼成はあまり良い方ではない。底部には径6.5cmの焼成後の穿孔がある。器外面は滑らかで、内面は篋削り調整されており、赤褐色を呈する。

5は口縁部を全く欠損しているが、肩部以下はほとんど残っている。胎土は石英の粒砂を少量含んでいてあまりよくないが、焼成は良好である。底部は丸底で2や4と同様な径6cmほどの穴がある。器外面には櫛状工具による施文がほぼ上下に平行して走るが、内面は篋調整である。茶褐色を呈する。胴部高30.6cm、胴部径25.9cm、器肉はほぼ一様で9mm。

6は肩部以上を全く欠いており、口縁部の状態は明らかでない。胎土には小粒砂が多量に含まれており、焼成はあまり良くない。器外面は櫛状工具による整形痕が乱雑に斜交している。内面は篋調整。丸底の底部には焼成後の径6cmほどの不整形な穿孔がある。大部分は茶褐色を呈するが、一部分黒色である。胴部径26.7cm、器肉8mm。

8は肩部以下が器全体の $\frac{3}{4}$ と口縁部がほんの僅か残存するので、辛うじて器形を知り得た。口縁部は緩やかに外反し、肩部はなだらかであり、胴部は長である。底部は丸底で、ここには焼成後の穿孔がある。器外面には櫛状工具による整形痕がほとんど上下に走っているが、内面は篋による粗雑な調整である。胎土は多量に粒砂を含んでいるが、焼成は良好、暗褐色を呈する。器高37cm、口径17.8cm (推定)、頸部径16.2cm、胴部径23.9cm、器肉8~9mm。

C類 (Fig. 49-7, PL. 63)

7は丸底の底部がほんの僅か残るのみで、焼成は極めて良好で須恵質である。器外面は非常に滑らかで、内面には叩きによる整形痕があり、赤褐色を呈する。

5) ま と め

以上のように本古墳は甚だしく破壊されており、旧状を留めている部分は極めて少なかった。しかし、構築の企画や外部施設のあり方を検討するには十分耐えられるものをもっている。ここで石室、墳丘及び遺物について若干考察を加えまとめとしたい。

(1) 石室と墳丘の企画

古墳は尺度を用いて設計がなされた建築的構造物であることは、すでに先学諸氏によって明

らかにされてきたところである。こうした考え方の上に立って本古墳を検討してみることにする。

まず、石室の計測値を見ると Tab. 6 のようにいずれも 35cm の倍数に近い数値であることに気づく。

	実測値 A	換尺の単 位 B	換尺値 C	B×C	A-(B×C)
石室全長	455cm	35cm	13	454cm	0cm
玄室長	205	35	6	210	-5
玄室奥幅	188	35	5	175	+13
玄室中央幅	184	35	5	175	+9
羨道長	245	35	7	245	0
羨道奥幅	不明				

Tab. 6 石室計測値と換尺値

一方、 $\frac{1}{10}$ 縮尺の石室平面図と $\frac{1}{10}$ 縮尺の 35cm 方眼図を Fig. 50 の下の如く重ねて適合状態を見ると、奥壁と右壁の線を基準にした場合石室の主要な個所が方眼の線に載ってくる。しかし、^{註1} 柵石だけは入口から 7 単位目のますの中であり、方眼の線には載っていないが、石室を切

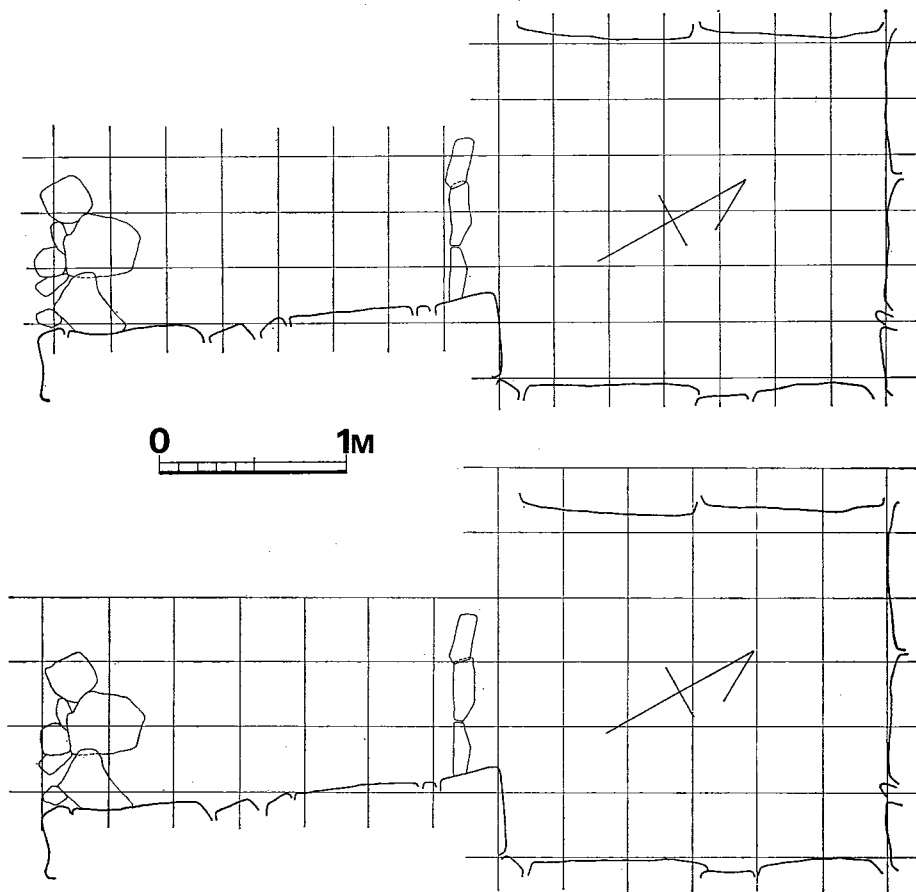


Fig. 50 王城山C12号墳石室平面構成図 (縮尺 1/40)
上……30cm目 下……35cm目

半した位置にある。他方、同じ平面図を同上の如く $\frac{1}{10}$ 縮尺の 30cm 方眼図に載せてみると、袖石、奥壁はうまく適合するが玄室側壁は中途半端である。この二つの操作によって推定できる基準尺は 30cm と 35cm のいずれであるか明確な判断はかなり困難であるが、適合箇所の数量から言えば 30cm の方に蓋然性が認められる。

高麗尺一尺は凡そ 35cm^{註2}であり、これを基準にして再び石室の寸法を見ると石室全長 13 尺、玄室長 6 尺、玄室幅 5 尺、羨道長 7 尺に換尺できる。

トレンチ名	内側上端まで	外側上端まで
a	4.80m	6.15m
b	4.85	
c	4.75	6.05

Tab. 7 玄室中心より周溝までの距離

玄室の中心から周溝までの距離は、

Tab. 7 に示す如くである。これを見ると玄室の中心から周溝内側上端までの距離は、4.80m 或いはこれに近い数値で、唐尺 16 尺に換尺できる。また、外側上端までは 6.00m に近似で唐尺 20 尺に換尺できる。この両者の差は周溝の上端幅となる訳で、その数値は 4 尺である。

次に Fig. 51 の如く、玄室の中心を中心として半径 4.8m と 6m の円を描いてみると円周線に周溝の両端が大方載ってくる。調査の段階で掘り方により多少の出入りがある。傾斜地であるための施工の段階で誤差が出るかもしれない。かようなことを勘案してみると、墳丘は唐尺で半径 16 尺、溝は 4 尺で築造されたと考えられる。

(2) 土師器甕と須恵器大甕の配置

土師器の囲繞についてはすでに述べたように、いずれも玄室の中心から 3.60m 離れた墳丘中腹に位置する。3.60m は唐尺 12 尺に換尺できる。したがって、玄室の中心を中心とした半径 12 尺の円を描いてみると、甕はすべて円周上に載ってくる。また、この円周線と羨道入口部石積のみ先端がほぼ接してくる。

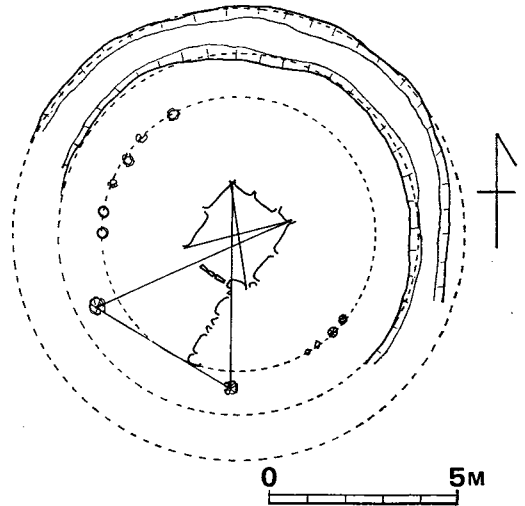


Fig. 51 王城山 C12 号墳墳丘構成図 (縮尺 1/200)

羨道入口の両側の須恵器大甕の配置は、Fig. ⑤ のように奥壁の両端から袖石の角部を通る直線上にあり、この 2 個の大甕を結ぶ直線は羨道入口石積のみ前面に接してくる。これと似た出方をしているものに福岡市 和白所在猿の塚古墳、福岡市西区 所在高崎 5 号墳、同片江第 7、第 8 号墳がある。ここで片江第 8 号墳を前述の方法で検討してみると、甕は石室の左側にしか残存していなかったが本古墳と同様な結果が得られ、企画性が十分うかがわれた。他の 3 基については図が掲載されていないので明確なことは言えないが、同様な企画の下に配置さ

れたであろうことは十分考えられる。

このような土師器や須恵器の配置についても、石室や墳丘の構築と共に当初より企画されたものと見られる。

(3) 出土遺物について

次に出土遺物について見ると、須恵器は大体3グループに分けることができるであろう。第一は No. 6, No. 9 高杯で小田富士夫氏の編年によるⅢ_B～Ⅳ期に、第二は No. 5杯, No. 7・8杯蓋, No. 10短頸埴^{註6}でⅣ～Ⅴ期に、第三は No. 1・2大甕, No. 3・4杯, No. 11長頸瓶でⅤ～Ⅵ期に比定されよう。このように須恵器については製作年代にかなりの幅があるものが出土している。ここで簡単に最も古いものをもって古墳築造時期とするには無理がある。というのは、第一グループは先にも詳述したように墳丘裾からの出土であり、原位置性に弱く、南西に隣接する古墳からの流入とも見られる節があるからである。原位置の確実なものは、第三グループ中の大甕であり、(2)節で論じたように配置のあり方が石室及び墳丘の企画と軌を一にしていると見られる点から、古墳築造時期を探る一つの指標となるものである。

土師器は焼成後の底部穿孔であることや出土状況からして儀器的色彩の強いものである。形態、技法の上から3類に分けられたが、配置が古墳の築造企画に基づいていないことから、墳丘の築造とほぼ同時期の埋設と見られる。この土師器の年代について形態、手法上の観点から類例を求めて考察するならば、福岡県筑紫野市所在八隈遺跡第Ⅰ地点第6号住居跡、同第Ⅱ地点住居跡群^{註7}に求められ、ここでは7世紀前半の年代が与えられている。

(4) 古墳の築造年代

本古墳の築造年代を遺構から推して見るならば、築造に当たっては高麗尺が用いられているようであり、その構造は末期的であり、7世紀後半と認められる。しかし、墳丘や石室内から出土している須恵器の九州地方での編年によれば、Ⅴ期は7世紀前半、Ⅵ期は7世紀後半となり、本古墳の築造時に埋設されたと思われる第三グループは7世紀前半代となる。ここに墳丘築造と遺物の編年観にかなりの時期差が認められるのである。仮に大陸との交易の窓口である北部九州に唐尺が早く使用されたと考えても7世紀中葉をさほど遡らない時期であり、これより前には遡り得ないであろう。

この築造企画と遺物の編年観のいずれに正当性が認められるか、今後検討していかなければならない問題点であろう。

(小林 敏夫)

- 註 1 この方法については既に石川正之助氏により群馬県野殿天王塚古墳、同前橋市総社二子山古墳を取り上げ、原企画の復元をめざして考案されている。石川正之助「野殿天王塚古墳の石室平面構成について」共愛学園論集第1号1967。氏には、今回の調査結果をまとめるに当り、数々の教示を賜った。
- 2 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』第一篇第三章第七節、1966年
- 3 島津義昭「猿の塚古墳」『和白遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集、福岡市教育委員会

1971年。

- 4 栗原和彦「高崎5号墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集，福岡県教育委員会1973年。
- 5 柳田純孝，柳沢一男『片江古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第24輯福岡市教育委員会1973年。
- 6 小田富士雄，真野和夫，柳田康雄「野添・大浦窯跡群」福岡市教育委員会1970年。小田富士雄「塚ノ谷窯跡群」八女市教育委員会1969年。
- 7 松浦有一郎，酒井仁夫，村松一良『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ』福岡県教育委員会1976年。
- 8 前掲書6「塚ノ谷窯跡群」。

13. 第 13 号 墳

1) はじめに

占 地 (PL. 66-1)

標高270m余りを測る乙金山から西方の平野部にむけてゆるやかに派生した一支脈上に王城山古墳群が形成されている。王城山C古墳群は数基づつが一つのグループとなっている数単位によって構成されている。一つのグループはたがいに墳丘の裾を接するようにして形成されている。そのうち、北側の6基によって形成されている一グループ中に13号墳がある。13号墳は6基のなかでほぼ中央の最も南よりに位置する。他の古墳と同様にほぼ南にむけて開口するように築かれている。

調 査 経 過

この13号墳の調査は、昭和45年11月30日から12月25日にかけて実施した。調査には福岡県教育庁文化課技師西谷正（現九州大学助教授）、立命館大学々生橋本久和（現高槻市立埋蔵文化財調査センター技術吏員）、龍谷大学々生森田克行（現高槻市立埋蔵文化財調査センター技術吏員）が従事した。以下、簡単な調査日誌によって経過をたどることにする。

- 11月30日 王城山古墳群および周辺見学
- 12月1日 調査に先立って樹木の伐採
 - 2日 伐採作業続行
 - 3日 伐採作業続行
 - 4日 伐採作業がほぼ終了したので地形測量を行う。
 - 5日 現状の写真撮影を行い調査をはじめ。まず、天井石の抜きあとと墳から石室の平面輪郭を追求する。両袖式の石室であることが判明。
 - 6日 石室内調査、玄室の奥壁・側壁は最下段石のみ残存する。
 - 7日 石室内調査、羨道、玄室いずれも床面まで掘り下げる。羨道閉塞を検出。玄室内の落石をチェーンブロックで搬出する。
 - 8日 石室内調査、玄室中央部の床面に石囲みを検出。夕刻、石室の写真撮影を行う。
 - 9日 石室写真撮影。石室の主軸方向と直交するトレンチを墳丘に設定する。トレンチ内に周溝の一部を確認する。
 - 10日 墳丘の盛土除去をはじめ。墳丘上に須恵器壺・甕を検出。
 - 11日 墳丘上の須恵器を取りあげる。墳丘盛土除去作業。
 - 12日 墳丘盛土除去作業。石室墓壙検出作業。周溝東辺部分の調査

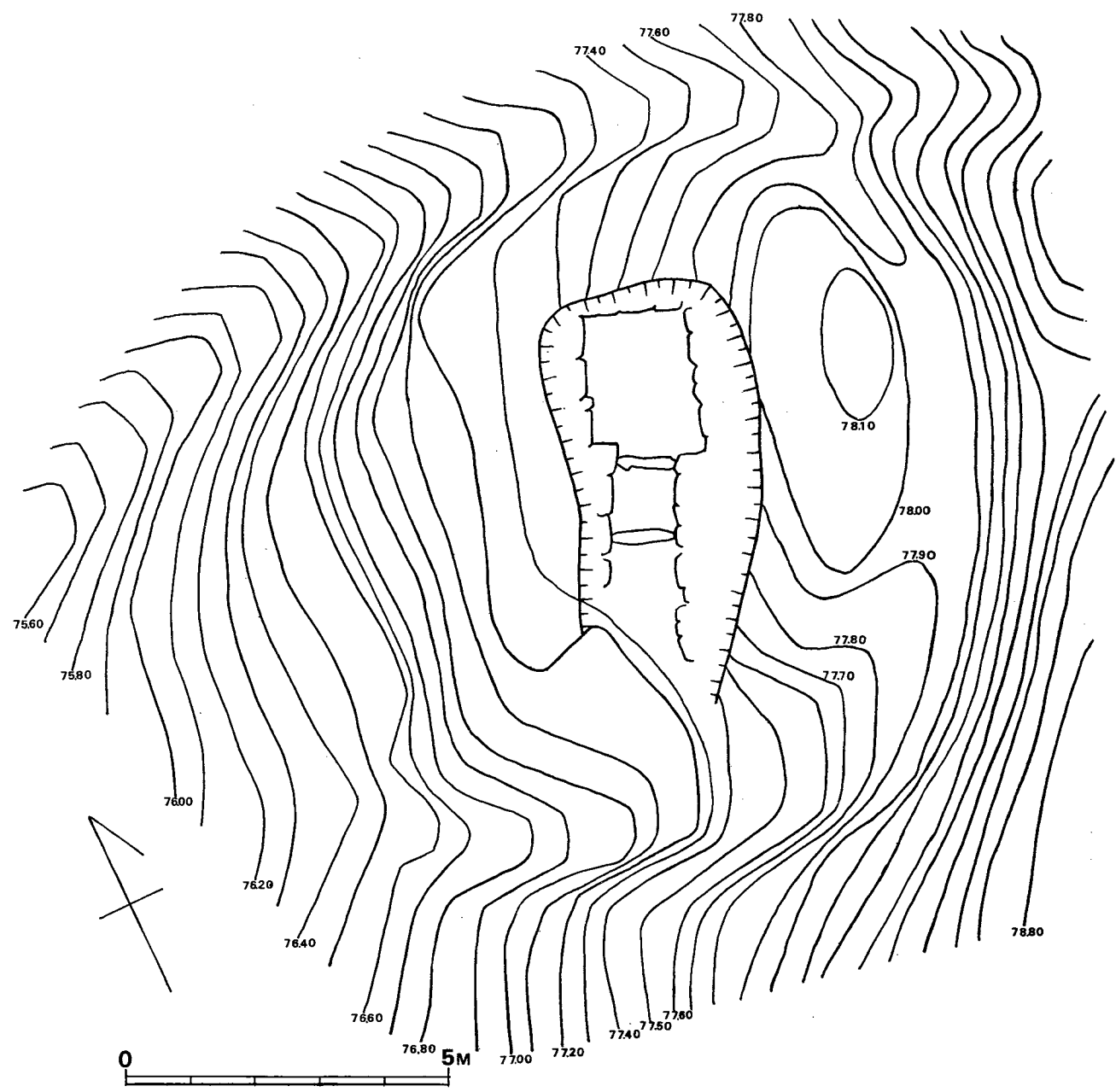


Fig. 52 王城山C13号墳丘測量図 (縮尺1/100)

- 13日 周溝調査（南側）。
 14日 墳丘盛土除去作業。石室西側の地山上に列石を検出。
 15日 墳丘盛土除去作業。墳丘断面図（東西）作成。
 16日 墳丘断面写真撮影。
 17日 墳丘盛土除去作業。
 18日 墳丘断面図（南北）作成。
 19日 周溝調査（北側），石室実測割りつけ。
 20日 石室実測図作成。
 21日 石室実測図作成。
 22日 雨のため作業休み。
 23日 石室実測図作成。
 24日 石室・全景写真撮影。実測図補足。
 25日 調査区域地山面測量。実測図補足。本日で全ての調査を終了する。

2) 墳 丘 (Fig. 52, PL. 66)

13号墳の発掘調査を開始するのに先立って地形測量を行ったところ径9m前後、墳丘の高さ約1mを測る円墳であることがわかったが、墳丘北側を林道によって削られており、また墳丘南側も0.6~1mの雨水の流路となっている溝が掘られていた。さらに、天井石がすでに抜き取られているために墳丘中央が約1m落ちこんでいた。

墳丘の調査は、まず石室の主軸と直交するトレンチを設定し、盛土の層序の検討を行なった。そして、盛土の南半分を層ごとに旧地表まで除去し断面図の作成と写真撮影を行い、さらに残りの北半分の盛土を除去した。

墳丘南半分の表土を除去したところ墳丘東側中腹に須恵器壺・甕が、西側中腹に甕が置かれていた。

墳丘の盛土を旧地表まで除去すると石室西側に人頭大の塊石を数個並べた列石を検出した。この列石は明らかに盛土下であり、丁度黄褐色土層の西端にあたる。列石付近には列石と同程度の石が散乱していたことから、盛土を盛っていく段階で盛土の崩れるのを防ぐために列石を施したのではなかろうか。

東西断面図 (Fig. ㉞) をみると、石室主軸より西へ4.1mの地点で暗褐色土の堆積したレンズ状の落ちこみがみられ、この土層内には須恵器・土師器の破片が混入していた。この暗褐色土の落ちこみを追求していくと、赤褐色の洪積世の地山を削って墳丘の周囲をまわる溝と判った。

この溝は墳丘の北側が林道で削られているにもかかわらず林道の下でも検出された。斜面下

方の墳丘西側では明確に検出されなかったが、石室主軸より西へ4.9mの地点で暗黄灰色土のレンズ状の堆積土があり、この地点を墳丘の西側裾と考えると、墳丘は東西9mとなる。

奥壁から背後の溝まで2.3m、同じく奥壁から前庭部の溝まで6.7mを測り、南北も9mを測ることになる。傾斜面を利用して古墳を築いているために斜面上方を掘さくした周溝は馬蹄形を呈し、墳丘東側から北側にかけて周溝内縁はほぼ正円であるが、西南側は楕円形を呈している。周溝の外縁は矩形である。溝幅は2~3mで、深さは約0.2mを測る。

残存する墳丘の盛土は約1.3mであるが、盛土のなかには赤褐色あるいは黄褐色など周溝を掘さくした際の排土がみられる。また、墓壙は地山の赤褐色土上に堆積した暗黄褐色土層あるいは、暗灰色土層上から掘さくされており、古墳築成にあたって整地が行われたらしい。

3) 石室 (Fig. ㉔・㉕, PL. 67・68)

13号墳の内部主体は両袖形式の横穴式石室である。墳丘のやや東寄りに築かれていて、N-18°-Wの方向で南に開口している。

ある程度整地された地山に長さ6.4m、最大幅3.2m、深さ0.8mの墓壙（掘り方）を掘りこんで、内部に花崗岩で石室を構築している。

すでに天井石は抜き取られており、玄室で側壁は第1段目しか残っておらず、羨道も西側の3分の1程度が破壊されていた。調査の結果、石室の規模は全長5.7m、うち玄室長2.05m、羨道長3.65mである。玄室幅は奥壁部で1.65m、玄門部で1.7mを測る。玄室の側長は東側壁で2.2m、西側壁で2.05mを測る。また、羨道の幅は0.95mである。

石室の石材は床面を墓壙壁に沿って10cm程度掘り凹めた内側に置かれている。玄室では一枚岩を使用して奥壁としているが、奥壁のすわり具合を良くするために、奥壁下の中央に小さな石を置いている。両側壁は重量感のある石材を縦づみにして、長さより幅が少し狭い玄室部を形成している。

玄門はその名にふさわしい縦長の石材を使用している。また、玄門部には榭石として、高さ0.2m、厚さ0.15mの細長い石材を床面に置いて、玄室と羨道を分けている。羨道は玄室より小型の石材を用いて構築し、第1段目は縦づみとし、2段目からは横づみにして3段目まで残っている。この羨道は玄室の主軸から約10°西側に曲がって構築されている。

羨道のほぼ中央部の床面に断面三角形の境石を置き、この境石から外へ約1.5mにわたって人頭大の塊石をつみあげて羨道を閉塞している。

玄室中央部の床面に内部から人頭大あるいはこぶし大の塊石を重ね合せた直径1m、深さ0.2mを測る円形の落ちこみを検出した。塊石を除去して内部の調査を行ったが何も検出されず、この落ちこみがどういう遺構であるか不明である。あるいは石室内の排水施設ではなからうか。この他に、石室内には棺台とおもわれるような石や遺物は見当らず、羨道部の榭石付近

にわずかに鉄製品の破片がみられる程度である。

(橋本 久和)

4) 遺 物 (Fig. 53・54, PL. 69・70)

出 土 状 況

石室内からの出土品は床面での出土品は皆無であったが、玄室内埋土中から蓋杯 2 個と高杯 1 個が検出された。墳丘上からは須恵器壺 3 個と甕 1 個、土師器鉢 1 個と甕 1 個が出土している。墳丘裾部と周溝内からは、杯蓋 8 個、杯身 4 個、高杯、提瓶、甕などが検出されている。なお、閉塞石南からも、平瓶と思われる破片を検出した。その他の遺物は何ら出土していない。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

土 器	須恵器	20 個体
	杯蓋	8 個体
	杯身	3 個体
	高杯	1 個体
	提瓶	1 個体
	埴蓋	1 個体
	平瓶	1 個体
	壺	3 個体
	甕	2 個体
	土師器	2 個体
	鉢	1 個体
	甕	1 個体

須恵器 (Fig. 53・54, PL. 69・70)

杯蓋 (Fig. 53-1~8) 蓋に身受けのかえりのない I 類と身受けのかえりを有する II 類とに 2 分類できる。

I 類 (1・2) 蓋に身受けのかえりをもたないものである。天井部はヘラ削りを施しているが、体部との境は削り切っていないため角張って甘い稜がつく。口縁端部は若干肥厚して丸味をもつ。頂部内面はナデを、以外は横ナデ調整を施す。1 は天井部外面にヘラ記号を有する。口径は 12cm~12.5cm, 器高は 3.2cm~3.8cm を測る。灰色で焼成は良好である。胎土は 1 は多量に砂粒を含むが、2 は精選されていて良好である。

II 類 (3~8) II 類は更につまみがつくものとつかないもので、a. b に細分できる。

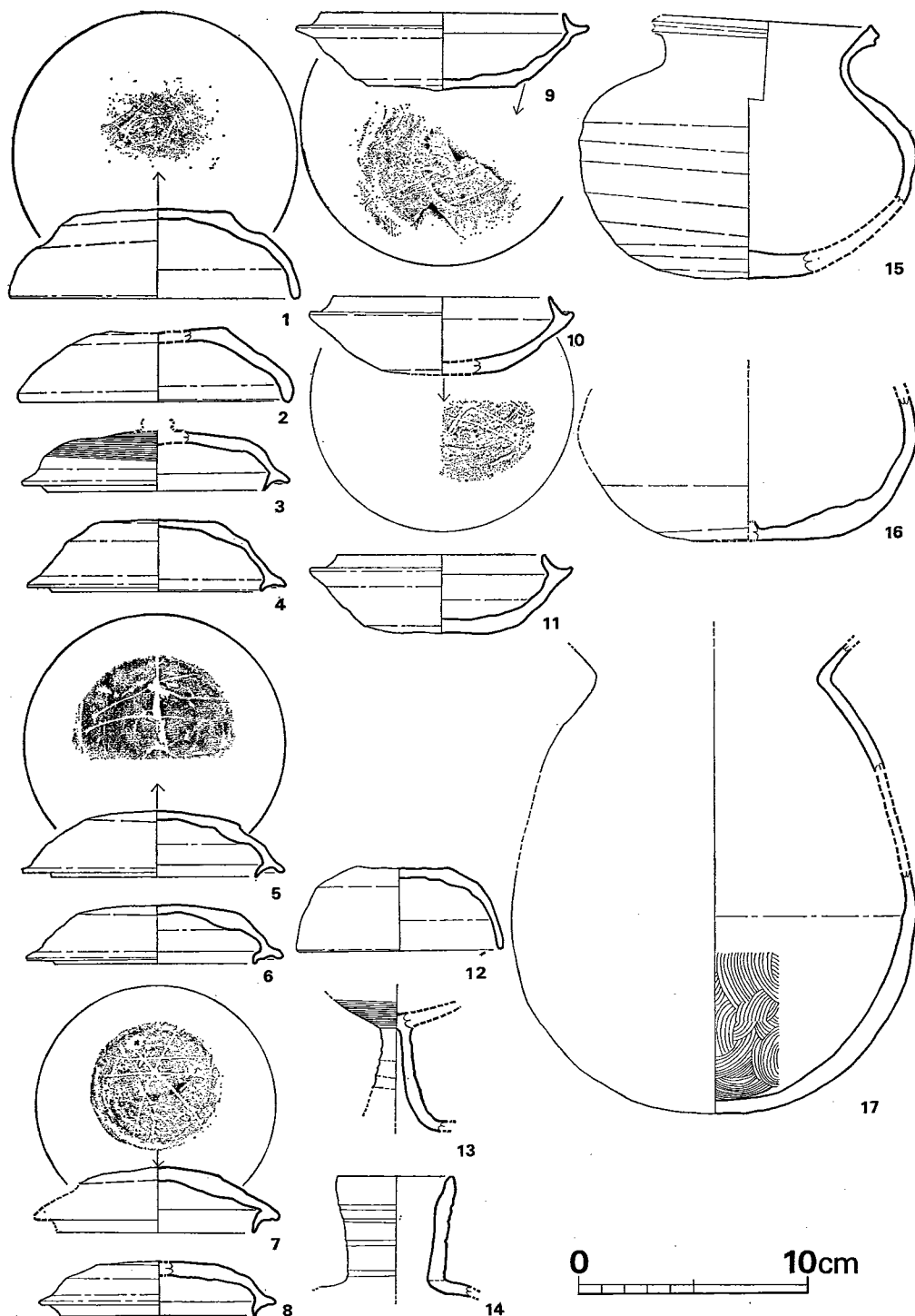


Fig. 53 王城山C13号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

IIa 類 (3) 頂部を欠損しているが、その残存部の状況と天井部にカキ目調整が施されている 2 点から、つまみがつく形態のものであることが推定される。かえりの端部は細くなり、やや尖り気味となる。かえりは長さ 5 mm であり、口縁部水平面より外方に出る。頂部内面はナデをし、以外は横ナデ調整を施す。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されている良好である。口径 9.4 cm, 最大径 11.7 cm, 現高 2.6 cm を測る。

IIb 類 (4~8) ともに身受けのかえりをもつ形態であり、杯蓋としたのは、かえりの形状と天井部の調整法の相違、器高により区別した、5・6 は玄室埋土から、4・7・8 は墳丘東南裾から出土した。身受けのかえりは 4 mm~5 mm と短く彎曲する。かえりは口縁部水平面よりも外方に出る。調整法は天井部外面はナデを、内面も頂部はナデであり、以外は横ナデ調整を施す。色調は青灰色ないし灰色であり、焼成は良好である。5 と 7 は天井部外面にヘラ記号を有する。口径は 8.5 cm~9 cm, 最大径は 10.4 cm~11.5 cm, 器高は 2.6 cm~3.1 cm と低い。

杯身 (9~11) 蓋受けの立上りを有するものである。立上りは 6.5 mm~7 mm と短く内傾する。杯蓋と異なって、底部外面はヘラ削りを施している。底部内面はナデであり、以外は横ナデ調整である。底部は平坦面を有している。底部は平坦面を有している。口径は 9 cm~10.5 cm, 蓋受け部径は 11.5 cm~12.8 cm, 器高はいずれも 3.5 cm を測る。9 と 10 は底部外面にヘラ記号を有する。色調は灰色ないし灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は好良である。

坩蓋 (12) 口縁部は薄手であり、若干内彎気味にのびており、端部は丸く仕上げている。天井部外面はヘラ削りを施し、内面はナデを、以外の部分は横ナデ調整を施す。天井部と体部の境はやや角張り、甘い稜線が入る。灰色で焼成は良好である。胎土は良好である。口径 8.9 cm, 器高 3.6 cm を測る。

高杯 (13) 高杯の杯部の一部と脚柱部を残存するのみである。小形の高杯である。杯部はカキ目が入る。脚柱部は横ナデ調整であり、その際の凹凸が器壁に著しい。玄室内埋土中からの出土である。青灰色を呈しており、焼成は良好である。

提瓶 (14) 口頸部のみを残存する。頸部には 4 条の平行沈線が入る。頸部は若干外反する程度であり、口はあまり開かない。口縁端部は丸くおさめている。黒灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好である。

平瓶 (16) 胴部の下半部を残存するのみである。底部は広範囲をヘラ削りしており、内面中心部付近はナデを、以外は横ナデを施す。閉塞石南からの出土品である。色調は黒灰色を呈しており、焼成は良好である。胴部最大径は 14.8 cm を測る。

壺 (Fig. 53-15・54-1・3) 3 個体とも墳丘上から出土しており、墳丘上に据えられていたものと思われる。15 は最も小形である。口縁部は短く、外反する。口縁部は粘土を貼りつけ肥厚させており、側方に沈線を入れて装飾とする。底部から胴部中央部付近までの広範囲をヘラ削り調整しており、以外は横ナデ調整である。青灰色を呈しており、焼成は良好である。口

径10cm, 器高11.3cm, 胴部最大径は14.7cmを測る。3は口縁部を欠損する。全体に厚手造りである。底部から 胴部中ほどまでの 内外面には叩目が入る。胴部の中程以上は横ナデ調整である。黄灰色を呈しており, 焼成は不良である。最大径18.2cmを測る。3は口頸部は短く, 外反する。口縁端部は肥厚させておらず, 側方に沈線が入る。胴部最大径は中央より若干上方に位置

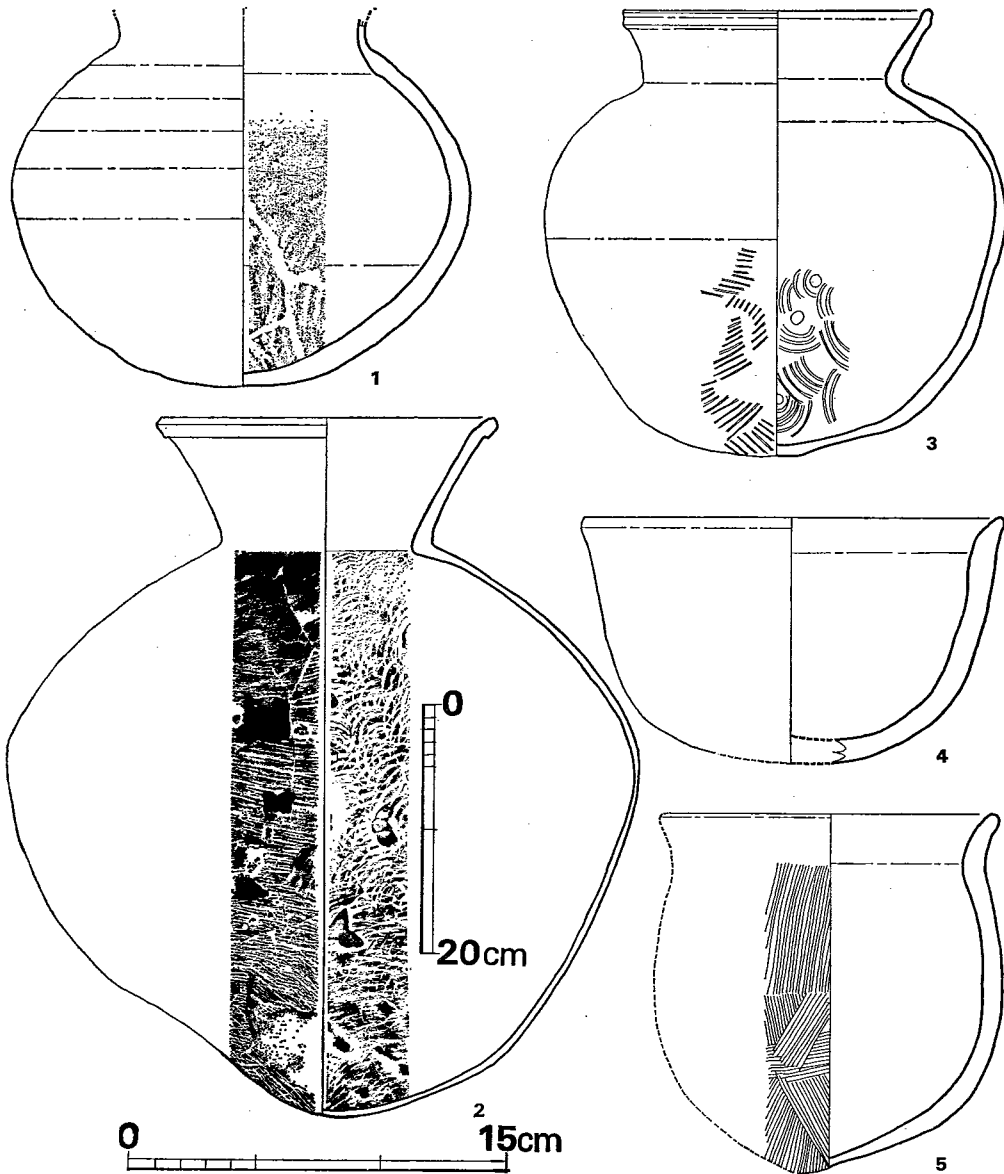


Fig. 54 王城山C13号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺1/3, 1/6)

する。薄手造りであるが、器壁は一様でない。胴部中央以下の外面には平行叩目が、内面には同心円叩目が入る。灰色を呈しており、焼成は良好である。口径12.5cm、最大径18.5cm、器高17.8cmを測る。

甕 (Fig. 53-17・54-2) 17は口縁部を欠損する。胴部最大径は下方に位置する。外面は全体にカキ目調整を施しており、内面は胴部中央以下は同心円叩目が入る。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。2は口頸部は直線的に外反し、口縁部は、貼り粘土をして肥厚させる。口縁端部は平坦面を有する。胴部最大径は中央よりもやや上方に位置する。底部は丸底であるが、やや尖り気味となる。胴部には内外面とも叩目が入り、器壁は一様に叩きしめられて薄手造りとなる。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。口径13.6cm、最大径25cm、器高27.9cmを測る。

土師器 (Fig. 54-4・5)

鉢 (4) 口縁部はやや外彎し、端部は細味となる。全体に厚手造りである。調整法は底部内外面はナデを、体部は刷毛目が入り、口縁部は内外面とも横ナデ調整である。口径17.0cm、器高9.8cmを測る。

甕 (5) 小形の甕である。口頸部は短く、外反する。底部はとがり気味の丸底となる。口頸部を除く外面全部は刷毛目調整し、内面はナデを施す。赤褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。口径は13.5cm、器高14.3cmを測る。

杯蓋は2類に分け、出土遺物も墳丘上と、周溝内、玄室埋土中と分けてみたが、これらの土器は、小田富士雄氏編年によるとⅣ期～Ⅴ期に属するものと思われる。

(川述 昭人)

5) ま と め

13号墳は天井石が抜き取られ、墳丘が林道や溝によって削られていたが、盛土を除去し、旧地表面を調査することによって、周溝や墓壙も明らかにすることができた。

墳丘の項で記したように、周溝は斜面上方を馬蹄形に削って形成していて、墳丘は径9mを測り、やや楕円形を呈している。

天井石や側壁上部が抜き取られているが、石室の構築順序が比較的良く判ったので簡単に記すことにする。

墳丘断面図から判るように、石室墓壙はある程度整地された旧地表を掘りこんで形成されているが、石室西側の暗灰色土層は炭まじりであり、東側の暗黄褐色土層の上面にもわずかであるが炭がみとめられているので、古墳を築く前に雑草等を燃やしたものであろうか。

墓壙は幅3.2m、長さ6.4m、東側で深さ0.8mを測る。

石室の西側壁は墓壙の壁にはほぼ接するように石材を寄せているが、西に傾斜する地面を転がして石材を墓壙の西側いっぱい寄せるように、構築当初から考えられていたのであろう。東側壁と墓壙との間隔が空いているのは、奥壁の幅によって玄室の幅が決まるためである。

玄室の構造をみると、まず、西側壁と玄門との間にわずかな空間がみられ、その空間を板石でふさいである。同じく、奥壁と東側壁でも同じことがなされてある。このことは、石室構築にあたっては墓壙内にまず奥壁および玄門をおいて玄室の大きさを決定する。つぎに西側壁の背面と墓壙壁には殆んど空間はみられず、石材が斜面上方から墓壙内に入れられ、墓壙壁いっぱいにつめられて西側壁が構築され、つぎに東側壁が構築されたのであろう。

墓壙壁の東側がかなり張り出しているので、東側壁を構築するのに際して、元来の墓壙を幾分掘り広げたものかもしれない。

羨道は玄門部から順番に側壁を構築していったらしい。このことは羨道が玄室よりかなり西方向にゆがんで構築されていることから判断でき、玄室を構築した際のような明確な指標はなかったのだろう。

墳丘でもふれたように側壁と墓壙壁の間には地山を掘さくした排土と思われる黄褐色土や赤褐色土がみられるところから、また、盛土の下部にも同様の土層がみられることから、側壁の構築と周溝の掘さく、盛土作業が交互に行われたものとみられる。

羨道部が構築された後、天井石が架せられるものと思われるが、奥壁の高さや現存の墳丘からみて横づみにした石材を一段程度おいた後、天井石を架したもので、また、床面から天井石までは1.2m~1.3m程度を測るものと思われ、約2mの盛土が推定される。羨道部は閉塞状況からみて元来現存の側壁上に天井石が架せられたのであろう。

玄室内には棺台に使用したと思われる礎石や釘類などの遺物もほとんど検出されていないために埋葬状況については不明である。墳丘中腹に検出された須恵器壺・甕が死者を葬る際においたものかどうかは不明であるが、今回調査された王城山C古墳群の中で多数の古墳で墳丘上に土器が検出されており、同じ葬送儀礼が行われたことが想像される。

墳丘上などから出土した須恵器から13号墳は7C前葉のものと思われる。

(橋本 久和)

14. 第 14 号 墳

1) はじめに

占 地

8・9号墳の北側に約10m, 13号墳の東側に約8m離れている。標高80mから81.5mにかけての斜面に占地している。この付近から15・16号墳にかけてが、当古墳群立地形中で最も傾斜が緩い。

調 査 経 過

10月9日～15日 9日に調査を開始する。同日のうちに石室を検出する。床面から耳環や紡錘車・鉄釘が出土する。石室主軸にそって3本のトレンチを設定し、墳丘上の表土を除去する。15日には墳丘面を検出し、石室清掃後写真撮影を行う。

10月16日～22日 3本のトレンチを完掘する。トレンチ断面図及び墳丘測量図を作成した後、前面の墳丘を除去する。両側墳丘中段より蓋杯が集中して出土する。

10月23日～11月11日 墳丘盛土を全て取り除き、最終的な写真を撮影する。石室実測をこの間に実施し、11月11日に全ての作業を終了する。

2) 墳 丘 (Fig. 55, PL. 71)

規 模

調査前に直径7.5m, 高さ1mの高まりを見せており、原形も小さかった。墳頂から南東に約3m離れた所に小規模な盗掘坑があった。周溝南東の山側に一部周溝が繞っていた。最深部でも深さは約10cmで、幅も狭い。

構 築 状 況 (Fig. ③)

平坦にした谷側造成面の上には山側平坦面と同レベルになるまで石室の構築と合わせて盛土している。このレベルで祭祀が行われたのか、北西の墳丘盛土上から土器が集中して出土している。その後全体を一挙に墳土を盛り上げている。

土 器 列

列状こそないが、北西側墳丘中より蓋杯・平瓶・壺が集中して出土し、南東側墳丘上には据え置かれた状態で土師器甕が出土した。

3) 石 室 (Fig. ③, PL. 71)

袖無単室の横穴式石室で、主軸をN-58°-Eに向けている。石室規模は Tab. 10 (p. 166)

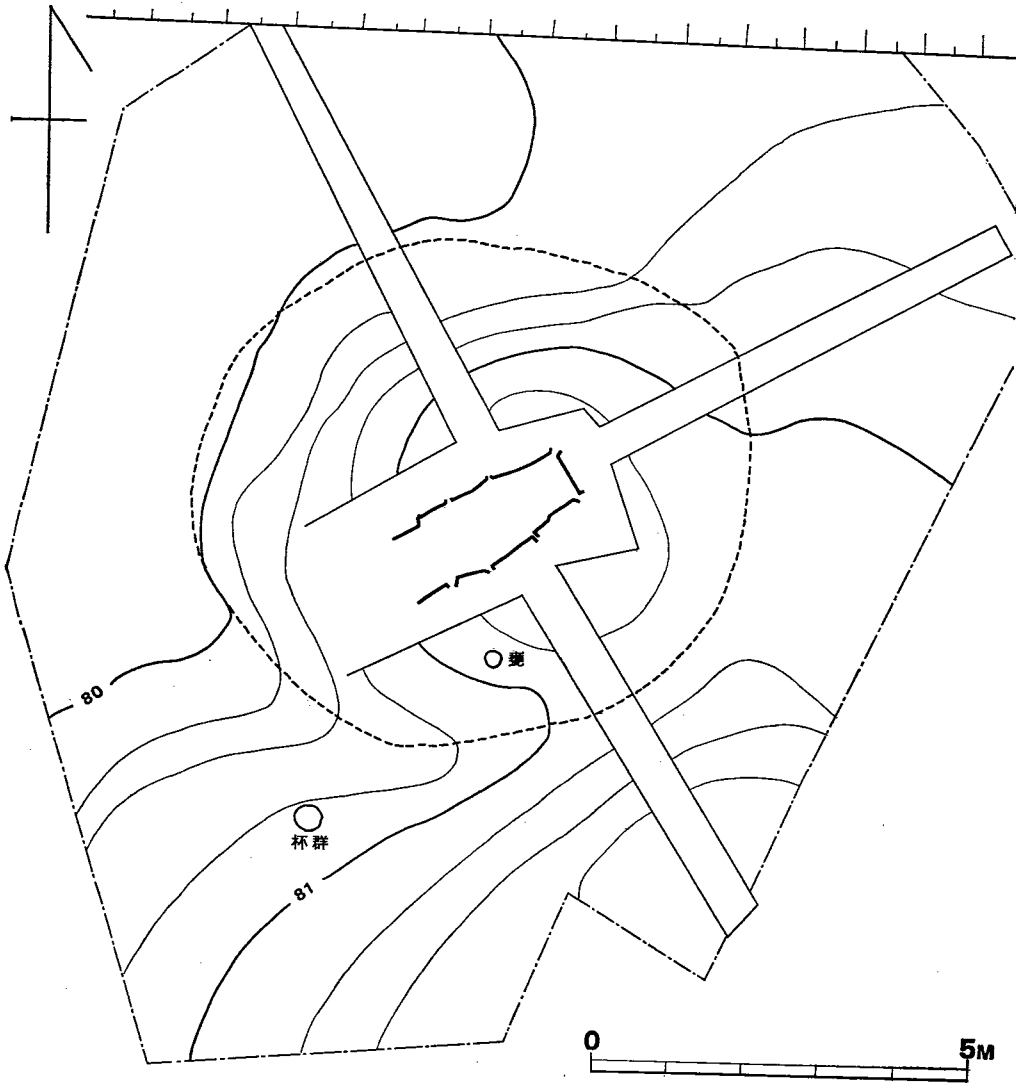


Fig. 55 王城山C14号墳墳丘測量図（縮尺 1/100）

の通りであるが、掘り方、石室共に長方形を呈している。つまり掘り方の奥幅は1.4m、中央幅は1.74m、石室の奥幅は68cm、中央幅は1mである。

墓道は約1.4m伸びており、その両肩に若干の石材を貼り付けている。墓道の床面は外方に向け傾斜している。

閉塞石の残存状態は良好であった。玄室と墓道の接点付近に、長軸を石室主軸と平行にした石を山積みし、上部に板状石を据えている。

4) 遺 物

出 土 状 況

玄室より金環 2 個, 紡錘車 1 個, 鉄釘 10 本前後出土した。墳丘中及び墳丘南側裾部出土の土器が多いが, 墓道埋土中や閉塞石間からも須恵器が出土している。

出土品を列記すると, 次の通りである。

(1) 装身具	金環	2 個
(2) 石 器	紡錘車	1 個
(3) 棺 材	鉄釘	12 本
(4) 土 器	須恵器	23 個体以上
	杯蓋	11 個体
	杯身	6 個体
	埴	2 個体
	平瓶	1 個体
	壺	3 個体
	土師器	2 個体以上
	壺	1 個体
	甕	1 個体

金環 (Fig. 56-1・2, PL. 72-1) 1 の径は 2.3cm, 2 は腐食のため若干身細りして径 1.7cm であり, 対にはならない。環部内側の金箔の残りは良い。

紡錘車 (Fig. 56-6, PL. 72-2) 粗悪な滑石製品で, 原石の自然脈が上下両面に残っている。上面径 3.0cm, 下面径 3.8cm の断面台形を呈する。

鉄釘 (Fig. 56-3・4・5, PL. 72-3) 断面方形の細身作りである。頭部は片側に叩き出している。全長は 6.0cm ~ 6.4cm である。

須恵器 (Fig. 57・58, PL. 72-4~74)

杯蓋 (Fig. 57-1~11) 1・2・9・11 が西北側墳丘中, 7・8・10 が墳丘南側裾部, 他は墓道の出土品である。かえりの付くものと付かないもの, つまみのあるものとないものがある。天井部の調整は 5 と 11 が丁寧である他は未調整か, 粗いヘラ削りを施したのみである。色調は 1・2 が赤橙色で, 8・9 は焼成が悪く灰白色である。11 は

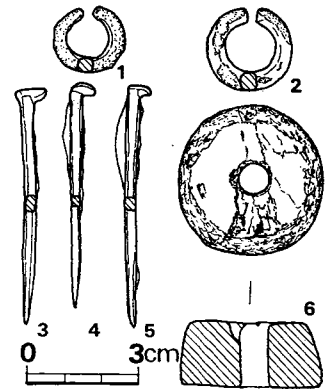


Fig. 56 王城山 C14 号墳出土耳環, 釘及び紡錘車実測図 (縮尺 1/2)

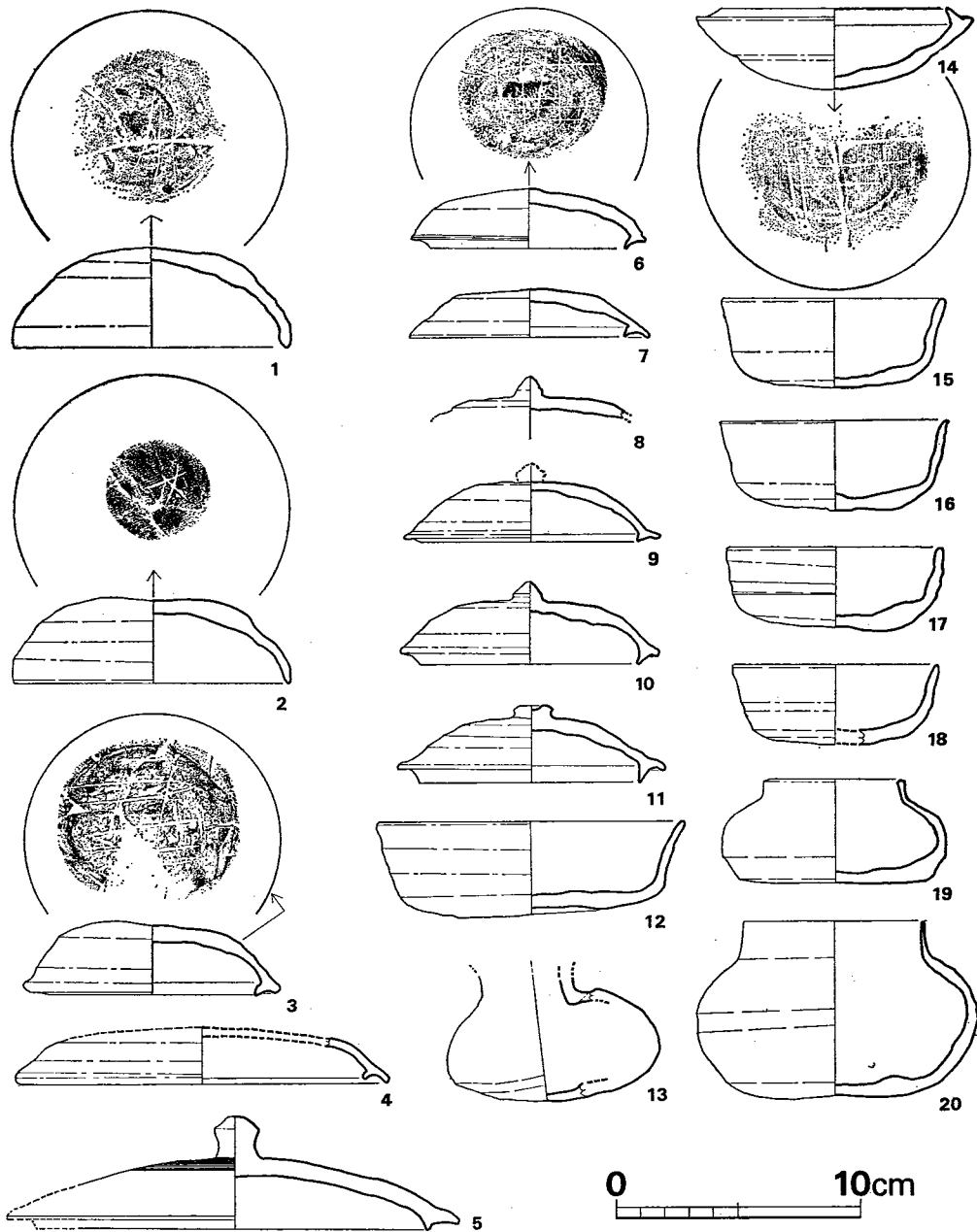


Fig. 57 王城山C14号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

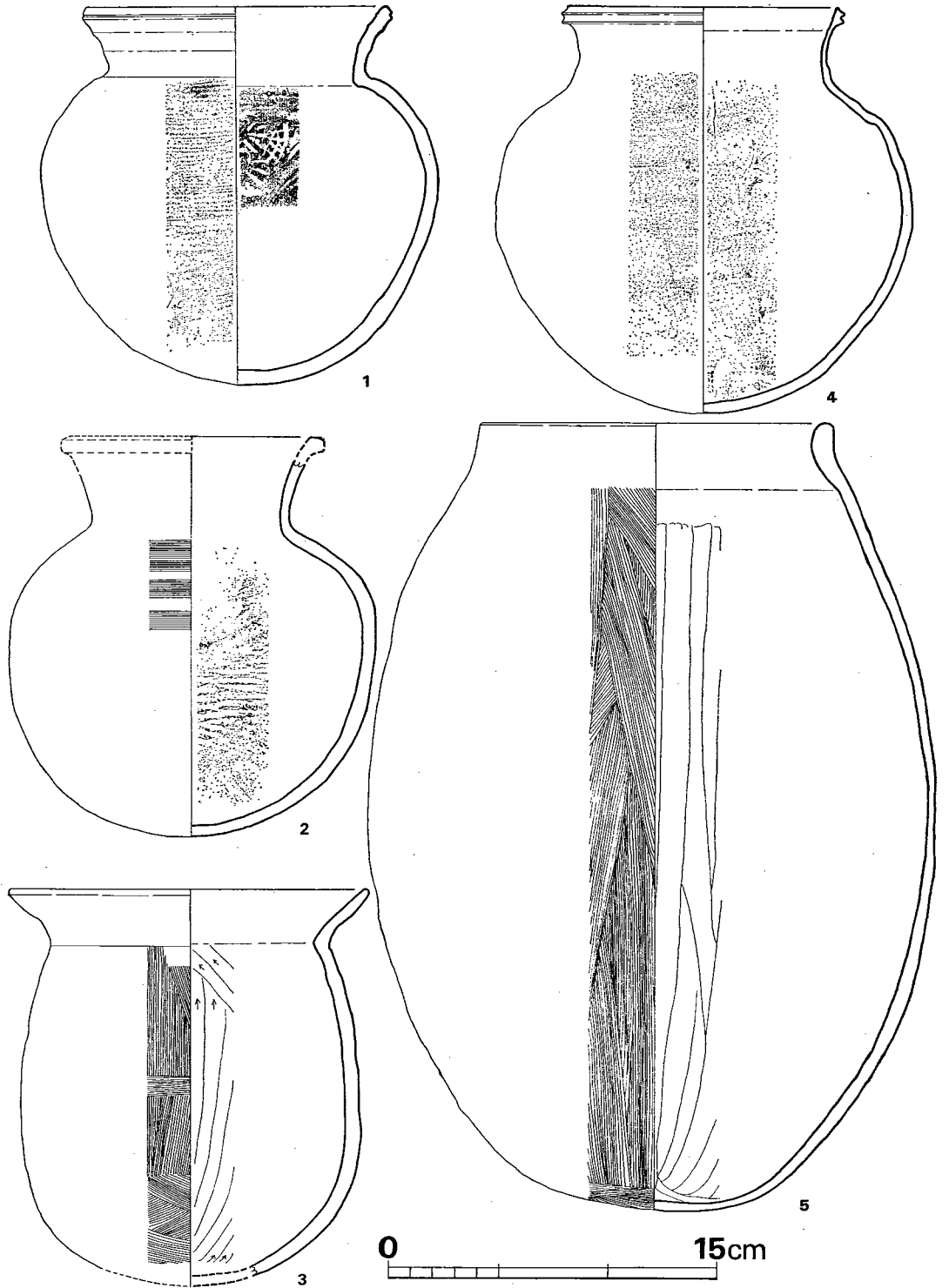


Fig. 58 王城山C14号墳出土須恵器，土師器実測図（縮尺1/3）

つまみの形状から高杯の蓋としたほうが良いかも知れない。

杯身 (12・14~18) 12が墓道, 14が北西側墳丘中の出土品で, 他は墳丘南側裾部の一括出土品である。14は底部をへら削りした上ナデしている。へら記号は杯蓋の3・6と同様格子状である。15~18の底部はいずれもへらで切り離したのみで未調整である。

罎 (19・20) 19は墓道埋土中, 20は墳丘南側裾部の出土品である。19の口縁端部は面取りしており, 底部は平坦である。下半は漆黒色, 上半は灰色を呈している。20の口縁は鋭く直立している。底部は幅の狭い工具で粗く削っている。色調は赤橙色で, 堅緻である。

平瓶 (13) 北西側墳丘中から出土した。小形で, 胎土中に砂粒が多く, 焼成は不均等で悪い。あるいはミニチュアではなかろうか。

壺 (Fig. 58-1・2・4) 1は南側墳丘裾部から出土した。口縁部に浅い一条の沈線を施している。肩部から底部にかけて叩文の上にカキ目を施し, 底部はその上をさらに丁寧にへらで削っている。内面は星状叩文の上ヨコナデしている。色調は黒色~灰黒色で硬質である。2は閉塞石間より出土した。胴部上半は叩文の上にカキ目, 下半は叩文の上ヨコナデしている。内面は同心円叩文の上ヨコナデしている。灰色~灰黒色を呈し硬質である。4は北西側墳丘中から出土した。薄手の作りで, 口縁部の稜は鋭い。体部は格子叩文の上をカキメ調整している。内面は同心円叩文の上をヨコナデしている。

土師器 (Fig. 58, PL. 74)

甕 (3・5) 3は墓道埋土中より出土した。やや下脹れし, 体部上半は縦, 下半は横位のハケ目調整を施している。内面はへらで削り上げている。5は南東側墳丘上の出土品である。短い口縁の内側がやや肥厚し, 端部は丸い。外面ハケ目, 内面へら削り調整である。

5) ま と め

調査の結果, 本古墳は径6.6m, 高さは床面より1.65mと推定された。石室は長方形を呈し, 幅が狭く, 1体分の棺を石室主軸と同一方向に置くスペースしかない。棺は鉄釘の出土より考慮して, 組合せ木棺であったろう。

玄室床面上出土の須恵器はなく, 追葬最終時期は決めがたい。閉塞石間や墓道出土の土器は追葬の際に掻き出されたものであろう。墳丘の南側裾部で一括して出土した土器は, 単に石室内から掻き出されたものではなく, 据え置かれたと考えられ, 送葬儀礼と何らかの係わりを持つてあろう。墳丘中出土土器群は築造当初のものと考えられる。以上のことから本古墳は7世紀中葉に築造され, 後半にかけて使用されたと考えられる。

15. 第 15 号 墳

1) はじめに

占 地

本墳は、東から西へと低くなる傾斜面上に位置する横穴式石室を内部主体とする小円墳である。西側には中央部から約17m隔てて12号墳が、南東側には、中央部で約10m隔てて16号墳が隣接している。また、本墳の背後（北東側）は、約9mで谷地へと急激に落ち込んでおり、古墳は存在していない。

現状における墳丘の最高所で、標高79.75mである。

調 査 経 過

調査は、昭和45年12月6日から25日までの20日間行なった。

調査前すでに盗掘、石取り等の破壊を受けており、墳丘も主体部も著しく変改し、墳丘中央部は大きく陥没していた。この中央陥没部の下部には、石室の壁石の根石にあたると思われる花崗岩の石塊がその一部をあらわしていた。

このような状況から、本墳は南西方向に開口する横穴式石室を内部主体とするものと推せられた。

そこで、調査はまず石室主軸に沿ってCトレンチ、Dトレンチ、石室主軸に中央で直交するAトレンチ、Bトレンチを設定した。それによって墳丘の規模、構築状態及び石室外郭の検出から始めた。その結果、A・B・Cトレンチでは、墳丘の裾部を画すと思われる浅い溝状の遺構が確認された。また、石室寄りでは、石室掘りかたが確認された。

次に3つのトレンチ（A・B・Cトレンチ）における石室掘りかたの状況をもとに、掘りかたの全ぼうの検出につとめた。

一方、石室の調査は、石室内に落ち込んでいる攪乱土の除去から始めた。壁石は、基底石を除いて、ほとんど持ち去られているが、根石だけは幸い各部分ともすべて残存していた。玄室内には、敷石による床面施設がなされ、副葬品も一部残っていた。写真撮影及び実測図作成の後、石室内の床面下の状況を調査した。

墳丘の調査は、攪乱を受けていない面まで全体に出し、あわせて溝状遺構を全体に検出した。この状態での実測図を作成して、全調査を終了した。

2) 墳 丘 (Fig. 59, Fig. 69, PL. 75~77)

規 模

本墳は、傾斜角度5~10度の東から西へ下がる傾斜面を利用して構築されている。このた

め、墳丘は石室入口側からは実際に積み上げられた盛土以上に大きく見える。墳丘の周囲には、石室入口前を除いて、浅い溝状の遺構が馬蹄形状にめぐっている。この遺構は、墳丘東南側から北東側にかけては明瞭であるが、北西側では傾斜面を「L」字状に削り

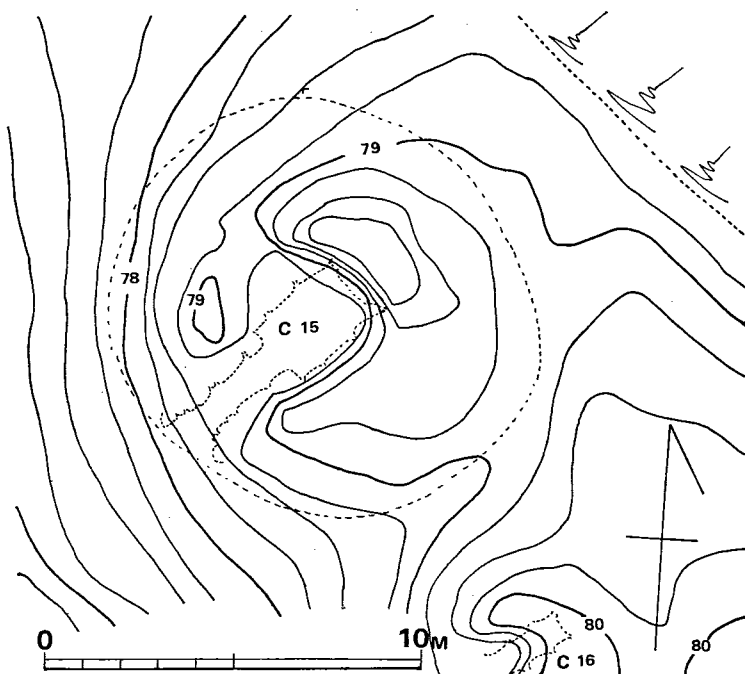


Fig. 59 王城山C15号墳外形実測図 (縮尺1/200)

おとしており、溝の外側の立ちあがりほとんど認められない。溝の規模は、東南側で幅約1.6m、深さ約25cmであり、北東側では幅約1.8m、深さ約20cmである。

このような状況からして、この遺構は、周溝と考えるよりは、むしろ、単に墳丘の外郭を画すだけのものであり、あわせて地山の整形により墳丘の基礎を成したものとえよう。

この溝状遺構の墳丘側の掘り込みの部分を墳丘裾部として計測するならば、東南から西北にかけてで径約8.7mである。

墳丘の高さは、石室床面を基準とするならば、奥壁背後で現存約1.85m、羨道付近で約1mであるが、多くは石材の抜取り等に際して崩されてしまっていると思われる。

構築状況 (Fig. ㉙)

墳丘の盛土は、石室に接する中心部寄りでは、念入りになされているが、周囲はやや雑である。トレンチ断面によれば、石室の壁石と直接接する部分の土(第4層)は、全体としては同質の土であるが、適当な間隔をおいて細い縞状の帯が観察される。また、この部分の土は、周囲にくらべて、とりわけ堅くしまっている。これらのことからして、この土が石室の補強としての裏込め的な機能を果たしていることが推察される。また、壁石の積みあげとその部分までの盛土との作業が交互に繰り返され、石室の完成にまで到ったものと考えられる。

3) 石 室 (Fig. ④・④, PL. 78~82)

石室は、両袖型の横穴式石室である。あらかじめ、傾斜面に、石室の規模に即して、約 $6.5\text{ m} \times 3.5\text{ m}$ 、深さ奥壁寄りで 1.5 m 、羨道入口付近で 0.5 m の掘りかたを穿ち、石室を構築している。掘りかたの底面は、玄室部では壁石の設置される部分が、中心部より約 30 cm 深くしており、壁石の安定化に供しているが、羨道部分では中心部も壁石の設置される部分も同高である。

石室床面は、掘りかた底面に玄室奥壁寄りで約 20 cm 、羨道部で約 50 cm の盛土をおこない、玄室部では、さらにその上に花崗岩の板状の小石による敷石を行なってつくられている。床面の盛土には、大きく 2 段階の工程が見られる。まず、掘りかた底面のうち、もっとも低い羨道部寄りに一定の盛土(第Ⅱ層)をして、ほぼ水平な面をつくった後、さらに石室内全体に $20\sim 40\text{ cm}$ の盛土(第Ⅰ層)をおこなっている。

石室は、大きくは羨道部と玄室部とからなる。さらに細かく見ると、羨道部に存する 2 つの境石(石室入口寄りより順に第Ⅰ境石、第Ⅱ境石とする)と玄室入口の両袖石により 4 つの小部分に分割されている。第Ⅰ境石から第Ⅱ境石までの間は^{註1}填塞がなされており、第Ⅱ境石より奥部に敷石による床面施設が存している。我々の発掘時には、玄室内に約 $100\text{ cm} \times 40\text{ cm} \times 10\text{ cm}$ の花崗岩の粗板状の石が、両袖石に長辺の一辺を接し、平の面を上下にして存していた。この石の下には、 $2\sim 3\text{ cm}$ のサラサラした土を間に敷石が存することや、石の長さがほぼ羨道奥幅 (87 cm) に近いこと、またこの石を袖石側におこすと、そのまま両袖石にもたれて、立て掛けられることから、当初は埋葬空間である玄室部を明確に画していた閉塞石が倒れたものと思われる。

石室壁材として使用されている石は、すべて花崗岩であり、いわゆる割石を用いている。石室内に面する部分には平な面を出して、たくみに矩形プランを構成しているが、他の部分は多少の凹凸がある。

玄室部では、両側壁はほぼ同大(長さ 1 m 前後、高さ 80 cm 前後)の石三石を横位に据えて根石としている。これらの石のうちには、その下に^{じきょう}地形のための小石をおいて、高さや水平の調整を行い、あわせて壁石の安定をはかっているものが多い。

奥壁は、主要部分を大石 1 石(約 $130\text{ cm} \times 140\text{ cm}$)で占め、これと左側壁とに生ずる間隙を^{註2}縦長の石(約 $80\text{ cm} \times 30\text{ cm}$) 1 石でうめている。

玄室入口部は一辺約 60 cm のほぼ立方体に近い石を両側にすえ、袖石としている。

これら玄室部を構成する根石(あるいは、それをささえる^{じきょう}地形の石)は、すべて掘りかた底面に直接据えられている。

次に、羨道部では、右側壁は袖石より二石目の石までは、玄室部の側壁基底石とほぼ同大のものであり、やはり掘りかた底面に直接据えられている。これより手前(石室入口寄り)は大略

人頭大の石により壁を構成している。またこの部分から石室入口に行くにつれ羨道幅は急激に広がり、入口部では、約2倍となる。この部分の根石は、掘りかた底面より約15cm上の盛土上（第Ⅱ層上面）に据えられている。この羨道右側壁における区切れ目は第Ⅰ境石の位置とも一致しており、石室構造上のポイントとなる部分と考えられる。

羨道左側壁は、石室入口部に至るまで直線的にのびており、石材の使用法にも右側ほどの顕著な特徴は見られない。ただ、石室入口寄りの壁石のほうが幾分小さめである。

石室の閉塞は、羨道部の小石による填塞と、玄室入口の板状の石による閉塞の2ヶ所が認められる。

羨道部のものは、前述したように、第Ⅰ境石から第Ⅱ境石までの間を、主として小児の頭大の花崗岩自然石を用いて填塞している。填塞の奥部の限界を示している第Ⅱ境石の上には55cm×30cm×20cmの板状の石と35cm×20cm×20cmの石が立て掛けられて、填塞の小石をささえるように置かれている。

これら填塞に用いられている小石を取り除くと、その下から第Ⅰ境石より約50cm奥寄りにもう一つの境石（第Ⅲ境石）が確認された。この第Ⅲ境石は、本石室の最終使用時にあっては、何等機能を果しえないものであることから、前段階において何等かの役割を果していたものと考えられる。

これら三つの境石の設置状況であるが、第Ⅰ境石は、第Ⅰ層中に底面を置き、石の上半分は床面上に露出している。第Ⅱ境石は、下部は第Ⅱ層中に及び、上面のみが床面上にあらわれている。第Ⅲ境石は、第Ⅱ層上面に設置され、その上面のみが床面上にあらわれている。これらからするなら、第Ⅱ境石と第Ⅲ境石は、ほぼ同様の設置状況にあるのに対し、第Ⅰ境石は、これらとは異なる設置状況にある。

次に石室床面を基準としての、石室各部の計測値をかかげる。

玄室長（右）	281	単位cm
（左）	266	
玄室幅（奥）	182	
（前）	178	
袖幅（右）	61	
（左）	47	
羨道奥幅	87	
A（Fig. 60）	556	
B（"）	446	
C（"）	182	

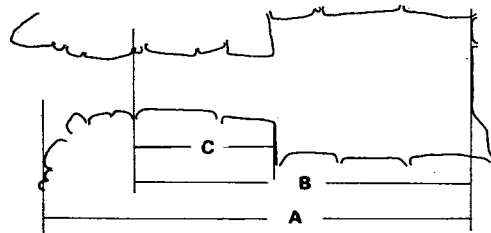


Fig. 60 王城山C15号墳石室計測位置図

4) 遺 物 (Fig. 61~64, PL. 83・84)

出 土 状 況 (PL. 81-1)

石室が大部分破壊を受けているのと相俟って副葬品もほとんど残っていなかったが、床面の破壊が及んでいなかった玄室入口寄りに幾分の遺物がかるうじて存していた。

玄室前左隅からは鉄鏃が約11本、束ねられた状態で出土した。また、須恵器杯破片が約5個体が玄室左袖付近にまとまって出土した。その他、石室中央部から金銅製耳環、銀製耳環各1個が出土しているが、原位置を保っているものとは考えがたい。

石室外では、羨道入口から左側へ約2.5mのほぼ墳丘裾にあたると思われる位置から須恵器壺の破片が2個体分出土している。また、この地点からやや墳丘上部に寄った地点からも、この壺に属する破片が幾分出土していることから、おそらく本来は墳丘上に置かれていたものが転落したものと考えられる。

出土遺物の種類及び数量を列記すると、次のようである。

- | | | |
|---------|-------|-------|
| (1) 装身具 | 金銅製耳環 | 1個 |
| | 銀製耳環 | 1個 |
| (2) 武器 | 鉄鏃 | 11本 |
| | 須恵器 | 8個体以上 |
| (3) 土器 | 杯蓋 | 3個体 |
| | 杯身 | 2個体 |
| | 壺 | 2個体 |
| | 新羅土器? | 1片 |

耳環 (Fig. 61-1・2, PL. 83-1・2)

金銅製のもの(1)は、2.5cm×2.2cmの長円形を呈しており、厚さ0.4cmを測る。銀製のもの(2)は、2.8cm×2.7cmとほぼ正円形に近く、厚さは0.2cmと細い。

鉄鏃 (Fig. 61-3~6, PL. 83-3・4)

鏃の数よりするならば、少なくとも11本以上が出土している。すべて柳葉式であるが、鏃の大きさから次の3種類に分かれる。

- ① (3) 鏃の長さ2cm, 幅約1cm,

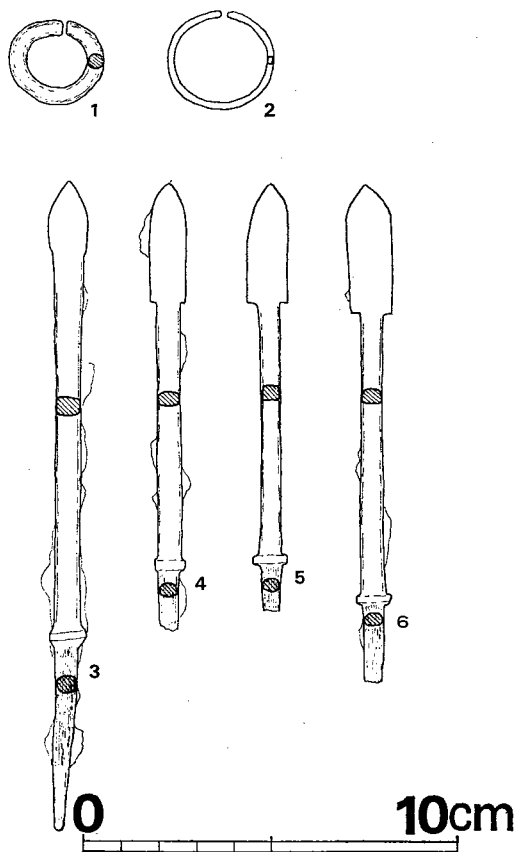


Fig. 61 王城山C15号墳出土耳環、鉄鏃実測図 (縮尺1/2)

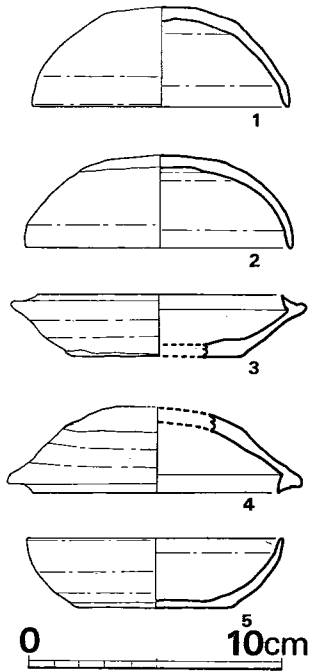


Fig. 62 王城山C15号墳出土須恵器杯実測図 (縮尺1/3)

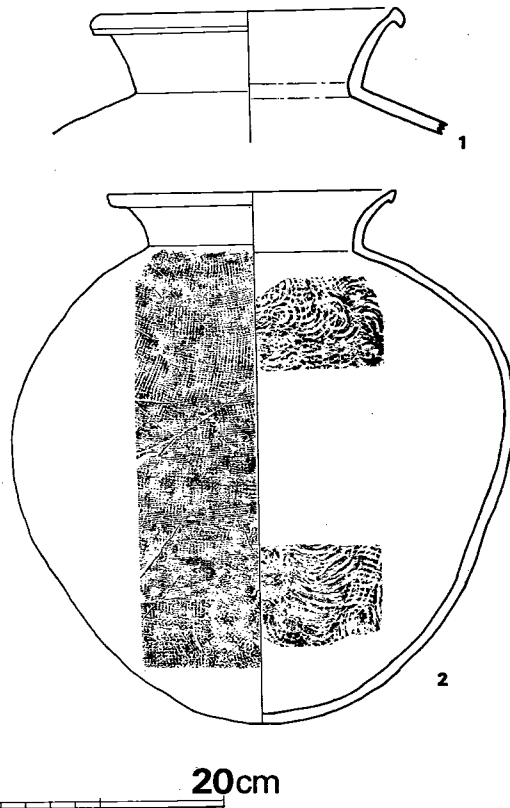


Fig. 63 王城山C15号墳出土須恵器壺実測図 (縮尺1/6)

全長は約17.5cmであり、茎部は約5cmである。

② (4・5) 鋒の長さ約3.2cm, 幅約0.9cmを有する。全長は約15cm (復元値) である。

③ (6) 鋒の長さ約3.8cm, 幅約1.2cmを有する。全長は約15cmであり、茎部は約5cmである。

須恵器 (Fig. 62・63, PL. 84)

杯 (Fig. 62)

身と蓋の区別がきわめて困難なものであるが、底部 (蓋の場合は頂部) の形態, 調整技法などから底部をヘラ調整により平底につくっているものを身とし, 頂部が山形をなしているものを蓋とした。

杯蓋 1・2は口径10.2~10.5cm, 器高3.7~4cmを測る。頂部にいたるまでヘラ削りが施されず, 体部との継ぎ目を明瞭に残したままである。色調は灰色を呈し, 焼成はあまりよくない。頂部外面に「×」字状のヘラ記号を有する。4は身受けを有する以外は, 形態, 調整技法など1・2と類似している。口径10.6cm, 最大径11.6cm, 器高3.4cmを測る。受け部のたちあがりは

0.8cmと短かく、内傾している。頂部に1・2と同一のヘラ記号を有する。

杯身 3は蓋受けを有し、口径9.6cm、最大径11.6cm、器高2.7cmを測る。受部のたちあがり
は0.4cmときわめて短かく、内傾している。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。底部は、
ロクロ静止後のヘラ調整により平底に仕上げている。底部と体部との継ぎ目を明瞭に残してい
る。5は口径10.1cm、器高3.8cmを測る。蓋受けを有していないこと以外は、形態、調整技法
など3と類似する。両者とも底部に「×」字状のヘラ記号を有する。

1・2と3・4と5が、それぞれセット関係をなすものと思われる。

壺 (Fig. 63, PL. 84) 1は口径25.2cmを測る。頸部は外彎し、口縁部は外側に折りまげ
られている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。頸部外面に「ニ」字状のヘラ記号を
有する。

2は口径23.3cm、最大部径40cm、器高42.4cmを測る。最大部径
は胴部中心よりやや上部にくる。暗灰色を呈し、焼成は良好であ
る。頸部及び口縁部は横ナデを施している。胴部以下の部分で
は、外面は全体に叩きしめた後底部付近を除いた全体にカキ目調
整を施している。内面は全体に青海波文を残している。

新羅土器 (Fig. 64) 羨道入口前から、須恵器片に混じって出
土した破片であり、本墳に直接結びつくものかどうかは明らかで
ない。器面には径0.7cmの同心円文が並んでおり、その同心円のおのおの端部から4条の沈線
が外方へフリーハンドでひかれている。器厚は0.4~0.5cmである。

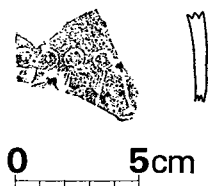


Fig. 64 王城山C15号墳
出土新羅土器実測図
(縮尺1/3)

5) ま と め

(1) 構造上の特色

すでに破壊により古墳の大部分を失ってしまっていたため、立体的な埋葬空間としての姿は
知るすべもないが、調査により得られたデータを基に構造上の特色について若干考えてみた
い。

まず、本石室にあっては、第I境石の位置が構造上の大きな分岐点になっていることが、壁体
の構造や石室填塞の範囲などから知られる。さらに、この分岐点を石室全体における機能的側
面から見ると、この第I境石より以奥をもって本来的な石室とし、第I境石より前の部分
は石室入口に到るまでの前庭的な空間としてあったと考えたい。羨道部における壁体の状況か
ら見て、小石により不安定な盛土上に積み上げられ、しかも急激に幅を広めていく第I境石よ
り前の部分に天井石が架構されていた可能性は薄い。第I境石より奥部に填塞が行われている
こととも相俟って、この部分を石室入口と考えるのが最も妥当といえよう。

広義の石室最前部(上述した前庭状壁体の最前部をさす)は、現状ではあるが傾斜よりみた

墳丘の限界点とも一致していることから、墳丘裾部より石室入口に到るまでの両側に、墳丘の傾斜に合わせて壁体のみ築かれたのであろう。

次に、石室と溝状遺構、広義の石室最前部との位置関係からするならば、墳丘の中心は玄室の中心と一致していることが推せられる。玄室の中心から石室最前部までの距離と奥壁背後及び石室左右の墳丘裾部までの距離は、ほぼ等距離（約4.5m前後）にある。この4.5mという数値は、第Ⅰ境石より奥壁までの長さ（本来の石室長にあたる）約4.5mに同じであり、本墳の墳丘規模が石室長を基準とし、径約9mの円墳として築造することが企図されたと考えられよう。

（2）原企画と使用尺度の推定

横穴式古墳は一種の建築的構造物であり、その築造に際しては、あらかじめ綿密な設計企画が存在したであろうことはつとに解明されているところであり、その実施にあたっては大陸伝来の尺度が使用されたこともまた明らかにされている。

本墳の築造に際しても、一定の原企画と尺度の使用があったことは、先に述べた石室と墳丘の相関や石室、墳丘の計測値から予測されるところである。

本墳の石室の各計測値について高麗尺、唐尺による換尺値を求めると次表（Tab. 8）のようになる。

上述の結果からするならば、本石室が唐尺において比較的安定した数値が得られることが知られるのである。とりわけ、構造上最も安定した数値が得られやすい玄室前の玄室幅、羨道幅、両袖幅において、唐尺では、それぞれ整数値あるいはその $\frac{1}{2}$ に近似の値が得られることは、唐尺使用の可能性を決定づけるものといえる。

この結果をもとに、原企画を想定するならば、右表（Tab. 9）のような復元値が得られる。

次に墳丘については、先に石室全長を基準にした径約9mの円墳として構築されている可能性が強いと見た。上述の結果より、石室全長は15唐尺と考えられ、これより墳丘は径30唐尺=5尋=9m（1尋=6尺=180cm）の復元

	計測値	高麗尺*	唐尺*
石室長(中央)*	446cm	12.7428尺	14.8666尺
玄室長(左)	262	7.4857	8.7333
玄室長(右)	281	8.0285	9.3666
玄室奥幅	182	5.2000	6.0666
玄室前幅	178	5.0857	5.9333
右袖幅	61	1.2571	1.4666
左袖幅	47	1.3428	1.5666
羨道奥幅	87	2.4857	2.9000
羨道長(中央)*	182	5.2000	6.0666

*高麗尺1尺=35cm, 唐尺1尺=30cmとする。
石室長は奥壁より第Ⅰ境石まで、
羨道長は玄室入口より第Ⅰ境石までである。

Tab. 8 高麗尺・唐尺換算表

	計測値	復元尺	復元値
石室長	446cm	15尺	450cm
玄室長	262(左)	9	270
玄室幅	178(前)	6	180
袖幅	44(右)	1.5	45
羨道幅	87(奥)	3	90
羨道長	182	6	180

Tab. 9 王城山C15号墳石室の想定原企画

値が得られるのである。

(3) 構築年代について

先の考察の中で、本墳は唐尺使用による構築であることがほぼ明らかとなった。我国への唐尺の伝来については、その時期を7世紀中葉以降に求めるのが、今日^{註7}にあっては一応妥当な線として考えられているのであり、この通説に従う限り、本墳の築造時期が7世紀中葉を大きくは期り得ないといえる。

一方、本墳より出土の須恵器とりわけ須恵器杯について、当地方においてほぼ確立されている小田富士雄氏の編年大系に照らすならば、口径が約^{註8}10cmと小型化していること、ヘラ削りの手法が用いられなくなっていること、底部を平底につくることなど、第IV型式に含められるものと考えられる。第IV型式の実年代については、7世紀前半の時期が求められており、使用尺度よりする年代観とは幾分の矛盾を示している。

福岡県を中心にした近年の横穴式古墳の調査の中で、唐尺使用の可能性の強い古墳も徐々に指摘されてきており、^{註9}今後の資料の増加の過程でよ

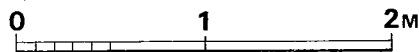
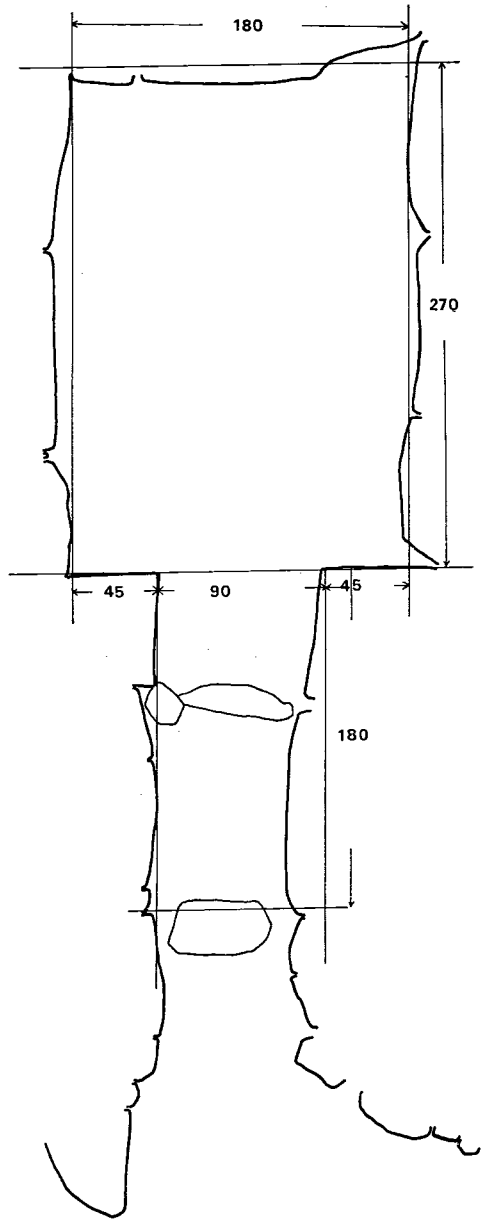


Fig. 65 王城山C15号墳石室プランと推定原企画の適合状態 (縮尺 1/40)

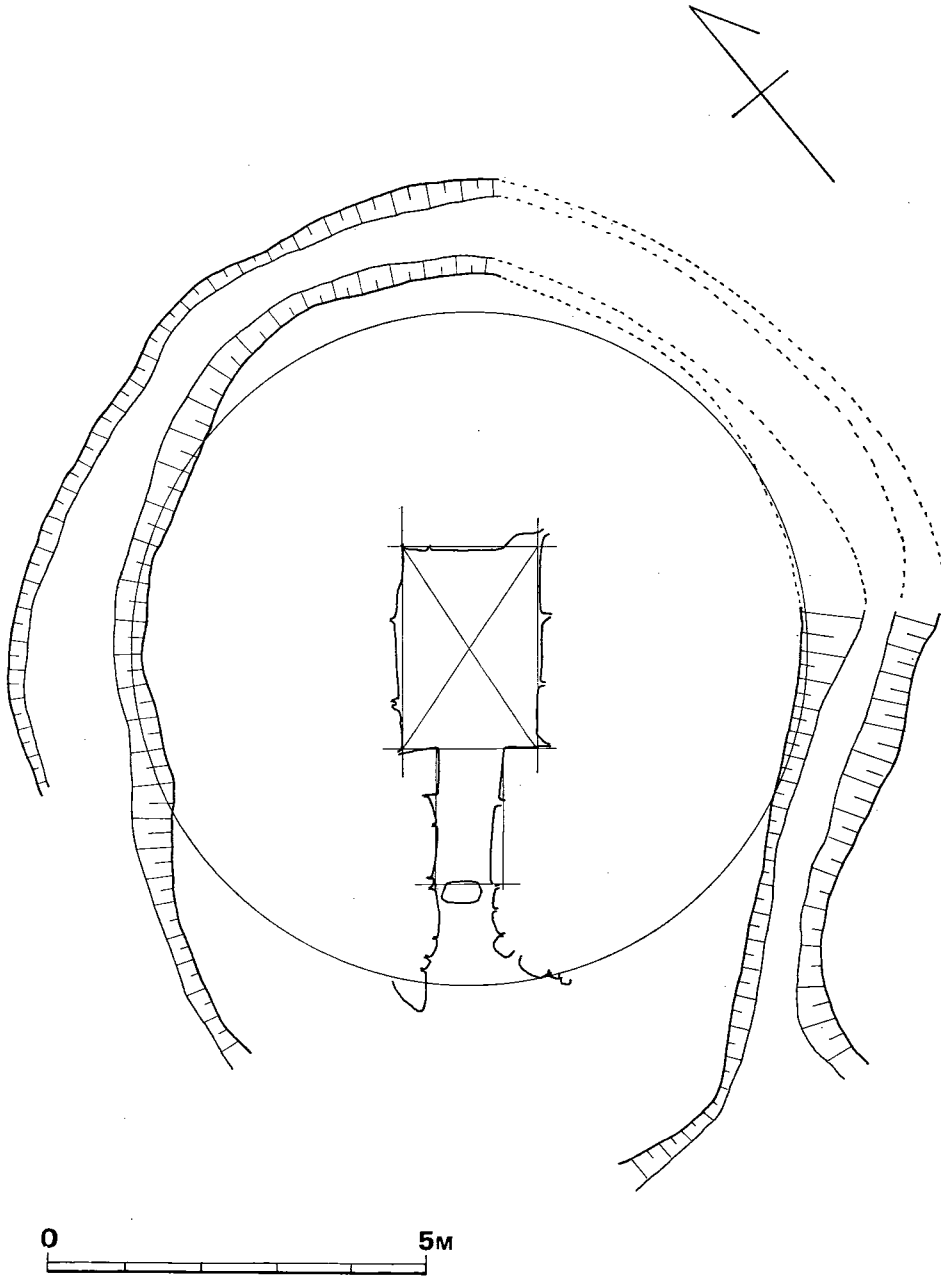


Fig. 66 王城山C15号墳墳丘復元図（円の径は9m=30唐尺）（縮尺1/100）

り明確な実年代が得られることと思われる。

わが国における唐尺使用の上限について、7世紀中葉をさほど朔り得ないことを確信する筆者の立場からするならば、本墳の構築年代は一応7世紀中葉以降としておきたい。

(右島 和夫)

- 註 1 小石により一定空間を閉ざすものを、主として一石の石で空間を閉ざす「閉塞石」と区別するため「填塞」の語を用いる。
- 2 石室入口より奥壁へ向っての左右である。以下、これに準ずる。
- 3 この種のものについて、日本製とする意見(田辺昭三『須恵』1975)もあるが、一応従来の呼称に従っておく。
- 4 横穴式石室における前庭については、松本浩一氏が最近論及されておられるが、そこで扱われているものは必ずしも本例が同一のものではないので「前庭的」としておいた。松本浩一「群馬県における横穴式石室の前庭について」『古代学研究』80号1976。
- 5 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1966。石川正之助「総社二子山古墳前方部石室の平面構成について」『考古学雑誌』54-4 1968。
近年柳沢一男氏が九州における横穴式古墳について精力的に取り組んでおられる。
柳沢一男「石室平面図形の企画について」『片江古墳群』1973。「横穴式石室平面図形の検討」『相原古墳群』1974。「北部九州初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』1975。
- 6 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』P.186-210。
- 7 註6に同じ
- 8 主として次の文献によった。
『野添・大浦窯跡群』1970。
『塚ノ谷窯跡群』1969。
『立山山窯跡群』1970。
- 9 例えば片江7号墳(柳沢一男他『片江古墳群』1973)、八隈3・5・8号墳(酒井仁夫他『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』1976)等が唐尺使用の可能性あるものとして指摘されている。

追記

C15号墳の石室・墳丘の構造、使用尺度の推定方法については後出「C12, 15, 16号墳補考古墳の構築と尺度」を参照されたい。玄室平面構成に $\sqrt{2}$ を、墳丘平面構成に2円を用いていることを気づいたのでその説明を加えて置いた。(尾崎)

16. 第 16 号 墳

1) はじめに

占 地

16号墳は、王城山C古墳群の北東側で落ち込む谷に近く、墳丘の中央部は、15号墳の中央部から約10m南東に離れた所にある。16号墳の石室入口付近の墳丘裾部の標高は約79.5mであり、15号墳の同じ地点での標高は約78mであって、両者の高さを比べると16号墳の方が1m強高い。そして、16号の墳丘は、その北西部で15号墳の東南部の裾と相接するように位置し、南裾は、王城山C古墳群を形成する尾根の北縁近くを西から東に向かって登る林道開さくのため、平坦化されている。本古墳は、尾根が南東から北西に流れる斜面上に造られた、所謂山寄せ古墳である。そして、篠藪を荊りとした後の丘陵斜面上に小さな墳丘を現わしていた。その中央部には北東から南西方向にかけて陥没した個所がみられ、主体部が崩落していることが外観で、はっきりわかる状態であった。墳丘の形状は円形をなし、円墳と予想された。

調査経過

発掘調査は、昭和45年12月16日から12月25日までで、17日・23日を除く8日間に実施された。

調査にあたっては、石室の主軸線と推定される方向に幅70~80cmで直線状のトレンチを設定し、奥壁の後方に伸びるものをCトレンチ、羨道前に伸びるものをDトレンチとした。さらに、C及びDトレンチに直交するように、左壁後方にAトレンチ、右壁後方にBトレンチを、ほぼ同幅で直線状に入れた。発掘の結果、Dトレンチが、左壁に寄ったため、主軸線と若干のずれを生じたが、Aトレンチ・BトレンチとCトレンチ・Dトレンチとが十文字に石室及び墳丘を切るようにした。加えて、Dトレンチ・Aトレンチの間にEトレンチ、Aトレンチ・Cトレンチ間にFトレンチ、Cトレンチ・Bトレンチ間にGトレンチの3本の補助トレンチを入れた。Bトレンチ・Dトレンチ間は林道によって切られているため調査しなかった。つまり、石室を中心に7本のトレンチを放射状に入れたのである。羨道入口部においては、Dトレンチの調査後、それと直交するトレンチを入れ、入口付近の地層の状態を観察した。

石室内は、精査後、床面を主軸線に沿って右壁側半分を割り、床面下構造を調べた。また、墳丘については、溝の有無の判定・墳丘基盤面の確認・盛土の観察後、盛土を剥ぎ、墳丘基盤面及び、溝を全面発掘し、墳丘の構築・墳丘と石室の構築との関係等について追求した。

2) 墳 丘 (Fig. 67・68, Fig. ㉔~㉕, PL. 85)

まず、A・B・C・D・E・F・Gの各トレンチ断面の層序を観察し、溝の有無の確認、墳

丘構築時の基盤面の判定、盛土の状態について検討した。

各トレンチ断面にみられる地層を上から順に、第1～第5層に識別した。第1層は粒子の細かい黄褐色土（第1-1層）及び暗褐色土（第1-2層）、第2層は黒色土、第3層は粒子の荒い赤褐色土（第3-1層）及びやや黄色味がありしまっているもの（第3-2層）、第4層は砂礫を含み、粘性があつて固くしまった黒色土（第4-1層）及び粒子の細かい黄褐色土（第4-2層）、第5層は礫を含む固くしまった赤褐色土である。

これらの地層の状態で注目されることの第1は第2層の堆積のしかたである。第2層は、第4層の上面を凹状に掘り込んだ三日月状の中に堆積しており、黒色を呈している。そのため、黄褐色の第4層上において、その存在が明瞭である (Fig. ④)。ちなみに、各トレンチでの第

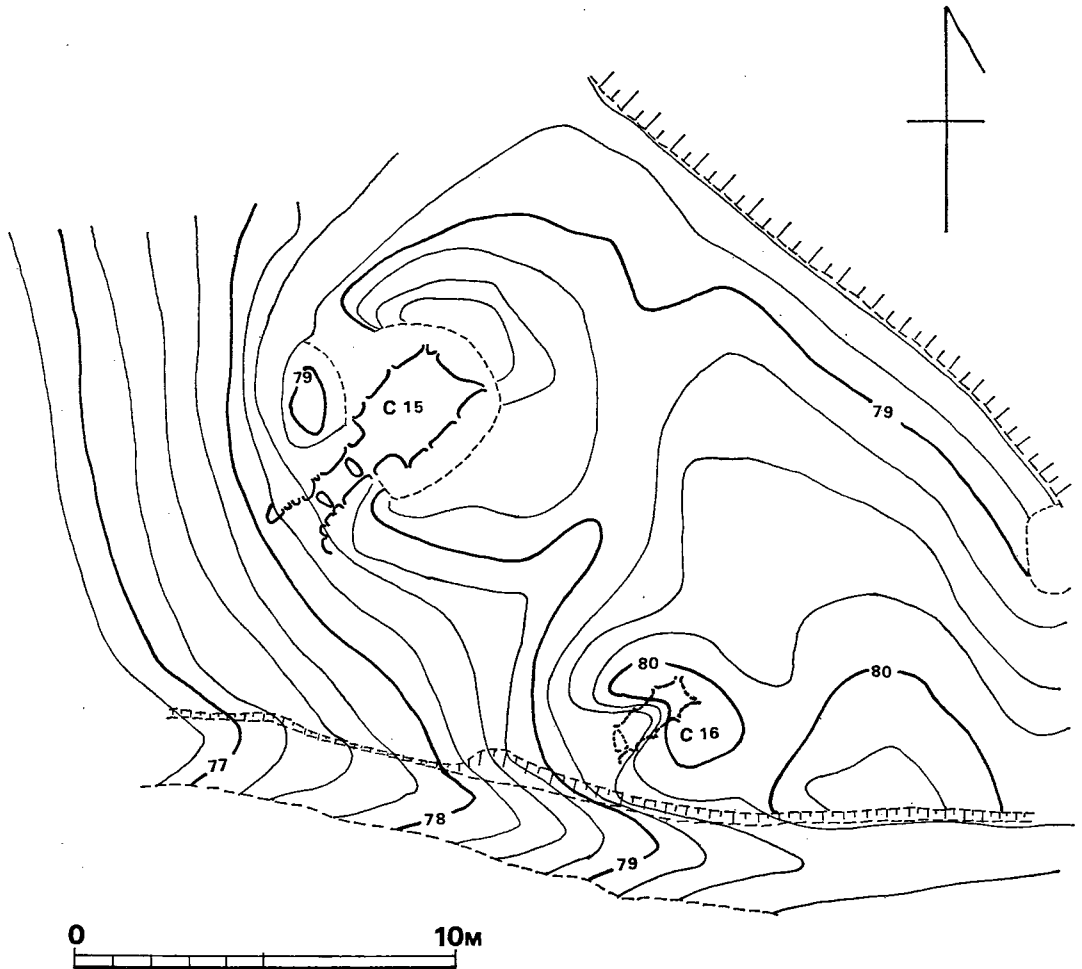


Fig. 67 王城山C16号墳外形実測図 (縮尺 1/200)

2層の計測値を示すと次のとおりである。Aトレンチでは、上端幅60cm、下端幅20cm、深さ18cm。Bトレンチでは、一部切断されているが、上端幅50cm以上、下端幅35cm以上、深さ12cm。Cトレンチでは、上端幅135cm、下端幅65cm、深さ20cm。Eトレンチでは、上端幅100cm、下端幅50cm、深さ17cm。Fトレンチでは、上端幅100cm、下端幅30cm、深さ20cm。Gトレンチでは、上端幅110cm、下端幅50cm、深さ60cmである。いずれのトレンチにおいても、第2層は、上端幅100cm前後、下端幅40cm前後、深さ20cm弱であって、黒色土がしばしばつまっている。しかも、この第2層の位置は石室埋葬部からほぼ等距離の墳丘の裾部である。このことから、第2層の黒色土は、墳丘の裾を第4層に掘り込んだ溝に埋まった土と判定された。したがって、本古墳には、第4層を掘り込んだ溝が墳丘裾をめぐっていることが確認された。なお、羨道前に伸びるDトレンチでは、第4層を掘り込んだ中に第3層の堆積がみられるが、上端幅50cm、下端幅20cm、深さ15cmで、位置・形状からしてこれも同様な溝の一部と解される。

第2に注目されることは、墳丘裾で溝を形成する第4層上面に注意してみると、石室にかかるとA・B・Cの各トレンチにおいて、第4層が、石室の近くで壁石の根石の底部のところまで掘り込まれていることである。この掘り込みは、第4層に続く第5層をも切断していて、石室を造る際に、第4層上面から掘り込んで壁石を設置したことを示している。第4層上面は、A・BトレンチではBからAトレンチへ、すなわち、南々東から北々西に約5°傾斜し、C・DトレンチではCからDトレンチへ、すなわち、東北東から西南西に約6°傾斜している。第5層もほ

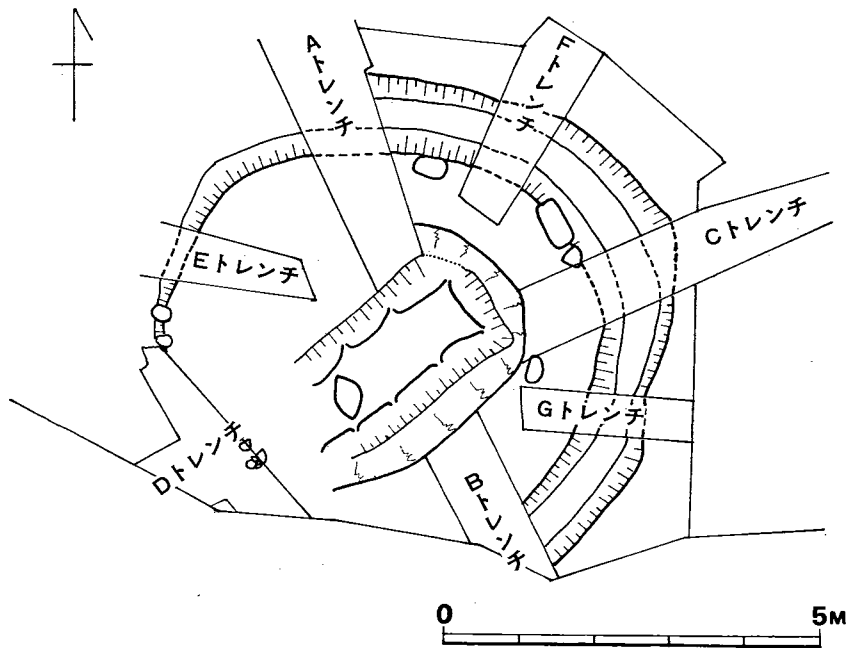


Fig. 68 王城山C16号墳基盤面実測図 (縮尺1/100)

ほぼ同様な傾向をたどっていて、第4層・第5層とも堆積状態は自然のものともみられた。以上のことから、丘陵の自然傾斜面の第4層が本古墳構築の基盤となっていることが判明した。

第3に、盛土についてみると、第4層を基盤とすると、それより上の土が盛土ということになる。第4層より上の土は、第1層がほとんどであるが、部分的に第3層が薄くみられる。第3層は、明らかに盛土を構成する土であり、第1層もおおかた盛土であろうが、若干問題を含んでいる。第1層は、盛土として石室上を覆いながらも、溝を埋める第2層上にも15~40cm積り、さらに墳丘外へも堆積しているからである。溝上あるいは、溝外へ第1層が流出しているのは、ひとつには永年風雨にさらされて自然に崩れ出したことにもよろう。しかし、そればかりではない。後世において、盗掘や石の抜き取りが行われた際に起こった現象と思われる。石室については後述するが、大方、根石しか残存せず、下から2段目以上が消失している。そうした現状からすれば、2段目までの石を動かすために、当然、そこまでのレベルの盛土も移動させているのであり、第1層はそうした上方の石の掘り出しの際にも墳丘外へ及んだと考えるべきであろう。このため、第1層は墳丘外へ流れ出ているだけでなく、攪乱も受けている。だが、築造時の盛土とその後の攪乱部分との判別は、層序が明確でなく、定かではない。そうしてみると、部分的にみられる第3層は、盛土の旧状をわずかにとどめているものとみられよう。

次に、墳丘の構築状態をより明確にするため、盛土を全面的に除去する作業を進め、基盤層を露出させた。その結果、基盤である第4層及び溝の状態がより明確となった。

基盤第4層は、およそ、東から西の方へ下る丘陵の自然傾斜面と同様に傾いている。その傾きは、石室に近いところで 5° ~ 6° で墳丘の東端、南端では 20° ~ 25° の角度で下がっている。この構築基盤は、石室のある中央部ではやや平坦になり、石室のまわりで楕円形の掘りがたを形成して掘り込まれている。第4層は現状においても多少の傾斜をみせているが、中央部付近の状況から、若干、削って地ならしをしているとも考えられよう。

全体の形状は、墳丘の南側の一部が林道によって切られているものの、明らかに円墳と確認できた。また、トレンチ調査時、および盛土除去時に石が何個か出土したが、これらは石室の石が転落したものや抜き取られたものと思われ、列石や葺石と認められるものはない。また、土器列もない。

溝は、墳丘の東側から北側をめぐる、西側まで円墳の4分の3ほど確認できた。残り4分の1は切られて不明である。溝は、前述の各トレンチでの計測値とほぼ同じ傾向で墳丘の裾をめぐる。そして、基盤第4層の傾斜に合わせて傾斜しており、ちなみに、各トレンチの位置での溝底のレベルを比較すると、次のとおりである。仮りに、Bトレンチ付近での溝底のレベルを0として、Bから北まわりに比高を列記すると、Gでは-12cm、Cでは-10cm、Fでは-49cm、Aでは-44cm、Eでは-65cm、Dでは-67cmである。以上のように、東から西に向

かって傾斜しているようすがわかる。一番高いBトレンチ付近と、一番低いEトレンチ・Dトレンチ付近との差は60cm以上あって、平均20cm弱の溝の深さを勘案すると、この溝に水が湛えられたとは考えられない。つまり、空堀である。

墳丘の規模は直径約525cm前後（ややいびつな円形のため計測個所によって多少異なる）で、溝の外側の上端まで含めて計ると、7m前後となる。墳丘の高さは現状の一番高いところで、基盤面上約80cmであって、比較的低い。天井石まで架構されていた構築時はさらに高かったと思われるが、どれほどに達していたかわからない。

以上のことから、本古墳の墳丘は、第4層の基盤面を中心として、それを掘り下げて石室を設置し、周囲を円形に浅く掘りくぼめて溝としてから、溝を境として基盤上に盛土を積み上げて構築していることが判明した。

3) 石室 (Fig. ④③・④④, PL. 86~88)

調査前から、石室と推定されるあたりが南北方向に落ち込んでおり、壁石・天井石などの崩落が予想されたが、土を除いた結果、やはり石室の破壊は著しかった。これは自然に崩壊したものではなく、人為的に石が抜き取られ、荒らされたものである。

内部主体は、ほぼ南西に開口する小さな横穴式袖無型石室である。石室主軸の方向はS-53°-Wである。中ほどに柵石があるため埋葬部と羨道部の区別がつく。

石室各所の計測値を示すと次のとおりである。

◇埋葬部（石敷面上の数値）

幅	奥幅	77cm
	中央幅	75cm
	柵石埋葬部側での幅	78cm
長さ	左壁長（柵石奥壁側まで）	172cm
	（柵石中央部まで）	190cm
	（柵石羨道側まで）	217cm
中央長	（柵石奥壁側まで）	167cm
	（柵石中央部まで）	190cm
	（柵石羨道側まで）	200cm
右壁長	（柵石奥壁側まで）	168cm
	（柵石中央部まで）	190cm
	（柵石羨道側まで）	210cm

◇羨道部（推定床面上の数値）

幅	柵石羨道側での幅	72cm
	入口幅	計測不能
長さ	中央長（柵石奥壁側まで）	183cm

(柩石中央部まで)	160cm
(柩石羨道側まで)	150cm
◇全 長	
中央長	350cm
◇床 面 レ ベ ル	
埋葬部石敷面上面	標高約78.73m
羨道部推定床面	標高約78.83m
埋葬部羨道部レベル差	10cm

石室に使用されている石は花崗岩の自然石である。山から採出してきた割り石とでもいうべきもので、割り口の平らな面を巧みに石室内に向けて揃えている。

石室内は現状で、奥壁が根石1石、右壁（奥壁に向かって右手の側壁をいう。以下これに準ずる。）が最下段のみ奥壁から柩石方向に4石、左壁が最下段3石と上方へ積んである石4石で計8石。埋葬部底部には敷石がびっしり敷かれ、羨道との境には柩石が1石配されていた。奥壁は下幅80cm、高さ35cmのほぼ三角形で平らな面を石室内に向けており、その厚さは約20cmほどである。左右両壁は、いずれも1段目の根石に比較的大きな石を使用し、およそ(40～50cm)×(60～80cm)の面を石室内に向けている。いずれも形状はそれぞれ異なるが、左右ほぼ同じくらいの大きさで、同じくらいの高さに揃えられ、相対するように3石ずつ奥壁から柩石にかけておかれている。いずれも石室内にほぼ平らな面が出るように置かれ、しかも下端より上端の方が石室内寄りに少し内傾させてある。また、奥壁は左右両壁の一番奥の石によって両側から挟み込まれた形で設置されている。このことから、奥壁が置かれた後に、左右両壁がそれに接して置かれたことがわかる。

柩石は、およそ40cm×60cmで上端は奥壁から3石目の左右両壁に接している。壁石が下から上へ向かって狭ばまるように傾斜をつけられていることからして、柩石の設置も、左右両壁の根石の設置より先と見るべきであろう。

根石の上に壁石がどのように積まれ、天井石がどのように架せられたか、その全貌は不明であるが、その一部分は左壁の奥壁寄りで見ることができ、ここでは、2段目、3段目と上へ行くにしたがって徐々に小ぶりの石になっていく。石積み法は、これら主となる石のすき間に小礫を詰め込み、自然石の乱石積としている。そして、根石自体の設置に傾斜をつけただけでなく、2段目、3段目と上へ行くにしたがって、しだいに、石室内部に石をせり出させて傾斜を強める。所謂持ち送りの手法を取り入れている。

床の構造は、奥壁・柩石・左右両壁で囲まれた埋葬部の狭い平面に小礫がびっしり敷き詰められた石敷面となっている。それぞれの小礫は平らな面を上にし、しかも隣接する礫との間にあまり間隙を作らないよう工夫して敷いてある。石の大きさは、奥壁寄りのもので35cm×18cm

乃至30cm×15cm程度、梱石寄りのもので5cm×10cm乃至7cm×8cm程度で、奥壁から梱石に向かって漸次小ぶりになっている。その総数は約80石である。

羨道は破壊がひどく、壁石の根石もほとんど残っていないので入口の状態も定かではない。しかし、羨道一帯にみられる多くの石が終わるところには、2石上下に積まれた石があり、その石の下には小石が4石みられる。また、これらの石の奥壁からの距離とほぼ等距離の左壁延長上には20cm×20cmの面を石室内に向けた石がある。そして、Dトレンチ断面には、墳丘の周囲をめぐる溝が、これらの石のすぐ外にみられ、この付近が入口部であったことを示している。

羨道には閉塞石らしいものが梱石の上面とほぼ同レベルのところまでみられる。しかし、壁石が失われている現状からすれば、閉塞石も旧状のままかどうか疑わしい。閉塞石らしき石を除いたが、埋葬部でみられたようなみごとな石敷は検出されない。が、凹面状の掘りがたが埋葬部方向から入口部まで続いているのが認められた。

つづいて、石室が墳丘基盤上にどのように設置されているか調査を進めた。

墳丘構築の基盤である第4層は墳丘の中央部で、楕円を描くように摺鉢状に掘りくぼめられ、さらに壁石の根石を置くところでは垂直に切り込まれている。つまり、掘りがたは2段階に切り込まれていることになる。その深さは、第4層上面から底まで、約60～70cmである。こうして、基盤面を掘った底に奥壁・梱石・壁石の根石などを据えたり、敷き石を敷き詰めた石敷面を設定したりしている。壁石裏側と掘りがたとの間にできた間隙には、直径10～20cmの小石を底に詰めて壁石を定安させている個所も見うけられる。これも一種の裏ごめであろうが、石室外部に石積みを施した、所謂裏ごめ被覆といわれるようなものではない。簡単な裏ごめも施していない個所は、単に土を埋め戻しているだけである。

埋葬部の石敷面下は、第4層と第5層の混ざったやわらかい土があり、さらに、その下には地山の第5層がみられた。これは、石室構築のため第4層から第5層にかけて掘り込んだあと、第4層・第5層の混土を水平にならして石を敷き詰めたものようである。そのため、前述のとおり、墳丘基盤は傾斜しているが、石敷面はほぼ水平に構築されているのである。

この石敷面上には、平均数cmほどの土が積もっており、その上には30cm×15cmの比較的大きな石から小石に至るまで約20片ほどの石がみられた。これらの石は奥壁から左壁寄りにかけて存在した。石の付近には、須恵器片が3片あって、石敷面上数cmのところ土・石・土器などでひとつの面を形成しているかのようなようであった。

床面を造る場合、石敷面上に土を置き、玉砂利などを敷いて床面とする例がある。しかし、本石室の場合は、石敷面上数cmの面を床面として考えるには難点がある。それは、この面のレベルが一定でないこと、遺物は墳丘上から落ち込んだものとみられること、左壁から奥壁よりにかけてみられる石は天井部や壁石などが崩落したものとみられること、盗掘・攪乱を受けているとみられることなどの理由による。したがって、石敷面上の土は石といっしょに墳丘から

崩れ落ちた土とみるべきであろう。

基盤上に築かれた石敷面が、そのまま死者埋葬時の床面であったか、あるいは、さらに玉砂利や土などを敷く作業を行なって床をこしらえたかは確認し得なかった。

石室内の埋葬空間は非常に狭く、埋葬部を平面プランで見ると、大人ひとりが伸展葬されると、長さ・幅ともいっぴいになる広さであり、立面で見ても、現状で左壁4段目までみられるが、それ以上あと何段も積めないと思われる。この石室は規模のごく小さい単独葬用のものである。

4) 遺 物 (Fig. 69, PL. 89-1・90)

出 土 状 況

石室内からは、埋葬部から3点出土している。いずれも須恵器甕の小破片であって、出土地点は、左壁寄りで奥壁から2石目あたり、石敷面上数cmのところから出土している。羨道内からの出土はない。

墳丘盛土中からも小破片が何点か出土している。墳頂部付近に大甕の破片がみられ、DトレンチとEトレンチの中間の墳丘裾部では、杯蓋が5個体分以上みられた。この中間点からは他に、須恵器甕片、新羅焼片、土師器片などがあり、墳丘各所に少しずつ散在している。DトレンチとEトレンチの中間地点は、羨道の壁石が抜かれているなど破壊が著しいので、羨道部に置かれたものが散乱しているという可能性もないわけではない。いずれにしても、墳丘出土の遺物は、小破片が残存するのみで、大方は散逸しているので原位置のものではなからう。

なお、墳丘出土の甕の破片と埋葬部出土の甕の破片とは同一個体のものと推察される。

出土遺物を列記するとつぎのとおりである。

土 器	須恵器
	杯(蓋・身) 2個体と5破片以上
	甕 1個体分以上
	新羅焼 1片
	土師器 3個体分以上

(小破片のうへ磨耗著しく詳細不明)

須恵器 (Fig. 69, PL. 90)

杯蓋(1・2) いずれもDトレンチとEトレンチの中間点出土。1は、口径11.7cm、器高3.8cm。口縁部では軽く内彎した立ち上がりを見せ、稜線を作って上面へ傾斜していく。上面は、ゆるやかな丸味を帯び、篋による回転痕がみられる。その中心部には、浅くヘラ記号が施されている。灰白色を呈し、胎土・焼成とも比較的よい。2は、口径11.3cm、器高3.5cm。口縁部から丸味を持ちながらもほぼまっすぐに立ち上がっている。上部は、平坦で篋による回転痕がみられ、その中心部にはヘラ記号が施されている。灰青色を呈し、胎土中には多量の小石

粒を含んでいる。厚手で焼成不良。

杯身(3・4) いずれも口縁部のみで詳細不明。3は、Fトレンチ出土。内傾した立ち上がりを見せ、その高さは1.3cm。灰青色。胎土・焼成ともに良好。4は、墳頂付近出土。内傾した立ち上がりがわずかに外反する。その高さは1.1cm。灰青色。胎土・焼成とも良好。いずれも蓋受け部に浅い溝をめぐらしている。

甕(5~8) 5~7は埋葬部出土。8は墳頂付近出土。いずれも大きな甕の一部とみられる。5と6は別個体らしいが、7と8は同一個体の可能性が強い。また、5あるいは6が、7・8と同一個体になるかもしれない。7・8には叩文がみられる。灰黒色で胎土・焼成とも

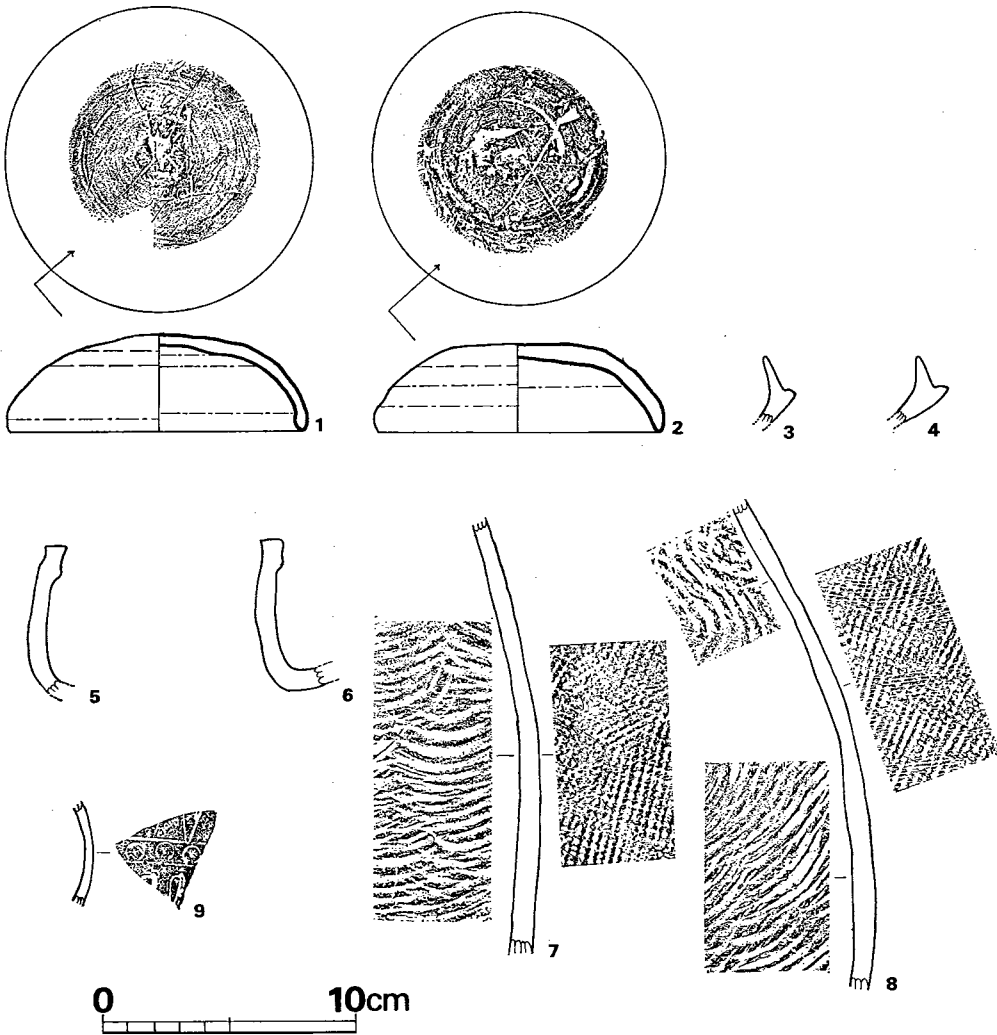


Fig. 69 王城山C16号墳出土遺物実測図(縮尺1/3)

良好。

新羅焼片(9) 器型は不明である。薄手で、幾何学的模様が認められ、所謂新羅焼といわれているものようである。

5) ま と め (Fig. 70・71)

以上の事実にもとづいて、埋葬状況・尺度による企画の問題・築造年代等についてふれてみたい。

まず、埋葬状況についてであるが、盗掘等のため確かなことはわからない。しかし、石室規模は単独葬用に造られており、築造の段階で単独葬を意図していたものとみられる。被葬者がどんな体格の人であったか知る由もないが、成人とすれば、その人の身長・肩幅からして、被葬者と壁石との間にはほとんどすき間もないほどである。それゆえに、副葬品も埋納するにも小物に限られたであろう。しかし、石室内に意図的に置かれた状態で発見された遺物はないので、その実体は明らかではない。

つぎに、尺度にもとづく企画設計の問題であるが、データを整理し、図面を検討した結果、墳丘ならびに石室において、一定の企画の存在が認められそうである。

はじめに、石室の使用尺度の割り出しを試みた。横穴式石室には大別して1尺が約35cmの高麗尺と約30cmの唐尺が使用されていると考えられているが、本古墳では、いずれが使用されているかということである。分析に先だって、念頭においておかねばならないことは、用材として、自然石の割り石が使われているということである。比較的平らな面を埋葬部に向けてセットしているもののその面は凹凸が激しく、截石切組積石室のごとく精巧な造り方でないので、ぴしっとした平面企画が求めにくく、計測場所による数値の変動がかなりある。自然石の凹凸

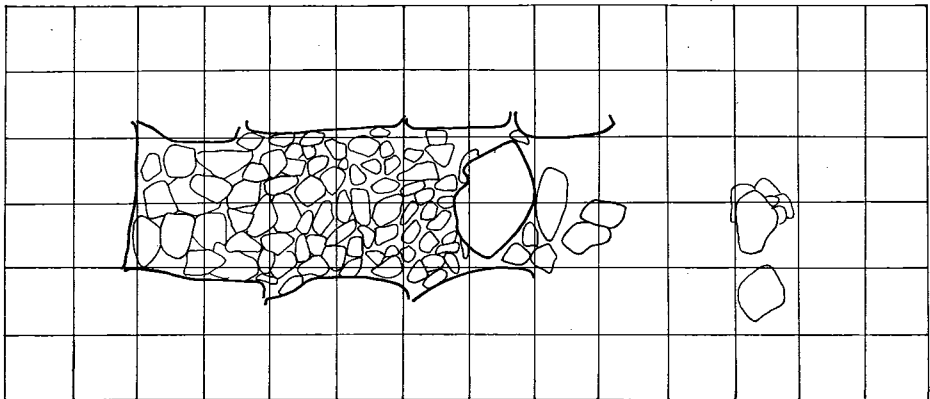


Fig. 70 王城山C16号墳石室平面図と高麗尺による方眼操作 (11尺=35cm)

を承知しつつ、尺度使用の有無を検討する必要がある。

そこで、石室の計測値を羅列すると、埋葬部の奥幅77cm、中央幅75cm、柵石の埋葬部側付近での幅78cm、といずれも幅は70cm強の値を示しており、長さは全長350cmである。これらから、幅も全長もほぼ1尺 \equiv 35cmの高麗尺の倍数になっていることがわかる。換尺値は幅2尺、全長10尺であり、全長は完尺である。さらに、羨道と埋葬部とを区画する柵石はその埋葬部寄りの位置で奥壁からほぼ5尺になる。したがって、柵石を羨道の一番奥の端とする形で両者をちょうど2分の1の長さに分けている。

つづいて、高麗尺1尺 \equiv 35cmとした方眼を作図・トレースし、石室平面図上に重ね合わせてみた。重ねるにあたって、奥壁の線に縦の操作線を合わせ、柵石付近で横の操作線が左右両壁に一致するようにして石室平面図にのせた。その結果は、Fig. 70 に示すとおりである。最初にことわっておいたように、用材が自然石のため、石そのものにかかなりのゆがみがあり、端の方がすばまっているため、方眼操作線上に完全に一致しないのはむしろ当然であるが、各壁石が、2尺 \times 10尺の操作線の近辺にあって、高麗尺使用の石室であることをほぼ裏づけている。

しかし、これのみでは理論的に脆弱であり、一步進めて墳丘に及ぼしてみた。

墳丘は「尋」によって築造されたことは、大化2年の所謂薄葬令にもみえ、築造にあたっての基本単位とされたことは十分考えられる。1尋を高麗尺でみれば5尺、実長で約175cmに相当するのではないかと考えられている。^{註2}そこで、1尋を175cmとした方眼を作図・トレースして、墳丘掘りかた面の

実測図に重ね合わせ、その適合関係を検討した。石室の主軸線を方眼の操作線上に合わせてみたが、うまく合っていない。墳丘基盤図 (Fig. 68) をよく見ると、溝の立ち上がりの外周線が部分的に弧でなく直線状になっているのに気がつく。そこで、直線状になっている部分を方眼の操作線に一致するよう重ね合わせてみた。その結果は Fig. 71 に示すとおりである。この位置でみると、溝の外周

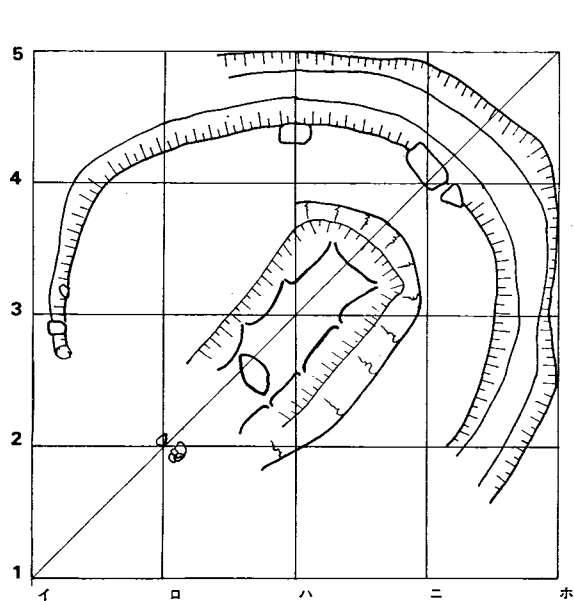


Fig. 71 王城山C16号墳墳丘基盤面平面図と尋による方眼操作 (1尋=高麗尺5尺=175cm)

の立ち上がりの線が、4尋四方の方眼操作線上にはぼあってくると同時に、墳丘の他の部分も、操作線とよく合ってくる。石室の主軸線は4尋四方の方眼(1・イ)から(5・ホ)の点を結ぶ対角線と一致し、しかも、もうひとつの対角線(1・ホ)(5・イ)との交点は、だいたい埋葬部の中央付近に位置する。そして、石室は、その掘りかたを含めて、中心部の2尋四方の中におさまり、羨道入口部が(2・ロ)の点にくる。また、溝の上端幅は、 $\frac{1}{2}$ 尋を意図しているようにみえる。

溝外周の立ち上がりの線を見ていくと、(2・ホ)～(4・ホ)間、および、(5・ニ)～(5・ロ)間は直線的に伸びており、その直線的な線と線の間を弧状につないで円型としていることがわかる。したがって、埋葬部の中央が円の中心となる円墳とみられるものの、正円とはならないのは、1点を中心にコンパス状のもので描いた円ではなく、4尋を1辺とした正方形を基本形として、そのかどを弧状に丸めて円としたからであろう。試に、(3・ハ)の点にコンパスをあてて2尋を半径とした円を描いても溝の外周線とはうまく一致してこないし、1.5尋を半径とした円も墳丘裾である溝の内周線と一致してこない。

さらに、この位置での方眼の縦軸線に着目してみると、磁北とのずれが約11度である。磁北と真北との偏角が西に数度ふれているといわれていることを勘案すれば、操作線がほぼ真北に近い位置をさしているといえよう。上述のように、方眼をこの位置で重ね合わせると、石室も含めた墳丘の尺度による企画がもっとも鮮明になってくる。したがって、方位測定の多少の誤差・方眼を重ねる位置が絶対的なものでないことなどの疑点も残るが、墳丘の地割りにあたって、北の方位を意識していたことも十分予想される。

そうしてみると、16号墳は、論証の手順として、石室から墳丘の企画へと解明を進めてきたが、企画の実際は、埋葬主体である石室の設置法を主にプランニングしたとしても、尺度を使用した墳丘全体の企画の中に石室も位置づいていたというべきであり、総合的な企画である。墳丘のその使用尺度は、高麗尺5尺を1尋とした「尋」である。

そこで、使用尺度にもとづく原企画を復元してみるとつぎのとおりである。

4尋四方の正方形をほぼ南北の線にそって設置し、その正方形におおむね内接する円をもって古墳をめぐる溝の外周とする。円は正方形のかどをまるめて円にした不整円である。当初の正方形の対角線の交点付近を埋葬平面の中心とし、主軸の向きは北東の頂点と南西の頂点を結ぶ対角線とし、南西方向に開口させる。墳丘の径は4尋＝高麗尺20尺、以下、溝幅 $\frac{1}{2}$ 尋＝2.5尺、墳丘盛土の径は3尋＝15尺、石室全長2尋＝10尺、埋葬部1尋＝5尺である。すなわち、1尋の人長が、基準となった〈埋葬部長〉、その2倍の〈石室全長〉、3倍の〈墳丘盛土径〉、4倍の〈溝を含めた墳丘全体径〉といった具合に人体の大きさを基準とした設計構想が大きくクローズアップされてくるのである。

最後に、本古墳の築造年代についてふれてみたい。

石室が寸法上竪穴式古墳の慣用の単独葬用であり、袖無型の横穴式石室であって、高麗尺を使用して構築していることなど、叙上の諸点を総合してみると、本古墳の築造年代は6世紀後半頃に比定されると思われる。

また、出土遺物の年代も九州地方の編年^{註3}に照らせば、おおむねこの時期に該当するものであり、構築方法からみた年代と、出土遺物からみた年代とに、さほど大きな矛盾はないものとみられる。

(石川 克博)

- 註 1 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1966年
第1篇 第3章 第7節 尺度による構成
2 同 上
3 小田富士雄『塚ノ谷窯跡群』八女市教育委員会 1969年

17. 第12・15・16号墳補考

古墳の構築と尺度

王城山古墳群第12・15・16号墳調査の考察について付加する。

古墳は、従来は遺物によって編年されていた。濫掘・盗掘等により、一括遺物が得がたいこと、出土品の数や量が少ないこと、或は皆無であることなどは、編年をさまたげていた。元来、古墳は死者の墓なのであるから、墓は必要に応じて作られるものであり、作られてから移動されるものでもなく、大体が作られた状態を維持して、現存しているものである。因って墓自体に編年の要素を求むべきものであろう。

横穴式古墳において、石室、ことにその玄室は、古墳構築上、まず着手され、墳丘に及び、埴輪配列などに至るものと考えられるので、この玄室の構築を基礎とし、石室・墳丘を併せて編年の要素を求めてみた。企画からはじまり、経始・根石の設置・石の積上げ・封土の盛上げ、埴輪の配列といった順序に行なわれたことであろう。古墳調査の間に気づいたことは、石室平面の企画・用石の加工度・墳丘平面の設計等の発展についてであったが、その終局は使用尺度の検出である。それらのいずれにも編年の要素は含まれているので、それらを併用した。

さて、尺度の求め方については、叙上の三古墳とも、すでに35cm・30cmの二種の長さの基準が求められたものとして、考察を行なっている。しかし、群馬県内では、それで通るであろうが、新しい、然も遠く離れた九州においては、誤解される恐れがある。この二種の基準の長さをその地で求め、たしかめた上でなければ、あてはめるのは危険である。

構築上、設計・経始・築造の順序に実施されたであろうが、その工程のそれぞれに誤差が生じていることは推定される。また、現時の調査において、実測・製図の段階で、同様に誤差が起り得る。したがって、考察においては、なるべく確実な実測図にもとづいて行なわれることが必要である。

そこで第15号墳を例にあげて説明してみよう。第15号墳の平面図が比較的完形に近いし、複雑な設計・工程を経ているものと思われるからである。

まず、玄室の長さとお幅の実測値を並べて見たが、共通の完数值を求めることは困難である。そこで試みに左測長266cmとお幅182cmをとって、その比の値を見た。左測長は奥幅の約1.4倍である。

玄室平面方形の作図には、①幅の正整数倍を長さとしたものと、②幅と長さに予め完尺値をあてたものがある。①の場合は長さとお幅との比の値は言うまでもなく正の整数であり、②の場合は、①の場合を除いて、小数となる。しかし、②のように小数となる場合に、作図のみによって、幅に対する長さがおきめられたものも存在している。幅を一辺とした正方形の対角線の長さを開いて、求める長方形の長さとしたものである。幅の $\sqrt{2}$ の長さを利用したものである。

試みに、第15号墳の奥壁につけて、その幅を一辺とした正方形を作り、その対角線を、左奥隅角を基点として開くと、左前隅角にほぼ一致する。長さは幅の1.4倍であり、幅の $\sqrt{2}$ 倍である。作図にあたり、 $\sqrt{2}$ を利用したものと言えよう。したがって、奥幅の数値に使用尺度の整数倍が一致することになる。

さらに石室各部分の実測値をとると、羨道奥幅は90cmで、奥幅の $\frac{1}{2}$ である。奥壁から羨道内の玄室寄りの境石の中心まではほぼ330cm、同じく羨道入口寄りの境石の中心まではほぼ450cmである。石室中軸線上で、奥壁下の中点から、奥幅を一辺とした正方形の中点までは90cm、奥壁下から玄室寄り境石までの330cmから、奥幅182cmを除いた残りはほぼ150cm、奥壁下、外側の境石までの450cmから同内側の境石までの330cmを除いた残りはほぼ120cmである。これらの数値は90cm、120cm、150cm、180cmで、それらは30cmの等差級数をなしており、いずれも30cmの倍数である。30cmを基準長として見ると、3、4、5、6となり、玄室中軸

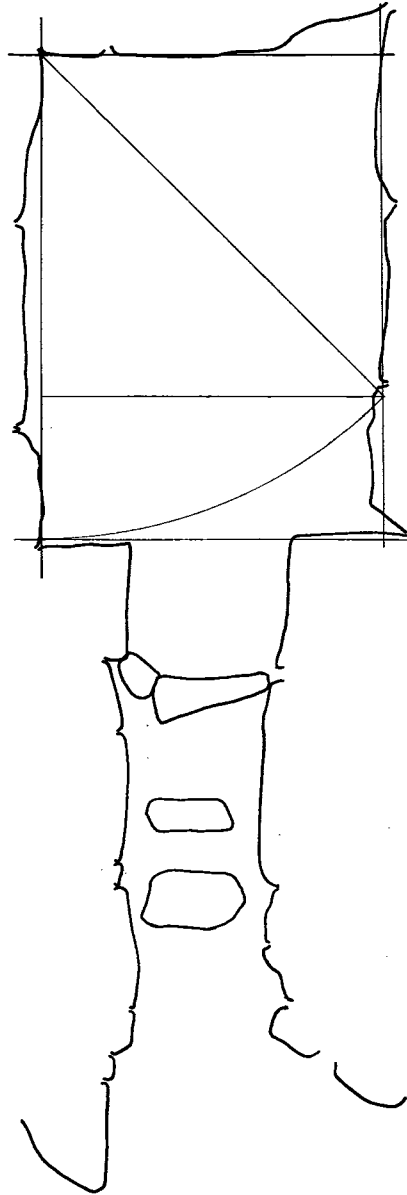


Fig. 72 王城山C15号墳石室プランと推定原企画の適合状態
(縮尺 1/40)

線上に配置され、設計にあたり、中軸線を分割したものと見られる。その際使用の尺度の基準長は30cmが妥当である。

そこで30cmの方眼を作り、各部分をたしかめることが必要であろう。さらに羨道の長さは、玄室長を以て玄室と羨道との接合部から羨道入口方向に測れば、羨道入口右側の根石尖部あたりに及ぶ。羨道入口であろう。

以上のように第15号墳においては、玄室平面の方形構成に、 $\sqrt{2}$ を利用してしているために、実測値のみでは使用尺度の検出は困難であり、直ちに、30cm、35cmの既定概念をあてはめることはできない。

墳丘については、周濠の形からみて正円ではなさそうである。いわば卵形であり、中心のずれた二円が想像される。石室中軸線上の奥壁につけ、一辺を幅にとった正方形の中心を中心に、周濠の内縁にのる円を求めてみると、900cmになる。1,900cmは30cmの30倍であり、180cm（1尺30cmとしての1尋）の5倍となる。すなわち、30cmを基準とした尺度での5尋で設計されたものと考えられる。

ところで、本古墳の占地は第16号墳裾により狭められている。同じ直径円の中心は石室中軸線にのせるに無理があり、周濠の内縁にのらない。周濠の内縁にのる円を求めると、直径780cmである。その中心は奥壁から玄室の長さの1.5倍の位置となる。羨道は玄室の長さと同じにとったものとすれば、羨道右壁先端の石にあたり、その長さの中心は求めた円の中心と一致する。また求めた円の周は奥壁に接する。その径780cmは30cmの26倍である。但し、この方は尋にはならない。また、36cmの整数倍でもない。 $\sqrt{2}$ をつかった玄室長から割り出されたものであって、他の円より小さく作られているものである。すなわち、第15号墳の平面図の構成は複雑なものであり、古墳を小さな範囲の土地一杯に作るためにとられたのではなかろうかと思う。玄室の設計に $\sqrt{2}$ を利用し、それを被う墳丘も径を大にするわけにはいかないで、二円をつなげたものとなったのであろう。

次に第12号墳の玄室平面については、奥幅と右側長のみが実測値を得ることができた。その長さは205cm、幅は188cmである。その長さと幅との比の値は1.09である。正方形を意図したかにも見えるが、第15号墳と玄室幅が近似であるので、実測図を併せてみると、幅はほぼ一致するので、第15号墳と同じく、30cmを1尺としたものと推定されるかも知れない。したがって、長さは210cm、幅は180cmと見るのが妥当とされるであろう。

しかし、本石室においては、羨道奥にある栢石が、石室全長を切半しているものであって、全長455cmの $\frac{1}{2}$ は227.5cmとなり、35cmの6.5倍である。羨道右壁奥の角をとることによって、玄室長は210cm、羨道長は245cmとなる。これらの数値からすればともに35cmの倍数となり、その倍率は6と7となる。各部の長さからすれば35cmの単位を含んでいる数値が多い。したがって、35cmを1尺とする尺度を使って、玄室の幅5尺にとり、配石の際、延びたものと見る方が

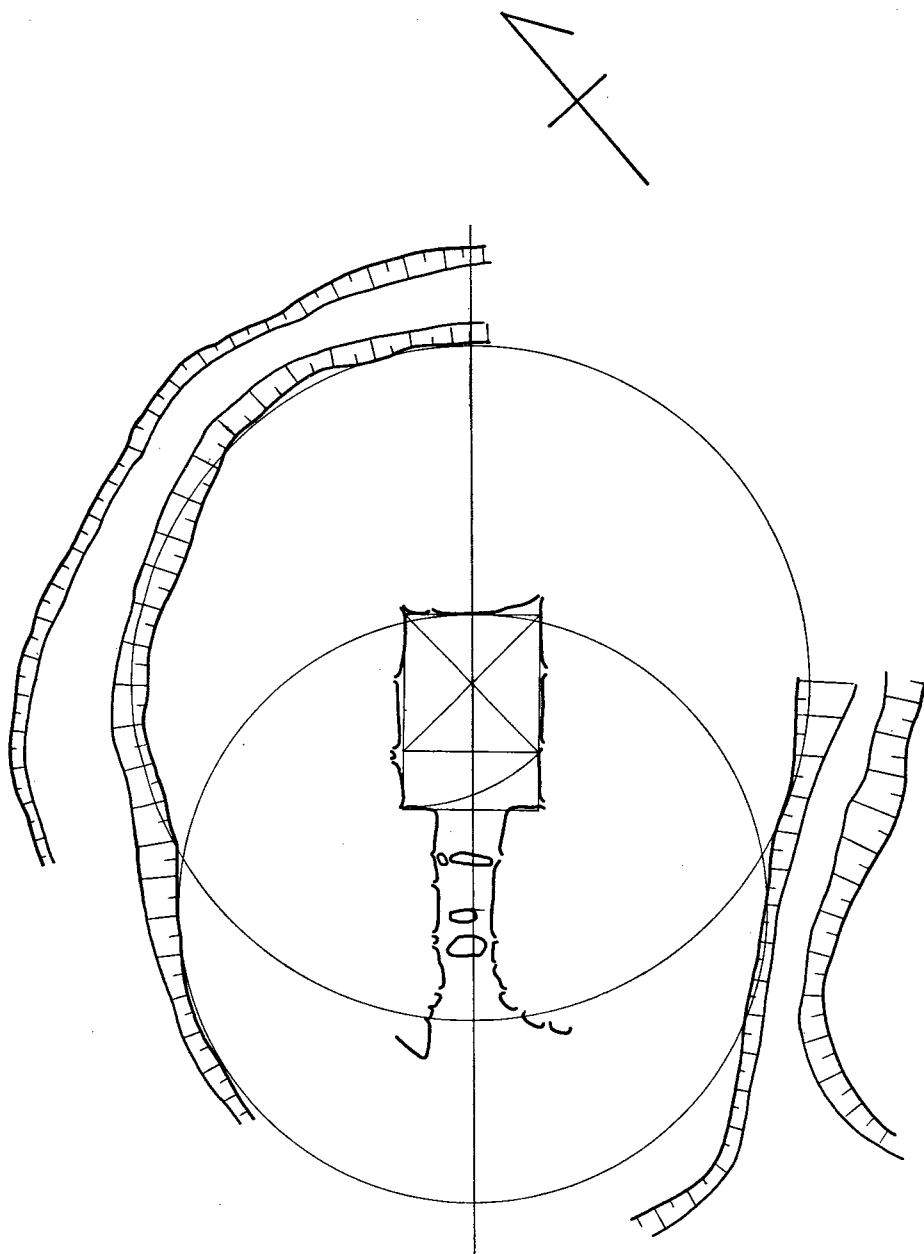


Fig. 73 王城山C15号墳墳丘復元図（円の径は9m=30唐尺）（縮尺1/100）

穏当であろう。また、配石の上で、長さ5cmつめ、幅を8cm延したの、5×6の長方形の企画を正方形に近づけたのではなかろうかという意図もうかがえる。

墳丘については、その裾部の径が周濠の内縁で960cmであり、墳丘中腹の土師器の甕の配列の径が720cmである。前者は30cmの32倍であり、後者は30cmの24倍及び180cm（30cmを1尺とした際の1尋）の4倍である。また、その720cmは36cmの2倍となる。墳丘は30cmで設計されたものであろうが、大化改新の所謂薄葬令では、墳丘は尋を用いることに規定されている。本墳では墳丘径は1尺30cmでの5尋（1,801×5）とその2尺とであり、尋を用いたものとは言えない。尺を用いたと考えざるを得ない。甕配列の径720cmでは、1尺30cmでの4尋である。したがって1尺30cmを基準としたと言えるのであろうが、大宝律令の雑令には、1尺2寸を大尺とするとあって、地を計るに用いられている。その1尺2寸は1尺30cmとしての36cmであり、甕の配列にはこの事が考え合せられるであろう。石室の構築と墳丘の企画、経始と、甕の配列との間には、時の隔りを考えねばならないかも知れない。

また第16号墳については、35cmを1尺として企画されたものと考えられよう。このような小石室については、横穴式古墳の末期の傾向として捉えられているものもある。しかし、群馬県においては、現在のところその初期のものとしている。7世紀初頭と見ている榛名山の二ツ岳爆裂以前のもので、横穴式石室の受容期にあたり、竪穴式古墳の石槨と単独葬の慣習との影響下に成立したものである。

以上3古墳について補足説明を加えたが、古墳というものは一期に作りあげられたものではなく、多少の年次を要したものであろうし、送葬に利用し祭祀を行っている間は、制度や文化などの変化の影響も受けたものである。また、文化の変動期においては、新旧文化が混在し、併用される。次に設立の時期を推定してみよう。

第16号墳の石室は、合葬用の型を単独葬用の型に改めたものである。所謂高麗尺の1尺は35cmにあてているが、これは群馬県の石室から測り出したもので、高麗尺1尺は35cmであると言うのではない。しかし、この数値は古墳調査には便利である。恐らく、横穴式石室に付随して受容された尺度であり、6世紀末乃至7世紀前半には新尺として使用されたものであろう。大化改新の薄葬令には、墳丘は尋、石室は尺で造るこが見えている。それ以前の古墳は墳丘、内部施設ともに尋で造られていたようである。すなわち、本古墳は600年前後のものと考えられるであろう。

第12号墳の石室は35cmを1尺の長さとした所謂高麗尺使用のものである。この尺度は大宝律令により唐尺受容の尺度が一般化するまで使用されている。しかし、唐尺は大化改新ごろには既に受容されていたと見られている。辛巳歳（681年）銘の山ノ上碑を墓誌とする山ノ上古墳には唐尺が使用されているのであり、この碑及び古墳は放光寺の僧侶の手に成ったものであ

る。唐尺は唐の伽藍建築法の受容に伴って、受容し、弘布したものであろう。したがって、7世紀後半には、35cm、30cmを基準とした尺度が併存し、使用者によって、各別に用いられていたと見られる。その使用年代について一応区別できるのは大宝律令実施以後のことである。

また、玄室平面の構成には、正方形を二箇ならべた形、すなわち長さが幅の2倍の長方形が一般に多く、このうちには巨石使用の巨室もあらわれている。やがて長さと幅とを別々に完全尺で定めて、幅4、5、6、長さ6、7、8、9の如く構築している。その取り合せは、幅に比して長さが短くなる傾向にあり、比1で終る。この群馬県で得た傾向を、そのまま九州にあてはめようというのではないが、多少の参考になればと思う。第16号墳の玄室の構成は、上述のことからすれば末期的なものに当る。調査当初は当然唐尺使用のものを見ていたが、検討の結果は高麗尺使用である。然るに墳丘及び甕の配列の径は唐尺使用であり、後者は或は律令の大尺使用とも考えられる。7世紀末に構築せられて、8世紀にはいつて甕が配列されたとも見ても差支えなからう。

第15号墳は1尺30cmの尺度が使用されている。第12号墳と併せてみると、それよりも後の構築のように見えるが、玄室平面は長方形を維持している。但し、その構成は $\sqrt{2}$ を使用しているので、単に1尺30cmの尺度使用のみでは考えられない。法隆寺の現在の平面図形には $\sqrt{2}$ が使用されており、和銅年間の再建である。多胡碑（群馬県所在）の碑石の造成にはやはり $\sqrt{2}$ が使用されており、和銅4年（711年）の紀年がはいっている。蛇穴山古墳（前橋市所在）の石室にも利用されており、山王廃寺跡（同所）の塔の心礎、奈良薬師寺の西塔心礎などの工法との比較から、天平2年（730年）ごろの築造と見られる。この外、南下A号墳（群馬県所在）、喜蔵塚古墳（藤岡市所在）でもその傾向が認められ、ことに南下A号墳の玄室の構成法は第15号墳と全く一致している。なお、これらの古墳の石室はいずれも截石切組積であり、玄門を備えている。8世紀初頭のものと考えられよう。またそのころは $\sqrt{2}$ 使用の流行とも見られる。これを九州にあてはめられるかどうかはなお検討されるべき問題であり、群馬県においても、玄室平面の構成上、その長さと幅との比のみにおいては、比1.5の上述山ノ上古墳（681年）の次に当るものである。したがって7世紀の最末期にかかるものとも言えよう。

（尾崎喜左雄）

18. 第 17 号 墳

1) はじめに

占 地

調査区北端に位置し、標高77mから78mにかけての丘陵北東側斜面に占地する。

調 査 経 過

調査に先んじた工事のため、墳丘と石室の大半を破壊されていた。

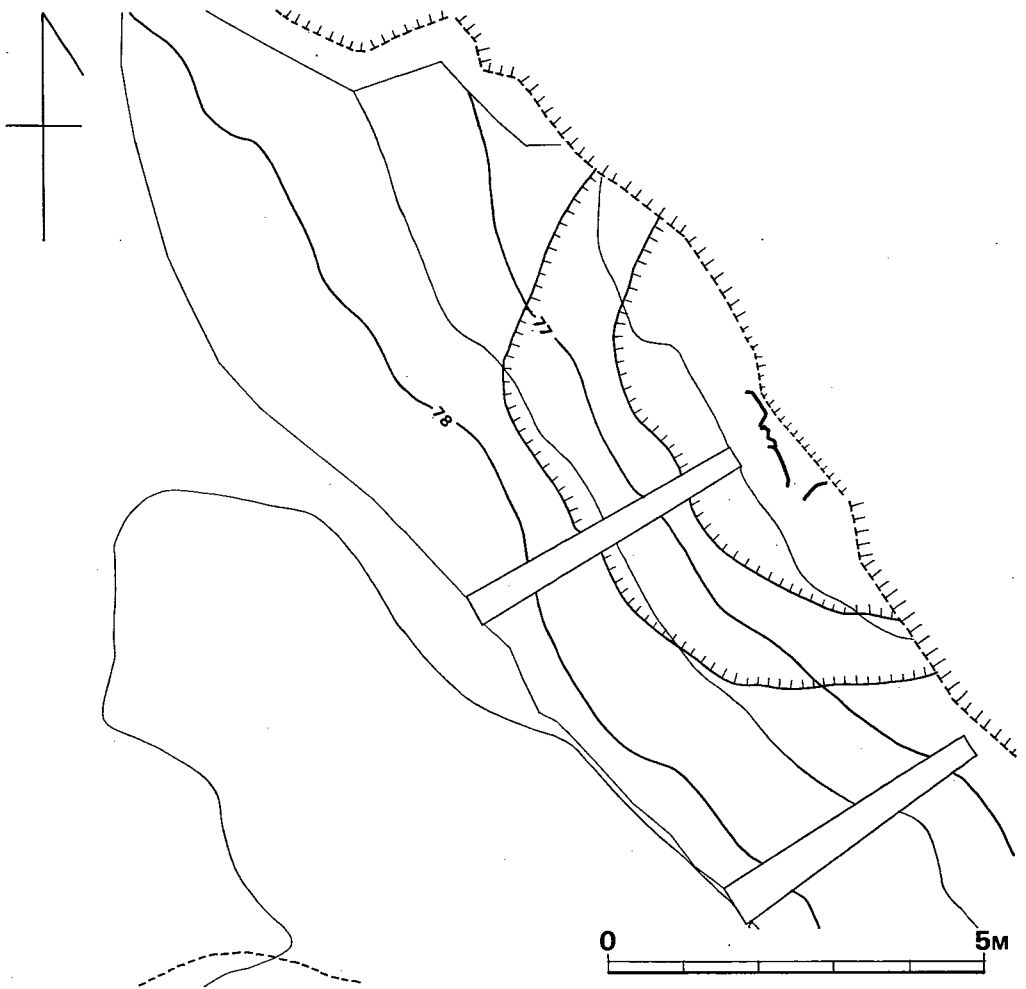


Fig. 74 王城山C17号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

10月14日 崖断面に現われた周溝と石室の状況を写真撮影してから、表土剥ぎを行う。

10月15日～10月23日 かろうじて残存する石室の一部を検出する。石室主軸に直交するトレンチ1本を掘り、土層を観察する。墳丘はその裾部を極く僅か残しているのみであった。

10月24日～31日 周溝と墳丘を全て検出し、31日に発掘作業を終える。

11月1日～2日 墳丘及び石室の実測作業を終え、調査を完了する。

2) 墳 丘 (Fig. 74, PL. 91)

僅かに残る高まりから、径8m、高さ1mの墳丘と推定された。

構 造 状 況

径8mにわたって地山を切り落して周溝としている。中央の径約6mをさらに切り落してその上端から墳丘を盛り上げている。以上は丘陵山側の状態であり、谷側でも周溝が掘られているかどうかは不明である。

3) 石 室 (Fig. ㊸, PL. 91)

1隅2面の石材しか残っておらず、石室形態や規模は不明である。掘り方の一辺が完存していることから、西南壁は原形を止める奥壁ではないかと推察される。さすれば主軸は、N-57°-Eとなり、調査した王城山C古墳群中第19号墳を除く全ての古墳とは約180°反対に開口していることになる。

4) 遺 物

石室内及び周溝中の出土遺物は皆無である。

5) ま と め

王城山C古墳群中、丘陵の北東側斜面に立地するのは当古墳と第19号墳のみである。この2基の古墳の墓道がどの方向に続いていたか興味の持たれるところである。

19. 第 18 号 墳

1) はじめに

占 地

14号墳の東方に位置し、墳丘は南西から北東に傾斜する斜面の標高 $80m \sim 83.5m$ に占地する。

調 査 経 過

11月16日 本日より発掘調査を開始する。まず墳丘を中心にして周辺部の樹木の伐採を行う。

11月17日 調査前の墳丘の写真撮影を行い、その後、盗掘坑を清掃して石室を追求する。

11月18日～20日 石室の中軸線を基準にして、北・東・西各トレンチを設定して盛り土の調査を行う。並行して石室の追求と表土除去作業を行う。玄室内は敷石をしているが、盗掘のためかなり移動している。表土直下から高杯が検出された。

11月21日 表土の除去作業を終り、墳丘の全容が明らかとなる。石室は単室であることが判明した。各トレンチの土層断面図を作製する。周溝内からは杯などが若干検出された。

11月22日・23日 表土を除去した墳丘の写真撮影を行い、終了後、墳丘の地形測量を縮尺 $\frac{1}{400}$ で行う。22日には墳丘前面の盛り土除去作業をし、23日に後半部の盛り土除去作業を行う。羨道部は前面にやや大き目の石を用いた閉塞石がある。

11月25日 盛り土除去作業を終了し、清掃後写真撮影を行う。

11月27日 石室実測のための割りつけを開始する。

11月28日～12月1日 石室の実測を縮尺 $\frac{1}{10}$ で開始する。12月1日は、閉塞石の断面見透し図と、墓道の土層断面図を作製して調査を終了する。

2) 墳 丘 (Fig. 75, PL. 92)

規 模

調査前の規模は直径 $7.2m$ 、高さ $2m$ の円墳である。中央には大きな盗掘坑があり、南東に開口する石室が想定された。なお、南東の墳丘裾は調査範囲外であるために調査は実施していない。

列 石

南東の墳丘裾は調査を実施していなかったが、調査した範囲内では列石は存在しない。ただ北東部で墳丘に1石が所在したが列石とはならない。

周 溝

墳丘の北西部では地山は浅く掘りくぼめられており、周溝が存在する。南西部は斜面の高所にあたるため地山を整形して墓域を画している。北東部は斜面の下方にあたるため、周溝は存在しない。

構築状況 (Fig. ④)

斜面に位置するために石室南西部の高所は、2 mの範囲を地山整形して平坦面をつくり、土盛りはほぼ水平に行う。北東部では旧地表上に内側から外側へ盛り土をする。北西部では腰石

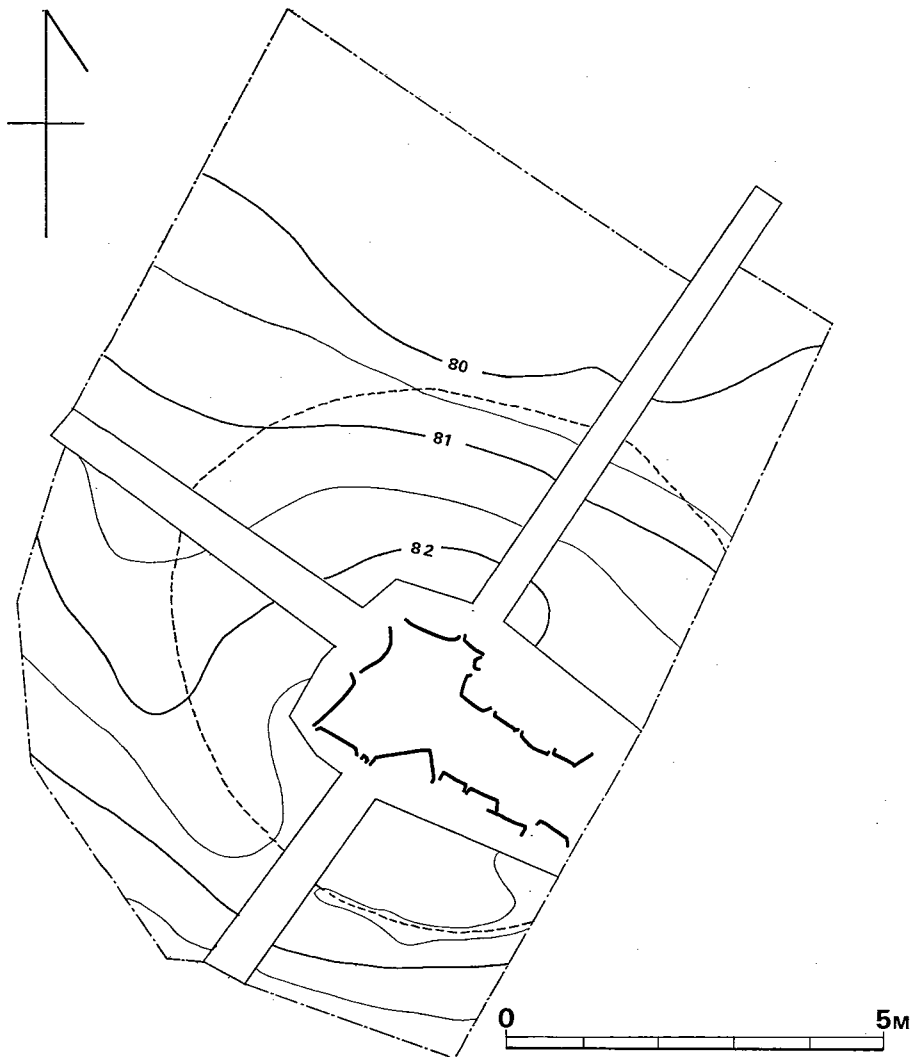


Fig. 75 王城山C18号墳墳丘測量図 (縮尺 1/100)

部のみ裏込めをしており、上方は内側から外側へ盛り土を行う。

土 器 列

南側表土直下から高杯が1個検出されている。西側周溝からは小型甕が1個体分検出されたが口縁部を欠損する。北側周溝から杯の蓋が1個出土した。閉塞石前面からは杯蓋2個・杯身3個出土している。

3) 石 室 (Fig. ④7, PL. 92-2)

単室の横穴式石室であり、主軸は N-53°-W で南東方向に開口する。石室規模は Tab. 10 (p. 166) の通りである。

玄室は横長の平面形である。奥壁は長さ80cm大の比較的大きめの石材を腰石として用いており、2段目からは小さ目の石材を横積みにする。現高は床面から60cm程である。左右両壁は各2個の石材を用いており、奥壁側の1石は奥壁と同じく横長に据え、あと1石は縦長に用いて腰石としている。床面には敷石が施されており、盗掘からまぬがれた敷石が周壁部に残存している。

袖石は左側は側壁から50cmほど突出させ、右側は大小2個の石材を使用している。床面からの高さはそれぞれ80cmと55cmである。袖石間の楣石は4石を用いている。厚さは15cmである。

羨道は左・右両壁の長さが異り、左側が長いこれは盗掘により石材を抜かれたのではなく、本来からの姿である。羨道は墓道部へ向って上昇して行く。羨道部の石材は袖石側の1・2石はやや大き目の石を用いるが、墓道寄りでは小ぶりとなる。

墓道は調査区域外であるため追うことはできなかったが、横断面の土層から二次にわたる床面が認められた。南側は登り勾配の斜面であり、西側には他の古墳が隣接するので、墓道は北側へ曲がって降りるものと思われる。羨道の右側が短いのも、墓道が曲がるためであろう。

閉塞は羨道の入口部で長さ1.1m、高さ0.8mであり、最下段に大き目の石材を4個置き、以上は小さ目の石材で閉塞している。掘り方は石室構築に必要な最小限度の掘り込みであり、平面形は長方形にならずに石室の平面と近似した形状を呈している。 (酒井 仁夫)

4) 出 土 遺 物 (Fig. 76・77, PL. 93)

出 土 状 況

石室内から遺物は検出されなかった。南側の表土直下から高杯が1個、北側周溝内からは杯蓋2個と杯身1個が、西側周溝からは甕が、そして閉塞石前面部からは杯蓋2個と杯身1個、埴の蓋1個が検出された。そのほかは何ら検出されなかった。

出土遺物を列記すると、次の通りである。

土 器 須恵器 9個体

杯蓋	5個体
杯身	2個体
埴蓋	1個体
高杯	1個体
甕	2個体

須恵器 (Fig. 76・77, PL. 93)

杯蓋(1~5) すべて同一時期のものと思われるが、口径、器高、天井部の調整法に差異がみられる。出土地点は1・3・5は閉塞石前面から出土しており、2・4は北側周溝から出土している。1は口縁部は直立し内面では天井部との境に甘い稜線が入る。天井部内外面はナデ調整であり、そのほかは横ナデ調整である。天井部はヘラ削りを施していないため丸味を有する。口径10.5cm、器高3.4cmである。灰白色を呈しており胎土にはやや砂粒を含む。2は口

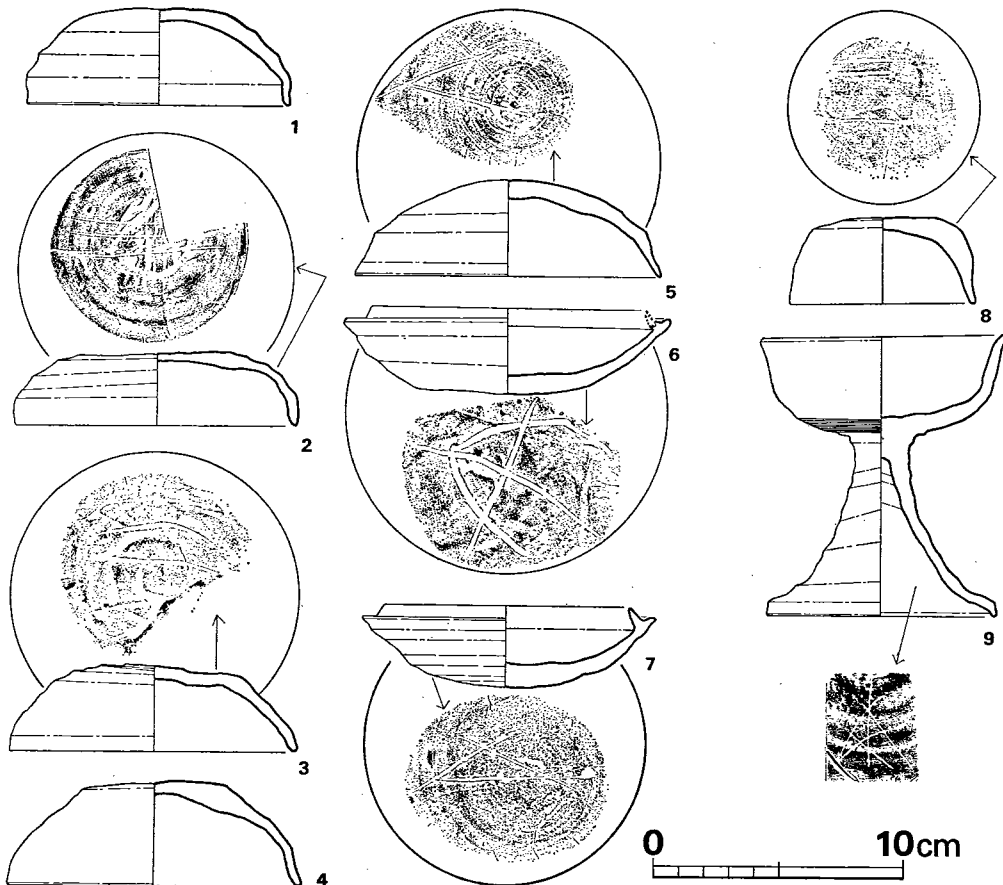


Fig. 76 王城山C18号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

径 11cm, 器高 2.9cm と器高の低い形態である。天井部ロクロを静止した状態でのヘラ削りを施す。黒灰色を呈しており、胎土は良好である。天井部外面にヘラ記号を有する。3 は天井部にヘラ削りを施し、口縁部は横ナデ調整を、天井部内面はナデ調整を行う。天井部外面にヘラ記号を有する。4 は天井部にヘラ削りを施していないため器壁は厚い。横ナデとナデ調整である。

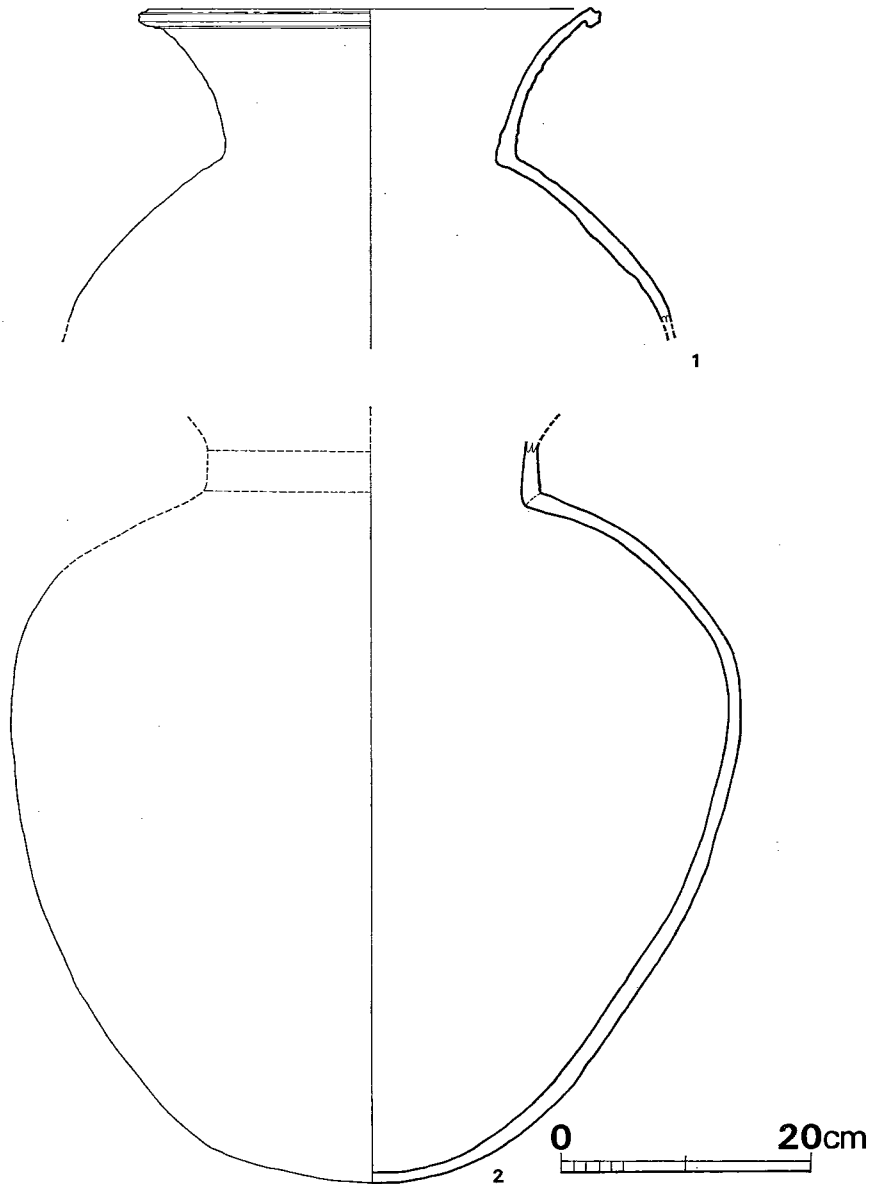


Fig. 77 王城山C18号墳出土須恵器実測図 (縮尺 1/6)

口径11.7cm, 器高4.2cmであり, 他に比して器高は高い。灰白色を呈しており, 焼成は不良である。胎土は良好である。5は口縁部が外方へ広がる形態である。天井部と口縁部の境は縁がつく。調整法は天井部外面はヘラ削りをし, 内面はナデを施し, 以外は横ナデ調整である。口径12.2cm, 器高3.9cmである。暗灰色を呈しており, 胎土には多量の砂粒を含む。天井部外面にヘラ記号を有する。ヘラ記号は7のそれと同じであるが, セットにはならない。

杯身(6・7) 6は立上りを欠損する。蓋受け部径は13cmである。底部はナデ調整であり, 器表は凹凸がある。底部内面もナデ調整であり, 全体にナデのしめる割合が多い。淡青灰色を呈しており, 胎土には砂粒を含む。底部外面にヘラ記号を有する。7は立上りは5mmと短く, 内傾する。立上りと内傾斜面との境には甘い稜線が入る。口径9.8cm, 器高3.2cmである。調整法は底部外面は丁寧なヘラ削りを施す。内面底部はナデ調整であり, 以外は横ナデ調整である。底部外面にヘラ記号を有する。灰色を呈しており, 胎土には多量の砂粒を含む。

坩蓋(8) 閉塞前面よりの出土品である。天井部と体部の境付近は器壁が著しく厚い。ヘラ削りは粗雑であり, 余分の粘土を削り切っていないため, 器壁が厚いものと思われる。天井部内面はナデ調整を, 以外は横ナデ調整である。焼成時の焼きひずみが著しいが, 口径は7.4cm, 器高は3.5cmを測る。黒灰色を呈しており, 胎土には多量の砂粒を含む。

高杯(9) 口縁部はわずかに外方へひらく。杯部の底部はカキ目が入るが, やや体部寄りではカキ目の上に横ナデ調整を施している。脚柱部は内外面とも, しぼり痕が顕著に残存する。脚裾は平坦面を有する。南側表土直下からの出土品である。口径9.8cm, 脚裾径9.2cm, 器高11.2cmを測る。脚部内面にヘラ記号を有する。

甕(Fig. 77-1・2) 1は甕の上半部のみである。口縁部, 頸部, 肩部の器壁は一樣に薄手造りである。口縁部は粘土をはって厚くし, 上方と側方に凹線を入れて口縁部を飾る。口頸部は外彎する。肩部外面は平行叩目が, 内面には同心円叩目が入る。頸部外面には横ナデの際の凹凸が著しい。灰黒色を呈しており, 胎土には多量の砂粒を含む。焼成は不良である。2は西側周溝より出土しており, 頸部の一部と口縁部を欠損する。胴部の最大部はやや上方にある。底部はやや尖り気味の丸味を有する。外面には格子叩目が入り, 内面には同心円叩目が入る。暗橙色を呈しており, 焼成は不良。胎土には若干の砂粒を含む。胴部径は28.7cmを測る。

5) ま と め

調査の結果, 本墳は直径7.2mの円墳であることが判明した。高さは1.6mは下らないものと推定された。斜面に墓壙を掘り抜いているため, 南・北の墳裾の高さは2.2mの差異がある。墓道断面で追葬の跡が確認されており, 最低2回の埋葬が行われたことは確実である。墓道は全掘していないが, 前面には他の古墳があることから墓道が北側へ曲がることが推定される。

表土直下，周溝，閉塞前面から須恵器が出土しており，石室内では出土を見なかった。出土品は追葬時のか，かき出しによるものもあると思われるが，いずれも同時期のものを出土しているので，追葬もかなり近接した時期に行われたものと思われる。出土した土器の年代は小田富士雄氏の編年によるとⅣ期属するものと思われ，その実年代は6世紀末に比定されるが，石室の形態は7世紀代に属すると考えられ，若干の年代の開きがある。

(川述 昭人)

20. 第3・4号墳間周溝中出土遺物

出土状況

4号墳の西側裾部は工事によって削られてはいたが、3号墳東側裾部寄りから多量の須恵器が出土した。Fig. 76-17の壺の破片は4号墳の北側周溝中からも出土している。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

土器	須恵器	17個体
	杯蓋	8個体
	杯身	2個体
	高杯	1個体
	壺	4個体
	平瓶	1個体
	盥	1個体

須恵器 (Fig. 78, PL. 94)

杯蓋(1~8) 身受けのかえりの有無, つまみの有無, 口径の差, かえりの形状などによって, I~IV類に4分類する。

I類(1・2) 身受けのかえりをもたないものである。体部と口縁部の境は明瞭である。口縁部は短く, 直立気味に体部につづく。2は体部との境の内面には稜線が入る。調整法は天井部内外面にナデを, 体部以下口縁部までは横ナデを施す。1は青灰色を呈しており, 2は暗赤褐色を呈する。ともに焼成は良好である。2は天井部外面にヘラ記号を有する。口径は11cmと12cm, 器高は3cmと4cmである。

II類(3~5) 身受けのかえりを有する形態であり, かえりの長さは4mm~6mmである。III類に比して, かえりは長く, 器高, 口径が大きい。3・5は天井部をヘラ削りしている。色調は灰色ないしは青灰色を呈しており, 焼成は良好である。口径は8.4cm~9.5cm, 身受け部径は11cm~12cm, 器高は2.5cm~3.2cmを測る。

III類(6・7) IV類との違いはつまみがつかないことである。身受けのかえりは2mm~3mmとわずかであるが, 口縁部水平面よりわずかに外方に出る。身受け部は体部から引き出されて長い。調整法は天井部は未調整であり, 以外は横ナデとナデ調整である。口径は8.2cmと8.3cm, 身受け部径は10.3cmと10.6cm, 器高はともに1.9cmである。色調は淡灰色と暗灰色である。胎土にはわずかに砂粒を含んでおり, 焼成は6は良好であるが7は不良である。

IV類(8) つまみを有する形態である。身受けのかえりは短い, 水平面よりも突出する。かえりの断面形は三角形である。頂部のつまみ周辺部はカキ目調整を施す。口径7.5cm,

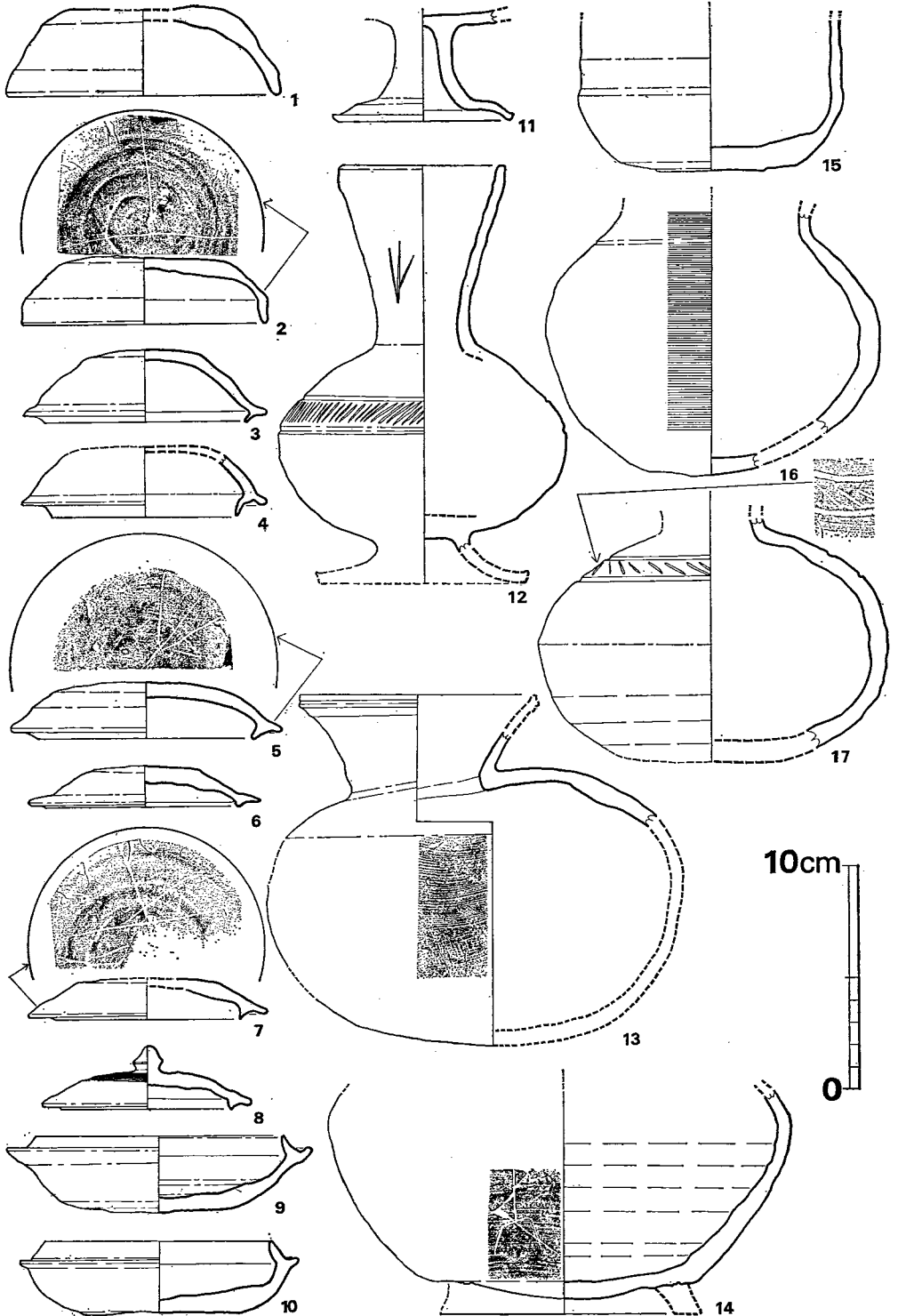


Fig. 78 王城山C 3・4号間周溝黒色土中出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

身受け部径9.3cm, 器高2.8cmを測る。黒灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。

杯身(9・10) 立上りは7mm~8mmと短く, 内傾する。立上り基部は厚手造りであり, 内傾斜面との境は明瞭な稜線が入る。調整法は底部外面は未調整であり, 内面はナデを, 体部以上は内外面とも横ナデを施す。口径10.2cm~11cm, 蓋受け部径12.5cm~13.7cm, 器高3.1cm~3.5cmを測る。灰色を呈しており, 焼成は良好である。

高杯(11) 杯部の一部と脚部を残存する。脚部は, 折れまがって, 脚裾径をひろげる。脚端部は平坦面を有する。残存部は内外面とも横ナデ調整を施す。暗灰色を呈しており, 焼成は良好である。脚裾径は8cmを測る。

脚付長頸壺(12) 脚部の大半を欠損する。頸部は8cmと長く, 外反する。胴部の最大部はほぼ中央に位置しており, 沈線が入る。この間は櫛状器具による刺突文が入る。胴部下半部は広範囲をヘラ削りしている。頸部は横ナデの凹凸が著しい。口縁部は丸くおさめる。口径7.4cm, 胴部径12.8cmを測る。黒灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。頸部にヘラ記号を有する。

台付壺(13) 高台部と肩部以上を欠損する。高台部は欠損しているが, 高台の接合部をヘラで沈線を入れて, 接合を強化しようとする痕跡が残っている。内外面とも横ナデ調整を行っており, 内面には凹凸が著しい。胴部にヘラ記号を有する。青灰色を呈しており, 焼成は良好である。

壺(16・17) 直口壺かとも思われる。16は口径部と底部を欠損する。肩部には2条の沈線が入り, この間には櫛状器具による刺突文が入る。肩部から頸部にかけての部分はカキ目調整を施す。底部はヘラ削りを行う。青灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。17は口頸部を欠損する。胴部全面にカキ目調整を施す。底部外面にヘラ記号を有する。暗赤褐色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。胴部径15cmを測る。

平瓶(13) 口縁部の広い平瓶である。胴部から底部を若干欠損する。胴部中央から肩部にかけてカキ目調整を行う。口縁部には沈線が入る。黒灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径10.5cm, 胴部最大径18.6cm, 器高15.7cmを測る。

盃(15) 口縁部を欠損する。体部は横ナデ調整を施しており, 直立する。底部はヘラ削りを施しているが, 器壁は厚手である。なお, 底部外面にはヘラ記号を有する。色調は灰褐色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には小砂粒を多量に含んでいる。最大径は11.8cmを測る。

以上土器の説明をしてきたが, 出土遺物の年代は小田富士雄の編年によるとⅣ期からⅥ期に属するものである。

21. 第4・6・7号墳間周溝中

出土遺物

出土状況

4号墳の北側墳丘裾部，6号墳の東側周溝黒色土中及び7号墳の前面からは多くの須恵器が集中して出土した。これらは追葬時に石室中より掻き出されたものと考えられるので，一括して取り扱った。

各須恵器の破片は随所より散乱して出土した。特に Fig. 79-6 の惣は4号墳北側周溝中，6号墳東側墳丘裾，7号墳羨道部及び9号墳西側墳丘裾部から出土している。これらは盗掘時に破碎された投げ棄てられたとは考えられない。また追葬時に単に石室から掻き出されたに於ては破片が広範囲にわたって出土しており，恣意的に打ち砕いて棄てたとも考えられる。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

土器	須恵器	7個体
	杯蓋	2個体

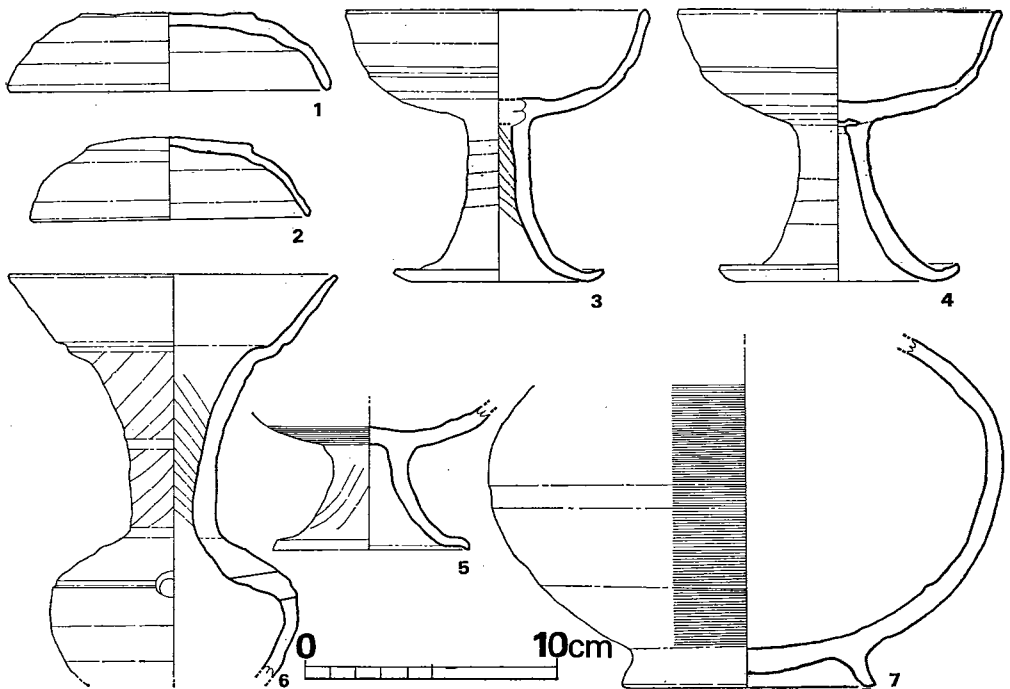


Fig. 79 王城山C 4・6・7号間周溝出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

高杯	3 個体
甗	1 個体
台付壺	1 個体

須恵器 (Fig. 79, PL. 95)

杯蓋 (1・2) 天井部は未調整で平坦面を有する。ヘラ削りをしていないため、天井部と体部の境は段がつく。口縁部は丸くつくられている。ともに天井部外面にヘラ記号を有する。天井部内面はナデを、体部、口縁部は横ナデを施す。色調は灰色ないしは淡灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は1は砂粒を含んでおり、2は精選されていて良好である。1は口径12.8cm, 器高3.1cm, 2は口径11.1cm, 器高3.3cmを測る。

高杯 (3~5) 5は杯部の上半部を欠損しており、3・4に比して小形となる。3・4の杯部は、口縁部と体部の境に1条のやや甘い沈線が入る。口縁部は、内彎気味に外反しており、横ナデ調整を施す。杯部の底部はともにヘラ削りを行い、5はカキ目が入る。脚部はゆるやかに外反し、端部は、はね上る。3は脚柱の内外面に、5は外面にしぼり痕が残存する。5は脚裾は屈曲して水平となり、端部は再び下方へまがる。3は口径11.8cm, 脚裾径8.3cm, 器高10.8cm。4はひとまわり大きく、口径12.8cm, 脚裾径9.6cm, 器高10.8cm。5は脚裾径7.8cmを測る。色調はともに暗灰色を呈している。胎土は精選されていて良好であり、焼成は4はやや不良であるが、他は良好である。なお4は脚裾に近い内面にヘラ記号を有する。

甗 (6) 底部を欠損している。頸部はゆるやかに外彎し、口縁部の境は外方へ屈曲して、口径を大きくして、再び外反する。境部外面には沈線が入る。端部は丸くつくられている。頸部は内外面ともしぼり痕が著しく基部は細い。球状部では円孔部に1条の沈線が入る。中央部以下はヘラ削り調整を行う。以外の部分は横ナデ調整を施す。灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。口径13.1cmを測る。

台付壺 (7) 肩部以上を欠損しており、口頸部の形態は不明である。底部の端部に、長い高台が付く。高台は内方が地につき、外方は若干上る。胴部外面はカキ目調整を施しており、内面は横ナデをする。底部は外面は横ナデを施し、内面はナデ調整である。灰白色を呈しており、焼成は不良である。胎土は精選されていて良好である。

以上、土器の説明をしてきたが、出土土器は小田富士雄氏編年によると杯蓋、甗、高杯はIV期、台付壺はVI期に属するものである。

(川述 昭人)

22. 第6・7号墳間周溝中出土遺物

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

土器	須恵器	16個体
	杯蓋	4個体
	杯身	5個体
	高杯	2個体
	平瓶	1個体
	蓋	1個体
	長頸壺	1個体
	埴	2個体
	土師器	1個体
	甕	1個体

須恵器 (Fig. 80, PL. 96, 97)

杯蓋 (1~4) 身受けのかえりをもつものと、もたないものとに2分される。かえりをもたないものをI類、かえりをもつものをII類とする。ただし、I・II類間の時期差はない。

I類 (1・2) 1は口縁部を肥厚させており、端部は丸味を有する。天井部は未調整である。口径は12.2cm, 器高は3.7cmを測る。灰色で焼成は良好である。2は口縁部側方をおさえ、平坦にする。天井部はヘラ削りを施し、内面頂部はナデである。体部、口縁部は内外面とも横ナデ調整である。口径11cm, 器高3.3cmを測る。灰褐色を呈しており、焼成は良好である。

II類 (3・4) 杯身と比して器高は低い。身受けのかえりは4mm~5mmと短く、細い。天井部と体部の境は稜がつかずになめらかである。3は天井部をヘラ削りし、以外は横ナデであり、頂部内面のみナデを行う。4は天井部は未調整のままである。以外は横ナデであり、頂部内面はナデを施す。口径は9.4cm, 身受け部径は11.6cm~11.7cmである。器高は2.5cmを測る。色調は青色もしくは青灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。

杯身 (5~9) 9は他の4個体に比して口径が大きく、立上がりもやや長めであるので2類に分ける。

I類 (5~8) 口径は9.7cm~10.1cm, 蓋受け部径11.6cm~12.1cm, 器高3cm~3.4cm, 立上りは5mm~8mmの間である。立上りの形態は、立上り基部が太くて、立上り内面が立つものと、細味で内傾するものがある。調整法は5・7は底部をヘラ削りするが、6・8は、未調整も

しくはナデを施す。底部内面はともにナデを，残りの部分は横ナデ調整である。7は暗小豆色であり，その他は灰色ないし暗灰色を呈しており，焼成はともに良好である。胎土には砂粒を含んでいる。

Ⅱ類(9) I類に比して，口径は大きく，立上りも長い。口径は11.5cm，蓋受け部径13.8cm，器高3.5cm，立上り1cmである。立上りの形態は，基部より中程までは内傾するが，上部は外反気味に立つ。蓋受け部は体部から引き出されて，長い。底部外面はヘラ削りをし，内

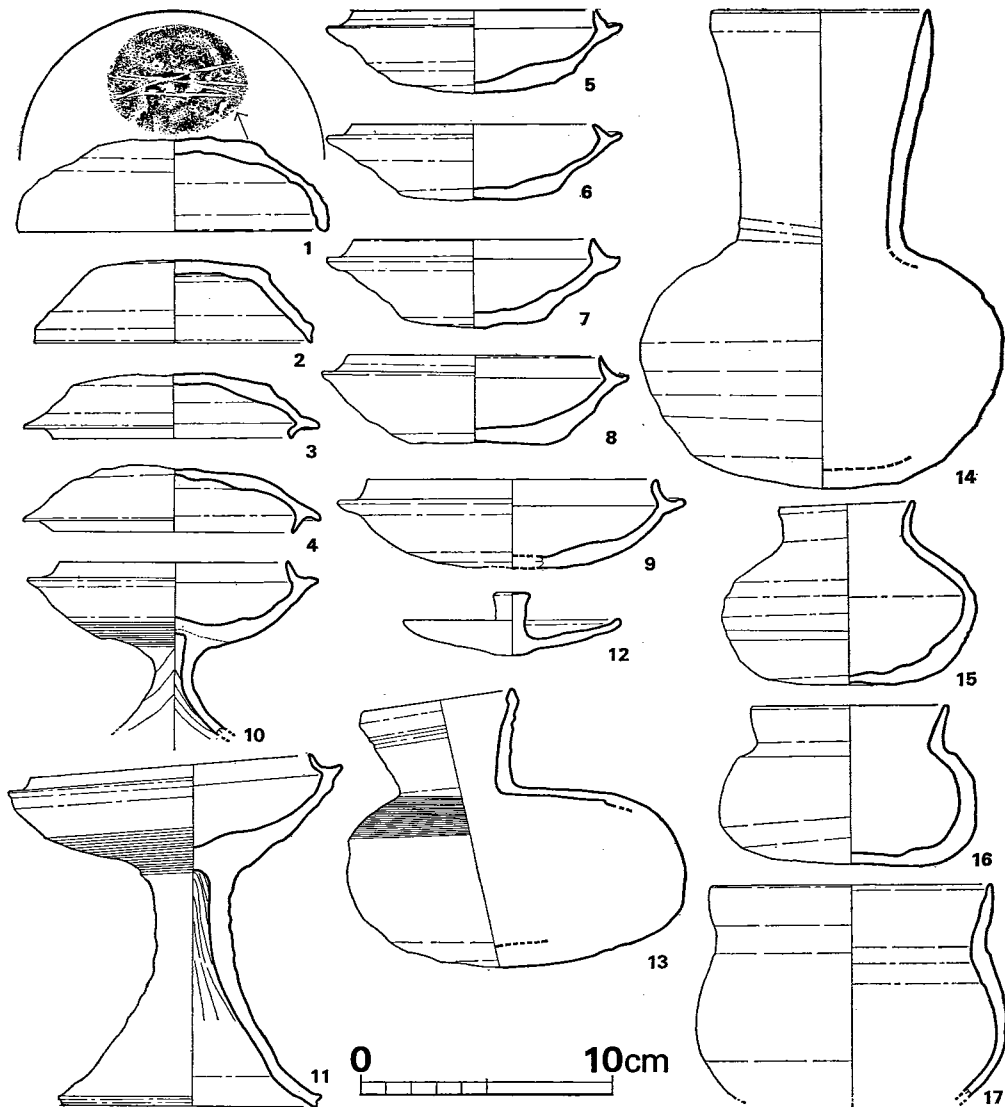


Fig. 80 王城山C6・9号間出土須恵器，土師器実測図（縮尺1/3）

面はナデ調整であり、残り部分は横ナデ調整を行う。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には若干であるが砂粒を含む。

高杯 (10・11) ともに有蓋高杯である。10は脚裾を欠損する。立上りは6.5mmと短い。脚柱上部は1.5cmと非常に細くなる。杯部底面はカキ目調整を施しており、杯部内底面を除く部分は横ナデ調整を施す。脚柱部は内外面ともにしぼり痕が著しい。灰黒色であり、焼成は良好である。胎土にはわずかだが、砂粒を含んでいる。11は立上りは細く、短い。杯部と脚部の接合部は粘土の貼りつけが著しいので器壁は厚味を増す。脚端部は側面を押えており、わずかにくぼむが断面は方形を呈する。脚柱内面はしぼりの痕跡がみられる。透孔は存在しない。器高は14cmを測る。杯部底面は細いカキ目が入る。カキ目調整後、横ナデを整えていることが観察された。灰を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。

蓋 (12) 新羅製品である。蓋の形状から見て、落とし蓋と思われるが、どのようなものの蓋となるのかはわからない。つまみは長く、上端部は平坦面を有する。体部、口縁部は上方へひろがって延び、端部は丸くおさめる。つまみ周辺の上面部は自然釉が付着して緑色を呈する。下面部は淡黒色である。胎土には砂粒を若干含んでおり、焼成は良好である。口径8.5cm、器高2.5cmである。

平瓶 (13) 口縁端部は内傾し、稜線が入る。肩部には細いカキ目が入る。胴部は横ナデであり、底部はヘラ削りを施す。暗橙色を呈しており、焼成は不良である。胎土には砂粒が多量に含まれており、器表は粗雑である。

埴 (15・16) 15は口径部は短く外彎する。底部は平坦面を有しており、未調整である。その他の部分は横ナデ調整である。青灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。16の口縁部は直線的に外反し、端部は丸くつくられる。底部は平坦である。赤褐色を呈しており、焼成は不良である。胎土には多量の砂粒を含む。15は口径5.5cm、胴部径10.1cm、器高7.2cmを測る。16は口径7.9cm、胴部径10.2cm、器高6.2cmを測る。

土 師 器 (Fig. 80-17)

広口壺 (17) 頸部はゆるやかに外反し、口縁端部は細味となり立つ。頸部と胴部の境は、甘い稜線が入る。底部を欠く。口径11.2cm、最大部径は12.2cmを測る。明茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好である。

以上、出土した土器は小田富士雄氏の編年によるとIV期に属すると思われる。

(川述 昭人)

号数	墳丘			形状	開口方位	石室					羨道		周溝	列石	墳丘中土器		
	現状径	復元径	現状高			奥幅	前幅	中央長	左側長	右側長	長	奥幅				前幅	
王城山C 1	800	800×100	200	220	両袖単室	N-215-E	220	214	240	225	204	330	100	125	北一東一南 (深さ30cm)	墳丘スリ及び中段	甕(土師器)1
王城山C 2	1000	1100	130~130	250	両袖単室	N-209-E	176	190	250	242	280	276	98	84	北一東一南	墳丘スリ及び中段	壺中に土器、壺、甕
王城山C 3	800	700	250	175	両袖単室	N-202-E	133	145	222	210	197	312	90	不明	北一東	西側二列	壺2
王城山C 4	850	730	230	195	両袖単室	N-223-E	132	136	202	198	200	171	87	95	北	北側のみ	甕(土師器)1
王城山C 5	760	800	90~170	170	両袖単室	N-228-E	165	177	220	225	205	314	90	100×100	北一東一南 (深さ10~30cm)	西	甕、壺
王城山C 6	1000	1040	200	215	両袖単室	N-226-E	160	160	225	230	223	225	87	105	西一北	北側	甕(土師器)2 甕(須恵器)1
王城山C 7	1000	670	250	240	両袖単室	N-239-E	175	175	232	233	225	365	85	95	不明	北墳丘中	甕、埴、壺
王城山C 8	1150	830	250	196	両袖単室	N-227-E	216	215	245	236	242	400	90	90	東	西~南	甕(須恵器)1 壺(須恵器)1
王城山C 9	1300	1100	250	?	両袖単室	N-231-E	?	?	?	?	?	510	95	200±		東石垣状	甕(須恵器)1
王城山C 10	950	620	200	196	両袖単室	N-202-E	160	132	140	130	135	257	65	77	東一北 (深さ25cm)	西	
王城山C 11	900	780	175	180	両袖単室	N-225-E	150	133	195	205	185	255	95	150±		墳丘中東一北一西	
王城山C 12	950~1100	965~960	150	不明	両袖単室	N-206-E	188	不明	205	不明	205	245	85	不明	東一北一西 (深さ10~15cm)		甕(土師器)10 壺(須恵器)2
王城山C 13	900	900	100	200	両袖単室	N-162-E	165	170	205	205	220	365	95	約1m	西一北一東 (深さ20cm)	墳丘中西	甕(須恵器)3 甕(須恵器)1 甕(土師器)1
王城山C 14	750	660	100	165	袖無単室	N-238-E	67	86	250	240	250	140	85	180	南東 (深さ10cm)		甕(土師器)1
王城山C 15	1130	876	130	不明	両袖単室	N-220-E	182	178	266	262	281	182	87	76	南東一北東 (深さ20~25cm)	ナ	壺(須恵器) 壺(墳丘上)
王城山C 16	500	525	100	不明	袖無単室	N-233-E	77	78	167	172	168	183	72	不明	東一北一西 (深さ20cm)	ナ	ナ
王城山C 17	800	600	100	150	単室?	N-57-E	?	?	?	?	?	?	?	?	南のみ	ナ	ナ
王城山C 18	700	710	150	185	両袖単室	N-143-E	176	185	110	122	115	240	82	80	北西一南西一南東	ナ	ナ

Tab. 10 王城山C古墳群墳丘及び石室各部計測値(単位cm)

Ⅳ 古野 C 古墳群の調査 (PL. 98)

1. 第 4 号 墳

1) はじめに

占 地

古野 C 古墳群中東端に位置し、標高67m~73mの急な斜面に占地する。

調 査 経 過

昭和45年12月8日~9日 盗掘坑内の土砂を除去することから調査を開始する。9日には石室の平面プランをほぼ検出する。

12月10日~15日 石室主軸にそって基本坑を設定した後、墳丘上の表土及び墳丘裾部に堆積した黒色土を除去する。黒色土中からは多量の土器が出土する。14日には墳頂より前面の堆積土を全て取り除き、堆積状態の断面写真を撮影する。15日には西側の羨道部南端から列石が続いていることが判明し、列石前面から蓋杯が一括して出土する。墳丘が全て検出された時点で平板実測を行う。

12月16日~21日 石室及び墳丘の全体写真撮影後、主軸にそって設定した墳丘上の3本のトレンチを掘削する。墳丘は4ないし5回にわたって盛り上げられているが、最上層は別として各層とも版築が明瞭であった。この間に石室の実測を開始する。

12月22日~25日 墳丘を全て取り除く。奥壁裏側の掘り方は2段掘りになっており、その上方には地山を削り出した僅かな高まりがあった。この高まりは墳丘裾線と一致する。25日には全ての作業を終了する。

2) 墳 丘 (Fig. 81, PL. 99・100)

調査前に直径11m、高さ2mの高まりを見せていた。中央に盗掘坑があり、その状況から、南に開口する横穴式石室が想定された。

列 石 (Fig. ④)

西側羨道南端より2.5mにわたって列石が墳丘裾を囲繞している。列石は1段積みで、下に僅かの根石をつめている。

構 築 状 況 (Fig. ④, PL. 100)

墳丘盛土は石室腰石の裏込めした上に4ないし5回にわたって行っている。最上層を別として各層とも版築の様が明瞭であった。版築は石室に近いほど固く締っており、墳丘裾近くでは

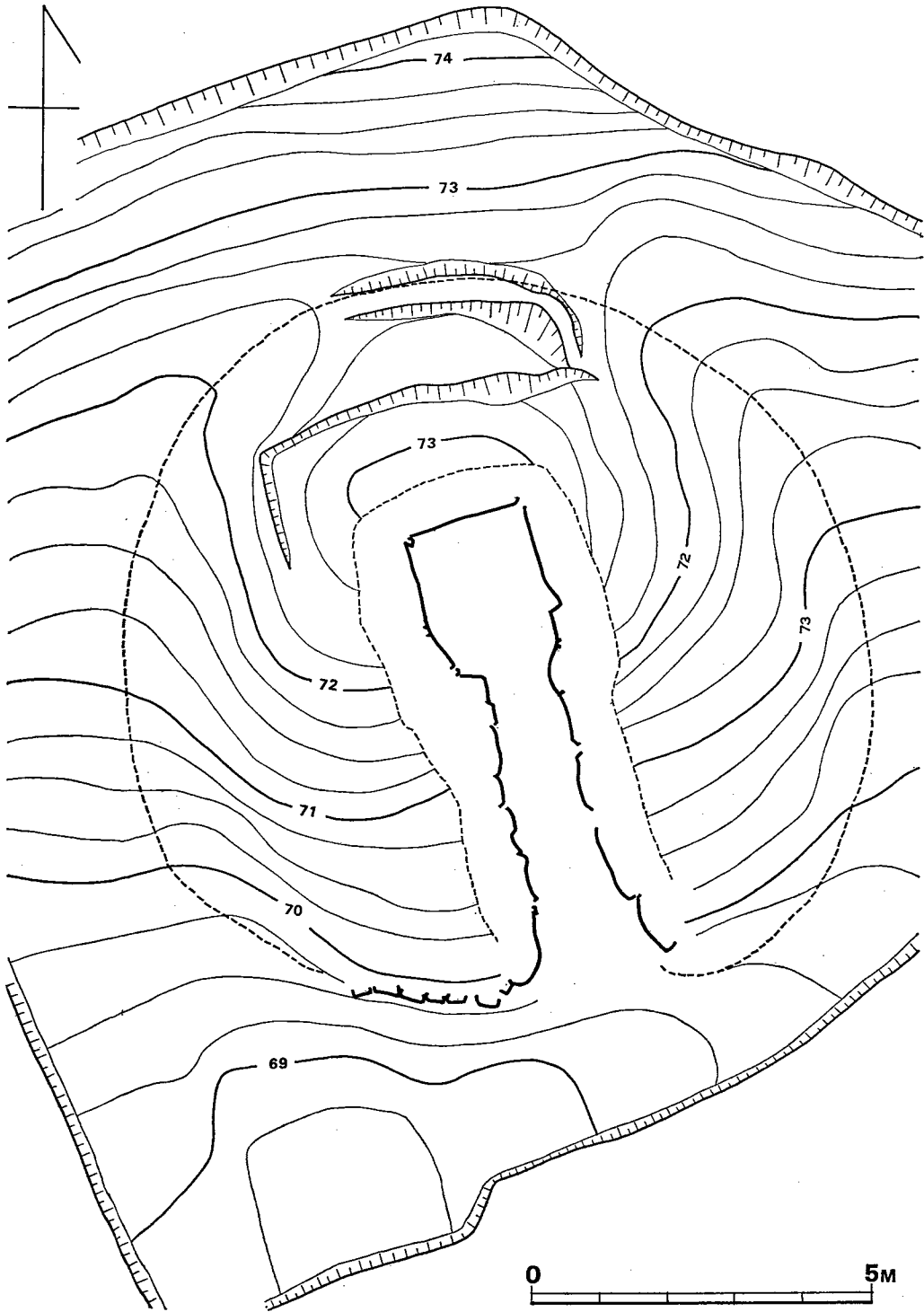


Fig. 81 古野C 4号墳丘測量図 (縮尺1/100)

軟かい。なお墳丘中から築造時の祭祀を想わせる土器群は出土しなかった。

3) 石 室 (Fig. ④9)

両袖単室の横穴式石室で、N-157°-Eの方向に開口している。石室規模は Tab. 11(p. 177)の通りである。

掘り方は床面で長さ7.7mあり、幅は玄室部で3.5m、羨道部で2.7mである。床面は羨道部中央まで緩傾斜であるが、その先は急に落込んでいる。

玄室奥壁は高さ1.5mの一枚石を立てて用いている。基部が分厚く安定した石である。奥壁側両壁の用材も巨石である。

袖石は方柱形の用材であるが、玄室石材の高さと比べて低く貧弱である。羨道部は袖石を含めて長さ4.7mと長く、末広がりになっている。羨道端には平面三角形の巨石を据えている。袖石に近い床面には敷石が残っていた。本来は石室全面に敷かれていたと考えられる。また敷石と接して閉塞石の基部のみが残っていた。

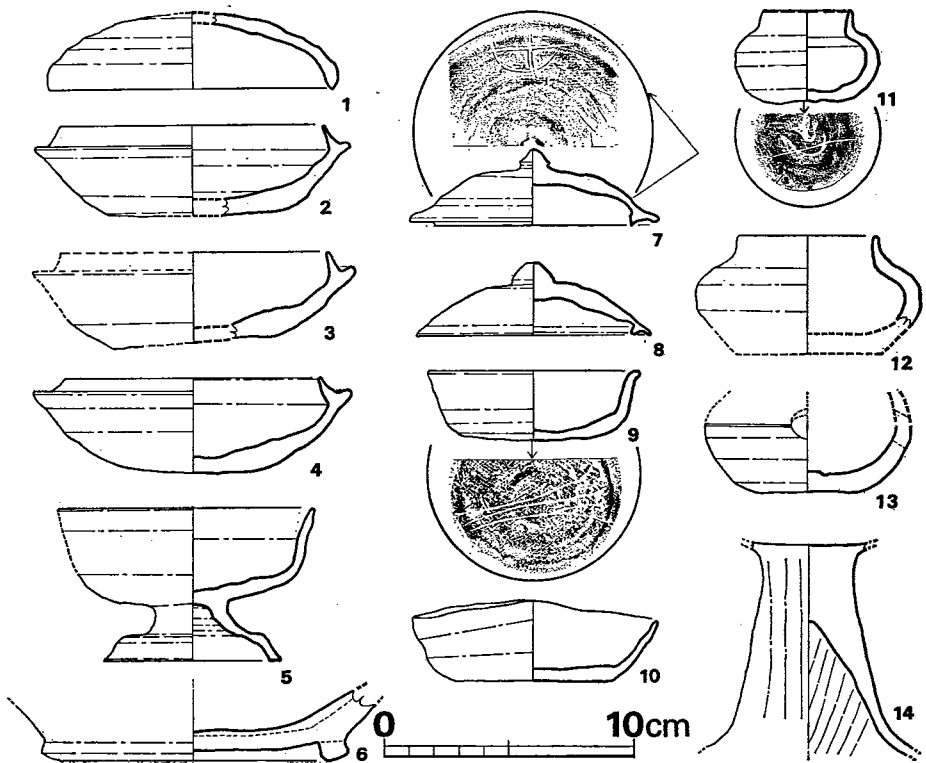


Fig. 82 古野C4号墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺 1/3)

4) 遺物 (Fig. 82・83, PL. 101-2, 102)

出土状況 (PL. 101-2)

玄室床面からの出土品はなく、石室内攪乱土や墳丘裾の黒色土中から多くは出土した。列石前面より蓋杯(1・3・4)が一括して出土した。墳丘盛土下より2・5・13が出土した。図示しなかったが、壺2個体の破片が前記黒色土中より出土した。

出土土器を列記すると、次の通りである。

須恵器	杯蓋	3個体
	杯身	5個体
	高杯	1個体
	埴	2個体
	甕	1個体
	壺	3個体
	甕	3個体
土師器	高杯	1個体

須恵器 (Fig. 82・83, PL. 102)

杯蓋 (Fig. 82-1・7・8) 1は天井部が丸く、口縁部は直立して端部は丸味をもつ。口径11.6cm, 器高3.1cm。7・8は石室内攪乱土中より出土した。いずれも天井部の調整は粗く、焼成も悪い。

杯身 (2~4・9・10) 2~4は受け部が丸く短い。底部は回転ヘラ切りしたのみである。灰黄色を呈して焼成は悪い。口径12.6cm~12.8cmである。9・10はいずれも羨道部の閉塞石上から出土した。精製された胎土で、色調は灰緑色、焼成堅緻である。

高杯 (5) 杯部の割には小さな2段脚部をもつ。脚端部は面取りしており平坦である。色調は暗灰色で、胎土、焼成とも良好である。

埴 (11・12) 玄室内攪乱土中より出土した。いずれも直立する口縁をもち、丁寧に横ナデ調整されている。

甕 (13) 穿孔部付近までヘラ削りした、平坦な底部をもつ甕である。精製された粘土を用いており、暗橙色で焼成堅緻である。

壺 (6) 高台の付いた底部のみである。

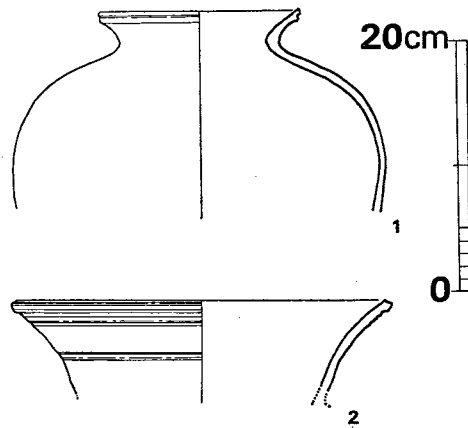


Fig. 83 古野C4号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/6)

胎土良質であり、灰黒色で焼成堅緻である。

甕 (Fig. 83-1・2) 1は口縁は短く、端部に1条の沈線を引いている。胴部は球形で平行叩文の上カキ目を施している。口径24cmで焼成は極めて良く、胴下半に自然釉が流れている。2の破片は6号墳西南斜面からも出土している。口縁部に幅の狭い篋で多くの条痕をつけて、頸部にも2条の沈線を入れている。灰色～灰黒色で焼成堅緻である。口径45.6cm。

土師器 (Fig. 82)

高杯 (14) 脚部のみであるが、外面のヘラ削り、内面のシボリ痕が顕著である。明るい黄茶褐色で、胎土、焼成とも良好である。

5) ま と め

調査の結果、本古墳は径9.5m、高さは床面より2.56mと推定された。用材としてかなりの巨石を用いており、特筆に値する。また墳丘築造に当たっても入念な版築を行っており、古野C古墳群中でも唯一であり、王城山C古墳群中でもその例を見ない。

出土土器のうち、玄室床面土器は皆無であったが、列石前面や墳丘盛土下より出土した土器と、玄室内攪乱土層中より出土した土器とでは明瞭な型式差が認められる。つまり、1～5・13と7～12の差である。以上の点から、当古墳は7世紀初頭に築造され、中葉に廃棄された古墳と考えられる。

(酒井 仁夫)

2. 第 5 号 墳

1) はじめに

占 地

3号墳と4号墳の間、標高70mから72mにかけての南面斜面に占地する。

調 査 経 過

7月31日 唐山古墳調査現場より資材を移動し、調査を開始する。

8月1日～5日 現状写真撮影後、表土剥ぎ及び石室内落ち込み土を除去する。

8月6日～12日 トレンチ掘削及び墳丘検出作業を行う一方、石室の実測作業を開始する。

8月13日～16日 盆休み

8月17日～23日 発掘の主力は6号墳におき、石室の実測作業を行う。

8月24日～25日 石室実測及び調査後の写真を撮影する。25日には墳丘の平板実測を終え、全ての作業を完了する。

2) 墳 丘 (Fig. 84, PL. 103)

規 模

調査前には極く僅かの高まりを見せているにすぎず、昭和45年度の第1～4号墳の調査時においても古墳とは認められなかった。

構 築 状 況

径約7mにわたって地山を整形し、平坦面を造成している。その中央に径約5mの墳丘を盛り上げており、墳丘と地山整形の外周との間が半円形の周溝様になっている。墳丘は東側で1層、北から西にかけては2層を残すのみで、石室床面から僅か90cmにすぎない。

3) 石 室 (Fig. ⑩, PL. 104-1)

袖無し単室の横穴式石室で、N-161°-Eに開口している。石室規模は Tab. 11 (p. 177)の通りであり、中央幅は90cmである。開口部の東壁は欠失しており、この部分の石室幅を認識することは不可能であった。しかし、西壁と同様の広がりを持つと思われる。奥壁より1.9mの位置で幅が最も狭くなる。また床面は全体的に開口部に向かって傾斜しているが、この地点からいっそう傾斜が激しくなる。西壁の腰石用材もこの地点より開口部側では小さい。以上3点の理由から、榎石は失われてはいるものの、この付近に閉塞石が置かれ、その内側が玄室として用いられていた可能性がある。逆にいえば、奥壁より1.9m～2.3mより先は羨道としての役

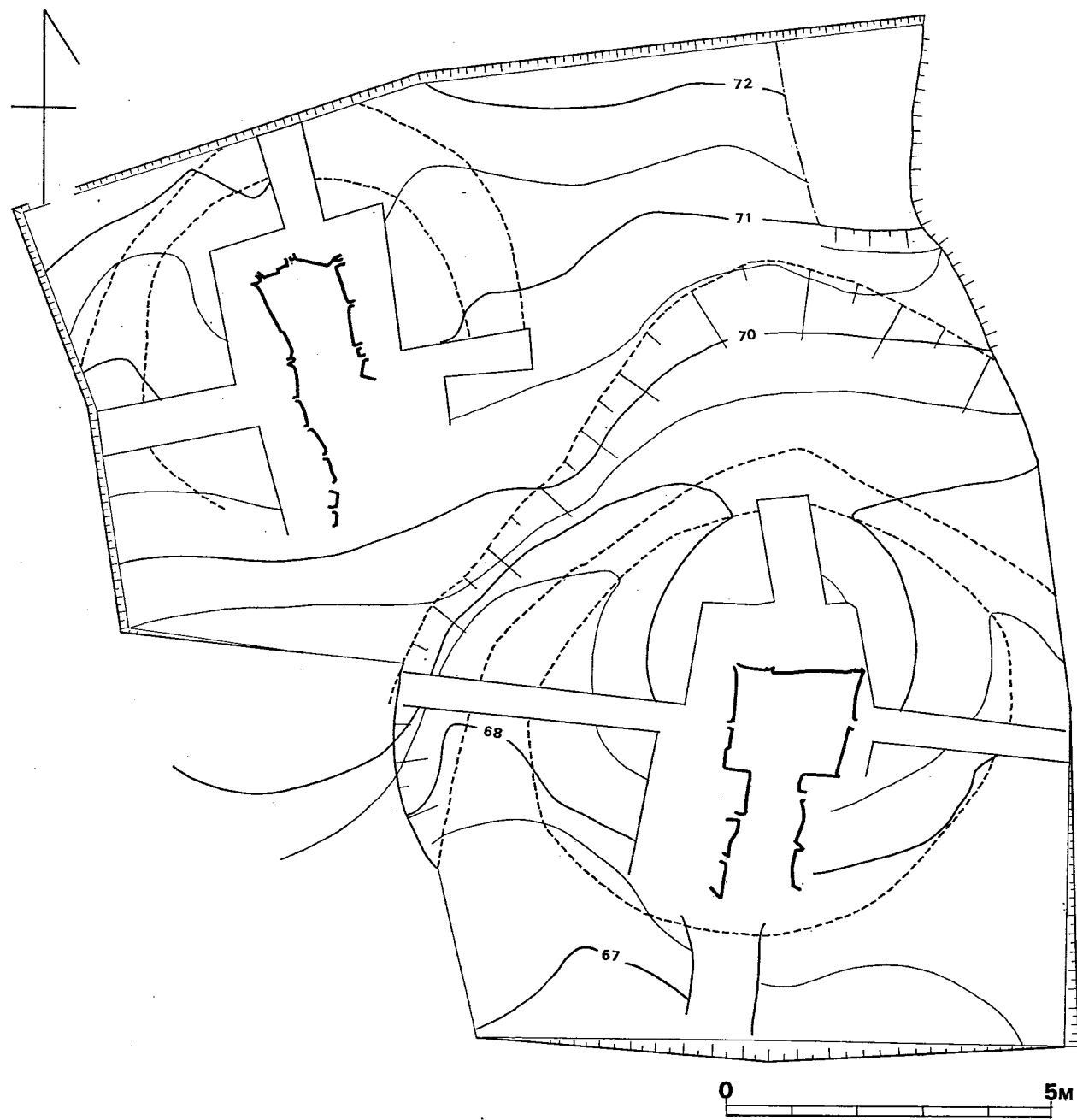


Fig. 84 古野 C5・6号墳墳丘測量図(縮尺1/100)

割があったと考えられる。

4) 遺 物

石室内や墳丘中、周溝中出土の遺物は皆無である。

5) ま と め

調査の結果、本古墳は径5.15mの古墳と推定された。しかし、墳丘の高さは残存状態が悪いため不明である。

石室出土遺物がないため、時期の決定は困難である。消極的だが石室形態は王城山C14号墳に類似しており、7世紀中葉以前の所産とも思える。6号墳周溝中の土器は7世紀初頭のものである。以上の推定からすれば、5号墳は、7世紀初頭～中葉にかけて築造されたものと考えられる。

(酒井 仁夫)

3. 第 6 号 墳

1) はじめに

占 地

4・5号墳の中間、標高67mから70mにかけての南面丘陵の斜面に占地する。なお東側墳丘裾は調査前の工事によって削られていた。

調 査 経 過

8月7日～12日 5号墳の調査に引き続き、7日より表土剥ぎ、石室の検出作業を行う。当古墳は昭和45年の1～4号墳の調査に際してその存在が確認され、石室の一部を発掘していたものである。墳丘の前面は工事によって埋め立てられており、その排土に多くの労力を費した。

8月13日～16日 盆休み

8月17日～23日 山側墳丘裾外側には馬蹄形の周溝が続っていることが明らかとなった。法面の幅は標高最高位点で3mを測った。羨道前面で1.8mの長さにわたって墓道を検出したが、その東側肩部に3個の石が並んでいた。また羨道両脇の墳丘裾で列石が確認された。この間、石室及び墳丘断面の実測を開始する。

8月24日～29日 石室及び墳丘の実測を行い、最終写真を撮影して、全ての作業を完了する。

2) 墳 丘 (Fig. 84, PL. 103)

規 模

調査前には径約4m、高さ30cmの小さな高まりを見せていた。なお、東側の墳丘裾は調査前の工事によって削られ、南側は埋め立てられていた。

列 石

羨道南端から東側へ2.8m、西側へ1.4mの列石が墳丘裾を囲繞していた。羨道に近い部分では石材を3段積み上げており、列石先端に近い部分では1段横積みである。

周 溝

墳丘北半山側を馬蹄形に大きく掘り込んでいる。法面幅は最高90cmを測り、標高67.5mの地点で自然消滅している。北西の周溝上端は5号墳墳丘裾と相接している。なお東側の周溝上端は工事によって大きく壊されている。

構 築 状 況 (Fig. ㉔)

山側を大きく掘り込み、中央に平坦面を築いている。奥壁側のみをさらに深く掘り込んで、中

石室を築き、上に墳丘を盛り上げている。墳丘裾と当初の地山整形法面との間が周溝となっている。つまり周溝は墳丘を周辺の自然地形から隔絶させる意図をもって掘られたのではなく、急斜面の地形上に古墳を築くための必然的結果として存在するのである。

墳丘は3次にわたって盛られている。

3) 石 室 (Fig. ⑤, PL. 104-2)

両袖単室の横穴式石室で、N-170°-Eの方向に開口している。石室規模は Tab. 11(p. 177)の通りである。

石室掘り方は玄室奥壁側にのみ存在する。地山整形面より3段にわたって掘られており、その深さ1.8mに及んでいる。奥壁腰石はその掘り方壁にもたせ掛けられている。その用材は幅1.3m、高さ80cmの石を立てており、西壁との間に幅55cm、高さ約50cmの石を用いている。上には1・2段の石を15°の角度で持送りしながら横積みしている。

両側壁は各2個の用材を腰石としている。上に腰石より僅かに小さい程度の石を横積みしている。最も残りのよい西壁中央で床面より1.5mの高さがあるが、持送りはこの段階では認められない。玄室床面には若干の板石がみられ、本来全面に敷石されていたと考えられる。

東側袖石は床面より66cmの高さがあり、玄室に面した幅は54cm、羨道に面した幅は30cmである。幅狭の石材を用いながらも、玄室の平面プランに左右対象を求めようとした意図が感じられる。袖石とそれに続く腰石とにかけたの床面は敷石されている。敷石部に続く開口部側床面に敷石よりやや大き目の板状石が置かれており、その部分の床面はかなりの傾斜を示している。閉塞石の根石と考えられる。閉塞石より外面の羨道側面は小さな乱石積みとなり、列石へと続いている。

墓道は1.75mのみ確認したが、さらに続いている可能性があった。墓道の東側肩部には3個の石を据えていた。

4) 遺 物

出 土 状 況

金環・玉類といった装身具が玄室床面北東隅より出土した。土器類は石室内部からは1点の壺が検出された。西南側の周溝中から多く出土した。

出土遺物を列記すると、次の通りである。

- | | | |
|---------|-----|------|
| (1) 装身具 | 耳 環 | 3 個 |
| | 切子玉 | 1 個 |
| | 管 玉 | 1 個 |
| | 小 玉 | 16 個 |

- (2) 土器 須恵器 6 個体
 杯 蓋 2 個体
 高 杯 1 個体
 壺 3 個体

耳環 (Fig. 85-1~3, PL. 105-2) 1は金環, 2・3は銀環で対になる。1の金箔の残りは非常に良い。径は2.8cm, 2・3の銀箔は一部腐食して破損している。径は2.6cm×3.0cmで扶状部方向がやや短い。

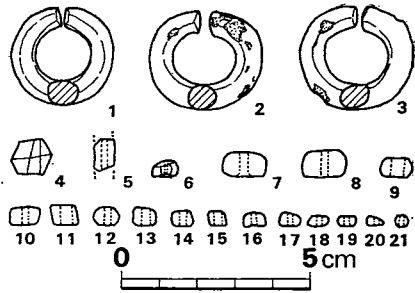


Fig. 85 古野C 6号墳出土耳環及びガラス玉実測図 (縮尺1/2)

切子玉 (Fig. 85-4, PL. 105-1) 小さな水晶製品で縦のカット稜はない。全体に磨耗が著しい。穿孔は片側からである。長さ9mm, 中央径10mm。

管玉 (Fig. 85-5, PL. 105-1) 翡翠製で淡青緑色である。上下両端を欠損した後も使用したらしく、破損面が磨耗している。径5.5mm, 孔径1.5mm。

小玉 (Fig. 85-6~21, PL. 105-1) 6は赤瑪瑙製, 他はガラス製である。1の研磨は雑

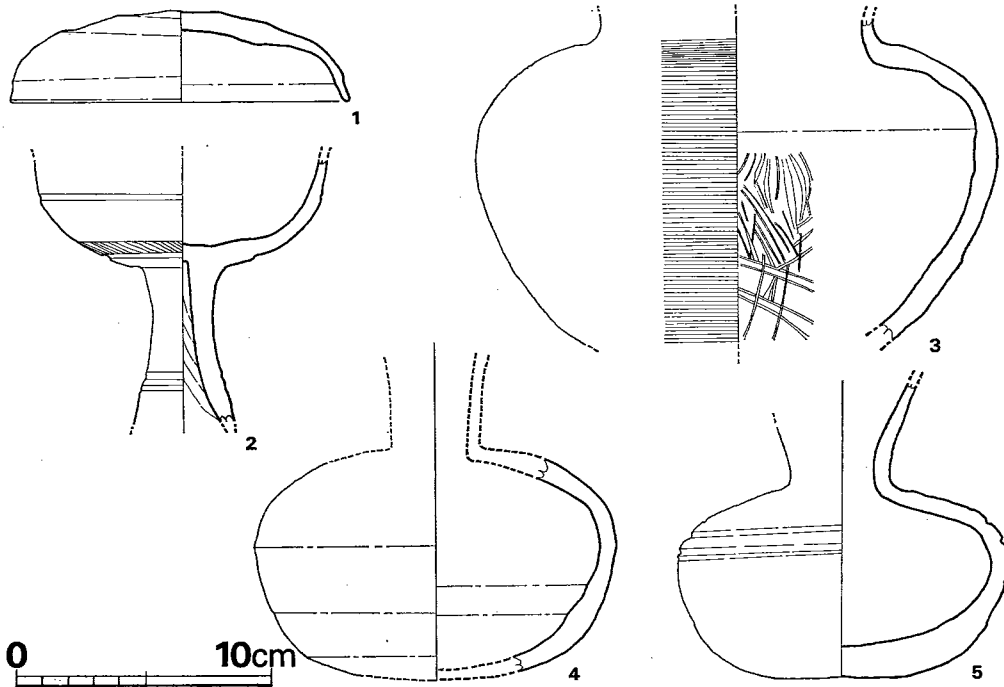


Fig. 86 古野C 6号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

で、底面に自然面を残している。7~9はコバルトブルーの巻き作り鉛ガラスである。10~20はコバルトブルーの切り作り鉛ガラスである。21はライトブルーを呈し、ソーダガラスでないかと思われる。

須恵器 (Fig. 86, PL. 105-3)

杯蓋 (1) 天井部はヘラ削りを行っている。外反する口縁部と体部との境に内外面共稜が入る。灰黒色で、焼成堅緻である。胎土中砂粒が多い。口径 13.3cm, 器高 3.7cm。他に王城山C6号墳北側周溝中出土品との接合資料が西南側周溝中から出土している。作りは図示したものに類似し、口径 13.6cm, 器高 3.9cmである。谷を挟み丘陵を離れた地点からなぜこのような出土の仕方をするのか、当時の葬送儀礼を考える上で興味ある問題である。

高杯 (2) 杯体部は丸く深い。2条の沈線と平行斜線をもつ。脚柱部は杯部との接合部が明瞭である。柱部中央に2条の沈線を持ち、内側にはシボリ痕が観察される。精製された粘土を用いている。色調は灰褐色で、焼成良好である。

壺 (3~5) 5が床面出土であるが、同一個体の破片は王城山C3号墳周溝中からも出土している。胎土中砂粒が多い。肩部は窯中の砂をかぶって灰色であるが、他は黒色で焼成堅緻である。3は肩が張った壺で、体部内面に同心円印が残り、頸部から肩部にかけてヨコナデされている。体部外面は一面に粗いカキ目調整されている。灰色を呈し堅緻である。4は胴の一部のみ出土した。外面全体ヨコナデされている。復元最大径は14.6cmである。

5) ま と め

調査の結果、本古墳は径7.3m, 高さは床面より1.9mと推定された。

床面出土の壺は西南側周溝中の出土土器と同時期の所産と考えられる。出土品中に2点も王城山C古墳群出土品と同一個体のものがあつた。後世の顕著な攪乱は考えられないので、当時の葬制と関係のある結果であろう。

(酒井 仁夫)

号数	墳 丘				石 室										周 溝	列 石	墳丘中土器		
	現状径	復元径	現状高	復元高	形状	開口方位	玄 室					羨 道							
							奥巾	前巾	中央長	左側長	右側長	長	奥巾	前巾					
古野C4	110	1100	200	300	兩袖單室	N-157-E	170	150	242	232	246	284	92	152	ナ シ	羨道西わき墳丘スソ	ナ シ		
古野C5	600	500	50	?	袖無單室	N-161-E	124	不明	370	350	190+ α				東-北-西	ナ シ	ナ シ		
古野C6	400	730	30	190	兩袖單室	N-170-E	190	174	170	158	164	180	70	106	東-北-西	羨道わき墳丘スソ	ナ シ		
原 口	700	120× 145	50	不明	兩袖單室	N-226-E	175	170	225	220	232	225	75	90	ナ シ	南東墳丘スソ	ナ シ		
喜一田	600	500	50												西側のみ検出	ナ シ	ナ シ		
唐 山	800	780	100	200	兩袖單室	N-138-E	192	166	210	208	184	350	71	120	西側	東側墳丘中	ナ シ		

Tab. 11 古野C古墳群・原口・喜一田・唐山各古墳墳丘及び石室各部計測値 (単位cm)

V その他の古墳の調査

1. 原 口 古 墳

1) は じ め に

占 地

古野C古墳群と丘陵を異にする南約250mの丘陵鞍部に位置する。標高は90~92cmと高く、周辺に古墳は見当らず、独立墳のようである。西側は急勾配の斜面であり、古墳築造には不向きである。

調 査 経 過

昭和47年8月1日 裏ノ田遺跡より資材を移動し、調査を開始する。

8月2日~5日 樹木を伐採し、現状の写真を撮影した後、表土を除去する。

8月6日~8日 ベンチマークを移動して地形測量を行う。石室をこの間に掘り終え、主軸に合わせた墳丘上のトレンチを1本、直交するトレンチ4本を掘削する。

8月9日~12日 墳丘及び石室を全て検出し終える。写真撮影後石室の実測作業に入り、ほぼ完了する。

8月18日~16日 盆休み

8月17日~18日 補足実測を終え、資材を王城山C群へ移動して全ての作業を完了する。

2) 墳 丘 (Fig. 87, PL. 106)

規 模

調査前に直径7m、高さ約50cmの高まりを見せていた。中央に盗掘坑があり、その状況からして、尾根線と直交する南西方向に開口する石室が想定された。

列 石 (Fig. ⑤)

南東側の墳丘裾に40~80cm大の石4個を横にして据えた列石が検出された、各石間には隙間があり、土止めを目的とするには不完全な並べ方である。

構 築 状 況 (Fig. ⑤)

墳丘の残存状態は極めて悪い。最も封土の高い奥壁側でさえ、平坦にした地山整形面上80cmにすぎない。東西両側は40~60cmの厚さで、2層を数えるのみである。周溝はない。

3) 石 室 (Fig. ⑥, PL. 106・107-1)

両袖単室の横穴式石室でN-226°-Eの方向に開口している。石室規模は Tab. 11 (p. 177)

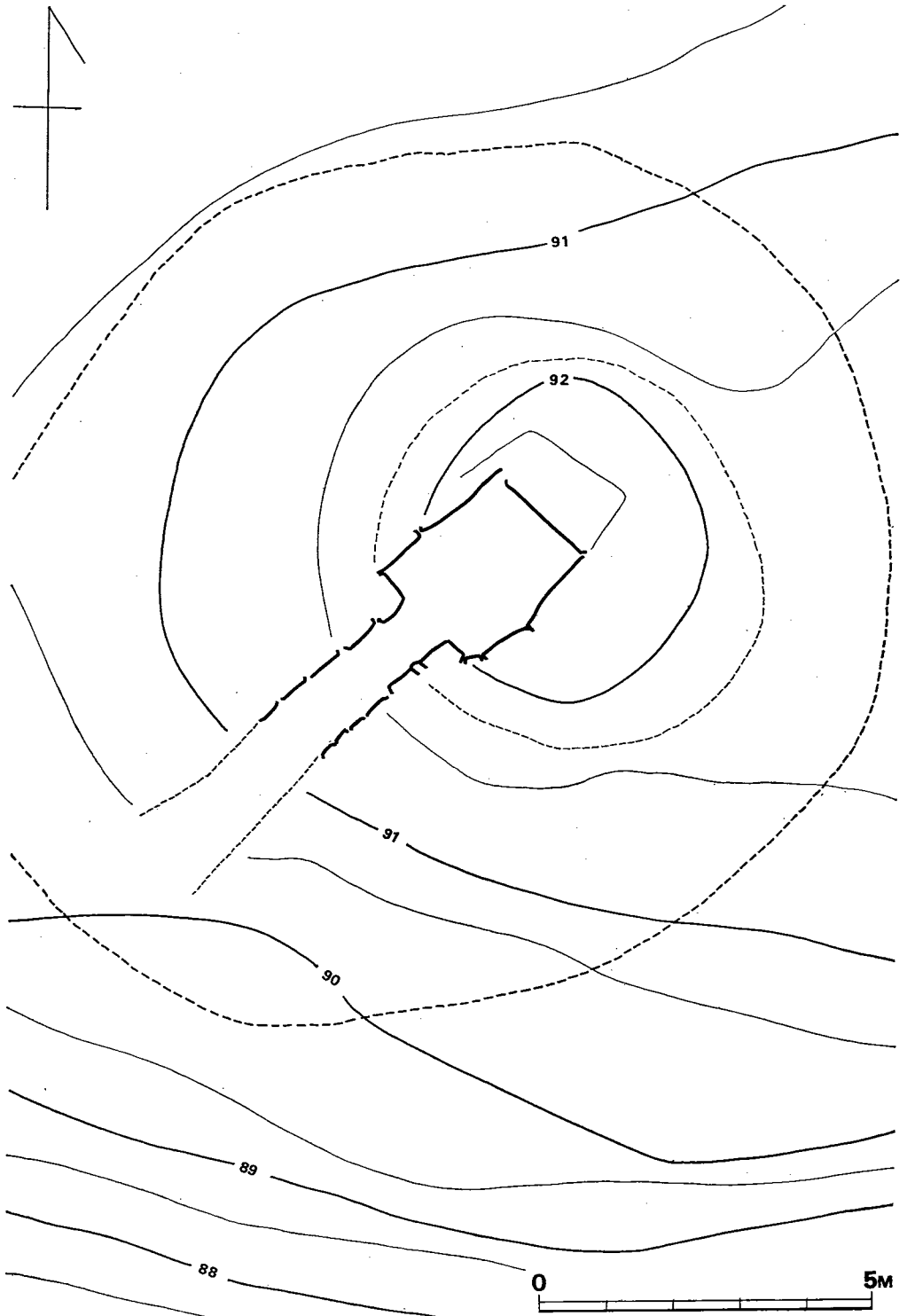


Fig. 87 原口古墳墳丘測量図(縮尺1/100)

の通りである。

石室掘り方は馬蹄形に羨道部端まで及んでいる。床面で奥幅3.6m、前幅1.6mである。床面はまったく平坦である。

玄室奥壁は中央で床面より54cmの高さの用材を奥幅いっぱい横積みして腰石としている。奥壁に近い側壁用材も同様な積み方をしており、高さよりも石材の幅を有効に用いようとした意図が感じられる。羨道寄りの床面には敷石が残っており、本来は床面全体に敷石されていたと思われる。

袖石は床面上敷石から80cmの高さの石を両壁とも用いており、その間の羨道寄りの端に栴石を置いている。両壁とも袖石を含めて2個の用材を縦積みして腰石となしており、それより開口部寄りには小礫の横積みである。縦積み部までは床面に敷石されており、その端の西壁寄りには横長の石が置かれている。境石を意図しているであろう。この石を境として横積みした閉塞石の基礎石が2段分残っている。

墓道は羨道部端より約2.8m続いている。奥幅90cm、前幅1.4mで西の谷側へ広がっている。

4) 遺 物

出 土 状 況

玄室の床面南西隅より蓋 (Fig. 89-4) 及び耳環 (Fig. 88-1~3), 刀子 (4・5) が出土した。石室や墓道の埋土中出土品が最も多い。糸切り底の土師器は玄室埋土上面からの出土品である。羨道中出土品で南側墳丘上より同一の破片を出土した須恵器の例 (Fig. 89-2・12・15) もある。

本来は墳丘上に据え置かれており、それが壊れ、羨道中に落ち込んだのであろう。

出土品を列記すると、次の通りである。

- | | | |
|---------|-----|--------|
| (1) 装身具 | 耳環 | 5個 |
| (2) 工具 | 刀子 | 2本 |
| (3) 土器 | 須恵器 | 19個体以上 |
| | 杯蓋 | 3個体 |
| | 杯身 | 3個体 |
| | 高杯 | 4個体 |
| | 埴蓋 | 1個体 |
| | 埴 | 1個体 |
| | 臚 | 1個体 |
| | 平瓶 | 3個体 |
| | 甕 | 2個体 |

土師器 1個体

杯 1個体

耳環 (Fig. 88-1~5, PL. 107-2) 2と3がほぼ同径で対と考えられ、他は1個ずつである。1は銀環で径3.1cm, 2・3は金環で径2.6cm, 4は箔が残っていないが、径2.2cm, 5は金環で径1.8cmである。

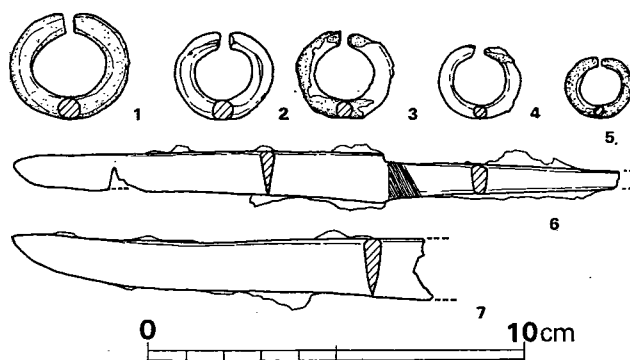


Fig. 88 原口古墳出土耳環及び直刀実測図 (縮尺 1/2)

刀子 (Fig. 88-6・7, PL. 107-3) 6は刃部一部と茎端を欠損するが、ほぼ完形で両関である。刃部は真直ぐで、長さ9.9cmである。茎には関部寄りに糸痕がみられる。断面は隅丸台形である。7は刃部のみで反り気味である。鋒部断面は丸味を帯びる。残存長11cm。

須恵器 (Fig. 89, PL. 108・109)

杯蓋 (1~3) 全て墓道埋土中の出土品である。1の天井部は丸く、丁寧にヘラ削りしている。口縁部は内外面とも肥厚し、端部やや尖る。やや軟質で黒灰色である。口径12.3cm, 器高4.3cm。2の天井部はやや平坦で丁寧なヘラ削りを施している。体部と直立する口縁部との境に稜が入る。口縁端部は丸い。やや軟質で淡青灰色である。口径13cm, 器高4.2cm。3の天井部は平坦で、粗いヘラ削りを行っている。蓋の受け部は平坦で、かえりも短い。胎土、焼成とも悪く、灰緑色を呈する。口径12.4cm, 器高2.9cm。

杯身 (5~7) 全て墓道埋土中の出土品である。いずれも丁寧に調整をしておき、ヘラ削りは体部中央以上にまで及んでいる。灰色~灰黒色を呈し、胎土、焼成とも良好である。5は口径13.4cm, 器高3.7cm。6は口径13.6cm, 器高4.1cm。7は口径15.2cm, 器高3.7cmである。

高杯 (9~12) 11が墳丘攪乱土中、他は墓道埋土中の出土品である。9・10の器形・調整法・胎土・色調はほぼ同一である。10の内面に同心円叩文が一部残っている。9は口径14.8cm, 10は口径14.2cmである。

壺 (8) 口縁部のみで、墓道埋土中から出土している。ヨコナデ調整は全体に丁寧である。色調は暗灰橙色で、焼成堅緻である。

埴蓋 (4) 玄室床面唯一の土器である。天井部のヘラ削りは粗く、全体に厚手である。色調は灰黒色で、焼成堅緻である。口径9.9cm, 器高2.9cm。

埴 (13) 墓道埋土中の出土品である。内傾する口縁の端部は丸い。体部に強いヨコナデを施している。底部は停止ヘラ削りである。軟質で、淡青灰色である。口径7.6cm, 器高9.1cm。

平瓶 (14~16) 3個体とも墓道埋土中の出土品であるが、15の破片は南側墳丘上からも検

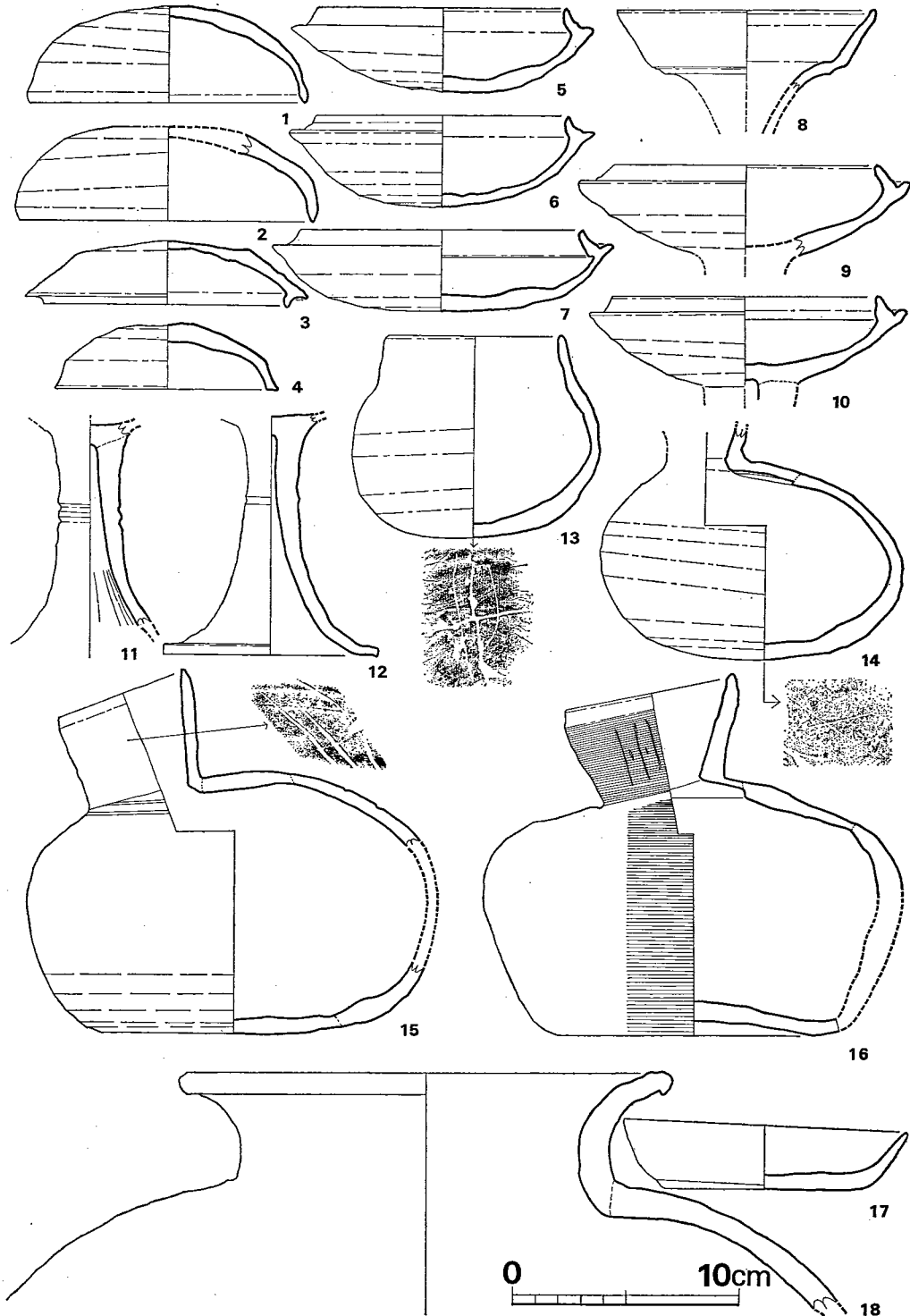


Fig. 89 原口古墳出土須恵器, 土師器実測図 (縮尺 1/3)

出されている。14は胴部が片側に強く張り出し、強いヨコナデを施している。底部は丸く、丁寧なヘラ削りを施している。胴部最大径14.7cm。15は直線的な口縁部をもち、端部はやや尖る。体部にはカキ目の上ヨコナデを施している。底部は平坦でヘラ削りしている。灰黒色～暗橙色で、やや軟質である。口径6cm, 器高16.2cm, 最大胴部径18.1cm。16は両肩が張り、中心に近い位置に頸部が付されている。底部は平坦で上げ底である。口縁部から底部にかけて全面にカキ目調整されている。淡青灰色～灰黒色で堅緻である。ヘラ記号は底部の全体に及び、縦横3本構成の格子文である。

甕(18) 羨道床面及び墓道埋土中から出土した。口縁部は短く、端部を単純に折りかえしたのみである。体部外面は平行叩文の上粗いカキ目を施し、内面は同心円叩文である。口径22.2cm。

土師器 (Fig. 89, PL. 109)

杯(17) 玄室埋土上から出土した。焼成の良い完形品で、底部糸切りである。口径12.6cm, 器高3.1cm。

5) ま と め

調査の結果、本古墳は径9mと推定された。墳丘高については封土の残存状態が悪く推定不可能である。

耳環は5個4種類出土しており、少くとも4体が埋葬されたと考えられる。

玄室床面出土の土器が貧弱で、追葬の最終末については明確ではない。墓道や墳丘上出土の土器は古墳築造当初に墳丘上に据え置かれたか、追葬時に玄室から掻き出されたものであろう。6世紀後半の所産と考えられる。

(酒井 仁夫)

2. 喜 一 田 古 墳

1) は じ め に

占 地

喜一田古墳群中で最も東方の高所にあり、南北に派生する尾根の鞍部からわずかにさがった標高101mの東側斜面に占地する。

調 査 経 過

10月9日 発掘調査を開始する。古墳の近くにBMを移動する。周辺部を清掃して現状写真を撮る。石室内の清掃を始める。床面には敷石が存在しており、床面隅から平瓶が検出された。

10月10日 墳丘を中心とした地形測量を縮尺 $\frac{1}{50}$ で行う。

10月11日～12日 石室の軸線に合わせて2本のトレンチを設定する。北西方向を第1、南西方向のものを第2トレンチとする。第2トレンチでは斜面の高所を削って平坦面を造っているのが判った。石室構築のための掘り方は二段掘りとなる。各トレンチの土層断面図も作製する。

10月13日～14日 墳丘の盛り土を除去して掘り方の全容と地山整形の調査をする。周溝が廻ることが確認された。石室の写真撮影をする。

10月15日～16日 石室の実測を開始し、16日に終る。周溝と地山面での等高線を測り、調査を終了する。

2) 墳 丘 (Fig. 90・91, PL. 110・111-1)

規 模

調査を着手するかなり以前に土取り工事によって、墳丘の大半は削減されており、石室はその崖断面に露呈しており、南西方向に開口することが予想された。

列 石

墳丘の大半を削減されているので、前面部に列石が存在したかどうかは不明であるが、残存部からは検出されなかった。

周 溝

墳丘を斜面に築造しているため、墳丘の西側部、即ち高所にあたる部分は地山を掘りくぼめて周溝を造り、墓域を画している。周溝の断面はU字形を呈しており、底面は地形と同様に北側に傾斜する。

構築状況

斜面に位置するため石室西側では1.5m、北側部では0.3mの範囲で地山を整形して平坦面を造り、この地山上に盛り土を行う。腰石部の盛り土は、明褐色土と淡灰褐色土で交互に裏込めされており、その上方には4～5層に分けて盛り土を行って墳丘を築造している。西側のそれは平行に、南側では石室方向へ下降させた土盛り法である。

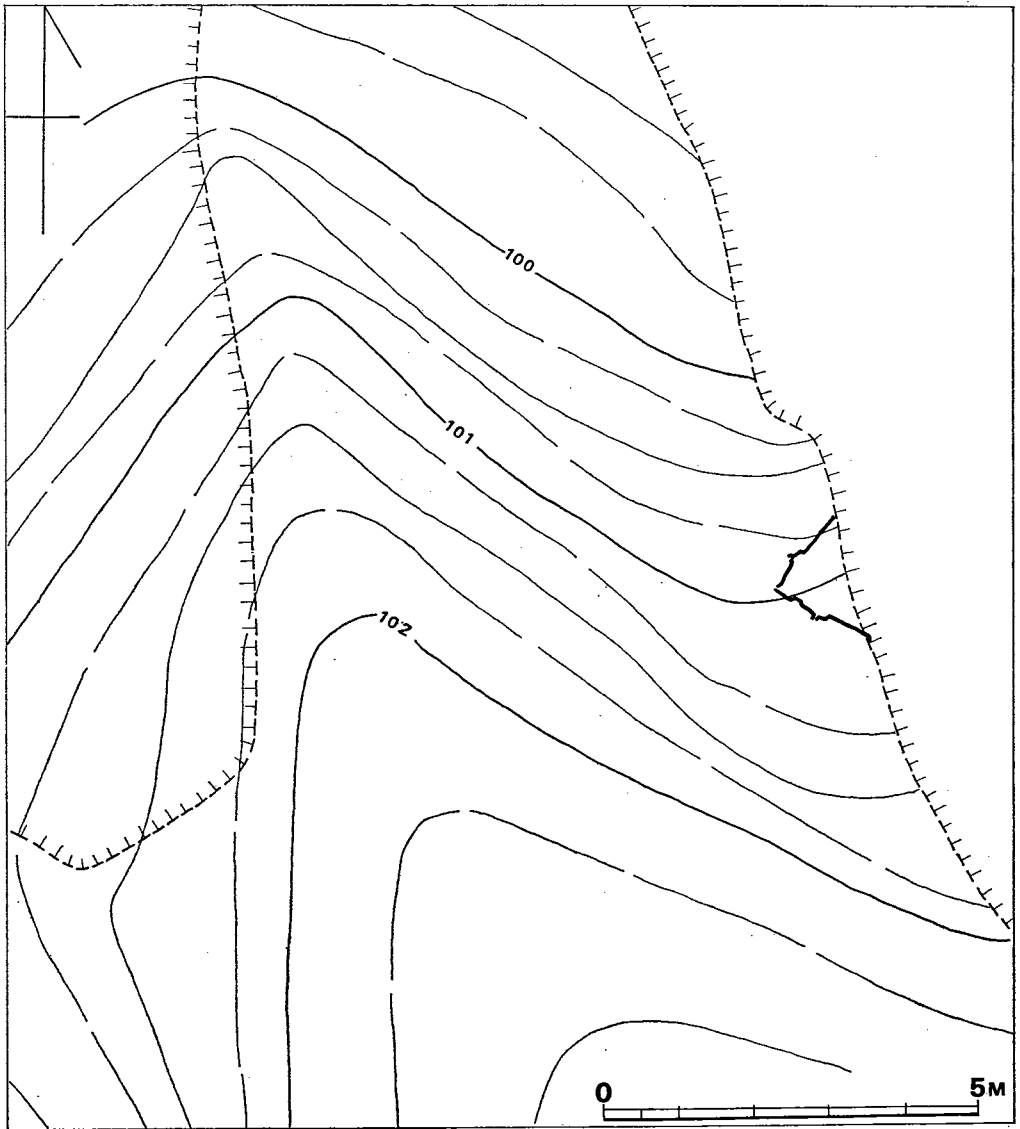


Fig. 90 喜一田古墳地形実測図(縮尺1/100)

土器列

残存部の墳丘からは一片の土器も検出されなかった。

3) 石室 (Fig. ㉟, PL. 110-2・111-2)

石室は奥壁と左側壁の一部を残存するのみであり、単室、複室の区別はつかない。主軸は

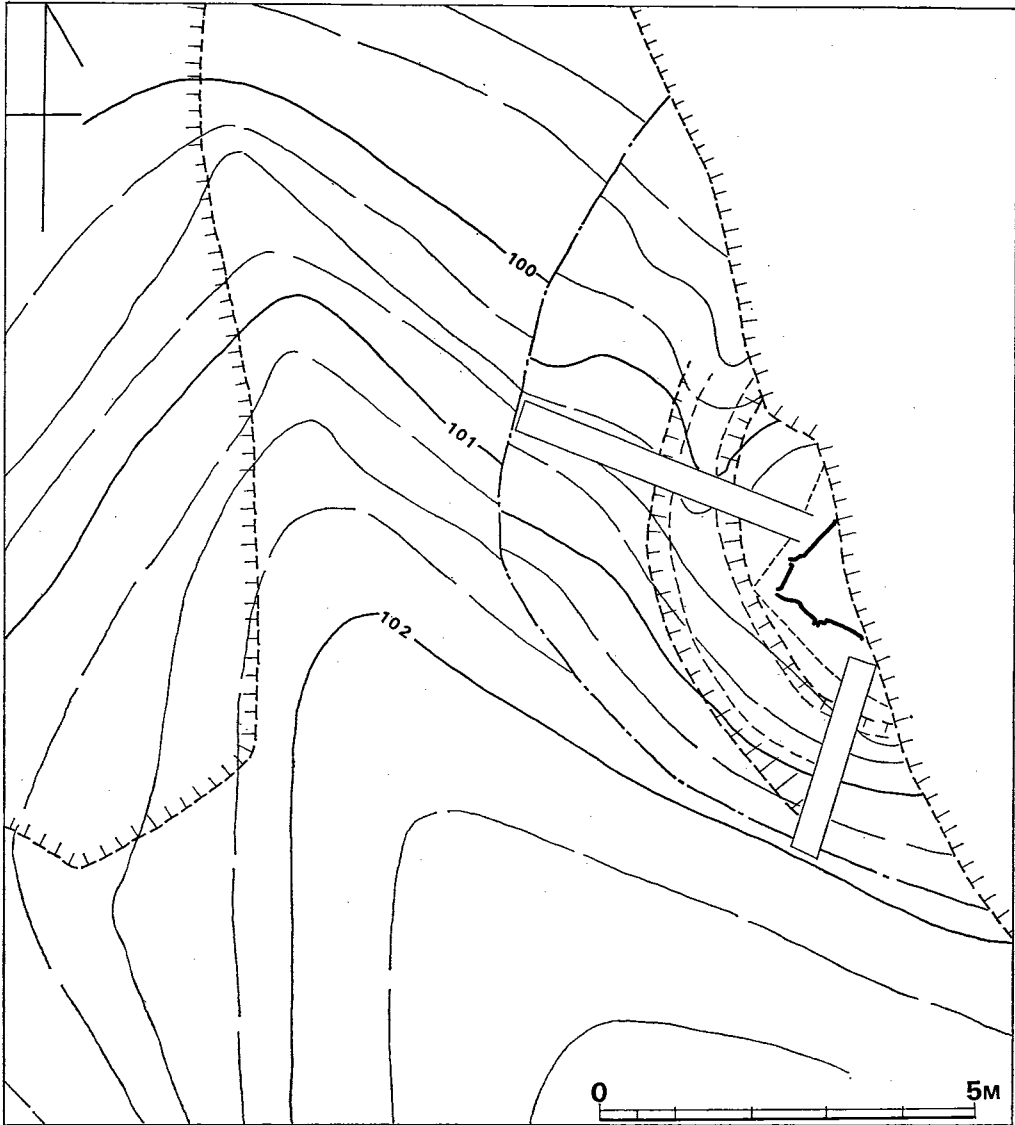


Fig. 91 喜一田古墳墳丘測量図 (縮尺1/100)

N-23°-E にとる横穴式石室である。石室規模は Tab. 11 (p. 177) の通りである。

石室掘り方は地山面から掘り込まれており、平面形はやや不整形ながらも長方形を呈している。左側壁の掘り方は二段掘りであり、深さは1.4mを測る。

玄室奥壁は、腰石として二個の石材を用いており、一個は横長に石材を据える。基底面は石材を据えるために特に掘り込むということはせずに平坦にした地山面上にある。壁面の構築法は奥壁、側壁ともに上方が内側に迫るいわゆる持ち送りがみられる。側壁は腰石にはやや大ぶりの石材を用いている。床面には幅20cm、厚さ5cm大の石材を用いて敷石する。

袖石、羨道、墓道、閉塞石については不明である。

4) 遺 物 (Fig. 92, PL. 111-3)

出 土 状 況

わずかに残存した石室の奥壁と左側壁のコーナーの床面から土器が1個体検出された。

出土遺物は、つぎの通りである。

- | | | |
|---------|-----|-----|
| (1) 土 器 | 須恵器 | 1個体 |
| | 平 瓶 | 1個体 |

須恵器 (Fig. 92, PL. 111-3)

平瓶、口頸部を欠損する。最大部径10.6cm、残存高6.9cmと小型である。調整法は頸部はナデており、以下胴部はカキ目調整を行う。底部は粗いナデ調整である。色調は明褐色を呈しており、焼成は不良である。胎土には小砂粒を含んでいる。

5) ま と め

前述の如くに本古墳は土取りにより墳丘と石室の大半を削減しており不明の点が多い。墳丘は径9m強、高さは床面から1.5m強と推定される。床面出土の唯一の土器から当古墳追葬の終末期は7世紀初頭に比定できよう。

(川述 昭人)

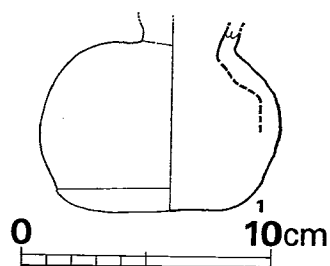


Fig. 92 喜一田古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

3. 唐 山 古 墳

1) は じ め に

唐山古墳は、標高 262m を測る乙金山の北側斜面に形成された小谷の中に位置し、1 基単独に谷間の流れに洗われるかのように石室の一部を露出して発見された。

福岡県大野城市大字乙金字唐山に所在する。

発掘調査は当初古墳 4 基の予定で着手したが、谷底のものは調査の結果、流石の集りで古墳ではないことが判明し、結果 1 基を発掘調査した。

調査期間は昭和47年 6 月 15 日～同年 8 月 5 日までである。

調査担当者 福岡県文化課技師 酒 井 仁 夫
同 森 田 勉

調査補助員 早稲田大学卒業生 中 司 照 世
国学院大学卒業生 岩 永 司

庶務担当 福岡県文化課主事 植 田 実

そのほか国学院大学学生多数が調査に参加し、多大な援助を受けた。

2) 墳 丘 (Fig. 93, Fig. ⑤⑥, PL. 112・113)

谷間の斜面に位置しているため流水および後世の石材抜き取りのため墳丘は旧状を留めていないが、石室横断方向で約 6.8m、縦断方向で約 11.3m を測り、形状は不整長円形を呈す。墳丘西側には、斜面上からの流水を受け、谷に流し込むための溝を設けている。石室の東側で盛土の流失を防ぐためか、約 20～30cm 大の石を盛土中に 3～4 段積み上げた列石を検出した。この列石の北半は攪乱のためどのように延びるか不明。

3) 石 室 (Fig. ⑧, PL. 114-1)

主軸を N-138°-E にとり略南に開口する単室の横穴式石室である。石室は緩斜面に堆積した砂質土を約 1.0m 掘った墓壇内に構築している。玄室各部の計数値は、左壁長 2.08m、右壁長 1.84m、中央仕切石内端までの長さ 2.1m、奥壁幅 1.92m、中央幅 1.84m、前壁幅 1.66m である。前壁付近の床面には敷石が残存している。本来は全面に敷いていたものと考えられる。袖石間には仕切石が置かれ、これと玄室床面とのレベル差は約 10cm を測り、玄室と羨道との区分けをしている。羨道は、左壁長 3.32m、右壁長 3.72m、袖石間 0.71m、墓道寄りでは 1.2m を測る比較的狭長なものである。墓道は地山を U 字型に掘りくぼめ、羨道先端から約 1 m の地点

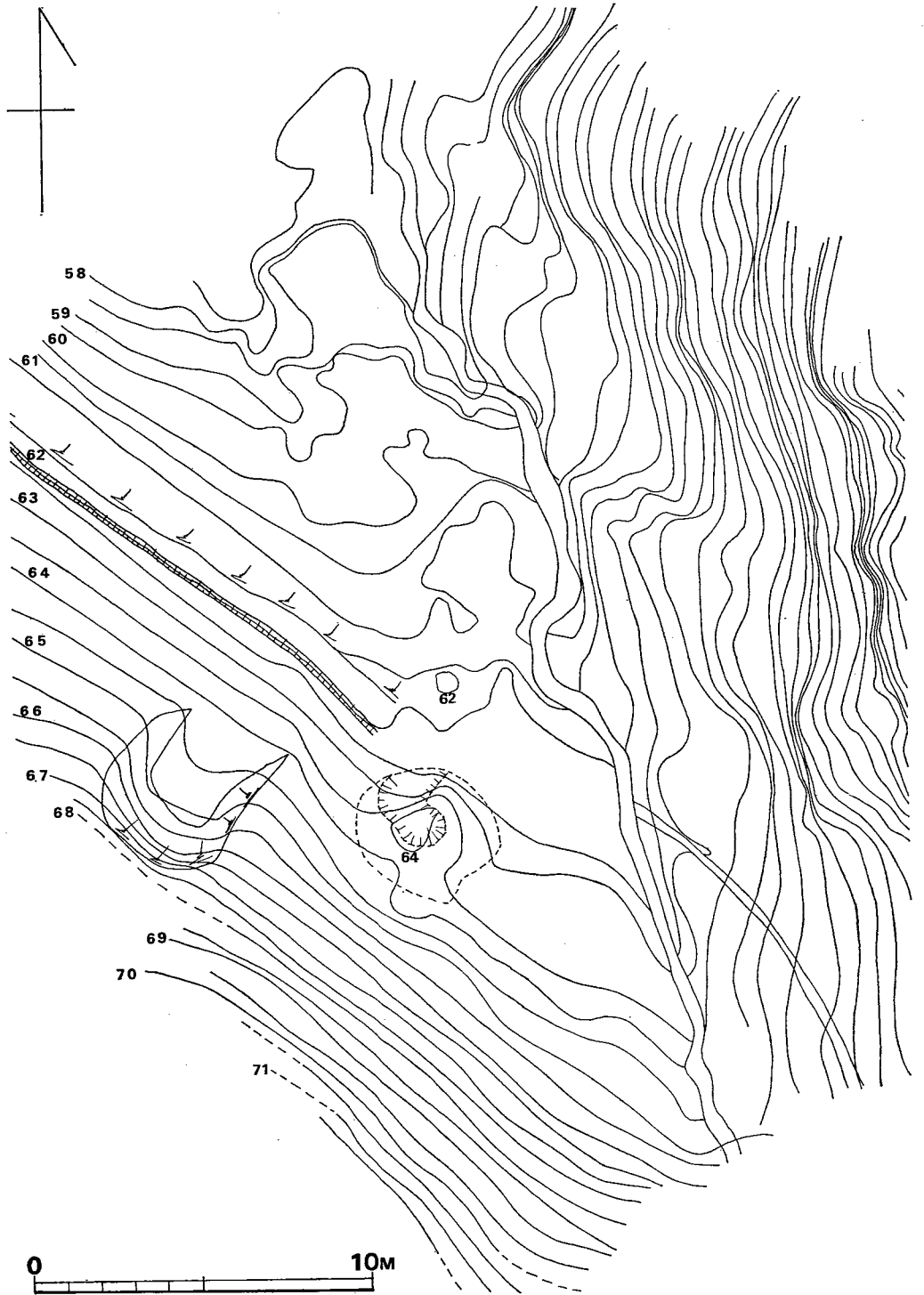


Fig. 93 唐山古墳地形測量図 (縮尺1/200)

で東に直角近く曲がり、その屈曲点から約4.5m延びた所で、谷に向かって大きく開く。前庭部は不明。

4) 遺 物

発見した遺物のうち、左袖石前面付近から出土したガラス製丸玉3個のうち2個が敷石に密着して、他の1個は敷石の下に転り込んだような状態で検出した。この3個の丸玉は原位置をさほど動いていないと考えられる。耳環は奥壁腰石の上で、他は玄室攪乱土中からの発見である。

出土遺物は下記のとおりである。

(1) 装身具

丸玉 44個

耳環 1個

(2) 土 器

須恵器杯身 1個体

丸玉 (Fig. 95-1~37, Tab. 12, PL. 114-3) 図示できるのは37個

で、他は破碎してい

る。材質はガラスと水

晶である。水晶製の丸

玉には若干稜が見られ

算盤玉に近い形状を呈

している。

耳環 (Fig. 95-38, PL. 114-2) 銅

胎に金箔を貼っている。径は23mm×

25mm, 断面は6mm×7mmを測る。

須恵器杯身 (Fig. 94) 蓋受け部の一部のみが残存しているだけの少片であり、法量は不明、その特徴から6世紀後半期のものと考えられる。

	厚 さ	径	色 調	出 土 位 置
1	2.10	4.05	Yellow Green	石室内攪乱土
2	3.00	3.50	Light Green	"
3	2.00	3.90	"	"
4	1.90	3.05	Sky Blue	"
5	3.00	3.75	"	"
6	2.65	4.05	"	"
7	3.40	5.00	"	"
8	2.00	4.00	Light Blue	"
9	1.45	3.65	"	"
10	2.05	3.65	"	"
11	1.70	3.85	"	"
12	2.00	4.00	"	"
13	2.05	4.05	"	"
14	2.55	4.35	"	"
15	1.70	4.55	"	"
16	2.75	5.00	"	"
17	4.35	3.55	Blue	"
18	3.05	5.00	"	"
19	3.70	5.10	"	"
20	3.05	5.00	"	"
21	3.70	5.85	"	"
22	2.15	3.70	Dark Blue	"
23	2.90	4.65	"	"
24	4.40	5.10	"	"
25	4.55	5.65	"	"
26	4.70	6.55	"	"
27	6.90	7.00	"	"
28	6.70	7.15	"	"
29	6.90	7.20	"	"
30	4.30	7.45	"	"
31	7.10	7.65	"	"
32	6.30	8.00	"	"
33	4.80	8.70	"	石室内出土 2
34	4.55	9.00	"	" 4
35	5.15	9.30	"	石室内攪乱土
36	7.35	10.00	"	石室内出土 3
37	5.60	6.10	"	石室内攪乱土

1~36 ガラス玉・37 水晶玉

Tab. 12 石室内出土丸玉計数値 (単位mm)



Fig. 94 唐山石室内出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

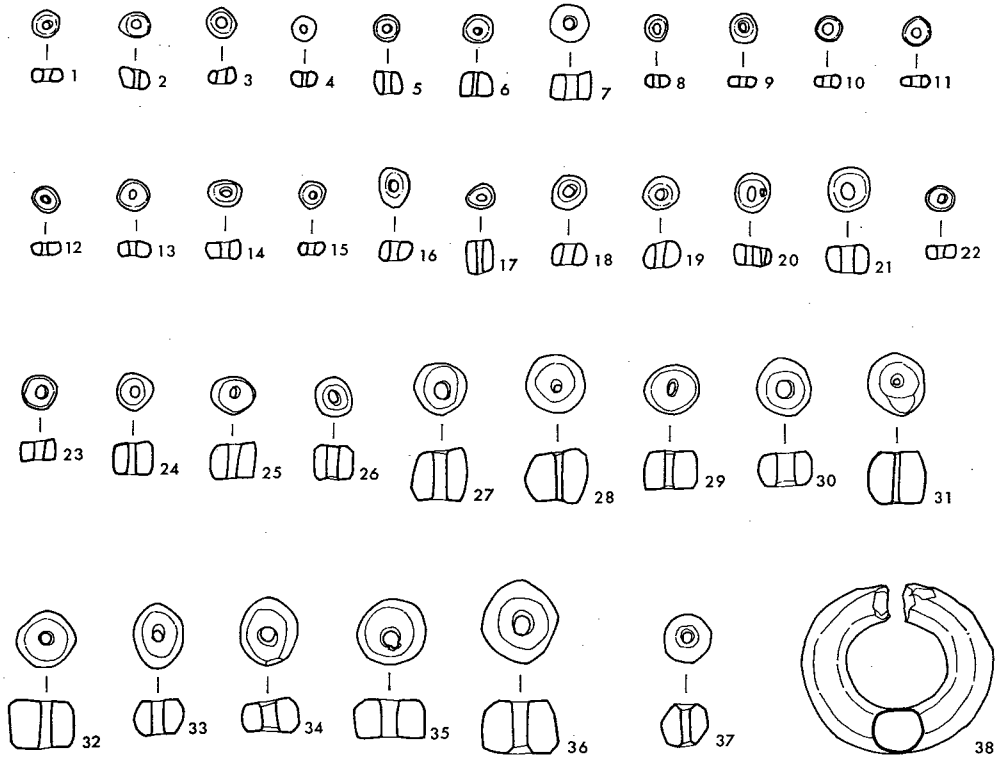


Fig. 95 唐山古墳石室内出土丸玉及び耳環実測図 (縮尺実大)

5) ま と め

本古墳の最大の特徴は谷底寄りの斜面の傾斜地に立地している所にあり、何故このような場所を選んだのか理解に苦しむ。また、同期に造営された乙金古墳群とは距離を持ち、かくまた、1基単独に造られている特異な性格を持つ古墳であると考えられる。

築造年代は、出土した須恵器杯身から6世紀末に求めることができる。

(森田 勉)

VI 附 編

A. 王城山 A 古墳群の調査

調 査 の 経 過

昭和44年4月、福博トラック株式会社（現中村ヤマハピアノターミナル）は、大野城市大字乙金字王城山910-8に楽器保管及び輸送センターを建設することになった。その予定地内に古墳数基が存在するとの通報が高田一弘氏より県文化課にあった。その報に基づいて分布調査を実施したところ4基の円墳が確認された。

福博トラック株式会社はただちに発掘届を提出し、会社側の依頼により、県文化課は同年5月1日より9日まで発掘調査を実施した。

調査の担当者は下記の通りであるが、大野城市教育委員会の多大の援助を得た。特に文化財担当職員の林隆明氏からは連日多面にわたって協力をいただいた。また機材保管場所として利用させていただいた正栄寺住職・七里文雄氏には、紙面をもって深謝致します。

調査担当者	福岡県教育庁文化課	松岡史
		石山勲
		酒井仁夫
		浜田信也

調査終了後、さらに円墳1基が検出され、5月30日に石山が石室実測を実施した。

なお、調査した5基の円墳のうち、石室を完存していた第4号墳は福博トラック株式会社代表取締役中村武雄氏のご厚意により保存されることとなった。調査終了後石室の整備が会社側の手によってなされた。また現在、墳丘の保繕工事を実施している。今後も当古墳が長く保存され、市民に活用されることを願って止まない。

調 査 の 内 容 (Fig. 96, PL. 115)

王城山A古墳群は王城山古墳群の最西端に位置し、標高40mから48mの間に位している。西端の第5号墳は丘陵北斜面にある。第1号墳は丘陵中央の最高所にある。第2～4号墳は北方から入り込んだ谷に面しており、第3号墳北に、中央に第2号墳を挟んで、第4号墳が南に位置している。

(酒井 仁夫)

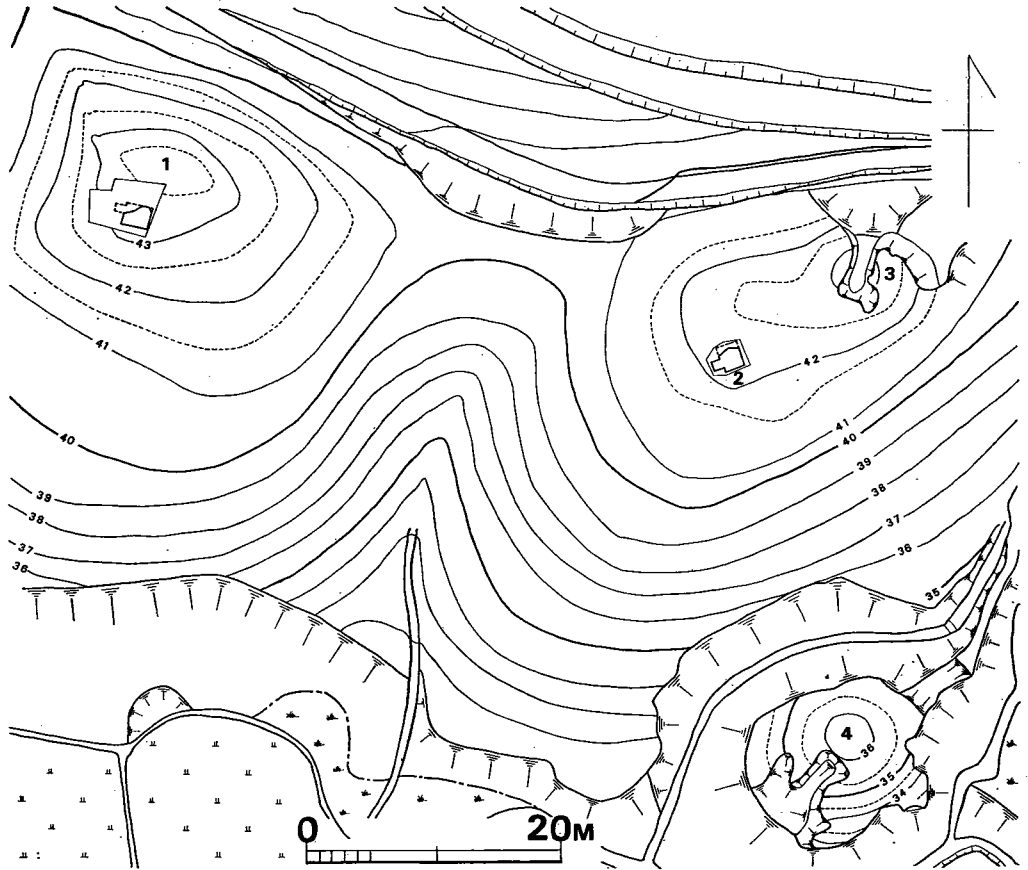


Fig. 96 王城山A古墳群地形測量図 (縮尺1/600)

1. 第 1 号 墳

王城山A古墳群中で、西側に位置し、丘陵の稜線上に位置する。墳丘は削平され、墳形、規模は不明である。

石室は、積石が全くないような状態で、一つの腰石が残っている状態であり、玄室の敷石が残っているのみである。

敷石と一つの腰石の遺存状態からして、石室は単室で、南向きに開口する石室と考えられる(PL. 116)。

(浜田 信也)

出土遺物

石室内からは鉄鏃と刀子片が検出されたにすぎない。東側の墳丘上からは、須恵の蓋杯3個体と、有蓋脚付壺が検出されており、古墳築造の年代を知る手懸りとなる。

出土遺物を列記すると次の通りである。

- | | | | |
|--------|------|---|-----|
| (1) 武器 | 鉄 | 鏃 | 2本 |
| | 刀 | 子 | 1本 |
| (2) 土器 | 須 | 恵 | 器 |
| | 杯 | 蓋 | 3個体 |
| | 有蓋脚付 | 壺 | 1個体 |

武器 (Fig. 97, PL. 119-1)

鉄鏃 (1・2) 片丸造り柳葉形に属する。箆被の断面形は円形である。

刀子 (3) 刀子の刃部の小片である。刃部幅10mm, 厚さ3mmである。

須恵器 (Fig. 98)

杯蓋 (1・2・4) 天井部と体部の境は稜が入り、口縁部はやや立ち気味となる。口縁部内面の体部との境には段がつく。調整法は天井部外面はヘラ削りを施し、頂部内面はナデを、体部から口縁部にかけては横ナデを施す。

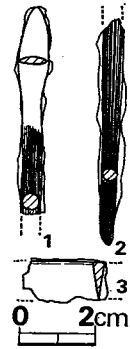


Fig. 97 王城山A 1号墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

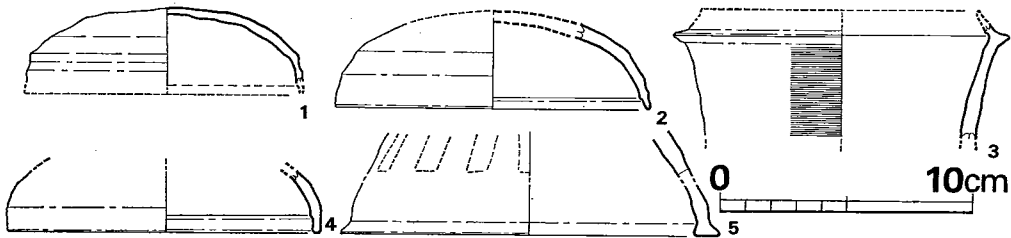


Fig. 98 王城山A 1号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

色調は2は暗赤褐色を呈しており、他は灰色を呈する。胎土には砂粒が多く、焼成は1を除くと良好である。口径は11cm～12.3cmである。

有蓋脚付壺(3・5) 3は口頸部、5は脚部であり、同一個体である。立上りは基部を残すのみであり、それによると、立上りは内傾する。立上りと内傾斜面との境は明瞭な稜がつく。脚部は端部底面は平坦面を有しており、底部全面が地につく。脚柱部には長方形の透孔が入る。調整法は頸部外面には目の細かいカキ目が入る。脚部は残存部の内外面とも横ナデ調整である。口径11cm、脚径15cmを測る。色調は黒灰色を呈している。胎土中には多量の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

杯蓋、有蓋脚付壺は同一時期に属するものと思われ、実年代は6世紀後半に比定されよう。

(川述 昭人)

2. 第 2 号 墳

第1号墳の東側約60mの丘陵の稜線上に位置する。墳丘はまったく削平され、墳形、規模は不明である。

石室は、西側の腰石2個を残すのみで、他は全て取り去られていた。玄室及び羨道の敷石は完存していた。

敷石の状態からして、この石室は両袖単室で、N-244°-Eに開口するものと考えられる (Fig. 99, PL. 117)。

(酒井 仁夫)

出 土 遺 物

玄室内床面から須恵器の提瓶が1個体と、奥壁寄りの床面から鉄刀が一振検出された。(PL. 118)

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

- (1) 武器 大刀 1振

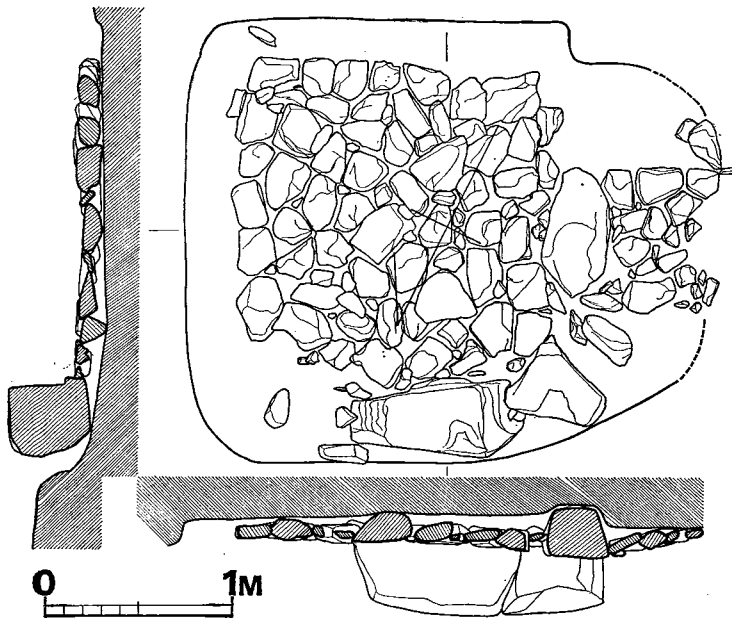


Fig. 99 王城山A 2号墳石室実測図 (縮尺1/40)

(2) 土 器 須恵器 1 個体
提 瓶 1 個体

武器 (Fig. 101, PL. 119-3)

大刀 刃部のみを56cm程残存しており、柄の部分に欠損する。刃部幅31mm, 厚さ9mmの直刀である。

須恵器 (Fig. 100, PL. 119-2)

提瓶 胴部はほぼ正円に近い形態であり、肩部には把手がつく。頸部の基部はやや幅が狭く、口頸部は、基部から1/2程はゆるやかに外反するが、上方部は大きく外反して口径を増す。口縁部は、わずかに肥厚する。胴部外面の調整は粗雑である。把手はかなりしっかりしている。口縁部は焼成時の焼きひずみが著しい。頸部にはしぼり痕が観察される。胎土には砂粒を多量に含んでおり、色調は灰色を呈する。口径は10cm, 胴部径13.5cm, 器高12cmを測る。

出土遺物の時期は、提瓶では、まだ把手もしっかりしており、6世紀頃に比定できよう。

(川述 昭人)

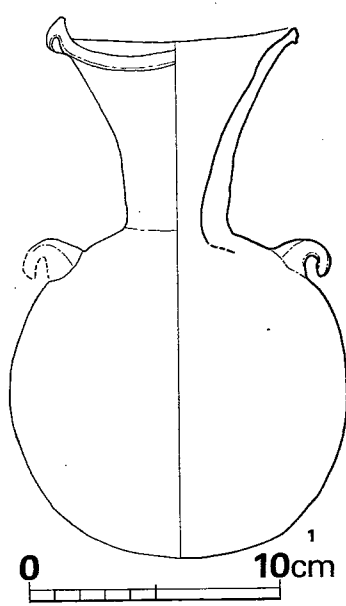


Fig. 100 王城山A 2号墳出土
須恵器実測図 (縮尺1/3)

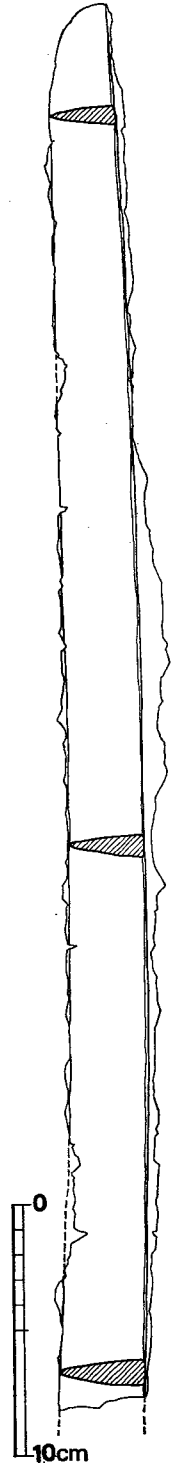


Fig. 101 王城山A 2号墳出土大刀実測図 (縮尺1/3)

3. 第 3 号 墳

1) 石 室 (Fig. 99, PL. 120)

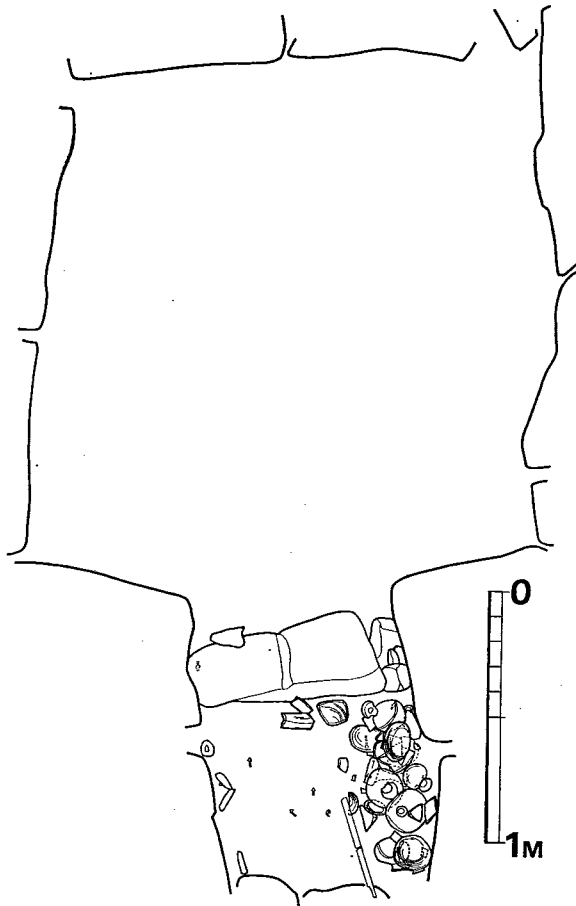
全長4.7m前後の単室横穴式石室を主体とする。玄室は方形に近い不整長方形プランで、幅は奥壁部で1.8m強、横口部で2m強。長さは中央部（奥壁から仕切り石端まで）で2.25m、左壁で1.9m強、右壁で2m弱。天井石は全て既に除去されており、周壁上半も同様で、現存高は1.3mに過ぎない。周壁構築に際しては、墓坑底をさらに一段掘り下げて腰石を据えている。以上も比較的大き目の石材を用いるが、面を長目にする傾向がある。

玄門部は0.8m弱で、床に仕切り石を置くが、袖石状に壁面から突出するのではなく、大きめの石を数段積み上げて他と区別しているに過ぎない。この前面に羨道側壁が続くが、後半（仕切り石玄室側端から手前約1.6mの間）は墓道の肩部に築かれている。前半部では腰石を用いず、この部分への天井石の架構はなされなかったものと推定される。

現存する閉塞石群は間層上にあり、埋葬時に床面の清掃が徹底しては行われなかったことを示唆している。

本石室は構造上は単室横穴式石室に属するが、閉塞群と仕切石との間には、長さ0.7m、幅0.8m前後の空間があり、純正な単室横穴式石室では仕切石直前で閉塞するのは明らかに異っており、実質的には複室式横穴式石室と大差ないとしてよい。

また石室全長約4.7mと、玄室中央長2.25mとは、2:1の比率であることが注意される。



(石山 勲)

Fig. 102 王城山A 3号墳遺物出土状況実測図 (縮尺1/30)

2) 出 土 遺 物

出 土 状 況 (Fig. 102, PL. 121)

羨道の梱石と境石との間から完形品及びそれに近い須恵器13個体が一括して出土した。

これらは古墳築造時床面より若干上位から積み上げられた状態であった。また閉塞石に持たせかけるようにして大刀一振が出土した。

鉄器類や勾玉は羨道の床面から散乱した状態で出土した。

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 装身具	勾 玉	1 個
	耳 環	1 個
(2) 武 器	大 刀	1 振
	鉄 鏃	7 本
(3) 馬 具	轡	1 個
	鍔金具	1 個
(4) 工 具	鉄 鎌	1 個
(5) 土 器	須恵器	13 個
	埴 蓋	1 個
	埴	2 個
	脚付壺	1 個
	直口壺	2 個
	高 杯	3 個
	提 瓶	4 個
	埴 輪	1 個
	灯明皿	1 個

装 身 具 (Fig. 103, PL. 122-2)

勾玉 (3) メノウ製で、尾部は太く、尾端部も尖らない。全長2.8cm。

耳環 (2) 細味の銅環である。図上左は折れて曲っている。環外径2.0cm。

武 器 (Fig. 103, PL. 122-3-4・6)

大刀 刀身は閉塞石に立て掛けられて羨道中から出土したが、現品は紛失した。1は圭頭大刀のしとど目 (PL. 122-4) であり、銅心金張りである。

鉄鏃 (6~12) 3類7本が出土している。いずれも広根である。6~9は三角形式で篋被茎共に方形である。最大幅は6が3.1cm、7~9が2.4cmである。10は五角形式、11・12は円頭

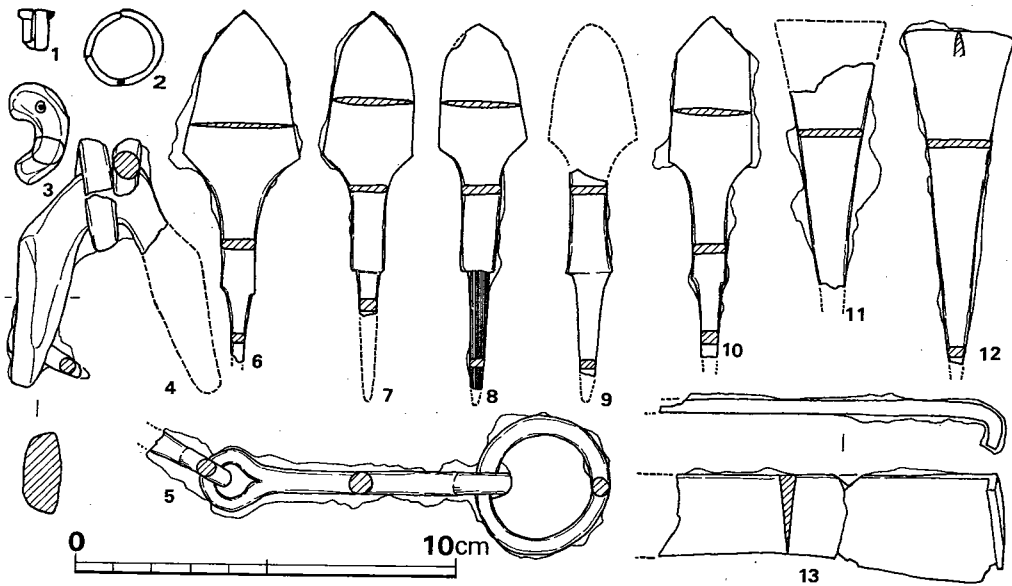


Fig. 103 王城山A 3号墳出土土玉及び鉄器実測図 (縮尺1/2)

斧箭式である。

馬具 (Fig. 103, PL. 122-5・7)

轡 (5) 長さ8.3cmで径6mmの細味の銜と径3.5cmの素環鏡板である。

鏡 (4) 肩の張ったU字状金具で、頂部に素環2個が巻かれている。脚部の横幅は2.1cmで、端部近くに長さ約2.3cmの鉄釘が斜めに打たれている。

鎌 (13, PL. 122-8) 長さ9.3cmを残す。柄取付け方向は鈍角である。

(酒井 仁夫)

須恵器 (Fig. 104-1~9・105, PL. 123・124)

埴 (1~3) 1は埴の蓋である。天井部と体部の境は角張っており稜がつく。口縁部は外反気味に端部へ続き、端部は丸くつくられる。調整法は天井部外面はヘラ削りを施し、頂部内面はナデ調整である。体部、口縁部は横ナデ調整を施す。色調は身にかぶせて焼いたため、外面は暗灰色であるが、内面は明灰色を呈する。胎土には細砂粒を多量に含んでおり、焼成は良好である。口径9.9cm、器高3cmを測る。出土状況などからみて、2とセットになると推定される。2は口頸部は短く内傾し、肩部との境には1条の沈線が入る。肩部の張り出しが著しく、器形はやや扁平な感じを受ける。調整法は底部はヘラ削りを行う。口径7.6cm、器高7cmを測る。青灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。3は口径部が長く直立する形態である。胴部中央部はやや角張っており、上下の沈線をはさんで刺突文が入る。肩部は頸部との境の沈線を含めて、3箇所沈線が入る。調整法は底部はヘラ削りを施し

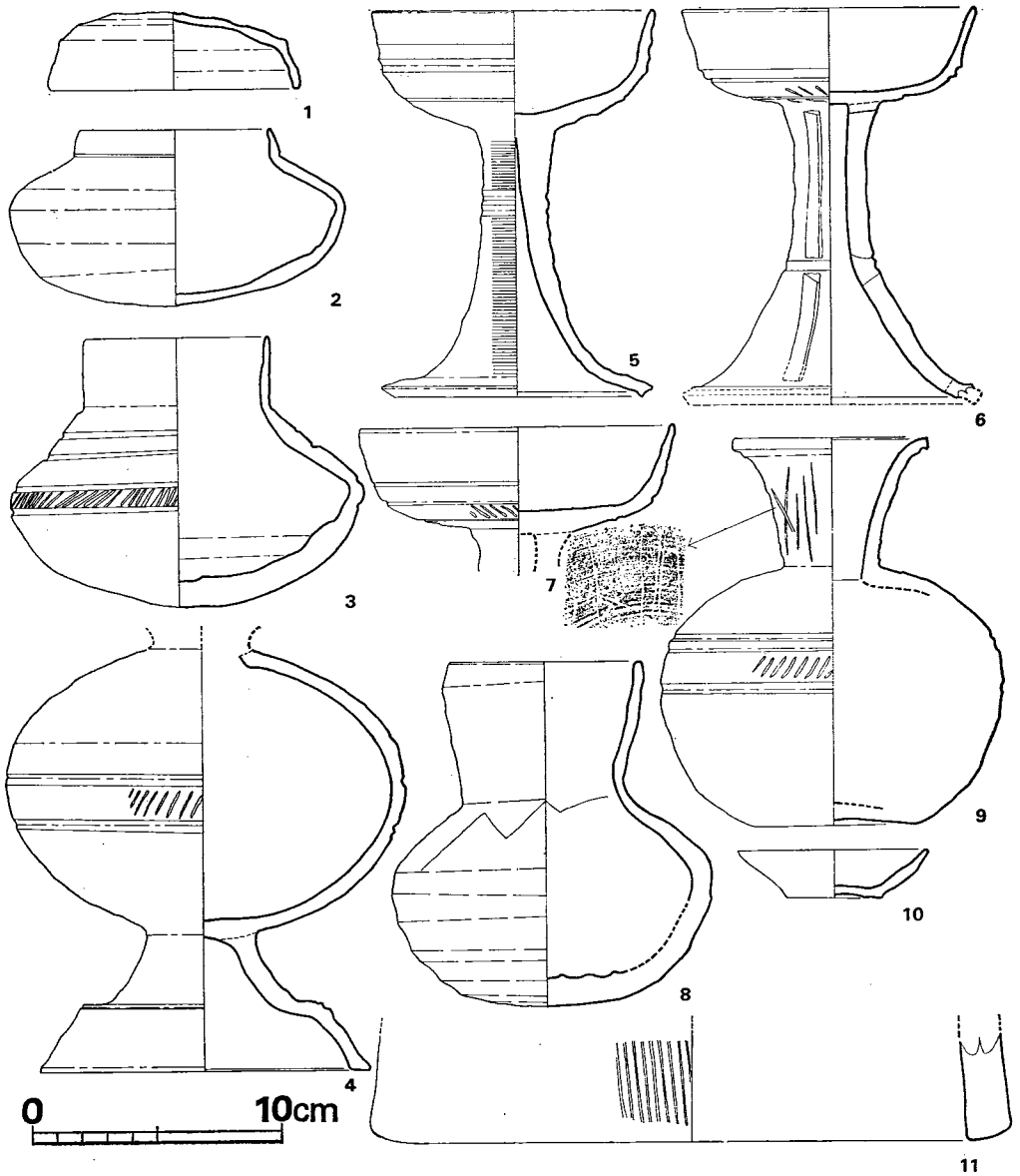


Fig. 104 王城山A 3号墳出土須恵器，土師器実測図（縮尺1/3）

ており，その他の部分は横ナデを施す。底部は非常に器壁が厚い。口径は7.3cm，器高10.7cm，最大径14cmを測る。灰黒色を呈しており，焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。

脚付壺（4） 口頸部のみを欠損する。脚部は中程で一段ついて，外反し脚裾径をひろげる。この部分の外面には沈線が入り，鋭い稜がつく。脚裾端部は外方へつき出しており，底面

は内面は若干上って地につかない。胴部はなめらかなカーブを描く。胴部最大径はほぼ中央部にあたり、2条の平行沈線が入る。この沈線間には刺突文が入る。調整法は現存部分はすべて横ナデ調整を施す。色調は青灰色を呈している。胎土には砂粒を含んでおり、焼成は良好である。脚裾径13.2cm、胴部径15.8cmを測る。

直口壺(8・9) 8は口頸部は6.7cmあり、わずかに外反しており、口縁部は内傾する。胴部最大径は中央よりやや上方に位置する。ヘラ削りは非常に広範囲に施されており、全体の%をしめる。肩部以上は横ナデ調整であり、外面にはヘラ記号を有する。このヘラ記号はほぼ半周する。青灰色を呈しており、焼成は良好である。口径7.6cm、器高12.8cmを測る。9は8の口頸部と異り、頸部基部は幅をせばめており口頸部は外彎する。口縁端部は平坦面を有しており、外方につき出す。胴部最大径は中程に位置しており、これを境として1条の沈線が入り、上方には2条の沈線が入る。そしてこの沈線間には刺突文が入る。ヘラ削りは底部から胴中央部よりわずかに下った位置まで広範囲に施されている。その他は横ナデを施す。底部は平坦面よりむしろくぼむ。口径7.8cm、胴部径13.5cm、器高15.5cmを測る。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には大き目の砂粒を含む。頸部にヘラ記号を有する。

高杯(5~7) 3個体とも無蓋高杯である。7は脚部を欠損する。5は透孔のない脚部であり、全面にカキ目が入る。杯部は、底部と体部の境には沈線が入り、体部はやや外反する。外面には横ナデの凹凸が著しい。脚端部は段を有する。脚柱上方部には2条の平行沈線が入る。口径11.2cm、脚裾径10.8cm、器高15.5cmを測る。6は脚部に透孔が入る形態であり、7も杯部の形態が同じであるのでこれも脚部に透孔が入るものと思われる。透孔は長方形を呈しており、上下2段で3箇所に入る。杯部は、底部と体部の境には沈線が入る。体部はやや外反しており、口頸端部は丸い。体部と底部の境から底部へ下った所にも1条の沈線が入り、この間に刺突文が入る。調整法は杯底部はカキ目調整が入り、その他の部分は横ナデ調整を施す。口径は11.7cmと12.4cm、器高は16cm弱である。色調は黒灰色を呈している。焼成は良好であり、胎土も良い。

提瓶(Fig. 105-1~4) 1・2は大形品であり、3・4は小形品である。1・2はともに、把手がつくが1は残存部の観察から環状の把手がつくものと思われ、2はやや退化した形状のものがつく。ともに口頸部を欠損する。胴部の平面形はきれいな円であり、脊面は平坦面を有する。2の方が側面はひとまわり大きい。胴部径は19.2cmと約20cmである。1は胴部にはカキ目が入る。色調は1は灰色を、2は暗赤褐色を呈する。3・4は小形の提瓶であり、3は口縁端部を欠損する。3は頸部上方に楕圓波状文が狭い範囲に入る。頸部は直線的に外反する。胴部は正円に近く、カキ目が入る。脊面は平坦面を有する。4は口頸部は外彎し、端部はやや角張る。胴部は円形がややくずれており、カキ目が入る。脊面は平坦面を有する。4は頸部にヘラ記号が入る。3は口径7.2cm、胴部径10.8cm、器高14cmである。4は口径6.4cm、胴部径10cm、器高

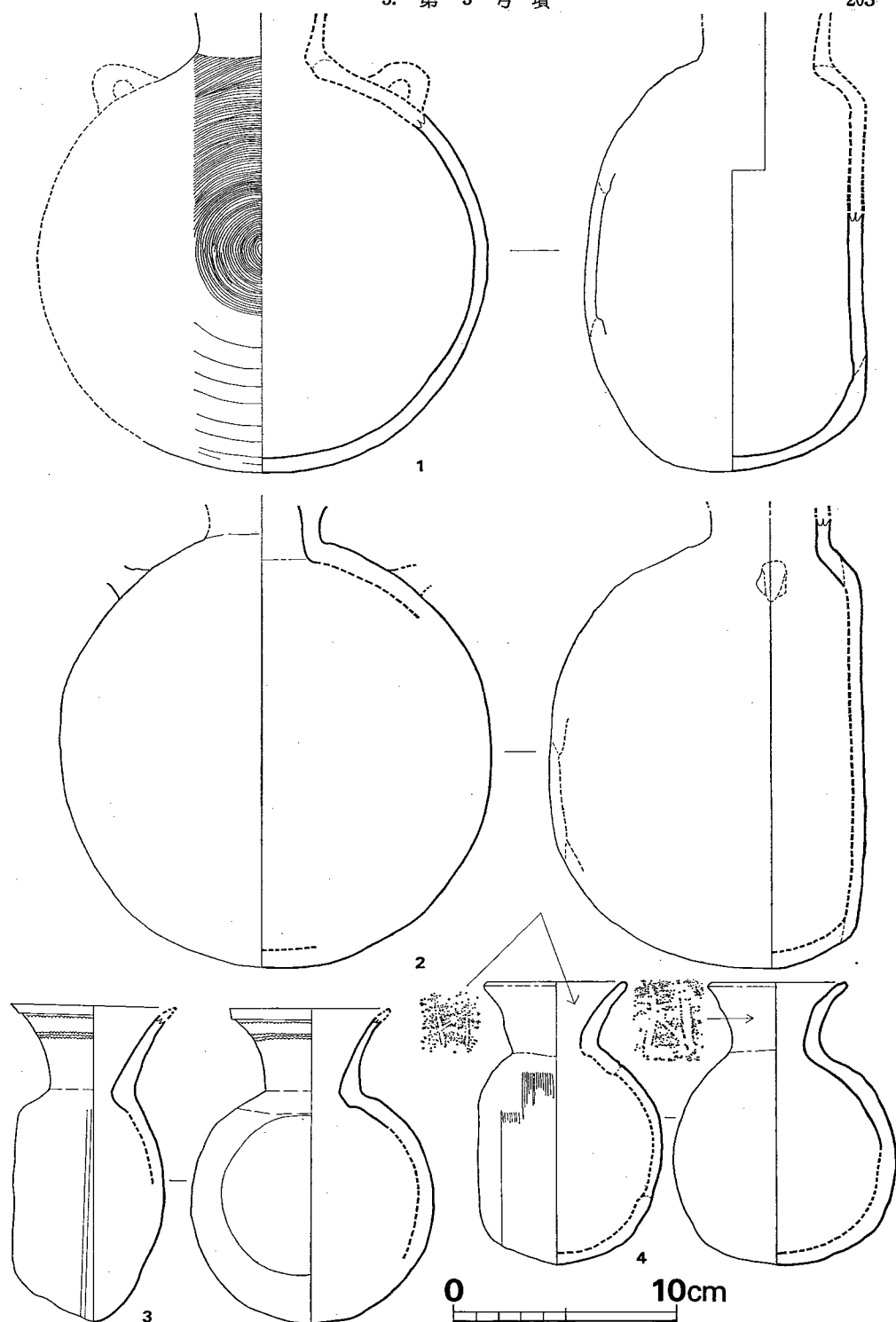


Fig. 105 王城山A 3号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

12.9cmである。色調はともに青灰色を呈しており、焼成は良好である。

埴輪 (Fig. 104-11) 円筒埴輪の底部のみである。底面は内方が地につく。赤褐色を呈しており、焼成は良好である。底径25.8cm。

灯明皿 (Fig. 104-10) 糸切り底である。口縁部は黒変している。口径7.5cm, 器高2cmである。

以上、土器の説明をしてきたが、出土品の時期は、須恵器の年代から6世紀後半に比定される。

(川述 昭人)

4. 第 4 号 墳

1) 墳 丘 (Fig. 106, PL. 125)

丘陵の南側斜面下方に位置する。墳丘は、周囲を水路等により削り取られ、全体に遺存状態は好ましくない。墳頂より北東部において周溝の一部が残っている。周溝の溝底幅は、0.7～0.9mである。墳丘高は、約3.5mで、墳径は15～16m前後と推定される。墳丘は、当古墳群中、最も遺存状態が良い。

2) 石 室 (PL. 126・127-1)

当古墳群中、完存している唯一の石室である。複室の横穴式石室である。玄室は、長方形のプランを呈し、前室は玄室に較べ、非常に小さい規模になっている。羨道部は、石室入口から、朝顔状に広がる形をとり、墓道はない。

石室は、割合い大きな石を腰石として使用し、全体に小形の石を多く利用している。石材は花崗岩を利用している。石室内には、河原石を敷石として利用している。

石室入口には、閉塞石が残っていた。内側に大きな石を4段以上積み上げ、その外側に小形の石を粗雑に積み上げている状態である。

(浜田 信也)

3) 出 土 遺 物

出 土 状 況 (PL. 127-2)

石室内からは須恵器の高杯が2個体出土しており、前室の土中からは土師器の皿が1個体検出された。出土した須恵器の大半と鉄器類や勾玉は羨道の床面から散乱した状態で出土した。

出土遺物を列記すると次の通りである。

- | | | |
|---------|-------|-----|
| (1) 装身具 | 勾 玉 | 1個 |
| (2) 武器 | 鞘 尻 | 1点 |
| | 鉄 鏃 | 14本 |
| (3) 馬 具 | 鏡 板 | 1個 |
| | 引手金具 | 2個 |
| | 辻 金 具 | 1個 |
| | 留 金 具 | 4個 |
| | 鞍 骨 | 1個 |
| (4) 工 具 | 鉄 斧 | 1個 |

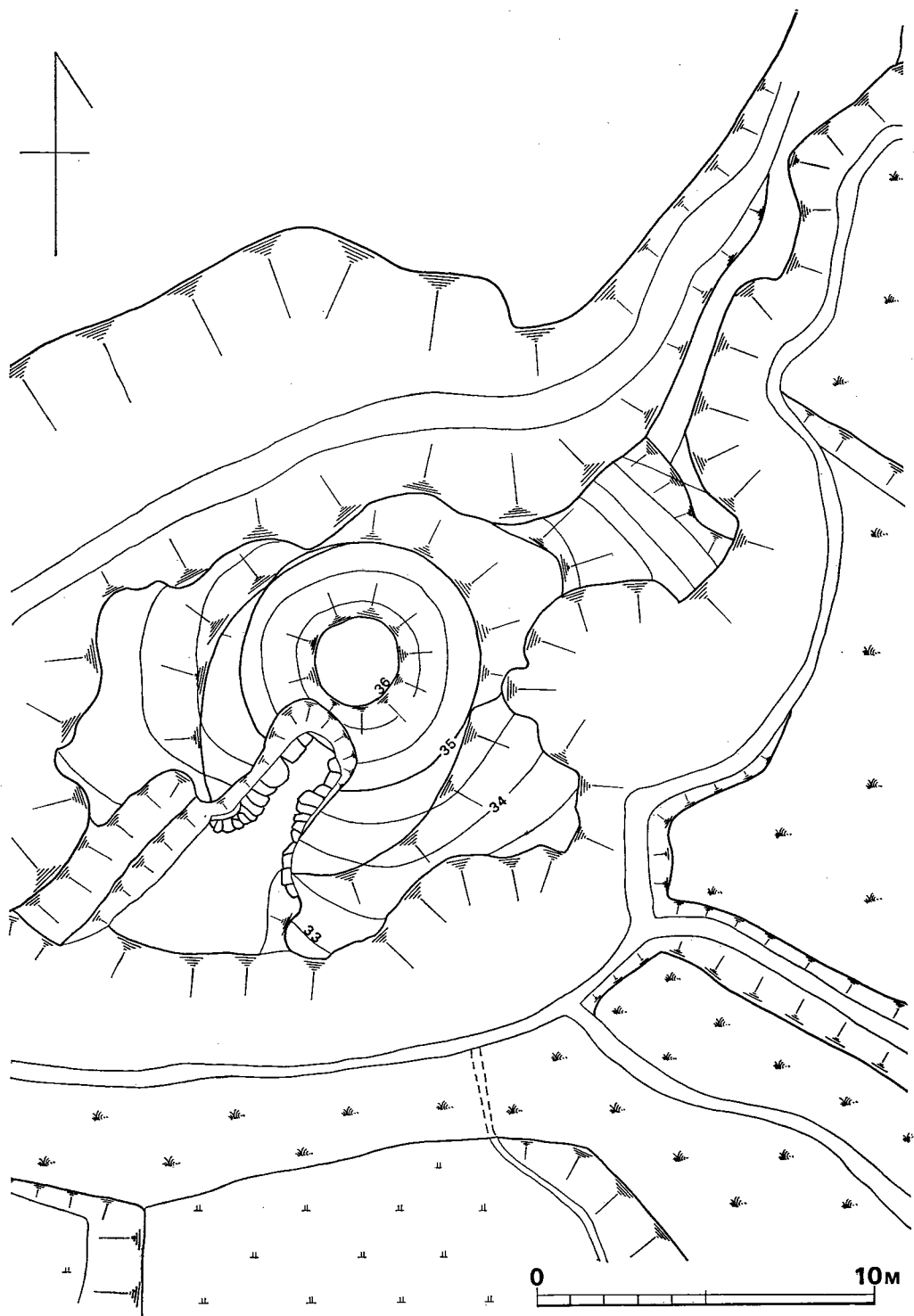


Fig. 106 王城山A 4号墳丘測量図 (縮尺1/200)

	鉈	1個
	刀子	3本
(5) 土器	須恵器	12個体
	杯蓋	1個体
	杯身	2個体
	台付埴	1個体
	高杯	5個体
	提瓶	6個体
	土師器	1個体
	皿	1個体

勾玉 (Fig. 107-1) メノウ製である。頭部と尾部の太さは大差なく、断面長円形である。

武器 (Fig. 107-11~30, PL. 129)

鞘尻 (11) 鉄製で、内面中央部まで木質が付着している。口部最大幅1.8cmである。

鉄鏃 (12~25) 12~17は広根, 18~25は尖根である。完存するものはないが、広根のうち12の全長は約11.7cm, 13は11.8cmであり、尖根のうち22は約16cmである。

馬具 (Fig. 107-2~10, PL. 128-1)

鏡板 (4) 素環の鏡板で、立聞部を欠損する。

引手金具 (3・5) 3は方形, 5は円形の環部を持つ。

辻金具 (10) 金銅製で、球状部端は厚さ4mmと部厚い。革留め部は長さ2.1cmで、鉋頭の径は1cm, 長さ1.3cmである。

留金具 (6・8・9) いずれも金銅製である。6は立聞をもち、鉋頭は2個とも欠損する。

飾り鉋 (7) 金銅製である。4枚羽根と推定される。鉋頭は大きな球状を呈し、鉋先端部も太い。

鞍骨 (2) 鉄製のU字形品で、先端がやや尖る。内部に木質痕がみられる。推定幅1.7cmである。

工具 (Fig. 107-26~30, PL. 128-2)

鉄斧 (26) 小形の鑄造斧である。袋部の断面は丸味のある台形を呈している。長さ5.6cm, 刃部幅2.2cmである。

鉋 (27) 完形品である。全長8.5cmの丁度中間までが刃部で、刃部付け根幅1.8cmである。

刀子 (28~30) 28は両関, 他は片関である。29の刀身には衣痕が, 30の刀身には鞘の木質痕が付着している。

(酒井 仁夫)

須恵器 (Fig. 108-1~4・6~11・107, PL. 130・131)

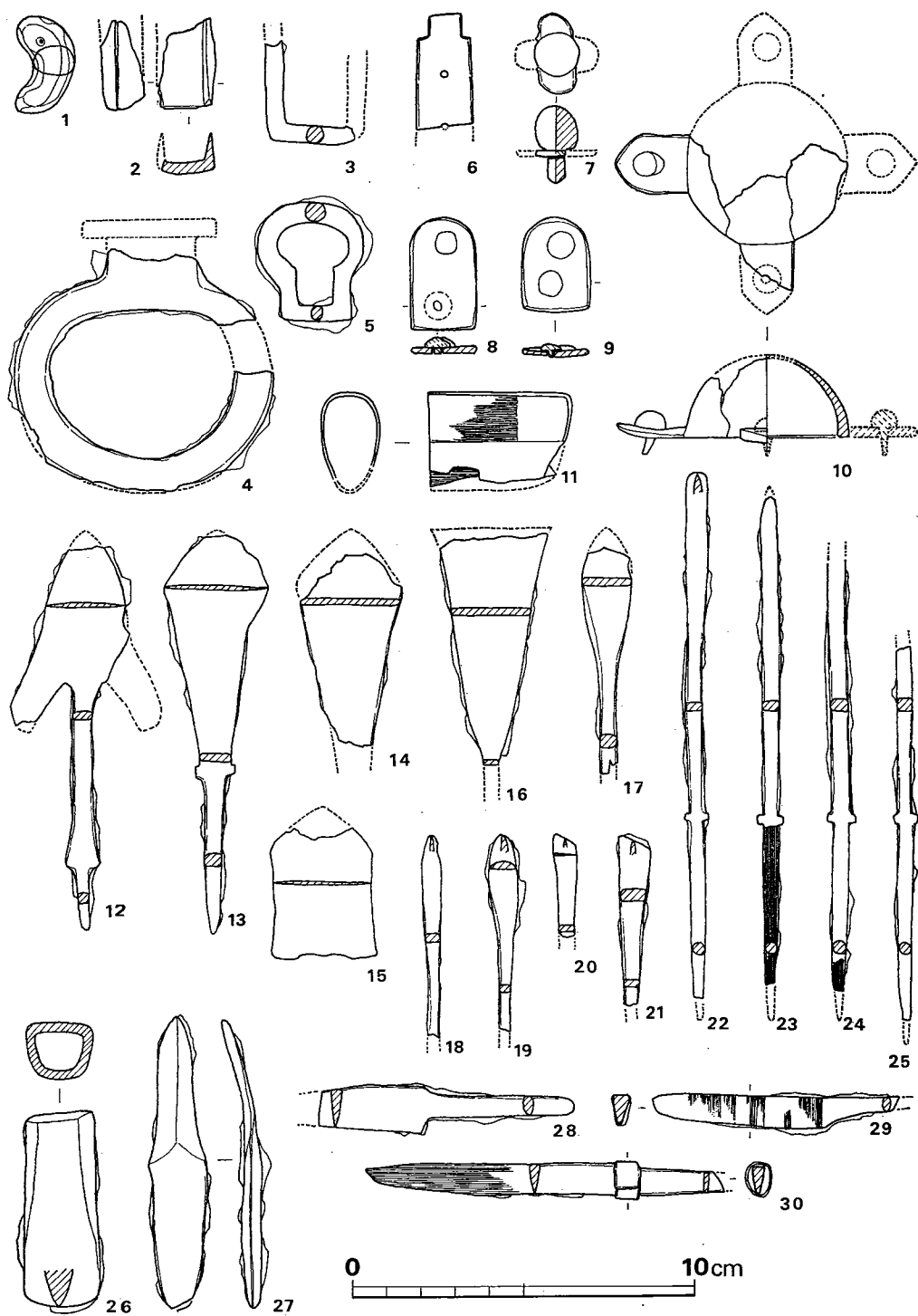


Fig. 107 王城山A 4号墳出土玉及び鉄器実測図 (縮尺1/2)

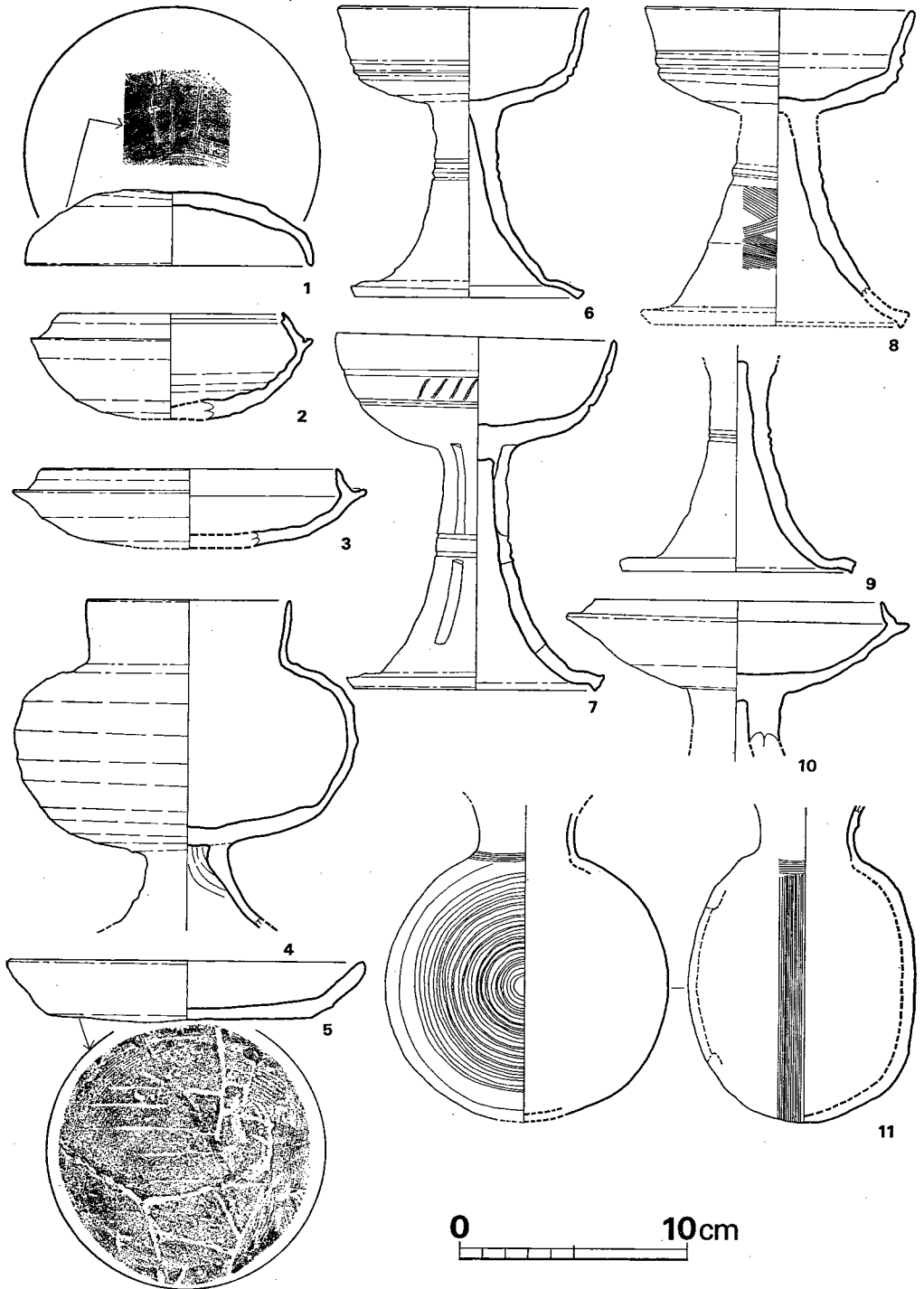


Fig. 108 王城山A 4号墳出土須惠器実測図 ① (縮尺1/3)

杯蓋 (Fig. 108-1) 口径に比して器高の低い形態である。口縁部は外反し、端部は丸い。天井部はヘラ削りを行い、頂部内面はナデを、体部、口縁部は横ナデ調整を施す。口径 12.6 cm, 器高 3.2 cm である。体部外面にヘラ記号を有する。灰黒色を呈している。胎土には砂粒を含んでおり、焼成は不良である。

杯身 (Fig. 108-2・3) 共に羨道部から出土している。

I 類 (2) 立上りは 1.2 cm であり、内傾する。立上りの端部は沈線が入り、段がつく。蓋受けは短く、わずかに外方へ突き出す程度である。口径に比して器高が高い。調整法は底部はヘラ削りをし、内面はナデを、体部以上は内外面ともに横ナデを施す。口径 9.9 cm, 蓋受け部径 12.3 cm, 器高 4.6 cm を測る。黒灰色を呈しており、焼成は不良である。焼きひずみが著しい。

II 類 (3) 立上りは 1 cm と短く内傾する。立上り端部は幅をせばめて、とがり気味となる。立上りと内傾斜面との境はするどい稜線が入る。調整法は底部外面はヘラ削りをしており、内面はナデを、その他の部分は横ナデを施す。口径 13 cm, 蓋受け部径 15.5 cm, 器高 3.5 cm を測り、口径が大きい。色調は青灰色を呈する。胎土には砂粒を多量に含んでおり、焼成は良好である。

台付埴 (Fig. 108-4) 台部は下半を欠損している。口縁部はやや長く 2.5 cm を測り、わずかに外反し、口縁部は立つ。底部以外は薄手造りである。ヘラ削りは胴部の $\frac{1}{4}$ に施される。肩部以上は横ナデ調整である。口径 9 cm, 胴部径 15 cm である。色調は黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含む。

高杯 (Fig. 108-6~10) 有蓋高杯と無蓋高杯に 2 分類され、無蓋高杯はさらに透しの有無により、a・b に細分される。

I 類 (10) 有蓋高杯である。脚部の大半を欠損する。立上りは 1 cm であり、内傾する。立上り基部は器壁が厚いが立上り端部は細くなり、ややとがり気味となる。杯部の底部はヘラ削りをし、内面はナデを、体部以上は内外面ともに横ナデを施す。脚部はカキ目が入る。墓道からの出土である。口径 12.7 cm, 蓋受け部径 15.1 cm である。黒灰色を呈しており、胎土には砂粒を多く含む。

II a 類 (7) 無蓋高杯であって、透孔を有するものである。透孔は長方形であり、上下 2 段で 3 箇所に入る。杯部は底部と体部の境が丸味を有しており、1 条の沈線が入って境となる。体部には、もう 1 条沈線が入り、この沈線間に刺突文が入る。口縁部への移行はなめらかである。脚柱部の中央部には 2 条の沈線が入る。脚裾は外方へ屈曲しており、端部は平坦に近く、下方は突出部のみが地につく形態である。横ナデ調整を主に行う。口径 12.2 cm, 器高 15.7 cm, 脚裾径 11.2 cm である。黒灰色を呈しており、焼成は良好である。

II b 類 (6・8・9) 杯部はヘラ削りを施しており、体部との境部には 2 条の沈線が入る。体部は外反しており、内外面ともに横ナデを施す。脚部はともに脚柱上方部に 2 条~3 条の沈

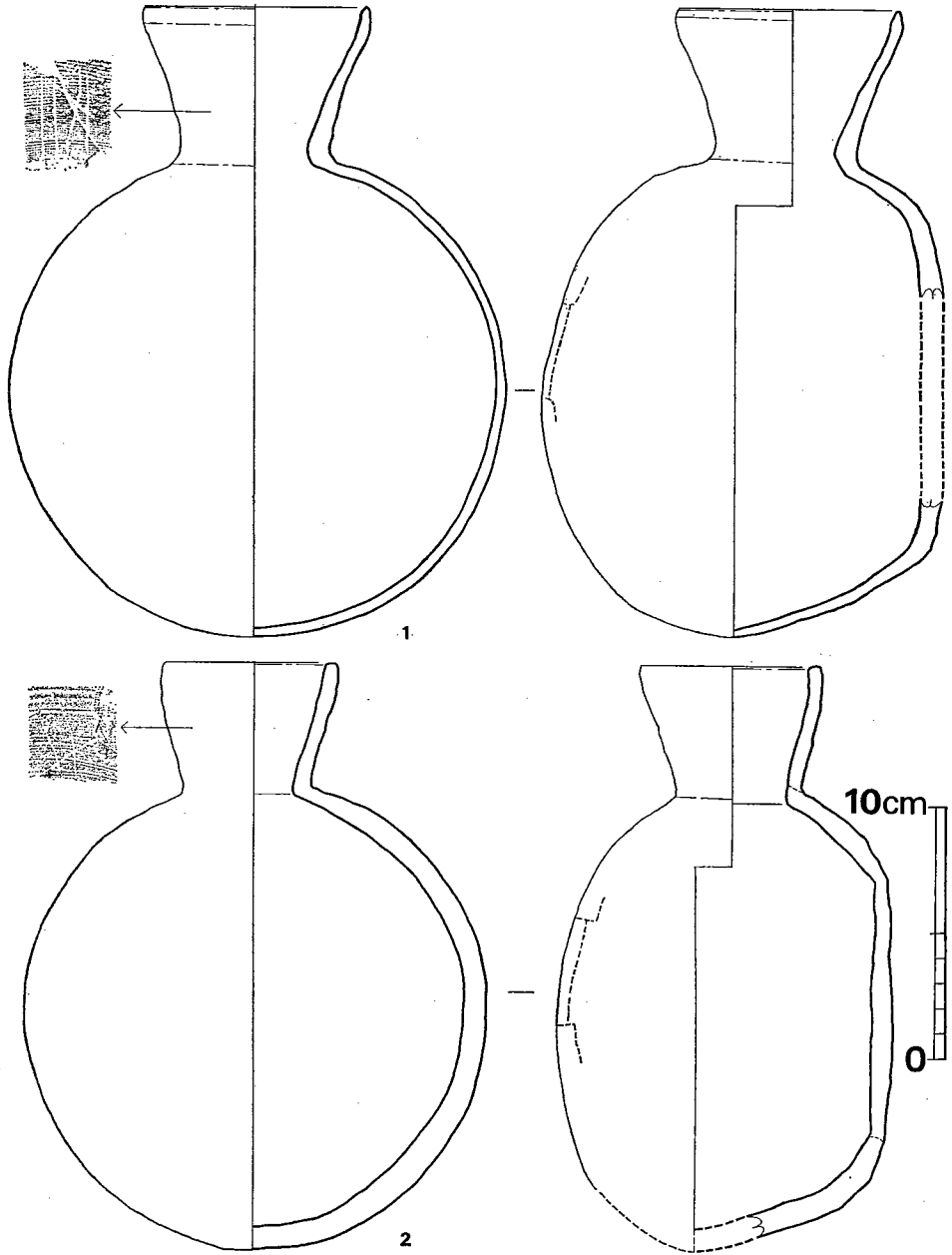


Fig. 109 王城山A 4号墳出土須恵器実測図② (縮尺1/3)

線が入っており、6・9は沈線部以下から外反をはじめめるが、8は基部から外反する。6・9は脚裾が屈曲して、脚端部へと移行するが、8は屈曲しない。6は口径10.9cm、脚裾径10.1cm、器高12.7cmである。8は口径11.9cmである。9は脚裾径10.5cmである。色調はともに暗灰色を呈しており、焼成は良好である。

提瓶 (Fig. 108-11・109-1・2)) 11は小形品である。口縁部を欠損するが、頸部は著しく外彎する。脊面はやや丸味をもつ。胴部にはカキ目が入る。暗灰色を呈している。焼成はやや甘く、胎土には砂粒が多い。1は頸部は外反し、口縁部は直立する。全体に薄手造りである。胴部平面は正円であり、脊面は平坦面を有しており、ヘラ削り調整である。頸部にはヘラ記号が入る。2は1より一まわり小形となる。頸部は外反し、口縁部は立つ。口頸部にはカキ目と、ヘラ記号が入る。胴部は正円であり、カキ目は入らない。脊面は平坦面を有しており、指頭圧痕が残る。脊面はヘラ削りを行う。1は口径9cm、胴部径19.7cm、器高25cmであり、2は口径7cm、胴部径18.3cm、器高23.3cmである。ともに色調は青灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。

土師器 (Fig. 108-5)

皿 (5) 口径15.7cm、器高2.1cmである。底面には糸切り痕がつく。内面には一方にだけ焼土付着。

以上、土器の説明をしてきたが、この中で杯身のI類は古式の特徴を良く残していたが、出土須恵器の属する時期は6世紀後半から6世紀末に比定されよう。 (川述 昭人)

5. 第 5 号 墳

石 室 (Fig. 60)

地山深く穿たれた墓壇底に営なまれた複室式横穴式石室で、略南西に開口する。採土工事により奥壁部が崖下に崩壊、転落したが、他の部分の遺存度は良好であった。

両側壁全長は 3.1m 強で、玄室長は一応 2.6cm 強とみられる。幅は前壁部では 2.25m であるが、奥壁部では稍狭まり両側壁最先端で 1.93m となり、不整台形プランを呈する。石室高は 3m 強と比較的高い。周壁は腰石を用い、随所に小石を充填しつつ徐々に内傾させており、両側壁最上段では、その間 75cm に狭まる。両側壁が 0.7~0.94m 迫出しているのに対し、前壁は 0.25m と弱い。

玄門部は通例のように袖石状に突出せず、幅 0.8m 強で、床面には仕切石が置かれ、この上面から天井までの高さは 1.25m。玄室には全長 3.7m 強のやや外開きとなる（玄門から 2.9m の地点で幅 1.2m 弱）一見羨道風の側壁が接続しているが、その前半と後半とでは腰石使用の有無、石材の大小、仕切石の存否等に明確な差があり、後半部は前室とすべきと思われる。前室の天井は通例のように楯石よりも一段高くはならず同高であり、壇底からは 1.4m の高さがある。幅 0.9~1m、長さ（仕切石間）は 1.2~1.4m 前後である。仕切石は玄門部のそれよりひとまわり大きく、その上面と天井までの間は 1.15m。

羨道部側壁は、使用石材が小形であり、積み方も粗雑な感を受ける。壇底は先端に向うにつれて徐々に上昇する。前壁から 2.9m の地点が墓壇端にあたり、ここまでが羨道で、この前面に切通状の墓道が付設されている。側壁はこれより前面の肩部にも及ぶが、天井石の架構は墓壇内で終わる。

閉塞は、前室仕切石直前で行われており、最下段には平石が立てられ、側壁との間隙には小割石が楔状に打ちこまれている。この他にも、墓道底および間層をはさんだこの上位にも閉塞石と思われる一群の石が認められた。前述閉塞石の裏込めとするには位置に、盗掘時の移動とするには墓道直上にある点にそれぞれ疑問がある。前・後室ともに床石も殆ど遺存しない程に盗掘を受けており、また短期間の実測調査であったために遺物は全く採取し得なかった。

奥壁が現存していないので確言できないが、石室全長（墓道肩部の側壁を含めない）は、玄室長の 2 倍である可能性が強い。

(石山 勲)

B. 古野 A 古墳群の調査

1) 位 置

古野 A 古墳群は、大野城市大字乙金字古野に所在する。特別史跡大野城跡の所在する四王寺山の北西側山麓に位置する。山麓には、四王寺山塊から脈生する丘陵がいくつもあり、これらの丘陵上に多くの古墳が所在する。

古野 A 古墳群はこの内の一群で、王城山 A 古墳群と谷を一つ隔てた南に、ほぼ東西に延びる丘陵上に所在する。丘陵上は、わりあい平坦で、幅広く、稜線上に 3 基の小円墳が遺存する。周囲には、古くから集落があり、いくつかの円墳は消滅したものと思われる。現存している 3 基のうち 2 基が調査対象となった。対象外の 1 基は、墳丘中央が大きく削平されており、石室は消失している。当古墳群の 3 基は、全て盗掘などを受けており、完存するものはない。

2) 遺 構 と 遺 物

(1) 第 1 号 墳

墳丘 墳頂および周囲が削平されている。墳頂は陥没しており、盗掘による排土が、墳丘の東南側に接して多量にあり、いっそう墳丘の形状を変えている。

墳丘は、丘陵稜線上に位置し、墳丘築造にあたっては、地山を削り、おおかたの形状を現わしている。石室構築にあたっては、事前に掘り方を掘っているが、非常に浅く、0.5~0.6m の深さである。掘り方の平面形は短冊型を呈するものと考えられる。墳丘は、大半が盛り土からなっているが、粗雑に積み上げられている。

石室 (Fig. 110, PL. 132) 石室は、半壊の状態で見られた。天井部および玄門部から羨道部を消失している。石室は花崗岩を石材とし、小形の石を使用している。腰石は、わりあい大きな石を使用しており、石積は、石面をよくあわせて行っている。東側の側壁は、盗掘により内傾しているものであるが、原形は垂直に近いもので、上段の方で、内側にせりだし気味に積上げる手法をとっているものと考えられる。積石の隙間には、小石をつめ込んでいる。

石室の平面形はさだかでないが、単室の石室であると考えられ、石室の最大幅は約 1.55m を測る。後述する 2 号墳と同形様の平面形を呈するものと考えられる。

石室床面には、角礫が敷かれてあり、奥壁側に若干遺存していた。

石室は南西側に開口する。

遺物 (Fig. 111, PL. 134-1) 石室内から発見されたもので、鉄器類と耳環、玉類である。鉄器類は、鉄斧 1、尾錠 1 と鉄鏃である。鉄斧 (Fig. 112-1) は完形品である。全長 11.9cm の

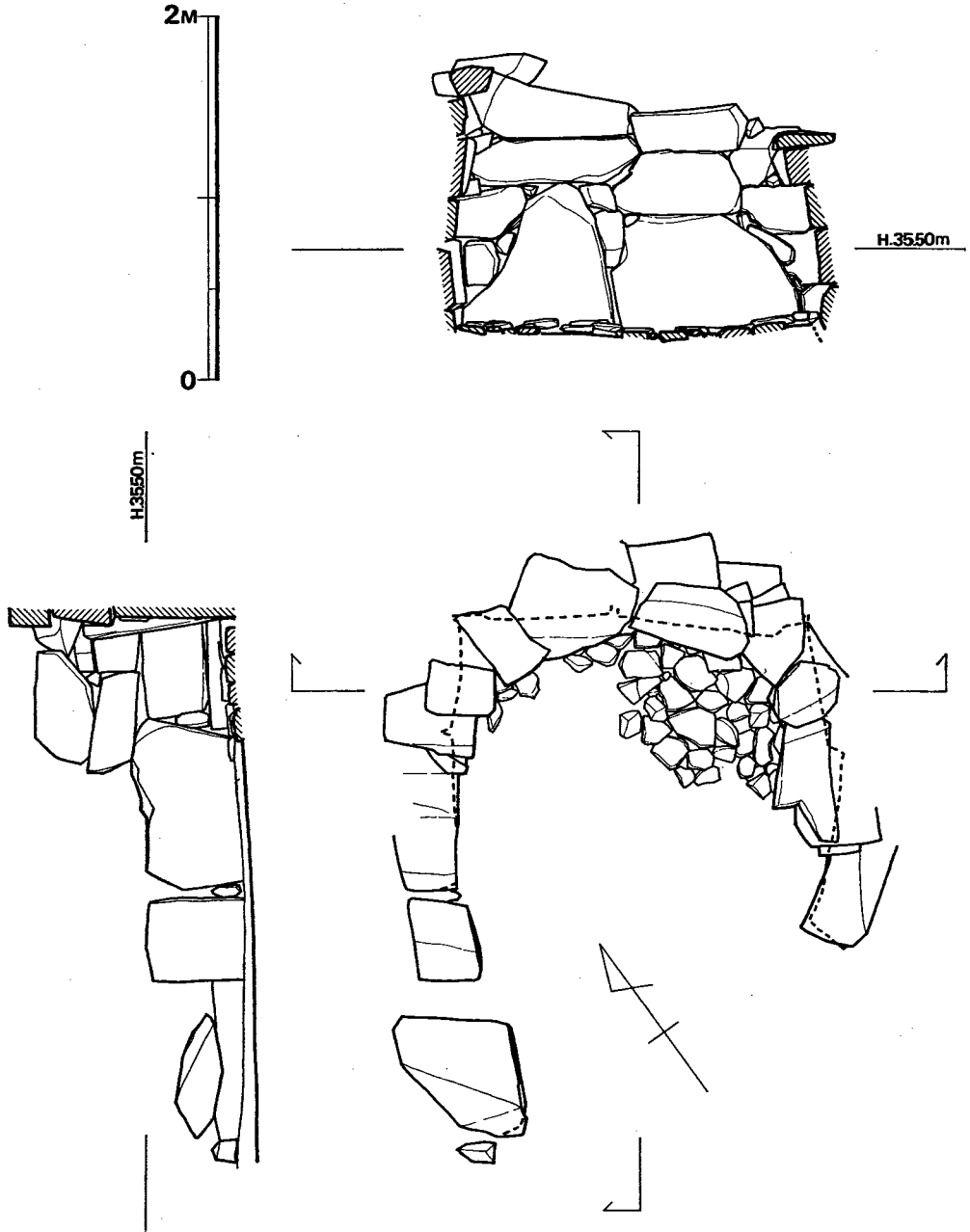


Fig. 110 古野 A 1号墳石室実測図 (縮尺1/40)

わりあい厚手の中形の実用品である。刃部最大幅は5cmで、弧深0.7cmの弧をえがく刃部である。片刃のように観える。袋部は、厚さ3.5~4mmの鉄板を曲げて内面長3cm、同短径1.9cmの楕円形を作り、両端を中央部で合わせる通有の形式である。なお、袋部には木質は認められず、出土状態からして、斧頭のみを副葬したものと考えられる。

尾錠 (Fig. 112-2) は、完形品である。馬具のどの部分に付属するものか不明である。帯を通す部分は半円形を呈し、両端を外側に折り曲げている。刺金は断面四角形をしめし、取り付け部は刺金の基部を中央部から切って、「八」の字状に広げている。

鉄鎌は、完形品はない。茎部が4個体分出土している。細根式のものである。

玉類は、石製丸玉と管玉である。丸玉 (Fig. 111-1) は、断面が扁平であり、穿孔は両面から施している。薄青色を呈し、若干の風化がみられる。管玉は、ガラス製 (Fig. 111-2) と石製 (Fig. 111-3~5) がある。ガラス製のものは小形であり、長さ0.9cm、径0.4cmで、厚さは0.85mmと薄い。淡い緑色を呈する。石製の管玉は大形のもので、長さ2.6~3.15cm、径0.85~1cm

である。穿孔は、一方からのみ行われている。鋭利な道具で穿たれている。他端は孔部周囲が浅く凹んでいるものもある。深緑色を呈する。

耳環は、4対分が出土している (Fig. 111-6~9)。このうち9が片方のみ出土している。6は、腐植が著しく鉄地が遺存しているのみである。7は、小形のもので、断面が不正形を呈する金製のものである。8・9は、鉄地に金銅張りのものである。

(2) 古野 2 号 墳

墳丘 (Fig. ⑥) 古野古墳群のうち、丘陵先端側に所在する。北西側が削り取られてお

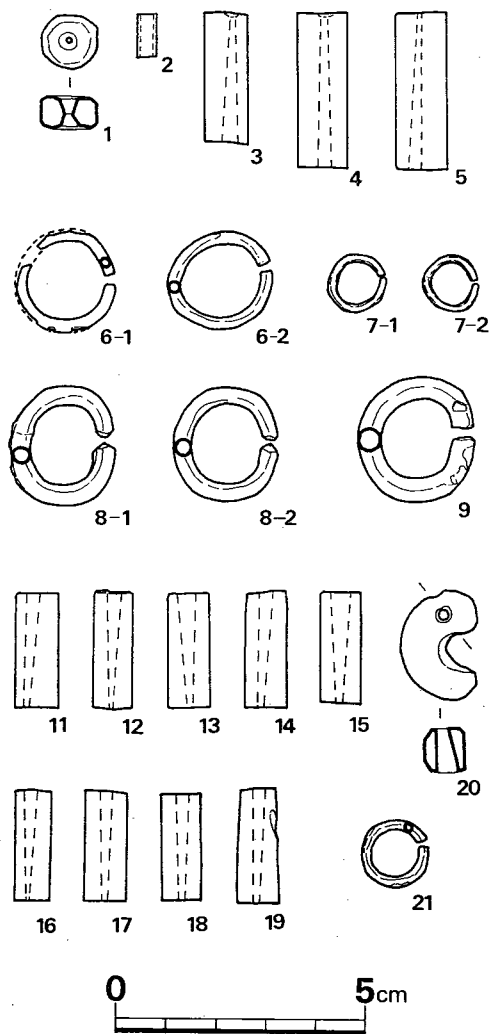


Fig. 111 古野 A 1・2号墳出土装身具実測図 (縮尺2/2)

り、さらに墳頂が陥没していた。1号墳と同じく、平坦な丘陵の稜線上に造られており、地山をある程度整形したのち掘り方を掘っている。掘り方は、長方形を呈し、この中に石室と羨道が構築され、これに墓道がとりつけられたものである。掘り方の深さは、0.5~0.6mと非常に浅い。石室の腰石とはほぼ同じ高さとなる。

盛り土は、非常に粗雑な積み方をしている。墳丘径は、約12mほどと考えられ、高さは2mを大きく越えるほどのものでないとする。

石室 (Fig. ②, PL.133-1) 石室は、天井部を消失している。単室の石室で、平面形は、若干胴張りのある長方形を呈する。長軸約2.6

m、最大幅2.1m、奥壁側幅1.8mで、玄門部幅は65cmを呈する。石室は、構築にあたって小形の石を使用し、中でも腰石は、わりあい大きな石を使用している。腰石から3・4段目くらいまで、ほぼ垂直に積み上げている。北東側の側壁は、腰石部より内傾してい

るが、これは盗掘により積石がゆるみ、内側が傾いたものと考えられる。積石の隙間には、小形の角礫を詰め込んでいる。羨道は、玄門部から「八」の字状に開くように造られ、短い。石室構築に使用された石材は、花崗岩である。1号墳と同様に南西に開口する。

石室床面には、花崗岩の拳大の角礫を敷いており、そのほぼ中央部には中でも大きめの扁平な石を敷いており、石枕を思わせる観がある。

羨道には、しきり石の外側に閉塞石が発見された。楕円形を呈する大きな石を立て、側壁の隙間と背後に角礫を置いている。

遺物 石室内より、須恵器、玉類および耳環が出土している。須恵器 (Fig. 113, PL. 134-3)

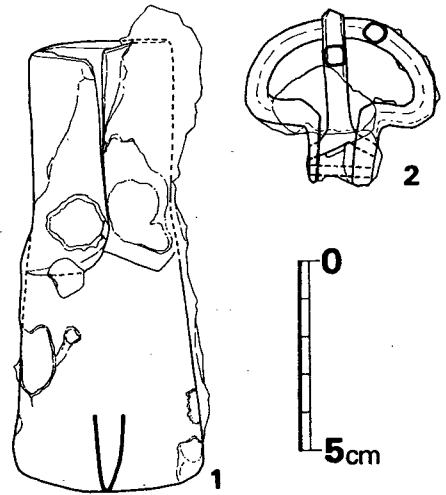


Fig. 112 古野A 2号墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

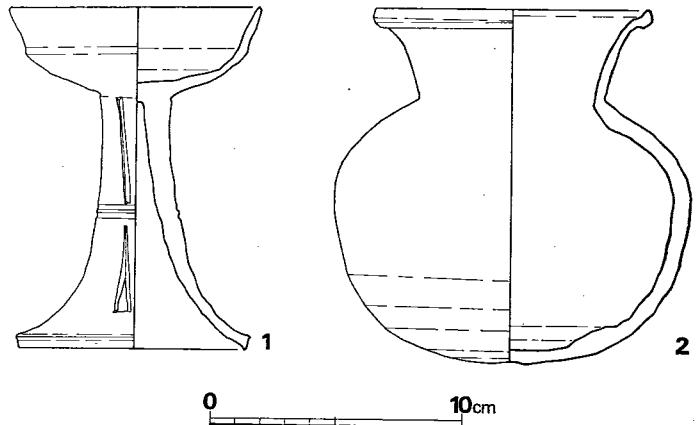


Fig. 113 古野A 2号墳石室内出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

は、高杯と甕である。高杯は、器高13.5cmある。杯部と脚端に若干の歪みがある。脚部には、透しがある。透しは、脚周をほぼ三等分する位置に施されている。上段は長方形、下段は三角形を呈する。上段は全て脚体の内面まで貫通していない。ヘラ状の鋭利な器具を用いて施したものと思われる。紫灰色を呈し、部分的に窯火を強く受けた部分がある。甕は小形のものである。器高14.1cmである。胴部下方にヘラケズリの整形痕があり、口唇部下には1~2mm幅のハケによる整形のあとがみられる。口唇部より内面は、指先使用による水びきによる整形がな

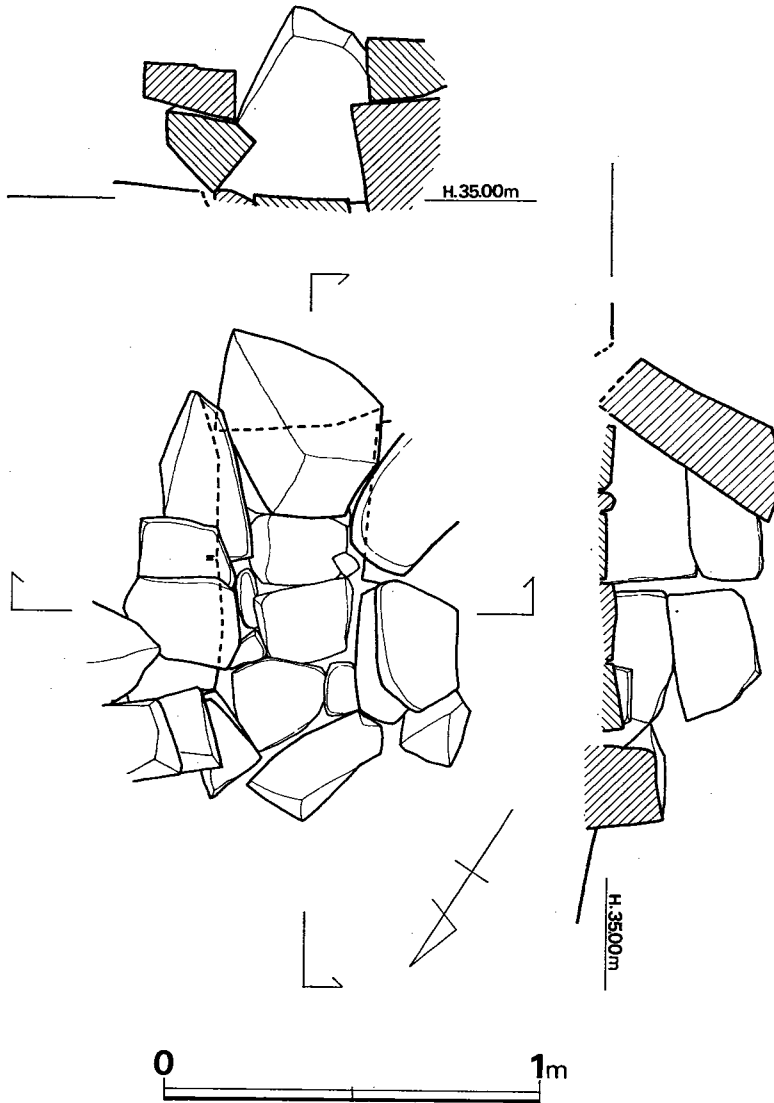


Fig. 114 古野石棺実測図 (縮尺1/20)

れている。胎土には砂粒子が多く含まれており粗い。灰色を呈する。

玉類・耳環 (Fig. 111-11~21, PL. 134-2) 勾玉, 管玉, ガラス製丸玉, ガラス製小玉 および耳環が出土している。勾玉 (20) はズングリした小形のものである。穿孔は一方からなされている。白色を呈する。管玉 (11~19) は9個が発見された。1号墳のものに較べ, 若干小形のものである。やはり, 穿孔は一方からなされている。他端の孔径が, 1mmに満たないものがある。深緑色を呈する。これらの管玉の器面には, 幅2.5~3mmの摩痕が縦位に観察できる。ガラス製の丸玉は, 完形8個, 破片3個が出土している。径は0.6~0.8cm, 厚さ0.4~0.5cmで, やや紫色に近い濃紺色を呈する。ガラス小玉 (ビーズ玉状) は完形55個と若干の破片が出土した。径0.2~0.4cm, 厚さ0.12~0.3cmで, 色は濃紺, 薄緑, 黄緑, 青と種々ある。耳環 (21) は, 小形のものである。銀張りのもので考えられる。腐植がいちじるしい。

(3) 石棺 (Fig. 114, PL. 133-2)

1号墳の石室北西側の墳丘内で発見された。小形の石棺と思われる。蓋石と棺材の一部が消失している。全体に小形の石を使用し, 両側壁は二段に石を積み, 小口の一方は一石を立て, 他方は下段の石が残っている。東南側の小口は, 両側壁間に据えられ, やや内傾している。これが, 初めから内傾していたかどうか不明である。他方の小口石は, 側壁下段の石とほぼ同じ高さであり, 両側壁に挟まれなく据えられている。棺外の東北側には, ひかえ積みのような形で棺材と同大の石が数個置かれている。このように石の積み方, 配置を観ると, 南東側の一石を立てた小口部が横穴式石室の奥壁部のようにみうけられ, 横穴式石室を模した, 小形の石室のようにも考えられる。

1号墳との関係であるが, 盛土内には, 墓壙と考えられる落ち込みは検出されず, 蓋等の棺材が一部消失していることから, 1号墳より古く, 1号墳築造の際に蓋等の棺材の一部が除去されたと考えるのが適当である。

石棺内外からの遺物は皆無であり, 所属時期は不明である。

(浜田 信也)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告
IX (本文編)

昭和52年3月31日

発行 福岡県教育委員会

〒810 福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 福岡印刷株式会社

〒816 福岡市博多区大字那珂142